

# Life Museum Network

2020 Life Museum Network

## ライフミュージアムネットワーク2020

### 事業概要

実施期間:2020年4月1日～2021年3月31日

プロジェクト活動期間:2020年5月21日～2021年3月31日

活動内容:リサーチ  
スタディツアー  
オープンディスカッション  
フォーラム

主催:ライフミュージアムネットワーク実行委員会

構成団体:南相馬市博物館  
はじまりの美術館  
三島町生活工芸館  
一般社団法人ふくしま連携復興センター  
原爆の囃丸木美術館  
福島県立博物館

委員長:鈴木晶(福島県立博物館長)

事務局:福島県立博物館

令和2年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業

# Life Museum Network

ある詩人が「大災厄」と呼んだ2011年の震災以降、  
私たちは人と人のつながりを紡ぎ続けてきた。

忘却と風化が忍び寄る10年目を前に、

より多くの人とより大きな、より強いつながりを築こうとあがいてきた。  
そこにコロナという悪疫が静かに忍び寄っていた。

この1年は10年前の心のきしりを思い出させる日々が続いた。

年度当初の目論見は次々と崩れ、途方にくれながらも歩み続けた。

悪疫の猖獗の合間にメンバーは奇跡のような旅をした。旅先に大都市はない。

三重県、島根県の山あいの小さな集落、京都府、富山県の海辺の都市。

そして福島県奥会津に点在する小さな宝石の原石のようなミュージアム。

それぞれの場所で真面目に生きる人たちに会った。

静かな場所で静かな語り、耳を傾ける。そんな時間を重ねた。

震災からの回復を探る道のりはいつか強いきずなを求め

大きな声を上げる振る舞いを身につけさせてはいなかったか。

大災厄から10年目にやってきた悪疫はそうした振る舞いから私たちを遠ざけた。

道中を共に語り合う旅や言葉を交わす対話の場は時に失われ、

時に小さく静かなものとなったが、

そこでひっそりとまたたき始めたのは一人一人の個の輝きだった。

たった一人の最後の卒業生、病室からモニター越しに声を交わす子どもたち、

産地を追われ一人の匠として全国で活躍する伝統工芸の担い手たち、

故郷を見つめ続けるアーティスト。

耳を澄まし、目を凝らさなければ聞こえない見えないものがある。

そこにこそミュージアムが取り組む沃野が広がる。

この悪疫からもきつと多くを学べるに違いない。

また向き合って話し合える時、私たちは少し静かに、少し優しくなっているはずだ。

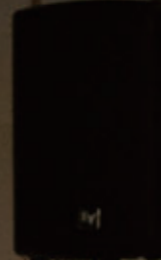








教育目標  
1健康で明るい子ども  
2進んで学習に励む子ども  
3仲よく礼儀の正しい子ども



プログラム開発概要 242

多様なニーズに応える  
ミュージアムの利活用プログラム 244

生活資料を活用した  
ミュージアムの連携プログラム 246

県外事例調査 氷見市立博物館(富山県氷見市) 248

地域資源の活用による  
地域アイデンティティの再興プログラム 252

スタディツアー・連続オープンディスカッション

奥会津の周り方 16

第1回 文化の泉を掘る～三島町歴史文化基本構想について～ 18  
モニターレポート 31

第2回 清の眼 根っこの眼 それぞれの地域学 34  
モニターレポート 50

第3回 奥会津の森を活かす 52  
モニターレポート 69

第4回 民具整理から見えてくる奥会津の暮らし 72  
モニターレポート 92

第5回 奥会津をつなぐ 94  
モニターレポート 111

寄稿 「奥会津の周り方」を終えて 本間宏 112

オープンディスカッション

浪江の記憶の残し方、伝え方 114

県外事例調査 合同会社「家の女たち」(島根県大田市) 138

オープンディスカッション・コミュニティとミュージアム

場を編む 人を結ぶ 146

寄稿 痕跡、ストーリー、拠りどころ 白河市本町9番から思うこと 青砥和希 172

県外事例調査 舞鶴引揚記念館(京都府舞鶴市) 174

寄稿 「記憶遺産」の再発見に必要なこと 岡村幸宣 196

県外事例調査 蜜ノ木(三重県伊賀市) 198

寄稿 ミュージアムする! 佐藤李青 216

フォーラム

地の記憶を苗床に  
～空知・島ヶ原・舞鶴に学ぶ  
「ミュージアム的」なこと 218

「いのち」と「くらし」に

向き合う学び





第1回  
**文化の泉を掘る～三島町歴史文化基本構想について～(三島町)**  
 日時:2020年8月8日(土)14:00～15:30

第2回  
**清の眼 根っこの眼 それぞれの地域学(柳津町)**  
 日時:2020年9月19日(土)16:00～18:00

第3回  
**奥会津の森を活かす(只見町)**  
 日時:2020年10月24日(土)14:00～16:00

第4回  
**民具整理から見えてくる奥会津の暮らし(昭和村)**  
 日時:2020年11月14日(土)14:00～16:00

第5回  
**奥会津をつなぐ(金山町)**  
 日時:2020年12月19日(土)14:00～16:00

主催:ライフミュージアムネットワーク実行委員会  
 協力:三島町教育委員会、三島町生活工芸館、やないづ町立斎藤清美術館  
 只見町ブナセンター、昭和村、金山町教育委員会

本連続オープンディスカッションは、奥会津5町村をめぐるスタディツアーでもあります。  
 参加して得た学びや発見を多くの方と共有するため、感想・意見をレポートしていただくモニター参加の枠を設けました。

# 奥会津の周り方

福島県西部の山間地に広がる奥会津地方。

豊かな自然環境は変化に富む景観と農産物を生み出し、

自然に根差したくらしと文化を育んできました。

また、只見川流域では川とともにくらしを営み、

水力発電による首都圏へのエネルギー供給を

支えてきたという歴史があります。

奥会津を構成する5町村、三島町・柳津町・昭和村・只見町・金山町は

それぞれに何を大切にし、コミュニティを築いてきたのでしょうか。

各町村の自然、歴史、文化を伝えるミュージアム関係者が集い、

奥会津の共通性、個性、課題を見つめる対話のリレーで

大きな奥会津をめぐるりました。

## 文化の泉を掘る

三島町歴史文化基本構想について

Life Museum Network

奥会津でいち早く策定された

「三島町歴史文化基本構想」。

携わったお二人をお招きし、

その理念と意義、

今後の展望をお聞きしました。

Life Museum Network 2020

日時：2020年8月8日(土)14:00～15:30

会場：三島町工人の館

講師：矢澤源成さん(三島町長)

赤坂憲雄さん(学習院大学教授/前福島県立博物館長)

## 矢澤源成

三島町長。1976年三島町に入庁。

町村合併担当課長、生涯学習課長を歴任し「三島町歴史文化基本構想」の策定にあたる。

三島町の歴史・民俗文化の保存・継承・活用をめぐる「三島スタイル」を構築。

「足元の泉を掘れ」をキーワードに、地域の文化資源・生活文化を活かす町づくりを行う。

## 赤坂憲雄

民俗学者。東北芸術工科大学教授、東北文化研究センター長、福島県立博物館長などを歴任。

現在、学習院大学教授。1999年「東北学」を創刊。

2011年以降、東北の被災地を歩き、民俗・文化・アートなどの文脈で震災の記憶の記録の重要性を発信している。

著書に、「3.11から考える「この国のかたち」—東北学を再建する」(新潮社)など多数。

## 板橋淳也

お待たせいたしました。本日は悪天候の中ありがとうございます。ただいまからライフミュージアムネットワーク2020のオープンディスプレイ「奥会津の周り方」第1回を三島町で開催させていただきます。本日進行を務めます、実行委員会委員でもある三島町教育委員会生涯学習課長の板橋と申します。よろしくお願います。第1回ですので、今回のオープンディスプレイの事業について事務局から説明いたします。

## 事務局・塚本麻衣子

ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局を務めております塚本と申します。この事業は福島県立博物館が事務局となり、さまざまな県内外のミュージアム、NPOなどと協力して行っている事業です。福島県立博物館では東日本大震災以後、震災遺産を集める事業もやってまいりましたし、いろいろな分断が起った中でそれを文化的にどう繋いでいくのかという事業も行ってまいりました。

その中で今後考えていかなければならない大きなテーマとして「いのち」と「くらし」があり、それに向き合うことを真剣にミュージアムとして考えなければいけないのではないかと、うことが浮き上がってまいりました。それで、2018年からこのライフミュージアムネットワークという事業を始めました。

この奥会津では、みなさんがどういうふう自然に根差して暮らし、生きてきたのか、2018年にこのプロジェクトが始まった当初からお話をお聞きしてまいりました。最初はこちらにいらっしゃる板橋さんにお話を伺い、三

島町での編み組の取り組みについて教えていただき、金山町では「村の肖像」プロジェクトという写真を使った記憶の残し方、ダムに歴史についてお聞きをするリサーチを行ってまいりました。翌2019年には奥会津5町村の小さなミュージアムを巡ることで奥会津をより深く知るツアーを実施しました。今年もできればそういった形で現地に赴き実際に見る活動をしたかったのですが、コロナウイルスの状況もあり、バスツアーという形が難しくなりました。今年には奥会津5町村でリレーのように対話を重ね、そこにみなさんにご参加いただくことでツアーに代え、奥会津についての理解、今後の連携を深めていきたいと考えて、第1回を開催する運びとなりました。

第1回を「文化の泉を掘る」三島町歴史文化基本構想について」というタイトルで行います。講師にお招きしました三島町長の矢澤源成さんにこの基本構想の策定に最初から携わっていらっしゃった経緯、思いを語っていただければと思います。三島町長よろしくお願いたします。

もう一方、赤坂憲雄さんに来ていただきました。昨年まで福島県立博物館の館長を務めていらっしゃいまして、奥会津のこの基本構想の策定にも携わってこられました。お二人に基本構想にかけた思いをぜひお話しただければと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

## 板橋

それではさっそく三島町歴史文化基本構想についてご説明します。この歴史文化基本構想は、平成20年から23年、3カ年かけて構想を作りま

した。町長は、当時は教育委員会の生涯学習課長として、リーダーとして3年間携わり、この資料を作りました。で、これがまさに我々のまちづくりの基本となっています。今日はそういった思いも込めた町長からのお話になります。よろしくお願いたします。

## 歴史文化基本構想

## 矢澤源成

それでは歴史文化基本構想の背景をちょっとお話しします。私は平成16年、17年と5町村の合併に躍起になっておりました。5町村の振興計画を作るのがその時の担当でした。会津坂下町から、柳津町、三島町、金山町、昭和村、この5町村の職員が集まっていろいろやってきました。振興計画を作る中で非常に疑問があった。三島町は、我々の時代では、文化を糧としたまちづくりを展開しようと思つてきました。

## 足元の泉を掘る事業

そのために、ふるさと運動、生活工夫運動、地区プライド運動や健康づくり運動、有機農業運動をやりました。自分の足元の泉を掘る事業を展開しました。ところが5町村の振興計画、田園都市構想という名前でしたが、もし合併した場合に、三島の間方、早戸の虫供養なんかはどうなるだろうと非常に疑問に思つたわけです。三島町は文化財というと雑流しかサイノカミ、あるいは虫供養、虫送りとか相当残っています。初田植とかね。そういう行事を連綿と伝えてきた我々のプライドはどうなるのだと心配されました。



矢澤源成さん



赤坂憲雄さん

調整の中で5町村合併が破綻になって、ある面ではほっとしたと感じておりました。その経過の中で文化庁と常に交渉をやった。あの頃は合併の嵐でした。その中で、それぞれの地域の文化をどう守っていくのか、今も文章の中に残っていると思います。一段落して合併の嵐が終わった時に文化庁から、歴史文化基本構想を三島でと選ばれたのです。ほとんどは盛岡とか飛騨高山とか東京の日の出町とか、あるいは太宰府とか大きいところばかり。うちがなぜ選ばれたのか。小さな地域を大事にするのが一つの文化だと認識していただいた。荒屋敷遺跡とかサイノカミ、生活工芸、我々の生活と共に根付いてきたもの、我々のプライドが国の指定になった。大きいお城、一権力者のお城とかいろいろな焼き物とかそういうものじゃない。三島もこういう方向で進んで良かったと考えております。そういう視点もあの頃あった。指定になって、委員長さんに誰を選ぶのかとなった時に、赤坂先生がたまたま会津学をやりたいと奥会津書房に来ていた。その時、仕事を抜け出して、「赤坂先生に委員長さんをやっていたきたい。」とお願ひした。赤坂先生は「わかりました。」って。

### 集落に光を当てる

ちょっと長くいろいろ考え方を申し上げました。で、赤坂先生に承諾していただいた。赤坂先生、奥会津書房と我々がそこにいた一つの繋がりの中でござります。歴史文化基本構想は、例えば飛騨高山ですと神社仏閣のすゝいのが連なっていて、伝統の継承、保存、活用が出てくる。うちは本当にどうしていいかわか

らなかった。文章は書いても実際に具体的にどう動かすかとなった時、赤坂先生から集落に光を当てるのが大事だと言われました。

### 地区プライド運動

で、地区プライド運動。みなさんもご承知のように、人がいなくなる。そして土地が荒廃する。限界集落と言われるように、集落の機能がなくなる。学者の先生に言わせれば、人の空洞化、土地の空洞化、集落の空洞化と言われます。そういうことが徐々に起こりつつある。それが起こらないための地区プライド運動。例えば私の集落は17軒しかないですけど、雑流しを地区プライドにした。サイノカミは18集落のうち10集落がやっているということで、それも地区プライド。虫供養、虫送り、悪虫送りっていうのがある。虫を送った後、会津の人は優しいのかな、食物連鎖の中で生きるその虫をもう一回供養しようとする。そういうなんていうかな、独特の三島の雰囲気があることに私も感動した。そこに光を当てるのが大事なかなと、赤坂先生を委員長に、県の人、職員を選んだ。

20年から21年、22年まで3年間続いたのでですけど、私は58歳で、2年間しか携わってなかつた。退職して1年間東京の学校に行つた、それから福島に1年間行つた。最後の締めができて、仲間最後の締めはやっていただいた。

### 三島の文化構想は異質

昔の記憶を思いだすと、赤坂先生を中心にこれだけの各集落のいろいろな伝統行事、我々にとっての文化を拾い上げながら歴史文化基本構

う状況にあるのか問いかけると実はわかっていないのです。30年前に指定したその文化財がどうなっているか誰も知らない、わからない、そういう話になる。

### 活用しながら継承する

すごく象徴的だと思います。つまり文化財行政というのは村や町にとって大事な文化財を指定するというところで終わってしまっている。でも村も過疎化でどんどん変容していますし、その継承に比重が少しずつ移り始めたのです。どうやってこれを指定するかで終わるのではなくて、どうやってそれを継承していくことができるか。しかもそれは活用しながら継承するという形を作らなくては守っていけないということに気が付いた。この歴史文化基本構想というのは、もう一度地域の有形無形の文化財を見直して、それを今ここで活用しながら継承していく仕組みを作って欲しいということだったので

### 物語として共有できるように

三島町では本当に泥臭い議論の中で一つ一つの議論をした。先生たちは喧嘩腰でぶつかる。それはこうじゃない、ああだつて。面白かったですね。その中で一つ大事なキーワードは物語という言葉でした。これまでの例えば歴史の先生であれば歴史の資料に基づいた展開を辿ればよかったですけど、どうもそれでは親しみが持てないし、マニアックな話になってしまう。それをもう一度大字ぐらゐの集落、スケールで歴史的な文化財、民俗的な文化財、自然と地形と

想を作っていたことは本当にありがたい。この文化構想を飛騨高山で国に発表した時、三島の文化構想は異質だと言われました。これは通るのになつて文化庁の方から言われると、私は、いやこれはうちにとっての歴史文化基本構想なのだと言ひ張つた。こういうことが過疎山村の地域を守ることなのだと言ひ張りました。18集落それぞれの振興計画。町の振興には集落の振興が大事で、各集落の振興計画がある。それを今でも大事にしながら、全体として積み上げをしているということでございます。

この歴史文化基本構想をどう発信していったらいいのか。地域の仕組みをどうしていくか。Eコマースやデジタル構想で山形県の朝日町が早かったんですけど、そこに研修に行つて来ました。地区の学芸員をどう位置づけるのか、地区の伝統行事をどう連携するのかというようなこと。デジタルでの発信とか、集落の人をどういふふう絡ませていくのか、なかなか難しい段階がありました。なんとかクリアして、今、板橋からありましたように一つの大きな振興計画として展開しているところであります。

### 循環型の社会をコロナ禍で作るべき

先ほどコロナの問題も出ました。新聞でアフトーコロナ、ウィズコロナなんて言っていますね。おそらくある程度の時間、コロナと共生しなきゃいけない。先生は地産地消の夢にかけるとか、そういう答えを書いていらっしゃいます。ただ、私も自分の足を掘りながら、循環型の社会をコロナ禍で作るべきだと本当に強い信念として持っています。そういう地域を作っていくことでコロナに対抗する。薬も大事です

か、そういったものを重ね合わせにして、トータルに物語として共有できるようにできないだろうかと考えました。うまくいったとは思えないですけど。

例えば荒屋敷遺跡と現代の編み組細工を繋げる。時間的に繋げる、そういう物語ができるのではないかと。工人とか手わざの里ということ、三島町がいろいろなことをやってきた。二千年数百年前の荒屋敷遺跡から編み組細工とか、いろいろなものが実際に出ていますね、漆とか。それが二千年数百年の歳月を経て、現在も村のこういう手わざの世界に繋がっているということ。大きな物語として提示してみたい。これは物語として受け入れやすい。二千年数百年の時間を継承されてきたということがわかる。今ここに生きている人たちにとっても荒屋敷遺跡と現代のこうした民具と呼ばれているものがまっすぐ繋がつてくるということ、それが一つの大きな物語。大字というより三島町全体を貫くような物語としてこれがいいかなって話がありました。

### 道とくまじ

道ということもずいぶん議論になりました。それぞれの地区ごとに物語の伝承や現代の生業といったものがあるわけですが、それをどう繋いで物語に仕立てることができるかという時に、道だねっていうことで、川の道、歩く道もあるけど、その道沿いに点在しているものを繋いでいきながら物語を作ろうといったこともずいぶん議論しました。小さな物語、小字レベルで、その後大字クラスがあつて、さらに大きな町全体の物語を作れないだろうか、そんな議論をしました。

ど、そういう面での歴史文化基本構想だったと考えております。ざっくりばらんなお話でしたけど、「質問も承って、私も勉強のために来ましたので、いろいろ話をしていただければよろしいかと考えております。以上です。」

### 板橋

ありがとうございます。それでは、続いて赤坂前館長さん、今日はお越しいただきありがとうございます。この歴史文化基本構想の策定当時、赤坂先生は県立博物館の館長をやられていました。この基本構想の委員長として本当に一緒になって作っていただきました。これから町長と赤坂先生にお話しいただきまして、後ほどみなさんからの「質問も承りたいと思いますのでよろしくお願ひします。」

### 受け渡すことができた最後のチャンス

#### 赤坂憲雄

このまとめの段階で震災だったのですよ。で、僕は最後のまとめにきちんと関われなかったの、とても悔いが残っています。けど、とても面白い議論の場だったと思います。喧々諤々の議論で険悪な雰囲気になったりした。僕はそういうのが大好きで楽しんでいました。もう亡くなられた方とか、70代後半、80代の先輩たちから、持っていられない知識とかいろいろなものを受け渡すことができた最後のチャンスだったなと思います。若い人たちが先輩の熱い思いを見る場でもあったなというふうに思い出します。いくつかポイントがあるとと思うんですけど、歴史文化基本構想を策定するように依頼された20の市町村の中で人口が20000人規模のそこ

三島町でやったのはまったく違います。一から自分たちで、ふるさと運動から始まって、いろいろなことを繰り返してきた。その大きな核になっているのは、ここに生まれ育ち暮らしている人たちが主人公になってまちづくりをする。でも閉じるのではなくて、都会の人たちとさまざまな交流を持ちながら、でもあくまで主人公は自分たち、地域に暮らす人たちである。僕は哲学と言つてもいいと思うのです。それを頑なに貫いてきた。始まったことは本当に新しくなつたと思います。だんだんそれが広まっていったのかもしれない。この歴史文化基本構想でも、それを頑固に貫いたなと思います。コンサルタントのような人はまったく入らないで、もう一度集落ことの歴史、文化、自然をよく知っている人たちから可能な限り聞き書きをした。やりきれませんが、2、3年でしから。それでも他の町や市が作ったものとは全然違うものができている。で、これが出てくる背景をちょっとお話ししておきたいのです。文化財行政も大きな転換期ですね。文化財の指定というのは多くが、今から20年、30年、40年前に指定されているのですけど、この時に指定に関わった人たちがもうお歳を召された。今、指定された文化財がどうい

## 交流者

その中で三島町がやった大事なことは、それをそこに暮らす人たちだけの手でやれるわけじゃないので、いろいろな人たち、例えば交流者という言葉が出てくるんですけど、さまざまな形でとりわけ三島町の外からいろいろな人たちが入ってくる、その人たちを交流者として位置付ける。地域芸芸員という言葉を使っていますね。県立博物館の民俗の学芸員は総合的な意味では知識を持っていますけど、実は自分がそれをやっているわけじゃないので、生きた技、生きた知識を持っているわけじゃない。だとしたら地域に暮らしながらその生活の中で技術にも携わり、身近に観察してきた人たちを地域学芸員と位置付けて、コーディネーターとして大事にしようといった泥臭い議論です。でもそれがとても大事だと思います。文化を継承していく時にコーディネーターの役割が重要。生活者の技の知識を継承していくためにコーディネーターという形でさまざまな人たちが、例えば博物館やミュージアムのようなところで展開していくと同時に、外から来る人たちを繋ぐ。あるいはもっと深く関わりたい交流者を巻き込んでいく。

## コーディネーターによって継承されていく

文化というのはコーディネーターによって継承されていく。そういう議論もずいぶんやりました。将来を考える時に、それはコンサルタントが作るものではない。2000人とか、3000人のレベルの村や町が自分たちの文化

をどういうふうに守っていくか、継承していくか、本当に泥臭い議論でしたけど、大切な議論をしたなと今思い出しても感じます。そして、繰り返しますが、本当に80代の先輩たちにいるような熱い思いを聞くことができる、そういう場でもありました。

矢澤

今、先生からお話があった議論の場ですけど、侃侃諤諤ですね。そうすると私の能力ではまともきれなくて、先生に怒られる。舵をしっかりと、なんて言われて。それが非常に印象に残っています。

## 20年、30年先を走っていた

自分たちが自ら仕事をやるという熱意。先生が言われたように自分の足元の泉をどういうふう掘っていくのか、その泉の中におそらく宝物がある。それは幻想かもしれないんですけど、スライツリーが三島に来る、そんな簡単なものじゃない。ないものはない、あるものをどういうふうに作っていくのか。三島は20年、30年先を走っていた。

私もこういう経験があるので。老人福祉計画を担当していた時、ゴールドプランと俗に言われる、10カ年戦略の時に過疎高齢者生活福祉センターを作った。国の基準は10棟が老人の部屋、後はデイサービス、管理部門と三つの部門。町民アンケートを取って、10部屋もいらさない、3部屋をショートステイにしてくれと国と県に言ったら、そんな要項はないと言われた。こっちも反論した。補助金の使い勝手が良いところがあれば、それは認めるべきだろうと。今はだ

赤坂

今日の対談が合併の挫折、失敗から始まったことは象徴的だと思います。合併しても幸せな暮らしが手に入らないということをみな気がついてしまっている。合併の巨悪っていうのは経済効率でくっ付いて余計なものを切り捨てた。でも今度このコロナでその余計なものを切り捨てたこと、余計なもの認定され切り捨てられたものから反撃を受けていると思います。本当に大事なものは利益を生まなくても守らなきゃいけないのに、それを切り捨ててきた。あまりメディアでそういう議論をしないでくださいね。でも間違いないと思います。

県博のみなさんがライフミュージアムネットワークというものを考えた時に最初この人たちが何を考えているのだろうって僕は正直思いました。でもいろいろな議論をするうちに、そうか、博物館の役割とか使命というのは「いのち」と「くらし」に関わることが最大のテーマなのに実は我々はそのことから逃げてきたのかもしれないと気づいた。で、面白いことをこの人たちは考えるなと思った。港千尋さんでしょ、この名前をくれたのは。

## 政治的な合併の対極

この時代を生きるものとして最先端のところでは何が大切なのか、「いのち」と「くらし」しかないじゃないか。これは岡本太郎が大好きな言葉だった。去年から奥会津の5町村を繋いでいくことをアートの、文化を手がかりに手探りし始めて、そして今年の展開の中で僕が聞いているのは五つの町村の文化施設、ミュージアムを繋いでいくことができるかということでした。

いたい認めますけど、当時はなかなか。これをやった時も三島は異質だって言われ続けていました。何くそと思った。町民が文化財の保存、継承が大事なことだということになれば、我々も体を張って町民の声だということでも頑張っていく。そういうことが大事。それも先生の会議の持ち方から学んだところです。

## 素材として台帳とって

赤坂

三島町が30年、40年かけてやってきたことをみなさんがすごく大事にされて、行政の方たちは連続性ってこともあると思うんですけど、こだわられてきた。実はこの議論の場はふるさと運動以来の三島町の歴史を継承しようという場でもあったのです。それはなかなかやりきれなかったと思いますけれど。ただ先ほど言いましたけど、考え方としてはたぶん他のエリア、地域から比べたら20年、30年先を行っていたと思います。でも、それをどこまで支え、深めることができたのかはまだわかりません。

五十嵐義展君来ているね。五十嵐さんが最後にもう一人の方とまとめた。震災の後の混乱の中で必死にまどめてくれた。やっぱり硬いよね。自分が最後のまどめに関わってないのに勝手なこと言わせていただきますけど、物語としてくつきり見えてくるかというところまで行っていない。これを素材として台帳として、もっと町の人たちが三島ってこういうところだよって、例えば荒屋敷と編み組細工の話をしたんだけど、そういうことを啓蒙的な教育活動のところで、みんながその物語を共有できるように活動をしてきたらどうか。やっぱりそこだと思うのです。

奥会津の大きな文化の風景を「いのち」と「くらし」ということを軸にして捉え返すことはできないか。政治的な合併の対極で、合併という形で自分を溶かし込むのではなく、それぞれの村や町の個性、幸福みたいな、物語みたいなものを大事にしなごら、なおかつ繋がっていく方法があるのではないか。その一つとして博物館から文化ということを掲げてやっていくことを考えたのです。小林さん一言。

## 事務局・小林めぐみ

県立博物館のよくわからないことを考えたうちの一人です。小林と申します。一昨年からこの活動を始めました。わかっているようで博物館はわかってないことも多いです。「いのち」と「くらし」の歴史の積み重ねではなくて、表面的に何が起きたかということばかりを追いかけてきてしまった反省があります。2011年の後に数年間かけて私たちはそれに気がついた。奥会津で三島や金山や昭和や只見、柳津が今まで活動されてきたことを教えていただき、初めて奥会津のエリアがこれまで数十年間踏ん張って大事に続けてこられたことが、奥会津だけのことでなくて、震災後の福島に広く教えていただけることが凝縮したものなのだと思うようになりまし。それも「いのち」と「くらし」を大切にしてくられたからで、本当に学ぶことが多い。この場所をみなさんと共有し、お伝えしたいと思っています。ここ数年です。

今年の活動のスタートとしてこうしてお二人に三島町でいち早く作られた歴史文化基本構想の背景をお聞きできました。私たち自身も今日のお話から足元を見直すことになったと思います。

それをきちんとやることによって、苦労して作ったこの基本構想が活かされていくし、こなれたものになり、町の人たちがみんなでも共有できる物語として受け入れてもらえる。これは勝手に作ったわけですから、その物語が町の人たちに受け入れられているのになって、そういう不安を感じますね。意地悪い質問をいたしました。

## 勉強する組織にまだなっていない

矢澤

100%ではないですけど、相当上がってきている。私は桐に桐の文化を継ぐ、竹に竹の文化を継ぐということが大事だろうと考えております。私には温故知新、不易流行っていう背景がある。時代とともに変わるものと、絶対に三島としては変えてならないものがあると考えています。そういう視点から、組織が学習社会というか、町長がそんなことを言うのはおかしいですけど、勉強する組織にまだなっていないのが現実です。

ふるさと運動でいろいろな先生が入ってきて交流しながら、自分の足元はどうなのだというところを常に考える。生活工芸運動をやった時には地域の資源に何があるのか、高齢者の福祉はどうするのかを考える。例えば有機農業は健康づくりとどういうふうな食の問題で結びつくのかとか。そういうことが非常に大事。

## 仕事を通して自分の人生を顧みる

今の若い人ってどっちかと言えば縦で物事を考えてそれで終わり。昔、東京に行くように

## 文化で柔らかく繋いでいく

赤坂

正しい一つの答えがあるわけじゃない。最初は違和感持ったけど、これしかないよなって思いました。例えば心や体に傷や障害を抱えている人たちが博物館にどのように関わることか、これまでほとんど車椅子の人見たことないとか、そういう反省から始まった。盲導犬と一緒に歩いていただいて、何が足りなかったのかを考えるきっかけになりましたね。うかつなのですけれど博物館という施設が誰の方を向いているのかということのような気がする。このプロジェクトそのものが大きな問いを我々一人一人に突きつけてきたという意味で、僕はすごく良かったと思う。今日はその展開の一つの場です。五つの町村を文化で柔らかく繋いでいく。本当は隣町のことをほとんど知らないです。三島町にはこういう民俗行事がある。集落ごとにサインカミは違う。でも見たことない。そういう気づきも実は繋がることによって初めて見出される。だから五つの村や町がもう少し文化的に繋がって行き来することによって、お互いに相手の良いところをいただくような、そういう動きを作れないか。

## 他者認識というか

## 自己認識を変えていく

その中で、中核的なミュージアムとか文化施設、昭和村だったらからむしの施設、三島町だったらこの辺りが手わざと繋がる、柳津町だったら斎藤清美術館がある。そういう中核的な文化施設を大事にしなごら、そこを繋いでい

## 新しい幸福感

幸福感、価値観って赤坂先生もご存知のように、何が幸福なのかという自分のメジャー、三島町はそのメジャーで考える。そのメジャーもゴムのように伸びる。そういうような地域にすればさまざまな課題に対応できるように柔軟な考え方を持てる。そして幸福感も高度経済成長のお金がどんどん入るのが幸福だって、このコロナが来て、またその時代に戻そうというふうな考えを私は持たない。

それよりは新しい幸福感、健康とか福祉、先ほど命という話がありましたけど、この辺の5町村はそういうことをテーマにしながら医療を守り、交流を図る。そういうことをすることが会津、あるいは奥会津5町村の生きる道。その辺は先生のお話を伺いたいと思います。

## 大事なものは利益を生まなくても守らなきゃいけない

くような人の集まり、交流できる機会を作っていくことによってお互いに他者認識というか自己認識を変えていくことができる。そして同時にお互いの個性を大事にしながら繋がる、どうやったら繋がるだろうかということを徹底して反省するような場にもなれば良い。

三島町以外から参加して下さっている方は手を挙げていただけますか。多いですよ。こういう場所そのものが三島町の心に触れる場として前向きにうまくみんなで利用していければいい。半分主催者のような顔をしています。相変わらず館長と呼ばれていて、今は北方風土館という誰も知らない施設の館長ですが。勝手なことを喋っています。

### 考え方が違うからこそ議論を

矢澤

赤坂先生が言われた5町村をどうするのか、行政的には5町村活性化協議会がありますが、やっぱりそれぞれ首長さんも個性がありますし考え方も違う。しかし、考え方が違うからこそ議論をしていくことが大事。多様性を理解しながら奥会津5町村の統一性をどう図っていくのが大事。そのためには昭和のからむしとか金山の歌舞伎、只見の自然公園、三島の伝統行事、柳津の西山温泉とか温泉街、そういうものを認め合いながらこの地域全体をどういうふうにするか共通項があるか一番やりやすい。

例えば官庁、医療、自然、福祉。医療と福祉は宮下病院の建て替えも含めてやると県で決定しました。こういう病院を作るか、包括医療センターみたいなのにするか、5町村の首長さんと議論をしながらみんなで統一性のある地域

を作っていくことが大事。違いのわかる男じゃないけど、それが大事。

どうしても我々は日常が忙しいから、事務方がまとめると、それでわかったっていうことでずっと来た経過がある。私もその一人です。地域を作る上で会津は農と民の国。その農と民の国を官庁も含めてどういうふうにしていくのかも大事だと考えています。会津から伊南川、只見川が阿賀野川に流れて日本海に注ぐ。循環型の社会ってことも大事にしながら、水という問題がありますので地域をみんなで作っていく共通項として大事と思っています。今日は昭和の村長さんが来ていますから、もし何かあれば。

### 夜が更けるのも忘れて

参加者・舟木幸一

昭和村の舟木でございます。私は三島の町長さんと同じ行政マン上がりで首長にならさせていただきます。入庁が町長さんでいたい。同じ頃で、三島町は佐藤長雄町長がいって、強くなり、三島町の下のふるさと運動を展開していた時期でした。福島県の出張の帰りに今のバイパスがない時代でしたので、町中を通ると夜9時頃、町民センターに煌々と灯がついている。吸い寄せられるように入ると町長を真ん中にして、その周りに、町の何て言うか、ものを申したい方がいた。その後ろにまた今度は役場職員がいる。で、噂々、本当に夜が更けるのも忘れてまちづくりについて話をしていた。その雰囲気非常に心地よくて40年前からそういう中に混ぜていただき、行政マンとして大変勉強させていただきました。ありがとうございます。

### 我々は何者なのか

今、5町村という話がありました。5町村の繋がりがもちろん大事ですが、それぞれの町や村、特に昭和村ですと意外に知っているようで自分たちの村のことを知らないのです。だから、我々は何者なのかをまず明らかにするのが大事じゃないかと思うようになってきました。これは織姫から教えられたことです。

### おじいちゃんやおばあちゃん

織姫制度も27年になりました。おかげさまで定着率が大変いいです。1期生から私も関わっています。今27年目、27期生に入っていますが、120人ほど修了し、その3割が残っております。で、その人たちに聞いてみますともちろんからむしがあるのが一番の理由だけれど、それを支えるおじいちゃんやおばあちゃんが非常に魅力的だと言う。どういうことかという、ないものは自分で作れるし、ある意味では暮らしの達人だという表現をする方もいらつしやいました。そういうおじいちゃん、おばあちゃん、の近くでもう少し一緒に暮らして学んでいきたいというのが残る理由だと言います。

私から見れば隣のおじいちゃん、おばあちゃんですけど、彼女らから見れば若い男性よりも非常に魅力的だとおっしゃいます。ですから、自分たちの持っている地域のそういう文化をもう少し自分たちが体感でき、それをさらに子どもたちに伝えていきたいと思っております。地に高校がありませんから、中学校卒業するまでの間に自分は何者なのかをちゃんと体感して、好きになって卒業していただきたい。学力向上

はその次。学力向上も大事ですけど、そこがしつかりないと昭和村の未来はないと思っております。今後ともよろしくどうぞお願いします。

### 何を失ってきたのだろう

赤坂

ちょっと別のことを考えていたんですけど、明治の初めには日本全国の、小字だと思えますけど、7万数千あったのです。それが明治の20年代、30年代にかけての大合併で1万数千に減り、で、何度か繰り返しているうちに1万1千弱になっている。その都度の合併の意味はたぶん経済効率がとても強かったのだと思いますけど、何を失ってきたのだろうかと考えてしまうのです。昭和村は明治の初めから見たらいくつの大字が付いたのですか。

舟木

10です。行政区は10です。

### 「産土」が壊される

赤坂

明治の大合併では南方熊楠という民俗学者がたった一人で抵抗運動をした。神社合祀反対運動と言われます。その時の批判が「産土」が壊されるってことでした。小さな集落はみんな産土の神社を持っていて、顔の見える暮らしの中で、何歳になつたら産土の神さまのところに行く、そういう精神的絆によって支えられている村の暮らしがあった。どこかに大きな役場を作られると実は神社も合併を強いられるのです。例えば五つ六つの小さな村が合併する。それで

何が起ったかという、その産土の神さまも大きな役場の近くにある神社にみんな合祀という形に移される。そうすると神さまを抜かれてしまった神社の森が経済性でしか見られなくなると、聡い人がどさくさに紛れて神社の巨木をどんどん切り倒して、売り払うということが繰り返し行われていた。大きな大字ぐらいにまとめられることによって、神社というその土地に暮らす人たちの心の絆であったはずの場所が姿を消してしまうということが何度も繰り返されてきたのだと思うのです。

### 合併ごとに何かを失って

東日本大震災は合併がもう終わって、まだ新しく編み直された地域がうまく融合していない時に起こった。僕が震災の後、被災地を見て回った時、町場から遠く合併したばかりの地域がとても悲惨なことになっていました。小さなエリアであっても、その役場にはその地域出身の人たちが役場の職員として働いていますから、小さな大字ぐらいのどこに誰が住んでいるかとか、みんな知っている職員だったはずが、全部召し上げられて、あらためてその土地とは関係ない職員、スタッフがいった。まだ合併から5年ぐらいというのはものすごく厳しい時期で、役場のその支所に送り込まれたスタッフがその地域のことを全然把握していない。津波で全部流されてしまって、どこに誰がいるのかもわからないような状況。合併ごとに何かを失ってきた、何かを捨ててきたと思いますけど、その果てに我々は生きています。だから僕は合併しなくて良かったなと心から思います。

### 接着剤になるのは文化

でも人口はさらに減少していく。三島町がどう生き残るのかといった時に、やっぱり僕は繋がることによってしかないと。経済的な意味合いでも、すべての村や町が自分たちの病院をきちんと持てればいいですけど、それもままならないとしたら、繋がることによってもっと風通しの良い人間関係、地域の関係を少しずつ作っていくような将来の奥会津の姿を漠然と思いついていける。外からの目で勝手なことを言っています。その時に一番繋がるための接着剤になるのは文化。文化によって境を超えることができるということ。文化にこだわってきた我々さつき舟木村長が言われたように昭和村のこ



### 我々は何者なのか

今、5町村という話がありました。5町村の繋がりがもちろん大事ですが、それぞれの町や村、特に昭和村ですと意外に知っているようで自分たちの村のことを知らないのです。だから、我々は何者なのかをまず明らかにするのが大事じゃないかと思うようになってきました。これは織姫から教えられたことです。

### おじいちゃんやおばあちゃん

織姫制度も27年になりました。おかげさまで定着率が大変いいです。1期生から私も関わっています。今27年目、27期生に入っていますが、120人ほど修了し、その3割が残っております。で、その人たちに聞いてみますともちろんからむしがあるのが一番の理由だけれど、それを支えるおじいちゃんやおばあちゃんが非常に魅力的だと言う。どういうことかという、ないものは自分で作れるし、ある意味では暮らしの達人だという表現をする方もいらつしやいました。そういうおじいちゃん、おばあちゃん、の近くでもう少し一緒に暮らして学んでいきたいというのが残る理由だと言います。

私から見れば隣のおじいちゃん、おばあちゃんですけど、彼女らから見れば若い男性よりも非常に魅力的だとおっしゃいます。ですから、自分たちの持っている地域のそういう文化をもう少し自分たちが体感でき、それをさらに子どもたちに伝えていきたいと思っております。地に高校がありませんから、中学校卒業するまでの間に自分は何者なのかをちゃんと体感して、好きになって卒業していただきたい。学力向上

とさえ我々は知らないというのも100年の歴史の中で考えてみると、合併によって産土の神さまを抜かれ続けて、合併を繰り返してきた地域社会をどうやって今踏ん張って立て直すかということなのかと思えます。

西会津町も最近、歴史文化基本構想を作った。実は僕は三島町で関わっているいろいろな反省もありまして、西会津町から声をかけられて歴史文化基本構想の策定に関わりました。西会津の方に発言を求めたいんですけど、とても面白かったです。結構険悪な雰囲気です。

参加者・矢部佳宏

私はそんなに険悪だと思っていなかったですが、赤坂先生は私に対するみなさんの鋭い視線を感じていらつした。

赤坂

僕が感じたのは世代間抗争です。文化財行政に関わってきた偉い人たちはもうみんな80代ぐらいて、若造に対して冷たい目なのです。僕は座長をやっていたので、その空気に耐えられなくて思い切り手を突っ込んでしまった。何をやったかという、矢部君を一人にしておくと虚められて出てこれなくなると思った。座長の場所から見るとなんか黒いのです。背広かなんかが黒い。で、こちら側に女性が一人と矢部君がいて小さくなっている。よしと思って半分女性にしちゃいました。半分女性を入れてくると、そしたら黒いこっちと華やかなこっちの中に矢部君が一人囲まれて、守られた。笑っているけど、すごく雰囲気変わったよね。

はその次。学力向上も大事ですけど、そこがしつかりないと昭和村の未来はないと思っております。今後ともよろしくどうぞお願いします。

### 何を失ってきたのだろう

赤坂

ちょっと別のことを考えていたんですけど、明治の初めには日本全国の、小字だと思えますけど、7万数千あったのです。それが明治の20年代、30年代にかけての大合併で1万数千に減り、で、何度か繰り返しているうちに1万1千弱になっている。その都度の合併の意味はたぶん経済効率がとても強かったのだと思いますけど、何を失ってきたのだろうかと考えてしまうのです。昭和村は明治の初めから見たらいくつの大字が付いたのですか。

舟木

10です。行政区は10です。

### 「産土」が壊される

赤坂

明治の大合併では南方熊楠という民俗学者がたった一人で抵抗運動をした。神社合祀反対運動と言われます。その時の批判が「産土」が壊されるってことでした。小さな集落はみんな産土の神社を持っていて、顔の見える暮らしの中で、何歳になつたら産土の神さまのところに行く、そういう精神的絆によって支えられている村の暮らしがあった。どこかに大きな役場を作られると実は神社も合併を強いられるのです。例えば五つ六つの小さな村が合併する。それで

矢部

はい。雰囲気は全然。

赤坂

空気が軽くなって、女性一人だと言えないことも3人、4人当たり前にいると、当たり前で議論ができるようになって、がらりと変わった。これ日本社会の縮図。半分にしちゃえばいいって僕は本当に思うようになりました。というわけで、虚められていることにも気がつかないほど面の皮が厚い矢部君でした。

矢部

歴史文化基本構想で西会津町も三島町さんを参考に作らせていただきました。西会津町はだいたい5地区に分かれていて、各地区の代表の方が自分の地区ごとに物語をまとめました。それをもとに地域アイデンティティを取り戻して活性化しようという動きに最後は委員のみなさんがなりました。残念ながら町を主体にしてそれを動かすことができる状態になっていないですが、委員のみなさんは個人的にそこから活動を始められました。町の広報誌に選定した百物語が毎月掲載されています。あの時、本をまとめた方は自らウオーキングイベントをどんどん開いた。先生たちが全員、自分が観光ガイドになって、先に立ってプログラムを作り、観光協会にチラシを作れとか言っています。観光協会は実はうちの弟が運営しています。今、兄弟で地域の歴史文化に関わっています。歴史文化が一番の観光資源になっているのです。どんな都会から来た方も、海外から来た方もなぜこれがこのようになってくるかの理由を知りたい。その時、歴史文化基本構想の冊子を持つ

て歩くと、西会津のほとんどを説明できる。それをもとに話すとは本当に全部繋がってくる人が多いです。もともと何を大事にしなきゃいけないか、何を若く人も少しづつ気づいていける。冊子自体は地味だし、そんなに読みやすいわけじゃないですけど、それを我々が使えることで今後もっとウェブ上で展開したりできる。

「rapとかスマホでどんな情報が出てくるように作ってしまう。それを小学校、中学校の子どもたちにやらせたいと思っています。今、仕込みの段階なのでやるかは決まっていなくてもいいけど、郷土のまちづくり事業の真ん中にしてしまいたいと思って動かししている状況です。」

赤坂

「百物語」の説明してもらえますか。

矢部

西会津町の中にたくさん歴史資源があるのですが、歴史資源一個一個だと、細かくてなかなかイメージに入っていないので、それぞれの地域にある重要な面白いストーリーを先生たちがまとめて書いてくださって、地域の人たちが面白いと思って愛することが出来るものを選んで選びました。

その時に議論になったのが、指定文化財と我々が考えている文化財の違いは何かということでした。私はそこで睨まれたのかもしれないですけど、指定文化財は指定文化財であるとしても、人それぞれに歴史の遺産の意味、意義、価値が違っていて、本当はそうすよね。だから西会津にある、とにかく引き継いでいきたいものを西会津歴史遺産として、指定文化財でなくても、分け隔てせずに百の物語を選定しよう

ということを非常に強く議論しました。歴史文化基本構想が権威主義ではないという状況に変わったことと自分たちが良いと思うから残したいということが非常に重要だというポイントに絞れたことが一番大きかったと私は思いました。

赤坂

権威主義を僕は黒ずんだ何かというふうに表示したのでですけど、やっぱり劇的でしたね、半分女性に指定したことによって。権威主義で30年前に自分が指定したのだと言う先生に、それは今どうなっているのか聞くと、それは知らなくて、訪ねてみると、その巨木がすでになくなっている。そういう現実がむき出しになってくるにつれて形勢がどんどん逆転していった。やっぱりその土地、そこに暮らす人々を主人公にして、その人たちが大事に思っているものが、指定されていなかったって大事な地域の宝物だということも当たり前にしたのです。でも嫌がられるわけですよ。権威主義の中で文化財のヒエラルキーを国指定、県指定、市町村指定にする。そこに入っていないものを実は地域の人たちがすごく大事にしていて、いつもお参りしていたりする。そっちを大事にしようということ。そこに暮らす人々を主人公にした地域づくりを学ばせてもらいました。百って良かった。百物語とすることによって、大字レベルから出してもらったものを調整していったんですけど、冊子にすることによって、みんな観光に使ったり学校教育に使ったり、いろいろなことが出来るような形にできました。

矢部

百の物語になることによって、使う側がとてなで、材料採取とか初めての経験をしました。まさしく泥臭い本当に大変な作業です。工人さんたち、ものづくりを嗜まれているみなさまがこんなに努力をされていたのを私も最近目の当たりにしたばかりです。そういうところもこの編み組細工の歴史の中では表にあまり出てこなかったと感じました。そういう部分、人に知られていない努力があった、今の美しい作品ができてきていることを多くの人に知ってもらえるように私も生活工芸館長としてこれから勤めてまいりたいと思います。ご支援よろしくお願ひします。

小林

ありがとうございます。三島町さんでは最近、編み組を学ぶアカデミーの制度を設けていらっしゃるんですよ。

もう一つ気が付いたことですが、当館に國井という学芸員がおります。南相馬の小高に伝わった箕づくりが原発事故の影響で途絶えてしまった。映像でその制作風景が撮られていたので、4年かけて自分で作ってみた。やってみてももちろん職人さんと同じようにはできないですが、難しいのは編む技術ではなく素材を取るための技術が7割だとわかった。ビデオに残っていない部分が非常に大きいということがわかりました。

三島町さんがこれから編み組細工のそういう泥臭い部分にも光を当て、いろいろな工芸のイベントの中で、最も難しいのがそこだと伝えながらやっていけることが大事なのかなと考えておりました。長くなりました。ありがとうございます。

### 人に知られていない努力があつて

参加者：二瓶仁志

去年の10月から生活工芸館の館長を勤めています。二瓶と申します。今の編み組む作業以上に材料にする部分が7割というお話がストレートに胸に響いておりました。私も去年の10月から

### 実際の生活の中で

板橋

私は去年の10月から教育委員会の生涯学習課長ですが、その前は二瓶館長の前職で生活工芸館長を4年やりました。私たちは歴史と文化の関わりについて文字を見て覚えるより、実際の生活の中で考えます。気づかないようではやってきています。例えば虫供養、早戸地区の虫供養は学校の総合学習の授業で必ず虫供養の日に3、4年生が早戸地区に行つて、地区の方と一緒に虫供養をすることを授業にしています。

最近のものづくりに興味を示す子どもたちもいて、夏休みになると、宿題じゃなく3日間工芸館に通つてものづくりをおじいちゃん、おばあちゃんたちに教わる。ヤマブドウのバックなん

も使いやすくなりました。個々の事象、歴史考証だと論争が起こりやすくなってしまふのですが、物語の場合はいかに伝えていくかという形にわかりやすく落とし込まれたので、西会津町広報誌の一番後ろのページは全部百物語です。それは子どもたちにも読まれるような形で学校にも取り入れられた。本当に使い手のことを考えてできた構想になったと実感しています。

赤坂

三島町に関わり、それから西会津町に関わり、二つの体験によっていろいろなことを学びました。地域の人が主人公になるって、簡単ではないですが。

小林

会場のみさんからもご感想、ご意見があればどなたかいかがでしょうか。お気軽に発言していただければと思います。ミュージアム連携のことが話題に出ていました。ミュージアムが連携することが合併ではない連携の骨格になりえるのではないかと私もこの1、2年考えています。ミュージアム業界に長く携わっている方がこの中にいらっしやいます。まほろんの本間さんどうですか。

参加者：本間宏

今日は先生がた大変刺激なるお話し合いがありました。ありがとうございます。昨日、文化財保護行政実務者懇談会というのをやりました。まさにこの歴史文化基本構想について、いろいろな声がありました。西会津からもご参加いただきました。いろいろな形でアクションを起こしていこうと思つているけど、今度は文化財保存活用

で我々滅多に作れないですけど、3日で作っちゃつたという子も出てきた。そういうふう自然の流れでいつの間にか文化と歴史の方に子どもたち、地域の人たちも馴染んでいる、知らないうちに自分たちの体の中でそういう動きをしているのかなと自分なりに実感しています。

### 悩んだ時は足元の泉を掘れ

私たち教育委員会の事業でもありますが、かつては地区で虫送りをやっていたのが、子ども数が少なくなつてしまつて今は他の地区の子たちも参加して、一緒に虫送りの行事をやるようなことも続いています。さまざまな文化、歴史を子どもたちも自ら体験している。昭和村の村長さんもお話ししましたが、高校がありません

域計画を作らないと補助金獲得の次の段階に行けない。歴史文化基本構想自体は法的裏付けがあるものではない。今度の文化財保存活用地域計画というのは昨年度施行された新しい改定文化財保護法に基づくものなので、簡単に言うとお客と合体しながら文化財を残すとともに活用していくという流れの一環です。これはやれる自治体とやれない自治体の格差がだんだん広がる危険があるものです。

### 体験しながら伝えていく

昨日の懇談会で、人口2000人に満たない自治体はどうすればいいのだろうという話になりました。いち早くやつた三島町が大きなモデルになる。先ほど荒屋敷遺跡の話がありましたが、3年ぐらい前、荒屋敷遺跡の資料などをお借りして、編み組細工が現代まで繋がる一つのモデル的なものを民俗技術という視点から捉えた企画展をやらせていただきました。これからはそれを未来に伝える、その意味を伝えることとがとても大事だと思います。体験しながら伝えていく三島町の取り組みは非常にいいなと折に触れて紹介させていただきました。

ただ専門的見地から言うとまだまだ難しい問題があります。縄文時代の編み組細工から現代までの間がよくわからない。特に古代、中世はほとんどわからない。素材の獲得方法もまだまだわからない。特に石器しかない時代に荒屋敷のように同じ幅の素材をどうやって取つたのか。いつの時期を狙つたのか、当時の普通の人がやっていたのか、職人技を持つ人たちだけがやっていたのか、そこもわからない。

最近、南相馬でもクルミ籠が出ました。川俣

なので、みんな高校になると会津若松やいろいろなところに行きます。義務教育の段階が終わつた時に、自分の生まれ育つた故郷三島には、こういう行事が季節ごとにあつたな、お祭りがあつたなど何でもいい、自分の体に染みつかせて、今の三島はどうなっているかなって思つてくれるように育つてもらいたい。それが故郷を思う気持ちになる。我々生涯学習課としては子どもたちの育成に繋げていくことが大事で、日々そういう企画を学校、地域と連携しながら活動しています。

町長から口酸っぱく言われます。悩んだ時は足元の泉を掘れ。必ず言われます。確かにその通りと今つくづく思っています。本当に泉を掘つてみると何か答えが出てくる。これからの時代、そういったことが大事だと思ひながら仕事をしています。

小林

ありがとうございます。子どもたちが三島で生まれ、そういう形で学んでいる。外から三島に編み組を学びに来てくださる方の制度もある。アカデミー生の方が聞いてくださっています。三島で編み組をやつての感想をお聞きできたらと思います。

二瓶

それでは今年アカデミー生として福島からいらした長澤さんです。本来ですとコロナの影響がなければ4月からスタートでしたが、7月から正式にスタートしました。待機期間中も三島のことを勉強されました。まだ短期間ですが三島に来ての感想を述べていただきます。



参加者・長澤

はじめまして、福島市からまいりました長澤と申します。第4期のアカデミー生として三島町にまいりました。三島町に来るきっかけは荒屋敷遺跡の成果展です。そこで見た編み組に心を惹かれ、数十年経ちまして、また三島に戻ってきたという感じです。編み組が現在も傳承されているのを知り、自分で習得したい、傳承したいまではいいかと思いますが、ぜひその技術を習得したい。材料にとっても興味があり、今、材料採取に関わらせていただき、とても貴重な体験をしております。これから1年間有意義に過ごさせていきたいと思います。

二瓶

ご紹介させていただきます。アカデミー生を修了して、その後の伝承生として工芸館スタッフで働いております3名です。私、館長を勤めさせていただいておりますので、彼女らと一緒にこれから生活工芸を盛り上げていけるように頑張っていきます。どうぞご支援のほどよろしくお願いいたします。

小林

ありがとうございます。みなさんから一言ずつお聞きしたいのですが、お時間になってまいりましたので、赤坂館長と町長に一言ずついただいて終わりにしたいと思います。

**縄文の技術は  
民俗の技術に繋がっている**

赤坂  
僕は縄文の技術は民俗の技術に繋がっている

と思っています。それについてはいくつか研究がありますが、例えば山桜の皮を利用するのも裏にするのか、表を出すのか、縦に使うのか、横に使うのか、編み方をどうしているのか、そういうことを徹底して調べた研究者がいて、間違いなく素材も技術も繋がっている。考古学の世界では認められていないかもしれないですけど、僕は繋がっていると思います。

それから箕のお話ですけど、一言付け加えると竹箕なのです。竹の箕。竹の分布圏の問題があつて東北に行くとならないので、イタヤカエドとかウリハダカエドであいうふうになつてくる。技術はほとんど同じですけど、決定的な違いは差別が東北にはない。関東以南では竹の箕を作る人たちが差別の対象になつていて、技術の背後にある文化、社会の差別の歴史みたいなものに繋がっているというのを付け加えていただきたいと思います。三島と西会津の体験はとても大きいと思うので、ぜひ交流をしてお互いに学べると思います。

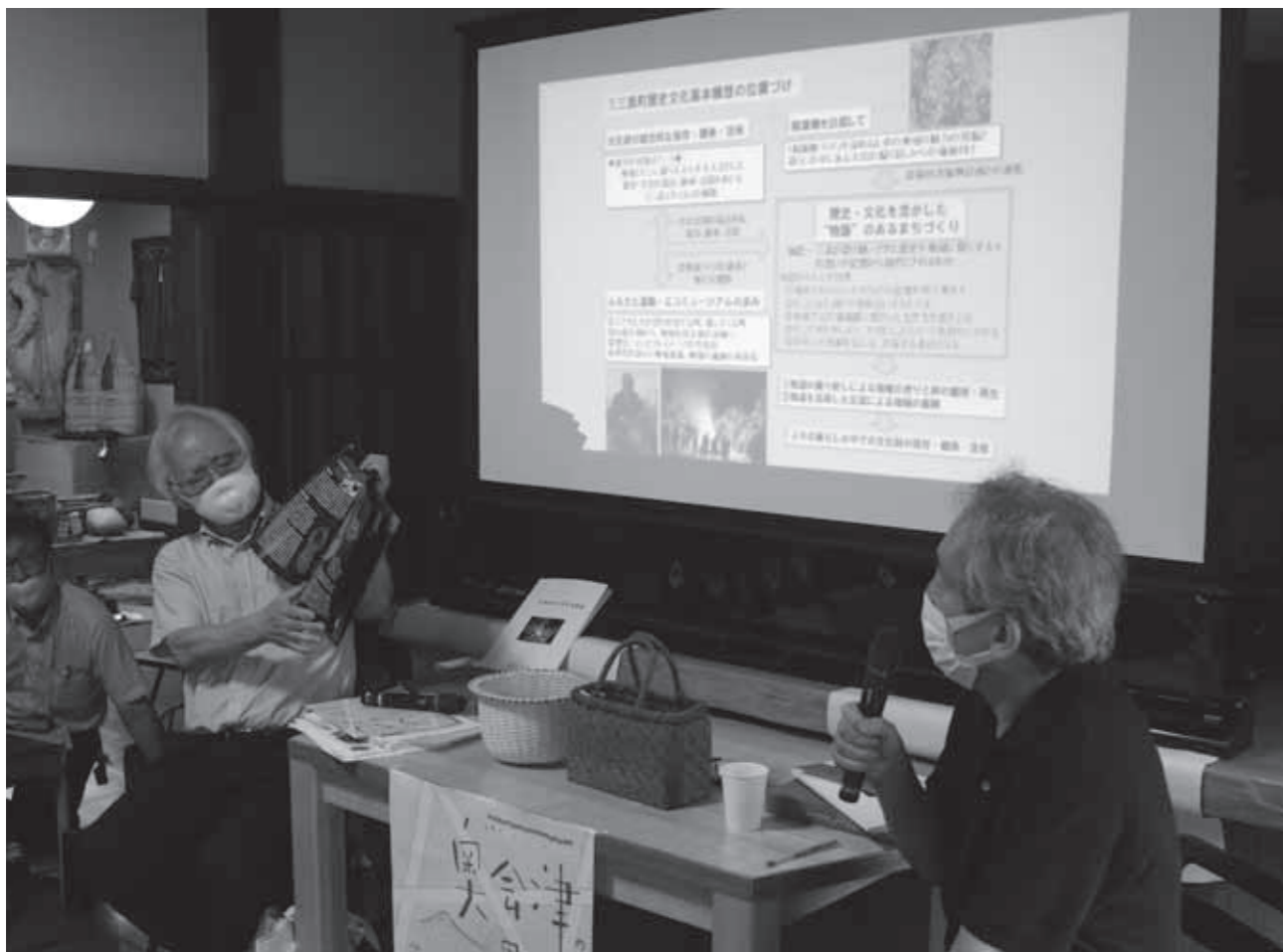
矢澤

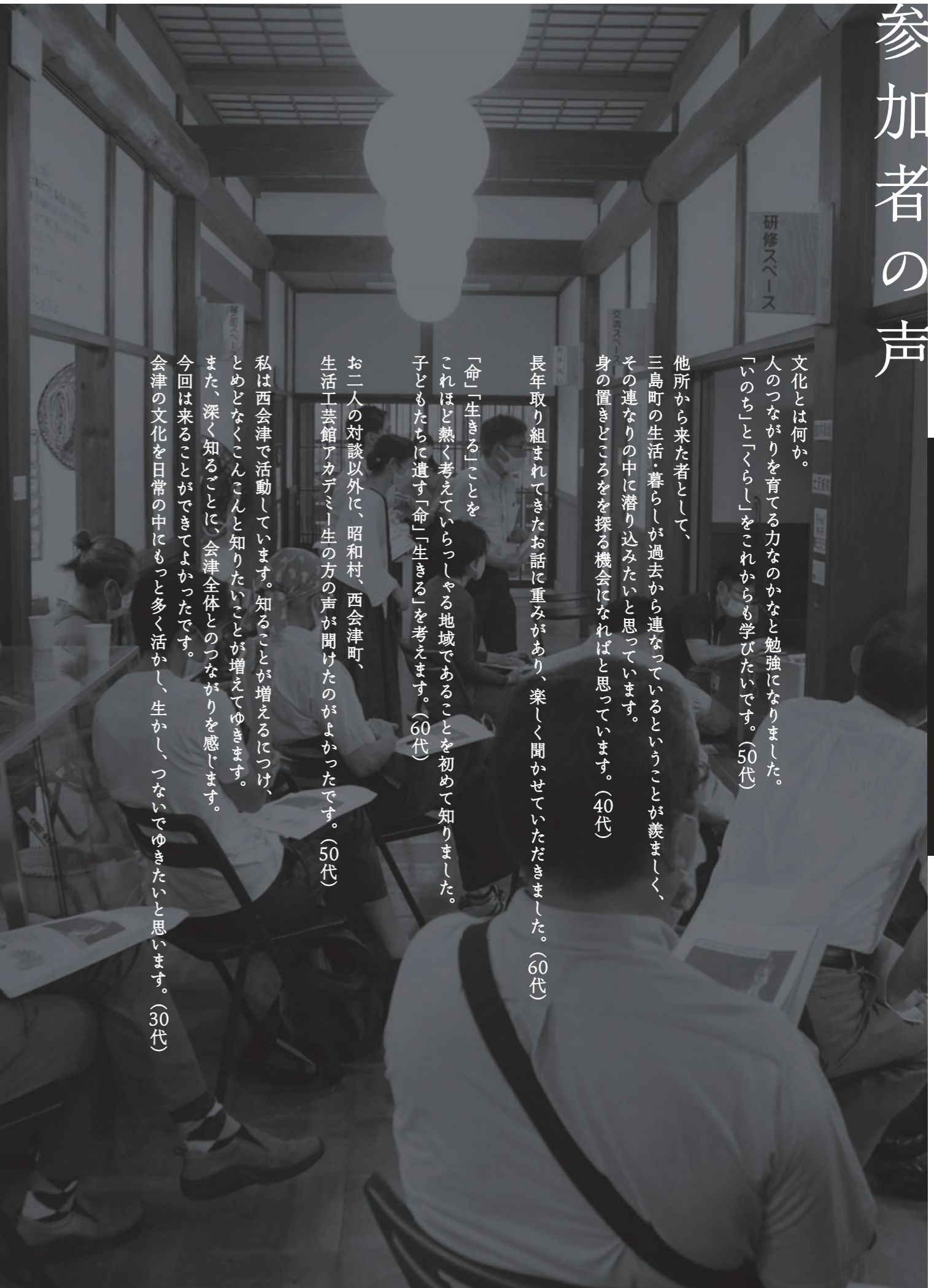
先生から交流というお話がありましたが、荒屋敷遺跡の出土資料を見ると相当広域的な交流があつた。栃木県、長野県やいろいろなところと交易、交流を通し自分たちの技を磨いてきた。広域的な仕組みの中に荒屋敷遺跡がある。会津若松より奥会津は歴史が古い。それがずっと続いている。自分たちはそういう地域に生まれた。交流を通して自分たちの地域、自分たちのことを交流者と一緒に考えながら三島の文化、文化とかこの問題と一緒に取り組むことが大事じゃないかと考えています。以上です。今日は本当にありがとうございます。

塚本

赤坂先生、矢澤町長本当にありがとうございます。みなさんも一度盛大な拍手をお願いします。次は柳津町、それから金山、昭和、只見と続きます。ぜひ今後ともこの事業をよろしくお願いします。ありがとうございます。

奥会津の方  
周





文化とは何か。  
人のつながりを育てる力なのかと勉強になりました。  
「いのち」と「くらし」をこれからも学びたいです。(50代)

他所から来た者として、  
三島町の生活・暮らしが過去から連なっているということが羨ましく、  
その連なりの中に潜り込みたいと思っています。  
身の置きどころを探る機会になればと思っています。(40代)

長年取り組まれてきたお話に重みがあり、楽しく聞かせていただきました。(60代)

「命」「生きる」ことを  
これほど熱く考えていらっしやる地域であることを初めて知りました。  
子どもたちに遺す「命」「生きる」を考えます。(60代)

お二人の対談以外に、昭和村、西会津町、  
生活工芸館アカデミー生の声が聞けたのがよかったです。(50代)

私は西会津で活動しています。知ることが増えるにつけ、  
とめどなくこんこんと知りたいことが増えてゆきます。  
また、深く知るごとに、会津全体とのつながりを感じます。  
今回は来ることができてよかったです。

会津の文化を日常の中にもっと多く活かし、生かし、つないでゆきたいと思います。(30代)

## 舟の方

### 第1回

「文化の泉を掘る」  
三島町歴史文化基本構想について」に参加して  
林あゆ美

奥会津が好きで、「奥会津の周り方」という文字をみてすぐに参加希望したこのオープンディスカッション。参加を決めてからよく読むと「三島町歴史文化基本構想について」とあるのに気づきました。もしかして、行政の方向けの内容だったのではないかしらと一抹の不安がよぎりましたが、ライフミュージアムネットワークが主催しているものは以前も参加したことがあり、どれももしろかったので、大丈夫と自分を納得させ、雨の土曜日に車を走らせました。

主題である「三島町歴史文化基本構想」。平成20年に全国で20市町村がモデル市町村として選定され、地域における歴史的、文化的な資源の活用方針などを策定、文化財の調査研究や、地域に残る文化の価値について発信していくなどをするようになったそうです。そこで選ばれた三島町は、人口・面積ともに一番小さい町。行政ってこういうこともしているのですね。一般市民は日常生活がとどこおりなく送られていれば、それが当たり前の日常であり、行政がどんなことをしているかについては、意識しないとわかりません。毎日忙しく過ぎていき、日本経済の長引く不況で働く環境は年々厳しく

なっています。かくいう私も、興味はあったものの、日々の仕事でくたびれていて、ようやくこういうおもしろそうな場に参加できる気力をもてるようになったところです。お話を聞きながら、自分の知らないところで動いている地域にジンとききました。

三島町の矢澤町長は周りの職員の方々に「元の泉を掘れ」とよく言われるそうです。だからなのでしょう。オープンディスカッションのタイトルも「文化の泉を掘る」。足元には泉がある、だから掘るのです。

三島町では歴史文化を掘り続け、そのひとつ荒屋敷遺跡に光をあてました。この遺跡については今回初めて知りました。まだまだ知らないことばかり。次に展示をみる機会があれば逃さないようにするにはとノートに荒屋敷遺跡をメモします。

文化の泉を掘ることは、次の世代である子どもたちにふるさとを残していくことにもつながるといふ話も出ました。総合学習で、虫供養などが子どもたちに伝わっていき、夏休みには工芸館で編み組をつくり、自然な形でふるさとの文化が継承されていくのはとても素敵だと思いました。子どもの頃の体験、思い出は、その後の人生の背骨になります。ふるさとの文化を自然な形で体が覚えていけば、離れてもふるさとに戻ってくる道が残され、お守りのような存在になりそうです。

オープンディスカッションは「オープン」の

文字通り、矢澤町長と赤坂さんの対談のみならず、参加されていた昭和村の舟木村長や福島県文化財センター白河館まほろんの本間さん、西会津町の矢部さんらの話も聞くことができたのもおもしろかったです。

昭和村ではからむし織の織姫制度が27年目を迎え、1200人程の織姫たちが3割程度、村に定着していること。村のおじいちゃん、おばあちゃんたちの暮らしの達人ぶりを織姫たちがみな魅力に思っている話を聞きました。

まほろんの本間さんから、編み組の作業も、編む前の材料をそろえることが作業の7割を占める話があり、7割！とびっくりしました。参加されていた三島町の生活工芸アカデミーの生徒さんが、その「材料」に一番惹かれてアカデミー生になったと話され、「材料7割」がすっかり染み込みました。

西会津の矢部さんの西会津町広報誌に掲載されている地域に伝わる伝説や民話、文化財の物語「にしあいつ物語100選」を覚えてもらい、帰宅して早速西会津町広報誌を検索し、拝読しました。物語として伝える文化、いいなあ。

権威主義の文化、上からこれが文化財だぞと押しつけられるものではなく、自分達がいいと思つたものを地域の文化にしていこう、これを当たり前にしていきたいという心意気が、矢澤町長をはじめとしてどの方の話からも伝わってきました。

まずは自分の心が動かないと、大事にしたい

という気持ちも生まれませんものね。

私は道産子なのですが、10代の頃に読んだ雑誌に只見のたもかくが紹介されていました。本好きだったので一読して「たもかく」にアコガレ、いつか行ってみたいと思っていたのですが、結婚で会津の土地に住み、我が子のひとり山村留学で只見において高校生活を送ることになると、当時の私には想像だにしませんでした。子ども時代に心が動いた土地に大人になって近づけるなんて、夢がかなったようで嬉しいです。只見のみならず、奥会津にずっと興味を持ちつづけているのも、子ども時代の延長なのかもしれません。

もうひとつ自分の話をする、元福島県立博物館長の赤坂さんの著作が大好きで、県立博物館の館長に就任されたときは、生の赤坂さんを見ることのできるかとミーハーに喜びました。以来、講座などでお話を聞く度に、深い見識に心を動かされ続けています。館長を退かれ、もう直接話を聞く機会はめったにおとずれないのだからかと思っていました。これからはまた機会がありそうです。赤坂さんの話からはいつも興味の種をまいてもらっています。その種が芽吹いて育ち、地域の泉にも気づかされていると思います。

次のオープンディスカッションの場所は柳津。楽しみです。



第1回  
「文化の泉を掘る」三島町歴史文化基本構想について」レポート  
岩波友紀

今回の連続オープンディスカッション「奥会津の周り方」は、奥会津は自然に根差した文化を育んできたこと、首都圏へのエネルギー供給を支えてきた歴史があることを背景に、近年や今現在は奥会津の町村がそれぞれ何を大事にし、そこにどのような個性または共通点があるのかを見つめていくというものです。5回にわたって行われるうちの1回目の三島町でのお話を聞きました。

私がこのオープンディスカッションに興味を持ったのは、特定の狙いがありました。私は現在写真家をしています。20年ほど前、三島町で豪雪の中行われたサイノカミに出会い、見たことのない文化に衝撃を受けました。また三島町にはサイノカミだけでなく伝統的な行事がいくつも現存していることを知り、戦後に写真家・濱谷宏が「雪国」で発表した世界がまだここに残っているのかと思い、そこから奥会津に興味を持ちました。何年かかけてその奥深い文化を撮影したいと思いましたが、いろいろな理由で頓挫し、昨年改めて取材撮影しようと会津に転居しました。

しかしながら奥会津のことを知るにつれて、ただ単に伝統の文化が残っているという現代のユートピアなことだけではないことがわかって

てきました。山に閉ざされた奥会津でも効率化、グローバル化の影響は十分に浸透し、自然を相手にした文化さらに生活までも、意図的に守らなければ存続しない状態であること。また、水力発電という経済的恩恵を受けて存続していたこと、などです。

今回の三島町でのディスカッションでは、まさに足元にある文化を大切に受け継ぐことが町の宝になるという構想のもと、保存、継承に努力されてきた経緯をお聞きできました。町の活性化に躍起になる場合、何か新しいことを始めることが多く行われたり、それでも今では地域の文化を「売り」にする試みは全国的にありますが、50年も前から三島町では地域の文化に目をつけ守り続けてきたことを知り、その先見の明に驚きました。さらに町民が意識せずに民俗文化を大切にしていることは、その歴史の長さゆえの結果であり素晴らしいことだと感じました。こういった地域の民俗文化は、意識するものでなく生活の一部であったものです。同じように継承され続けていても、「保存しよう、やらなきゃ」と意識することなく、どれだけ自然に行われるかというのが根本的に意味のあることだと改めて感じました。その「意識しない感」は三島町ではどの程度なのかを、深く知りたかったです。

根本の変革がない限りどうしても経済性が必ずつきまとうので、経済と（全くもって経済性と縁のなさそうな）文化を結び付けて存続させなければいけないことはとても大変なことだと思います。

連続オープンディスカッション  
モニター感想文  
青木慎太郎

現在、奥会津地域では、地域の存続が危ぶまれるぐらいに過疎化、高齢化が進んでいます。その対策として、地域に人を呼び込む手段として「奥会津らしい」ものを探す取り組みが各所または各団体で行われているところです。

では、「奥会津らしい」とは一体何なのでしょう。それは国内外から多くの人を呼び込める風景なのか、またはこの地域でしか味わえない特産品なのでしょうか？広域行政の一翼を担う只見川電源流域振興協議会（柳津町・三島町・金山町・昭和村・只見町・南会津町（旧南郷村・伊南村・館岩村の地域）・檜枝岐村で構成され、福島県と各町村の職員が事務局として勤務し、只見川電源流域の各種振興策に取り組んでいます。）に所属し、この地域の活性化を目指して日々の業務にあたっている私には、この「奥会津らしさ」を探すことが、とても大きく抽象的なテーマとなっています。

実際、みなさんも「奥会津らしさ」を表そうとすると、単に風景や特産品を挙げてしまうのではないかと思えます。私も奥会津に「今あるもの」だけから「奥会津らしさ」を探し出そうとして、すくく表面的なものと思うことや、本当にこれが「奥会津らしさ」を表しているものなのだろうかと感じてしまうことがあります。

今回、この「奥会津の周り方 第1回文化の泉を掘る」三島町歴史文化基本構想について

私的な感想になってしましますが、ただ単に残っているわけではない生活と文化の現状を知ること、奥会津への関わり方、作品を作っていく上での大きな指標の一つとなり、今後のディスカッションにも期待しています。個人的には只見川電源開発による生活、文化への影響、両者の関わりなどをもっとお聞きできれば幸いです。まだ1回目なので、今後の町村とうつつながっていくか楽しみです。

今回の複数町村にわたるディスカッションは、町村の垣根を越えて他町村の動きを知り、さらには今後連携したりすることにもなりそうなので、とても素晴らしいアイデアで有意義なことだと感じました。しかしながらこういったイベントの常ではありますが、いつも同じメンバーばかり集まり、なかなかその外へ広がらないことが往々にしてあると思っています。もっと一般の町民村民、会津以外の人や私のような他分野の人などが集まれる、聞かれるような広がりがあればと感じています。

先にも奥会津の地域が存続し、人々が生き生きと暮らしている地域を目指し、地域内の各集落の活性化を図っていくことにあります。この役割を果たすため、地域内外の人にとって奥会津が魅力的な地域であるために各種施策に取り組んでいるところですが、この施策の根底には、地域の人々が自らの地域の営みに目を向け、そこから今の暮らしにどう結びついてきているのかをどう手助けしていけるかが重要なのではないかと、今回のオープンディスカッションを通して気づかされました。

また、今回のオープンディスカッションで、行政単位としての市町村は地域の文化の承継にとつては意味を成すものではなく、町村の枠を超えて同様の文化圏が存在し、その文化を承継していくためには、自治体の連携や団体を超えた連携が必要だというお話がありました。これからの行政組織には、自分の自治体のみならず周辺自治体と連携した施策が求められており、この分野にも当然、広域的な連携が求められていることが改めてわかりました。

県内でも稀な広域行政体としての当協議会として、只見川流域の文化として広く町村の枠を超えて、連携して取り組んでいくことの必要性もまた今回のオープンディスカッションを通じて改めて認識できました。

この二つの気づきを心に刻みながら、今後も奥会津地域の振興のために取り組んでいきたいと思えます。ありがとうございました。

私たちの役割は、第4期只見川流域振興計画のスローガン「自然のなかにくらすいとなみ、100年先のみらいへ」が示す通り、100年

# モニターレポート

# 清の眼 根つこの眼 それぞれの地域学

既存・既知の地域文化に、  
学芸員や研究者、地域の文化に携わる  
人々によるさらなる  
調査研究がもたらす新たな発見と、  
そこから見える柳津の  
これからについて対話しました。

Life Museum  
Network

Life Museum Network 2020

日時：2020年9月19日(土)16:00～18:00  
会場：やないづ町立斎藤清美術館  
講師：伊藤たまきさん(やないづ町立斎藤清美術館学芸員)  
大里正樹さん(福島県立博物館学芸員)  
金子勝之さん(ブルーベリー園・農家民宿山ねこ店主)  
モデレーター：川延安直(福島県立博物館副館長/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)  
共催：やないづ町立斎藤清美術館

**伊藤たまき**  
やないづ町立斎藤清美術館学芸員。茨城県陶芸美術館、会津若松市教育委員会勤務を経て、2017年より現職。専門は日本美術史。会津出身で世界的に活躍した版画家・斎藤清の作品を主要なコレクションとする美術館で、斎藤清の多様な側面を新たな切り口で捉え直している。

**大里正樹**  
福島県立博物館学芸員。専門は民俗学。福島県内各地の地域の祭りや年中行事を中心に、郡山市・会津坂下町・昭和村などで調査を行っている。現在は特に柳津町の山あいの青中地区に伝わる藁人形行事の継承に向けた調査を進めている。

**金子勝之**  
ブルーベリー・自然栽培農家。柳津町砂子原地区在住。ティールームと農泊「山ねこ」を営むかたわら、先人に倣うことを主眼とし、農業や化学肥料を一切使わない農作物を栽培。訪れた方々に提供し、奥会津の素晴らしさを伝えている。



伊藤たまきさん

ます。近年、柳津町の藁で作られた人形の文化を研究して、柳津町に深く関わっています。そのお話を聞きたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

もう一方、金子勝之さんです。農家民宿山ねこブルーベリー農園を営まれております。農業を使わない昔ながらの農業を先人に学びながら続けるというスタンスで営まれております。地域に根差した目で奥会津をどう見ているのかお聞かせください。よろしくお願ひいたします。

では伊藤たまきさんからお話しいただき、休憩を挟んで後半はモデレーターを含めてディスカッションをしていきます。

## 「やないづの家宝展」

伊藤たまき

よろしくお願ひいたします。斎藤清美術館学芸員の伊藤と申します。今日新しい企画展が開催になりました。その辺りも交えながらお話しいたします。「斎藤清が見た日本、求め続けた会津」という展覧会と、ライブラリーコーナーでは「やないづの家宝展2020」という展示を行っています。この美術館は斎藤清先生の作品を専門に収集、展示、保管する美術館です。なぜ、そこで柳津の民具を展示しているのか。ちょっと不思議に思われる方もいると思います。まず「やないづの家宝展」についてご説明します。みなさんの資料の中にA4両面の「家宝誕生秘話」(49ページに掲載)という資料がございます。「やないづの家宝展」は去年から始まった比較的新しい企画です。当館には、今は2名の地域おこし協力隊がいて、美術館活

動を通して柳津町を活性化させ、文化を発信していく仕事をしています。「やないづの家宝展」もそういった事業の一環として始められました。ここに書いている金盛郁子が、2019年、去年から始めました。「やないづの家宝展」の前身の誕生、どういうきっかけ、どういう経過をたどったのかが書いてあるので、ぜひ後でゆっくり目を通していただきたいです。

地域おこし協力隊の今いる二人はまったく柳津とも会津とも縁もゆかりもないところから来ています。その彼女たちが実際にこの地で日々の生活をして、柳津の町民の方たちと深い交流を重ねています。

## 家宝誕生のきっかけ

まったく会津とは関係がないところから来た彼女たちが柳津の町民たちと交流しながら生活していく中で感じた会津の文化、柳津の生活をテーマに紹介したいというのが家宝誕生のきっかけでした。金盛は武蔵野美術大学の学生でした。彼女が呼び水となって、武蔵野美術大学の学生さんたちを柳津町に招き入れ、彼女たちが町民の人たちにインタビューをしました。

そちらにいらつしやる金子勝之さんには去年から家宝展でお世話になっていきます。生活の中で大事にしているもの、宝物があり、なぜその宝物が大事なのかを聞き取りをしました。で、聞き取った話、エピソードに学生さんたちがインスピレーションを得て美術作品を作る。その作品とインスピレーションのもとになった町民の方が持っていた宝物、そのエピソードをあわせて展示する企画でした。

お借りした民具などは、他人から見たら、「こ

事務局・塚本麻衣子

それでは連続オンラインディスカッション「奥会津の周り方」と題し奥会津5町村を巡っていくディスカッションの第2回「清の眼 根つこの眼 それぞれの地域学」を始めます。

では、まず斎藤清美術館学芸員の伊藤たまきさんにトップバッターでお話しいただきます。伊藤さんは新しい切り口で斎藤清の絵の見方を紹介していらつしやいます。「やないづの家宝展」として柳津町の民具を展示することも行っています。美術館と地域がどう繋がっていくのか、その辺のお話も聞けるのではないかと思っております。

二人目は福島県立博物館学芸員の大里正樹さんです。大里さんは民俗分野の学芸員で、地域の祭りや年中行事を中心に研究、展示をしてい



描いています。リアルで細かな描写からそう

いう気持ちを読み取れる気がするのです。

### 実は別の土地から会津を見ていた

齋藤清はもとと会津坂下町の生まれで、会津出身ではあるのですけど4歳の時に北海道に移ってしまいます。北海道で成長して東京に移り住んでしまう。東京に移り住んで、次に鎌倉と生活の拠点が変わっていく。つまり齋藤清は4歳までの記憶しかないのです、会津の記憶は。実際にご自分でもほとんど記憶がないと言っています。生活の拠点は大人になってからずっと会津とは違う場所です。北海道、東京、鎌倉。本当に会津で暮らすようになるのは1987年、先生が80歳になってからのことです。歳を取ってからやっと柳津の町で生活する。この地で暮らす人になったのです。それまで先生は会津によくちよく帰って来ていたし、会津の人たち、芸術家たちと交流は持っていたけれど、先生自身が暮らしてはいなかった。実は別の土地から会津を見ていた人間だったのです。多くの作品はそういった視点から描かれている。言わば異郷から見た会津の風景。齋藤先生は自分のそういった生き方にもややもやした気持ちがあったらしい。

### 高藤清は会津に戻ってきた時

齋藤清は会津に戻ってきた時、会津の民具や子どもたちの絵をいっぱい描いています。今、展示室でやっている齋藤清展の出品作品にも会津の民具が描かれています。家宝展は地域おこし協力隊が主になって彼女たちが企画したのですが、一方、私が今やっている展覧会の準備を進めていく中で、齋藤清の会津の民具、当時の生活ぶり、子どもたちと家族の仕事の情景を描いた絵を見ているうちに、感覚が似ているなと思ってきました。地域おこし協力隊がやる家宝展もよそから来た人間が柳津の暮らしぶりを町民との交流の中で聞き出して、そこから自分たちがルートにしてきたものとは違うものへの興味とか面白さを抽出して展示しています。齋藤清も会津の民具を見て、やっぱり面白いと思っ

活者だったら出てこない台詞だと思います。地元の人が苦労している雪を描いて申し訳ないと感じたくない。実際に生活したら雪かきはあるし、寒いし、凍って道は滑るし大変です。齋藤先生は雪景色の中に潜むそういう生活の大変さを知らない。知らないけれども「会津の冬」という作品で雪を描いている。そこに申し訳なさを感じる。

### 異郷の人が見た会津、柳津の魅力

異郷者の目、異郷者の感覚です。そういった感覚ですと会津の雪景色を描いていた。自分がよそ者だという感覚があった。よそ者の感覚で会津の風景、会津の生活、会津の人たちを見ていたと思う。だからこそこういう目が出てきたのではないか。スケッチも異郷の人から見たからこそ、面白い、描きたい、記録したいと思っ

もう一つ私には家宝展をやりたい理由がありました。学芸員な理由ですが、齋藤清先生はいっぱい柳津、会津の風景を描いていらっしやるけど、私には何をやっているのかわからない絵があります。例えばこの絵の中の人物が何をしているかわかりますか。わかる人はわかるのですが、私はわかりませんでした。てっきり雪で遊んでいるのだと思いましたが。会場にいらっしやる金子さんにインタビューした時、これは踏張だとわかったのです。遊んでいるのではない。踏張、象の足みたい以太い俵みたいなものを履いて、それで雪を踏み固めて道を作る。絵の中のこの子は遊んでいるのではなくて働いている。お仕事をしています。すごく感動しました。そうだったのかって。柳津の方のお話を聞いて初めて何をしているのがわかった。そういう発見がいっぱいありました。柳津の家宝展が実は齋藤清の絵を知る上でとても重要な事業なのだと気づいて、学芸員としてこれに取り組んでいました。

### 異郷の人間だからこそ見える

私は初めて踏張を知ったので、大興奮して美術館の上司に報告したのです。そうしたら上司は柳津町の出身なもので、事もなげに、自分も子どもの頃にこういうふうに通つくりしたよって言う。何をそんなに興奮しているのって。地元の人たちはこの絵を見て特に何てことのない、齋藤清先生が踏張の情景を描いているなと

### 申し訳なく感じていた

「会津の冬」という齋藤先生のとても有名な作品があります。生涯、描き続けたテーマですが、一方では地元の人が苦しんでいる雪を絵にすることをとても申し訳なく感じていたみたいです。齋藤先生が会津にずっと暮らしている生

た。私は今回の展覧会、「やないづの家宝展」を通して異郷者の眼差し、その可能性を考えさせられました。

### 美術館、そして美術館の学芸員ができることを

柳津町も人口減少が進んでいます。高齢化も進んでいます。その土地が固有に持っていた文化、生活様式がどんどん失われていく流れにある。そういった中で、外から来た人間がこの地にある文化、生活の魅力を見つけ出し、発掘していく。それが地域特有の文化を守る一つの可能性になると私は今回の事業を通して感じました。美術館、そして美術館の学芸員ができることを考えさせられる事業だったと思います。金子勝之さんにお世話になって、いろいろ教えてもらい大変勉強になりました。ということで私の話は終わらせたいと思います。ありがとうございます。

### 塚本

伊藤たまきさんありがとうございます。いかにも会津という齋藤清の絵もよそから来た目によっている。それが地域おこし協力隊の目と近いのではないかとという着眼点がすごく面白いと思ってお聞きしておりました。本日は金盛郁子さんから地域おこし協力隊として柳津にどう関わってこられたのかをお話しただく予定でしたが、コロナウイルスの影響によりご出演が叶わなくなりました。そこで今回とても素敵なテキストをお寄せいただききましたので、後でじっくり読んでいただけたらうれしいです。では次に、これも外からの



大里正樹さん

目になるのかと思うのですが、民俗研究としての立場から柳津に関わっている大里さんから話をお聞きます。よろしくお願ひいたします。

### 大里正樹

福島県立博物館で民俗の学芸員をしております大里正樹と申します。私も金子さんに大変お世話になっていて、金子さんのファンの一人です。みなさんの中にも金子さんとの繋がりのある方がいらっしやると思います。私自身は民俗を調査するのが仕事として、それを展示に繋げていこうと考えていて、今のフィールドは柳津です。最初に調査に来て金子さんに大変お世話になりました。そうした経験も踏まえながら、民俗調査者として見た柳津町の民俗、金子さんについて、今日のテーマの「清の眼 根っここの眼 それぞれの地域学」ということでお話しします。私は外部から柳津の民俗について学んでいる人間ですが、金子さんは地域学を地元にあつて地元への深い理解にもとづいて、ある意味で体現しておられると私なりに理解しております。

たまきさんや地域おこし協力隊のみなさんと同じで私も県外の千葉県の出身です。2014年の4月から福島県立博物館に勤めており、各地の特に夏季のお祭りや年中行事に興味があつて集中的に調べています。もちろん博物館でするので、ものを集めて調べるのも仕事です。家宝展のように、それぞれの地域に伝わっている民具、生活道具、そういったものも調べています。柳津町との接点ですけれど、私が興味を持って調べているのは藁に関する行事で、来年の企画展にも繋げていければいいなと思っています。実は福島県は、呪いの藁人形ではない藁人形、

同時開催でやりました。

### 何をやっているのかわからない絵

同時開催でやりました。もう一つ私には家宝展をやりたい理由がありました。学芸員な理由ですが、齋藤清先生はいっぱい柳津、会津の風景を描いていらっしやるけど、私には何をやっているのかわからない絵があります。例えばこの絵の中の人物が何をしているかわかりますか。わかる人はわかるのですが、私はわかりませんでした。てっきり雪で遊んでいるのだと思いましたが。会場にいらっしやる金子さんにインタビューした時、これは踏張だとわかったのです。遊んでいるのではない。踏張、象の足みたい以太い俵みたいなものを履いて、それで雪を踏み固めて道を作る。絵の中のこの子は遊んでいるのではなくて働いている。お仕事をしています。すごく感動しました。そうだったのかって。柳津の方のお話を聞いて初めて何をしているのがわかった。そういう発見がいっぱいありました。柳津の家宝展が実は齋藤清の絵を知る上でとても重要な事業なのだと気づいて、学芸員としてこれに取り組んでいました。

### ニンギョウマンギョウ

柳津町は胄中地区のニンギョウマンギョウ行事というのがあります。ご存じの方はいらっしやると思います。西山の山の奥にある胄中という地区で2月2日に行われる藁人形の行事です。金子さんのいらっしやる砂子原にはセンドムシという、これも言葉で聞いたら何だかわからない行事があります。サイノカミに近いですが、藁で作った大きな円錐状のもので大きな火を焚き、麻殻（麻殻）に着けた松明をそれぞれ持ちまして、それでみなさんが叩き合うという勇壮なお祭りです。これも毎年旧暦の9月18日、今年はお正月と文化の日（11月3日）にやるのですが、その調査でも柳津におじゃましておりました。そのこともあつて去年、筑波大の民俗学研究室の学生さんたちが来て、金子さんにお世話になりました。

前置きが長くなりましたがニンギョウマンギョウ行事の一つの危機、継承の上でちょっと危ないことがあったのです。そうした中で、金子さんが大きな役割を果たし、また無事に継承されているということをご紹介したいと思います。

す。これが胄中地区で2月2日に行われているニンギョウマンギョウの藁人形です。写真では小さく見えますが、実際は人間の大ききぐらゐり、だいたい2mあります。人の背丈を超えるぐらゐの大ききがあります。



2月2日に行われ、2体の男女の藁人形を製作して燃やす。男女はどこでわかるかという性器の表現があります。夕方には小豆ご飯を食べ、その箸を人形の体に刺す。自分の悪いところに自分が食べた、使った箸を刺すことによつて自分の悪いところを人形に持つていってもらつという民俗的な信仰がありまして、それを示していると思います。現在は燃やしてしまふのですけれど、かつては人形を立ててしばらく置いておいたそうです。で、ニンギョウマンギョウというこの名前自体が非常に興味深い。「ニンギョウマンギョウ送れよ、納豆つっこも送れよ」という掛け声をかけながら、村の上と下を送つていったそうです。納豆つっこというのは納豆の「つっこ」のことです。昔は藁で納豆をお正月の前に自宅で作つていた。その納豆つっこに使つていた藁は非常に臭いが強い。その臭いの強いものを藁人形に使つて、地区の上と下に送ることによつて悪いものを送る。外からは悪いものが入つてこないようにするという信仰と考えられます。

### 絶えずに行われている唯一の行事

2004年、この頃に県の祭り・行事調査があり、ニンギョウマンギョウはそれで取り上げられた行事です。2月2日は百万遍行事が新潟から会津にかけて分布している。そこに注目していきますと、ちょうどこの時期に新潟県側から

ら津川とか旧会津藩のところに多いのですけど、そこから会津地方にかけて藁人形が多く分布していました。福島県側で絶えてしまった行事のようですが、人形送りと言われるもの一種です。現在の福島県側では胄中地区の行事が絶えずに行われている唯一の行事です。西会津町の萱本地区では一回絶えたけれど、また地域を盛り上げるために復活させて現在も盛んに行われています。

そういうことから考えると柳津町胄中のニンギョウマンギョウ行事は断絶することなくずっと続いている非常に貴重な行事。百万遍に関わる藁人形の貴重な行事であると言えます。今は作つてその日に燃やしてしまふ。サインカミと同じようにお正月のしめ飾りもこの時に燃やしてしまふ。右側が男性、左側が女性。胸、あるいは性器の表現が見られます。女性のほうは薙刀と懐剣を持ち、男性のほうは腕に弓をかけていて矢もあります。大小の刀も着けています。これを地域の人たちが燃やす。藁で作られた人形なのでよく燃えます。小豆粥を食べた箸なんかも刺して、消防団の方が点火して燃やします。顔には、「村中家内安全、無病息災祈願」と住民の方が書いています。絵も非常に味がある。怖がらせるのが目的でもあるので、陰しい怖い顔をしています。角もありますね。これで悪いものを追い払う。女性のほうは胸の表現があります。これも地域のおばあちゃんたちが大笑いしながら作つていたりする。

### 地元の方だけの行事

ここで金子さんのお話になるのですが、私は2015年2月2日に初めてこの行事を見ました。残念ながら藁人形を作るところは、直前の

それぞれの家から藁を出すことができなくなってしまいました。集落だけで、自前で藁を確保することが困難になってしまった。

私もこれまでに4回拝見しているのですけれど、2018年2月には藁人形を作ることができませんでした。作りたいというお気持ちはもちろんみなさんあるので、半紙に顔だけは描いて準備はされていたようですが、結局藁が集まらずにこの年は人形が作れなかった。こんな初めのことだとおっしゃつておられました。本当に少ない藁をかき集めて人形のかたちに置いて燃やし、この年の行事は終わつてしまいました。

例に漏れずといいますが、地域社会の少子高齢化はどこでも進んでいる。これで絶えてしまうところも多いと思います。胄中は2018年時点で継承の危機にさらされた。人形を作る人はいるし、作る気もある。けれども藁が用意できなかった。行事は続けたいけど藁がないということが問題でした。

### 人の輪を作りだすことで解決

金子さんは非常に顔が広い。農家民宿もやっていて、胄中の行事についても理解がある。柳津町を車で走っていますと、まだ藁を干しているところを目にすることがあります。だから藁が無いわけではないのですね。そこをうまく繋ぐことができないうことだろうと思いません。で、胄中の人から藁がないという情報が入つた金子さんは、翌年から町内の大規模農家から藁を譲り受けて、ご自分で軽トラ2台分の藁を胄中地区に持つて行つた。

地区だけでは困難な課題を人の輪を作りだす

### ホームグラウンドのことを深く理解している

金子さんは武蔵野美術大学の学生さんを連れて行事の見学に来るようになりました。地域以外の人たちが行事に興味を持つて見に来るといふことが生まれています。私が調査で目にした金子さんの役割ですが、私などは先ほどの伊藤たまきさんの言葉で言うなら異郷人、外から来た人間で地域の繋がりを持つていくわけではない。けれども、金子さんは、地域に暮らして、地域のことに興味関心を持つています。金子さんにとつての地域、ホームグラウンドが柳津町なのか西山地区なのか、あるいは砂子原地区なのか、広がり広い狭いはあるかもしれないですけど、自分自身のホームグラウンドのことを深く理解している。そして、それにもとづいて外の人に伝えることを惜しまない。そこが金子さんが持つている重要な部分かと思ひます。

### 地域にあって人を繋いでいく

地域にあって人を繋いでいく。それは地域と地域の人々を繋ぐということでもあるでしょうし、その地域の中と外の人間とを繋ぐという役割もある。私自身もニンギョウマンギョウの調

査だけでなく、大学生を実習地に受け入れるご案内や砂子原のセンドムシ行事の調査、そうしたところでも本場に助けられています。私自身がそれに対して何を返していけるのかという、展示や文章として発信していくことだと思ひます。私が取り組んできたこれまでの調査の中で感じた金子さんのような地域にある人が人々を繋いでいく役割についてご紹介しました。私の話は以上です。ご清聴ありがとうございました。

塚本

ありがとうございます。胄中のニンギョウマンギョウというキーワードだけですごくインパクトのあるお話だなと思つてお聞きしていました。行事を繋いできたのは地域の人だけれども、これからのことを考え、さらにどう繋げていくかという時に外から来た者、その人々を繋ぐ間に入る人、そういった方の役割が必要なのだとこのことをとても感じました。では、金子さんお願いいたします。

### やらなきゃいけないからやる

金子勝之

みなさんこんにちは。金子勝之です。学芸員さんにはずいぶんと持ち上げられてすつかり気分が上がりつつあります。

ニンギョウマンギョウ。地域の方がおっしゃるには、胄中はニンギョウマンギョウをやらなきゃいけないところ。理由もなく、わけもない。とりあえずやらなきゃいけないところだ。これほど強いものはないと思ひます。あれがあるからやるのか、こんな理由があるからやる

日曜日に作つてしまふということで見ることができませんでした。この日は平日でしたが、確かに今日燃やしますよということ、夜にまた伺いました。本当に地元の方だけの行事で、観光客が来る行事ではありません。写真を撮りに行くのも私ぐらいかと思つていたので、同じく写真を撮りに来ている金子さんがおられました。ほぼ毎年来て写真におさめている写真家だと思ひました。記憶が鮮明に残っています。

地域の外から来ているのは私と金子さんぐらいだったと思ひます。地元の方が毎年やつていふ行事で、当たり前なのです。来年どういふうにやるのか覚えて残していくという気持ちは強いのですけれど、私と金子さんのように写真や映像に撮つて残すということはあまりやられていないようです。

### 藁が入手困難に

「ご覧の通り長い藁を使っています。今のコンバインで機械化した農業では長い藁はまず残りません。手刈りをしていけばいいのですが、機械で刈つてしまふと藁は細かく砕いて肥料にしてしまひます。長い藁を使うためには意識的に残しておかなければいけない。胄中は西山温泉の山の方で耕地が少ない。今は戸数も減つてしまつて、大きく農業をされている方はいらつしやらない。藁が入手困難になつてしまつたのです。で、人形が作れないというふうな状態になつてしまひました。

これも村の決まりですけど、丸まつた藁、一抱えの大きき藁を、一回りとか二回りそれだけの家が分担して出す。ただそもそも稲作をしていないというお家も多くなつてしまつて、そ



金子勝之さん

とかじゃなく、やらなきゃいけないからやる。その気持ち私は大事だと思うのです。それで毎年行っています。

いつでしたか、すごい雪の降る時におばあちゃんたちがうずくまって藁で作っていた。作りながらの着た背中に雪が積もっている。あの風景が本当に忘れられない。印象的な良い写真を撮らせてもらいました。そんなことがあった。

それから砂子原地区のセンドムシ。大里さんに紹介していただいた。あれもやらなきゃいけないことです。100年前に一度やらなかった。その時に砂子原の大火で地域が全焼してしまっただ。やらなかった年には大火があった。だから何としてもやらなきゃいけない。旧暦で9月18日の夜です。

## 自分たちの心の中から

ニギヨウマンギヨウもセンドムシもあまり人に教えない。観光で人を呼ぶためじゃなくて自分たちがやらなきゃいけない、そういう理由のもとにやっている。あまりギャラリーを加えてちやほやされるのは嫌だって暗黙の了解があつてね。それで誰にも教えない。それでも見ていただきたい人もいたりするので、3人から5人ぐらいの人に声をかけることもありま。そんな話で、その地区でやる行事は観光用じゃなくて、自分たちの心の中から出てくるものなのだろうと、そんなふうに思います。

## 何ができるのだろう

私は世界遺産を作って、世界遺産を食べて、世界遺産を提供する。そのぐらいの気持ちを持って差し支えないだろうとそんな思いを持っています。奥会津に住む人はみんな持って差し支えない、そんなふうになっています。食べて美味しいものが出てくるとうれしいじゃないですか。みなさん笑顔になる。それが好き。そこに幸福感って生まれる。私ができることはそういうことなのかなと思う。奥会津の方々には関わりを持って多少迷惑かけながらも、強引ながらも、こんなことで横の繋がりと。何か地域の繋がりができたら、自分が役に立っているのかな、そんなふうには思ったりします。

## みなさんの5年先、10年先を見てみたいから

奥会津をもし記録できるなら、2020年の今をスパッと切って、それをデジタルかなんかで拵けていたら面白いだろうな。それを毎年やる。デジタルならできそう。今ここにいらっしゃるみなさんのすべてを残す。山の木、水。そんなものを記録して積み重ねていったら将来の人たちが楽になるかなと思う。それをスーパードコンピュータの片隅に記録していく。きつと将来の人に何か役に立つ。将来的にはデータの中心から人の心、喜びとか幸せ感とか、そんなのまで測れる機械がいつかできるかなと思う。ピッと測ると自分の幸せ感みたいなものが測れる。顔見ればだいたいわかりますけど、そんなものが記録される時が来るような気が私にはする。その土地の2020年まで遡って、この年はどんなだったろうかというのを解析できる。その時までは長生きしてみたいと思います。

で、私ができることといっても、民俗学的なことは何もわからない。私の生まれは昭和27年です。12歳の時に東京オリンピックがあつて、一気に経済成長した。その恩恵を受けながら高校を卒業して、金の卵で上京した。経済成長の恩恵を受けた。

遺暦の頃、2011年、大震災がありました。その時もこの辺ですからね、同じ福島県人なのにこんな何ごともなくて、申し訳ないなと思うくらい何もできないでいた自分に苛立っていました。今年はコロナ禍。日本国内で大変なことが起きているのに自分が何もできないもどかしさがいづつも付きまっています。何ができるのだろう、今自分の周りにいる人たちにに対して。自分が関わる人たちにに対して何かしてあげることではないのか。何かして差し上げることができないのかという思いが少しずつある。

## 下流の人に迷惑をかけちゃいけない

食べ物に関して私の西山地区は、水が美味しいし、食べ物もとても良いものができます。なので、関わるにしても美味しいものを食べて元気になっていただきたい。美味しいものを分けて、みんなが元気になってくれればうれしいというのが一番強いです。

私はかなり上流に住んでいます。この只見川の支流の滝谷川の上流。上流に住んでいるからこそ、下流の人に迷惑をかけちゃいけないという思いがあります。ここで作る野菜が下流の生活環境を壊しちゃいけない。野菜を作る時にそんなことがあっちゃいけない。なので、化学肥料的なもの農薬的なものはまったく使わない。地元にあるものを堆肥にしてそれで野菜を

作って、みなさんに食べていただいています。初めて食べたのに美味しいと言ってくださる方が多いのは、お世辞じゃないのだろうと思ったりますのです。

## 水の力

数千年の間日本人が食べてきたものの延長線上にあると考えていいのかな。化学肥料で採られたものはおそらく100年に至っていないと思う。人の体に受け入れられていないと思う。私が作っているものには肥料もあげない。山なので、雑草と言いたくないですが、草がたくさんあります。その草を敷いて、それで野菜を育てる。結構立派に育つのですよ。本来、化学肥料や農薬は野菜たちにも人にも必要ないと思います。

きつとうちの地区の水の持つ力、お米が数千年の間、同じところで作り続けられるのは水の力と思えば、畑もそうであるはず。湧き水とかね。周りの人にそんなのを食べてもらって元気な顔が見たい、喜んでくれる顔が見たい。美味しいと言っている顔が見たい。たぶんそれを自分の満足としたいのだろうと思います。

雪が多いところなので、冬には冬の食材、漬物やら燻製作りをやった。なるべく先人、先輩たち何代か前の人たちが作っていたような野菜を食べてみたい。そう思ってたぶん無農薬で作ろうと思った。ああ、こんなのを食べていたのかとか、燻製作りは縄文時代に始まっていたんだとか、こんなのを食べて結構豊かな食生活してたんじゃないのかなというように思うを馳せています。できたら自分の関わる人にはぜひ食べていただけたらいいなと考えており

ます。

## 和食を取り巻く文化すべて

山間の奥会津地域で私を含めてみなさんが食べているものは自然に由来するものがほとんどです。山間部にある美味しいお水、山菜、野草、そんなので体を作って生活を続けています。世界ユネスコ無形文化遺産に平成25年は和食が指定されました。それは和食に関わる文化すべてを言うのだそうです。築地の寿司とかそういうことじゃなくて、和食を取り巻く文化すべて。それはどこに行ったら食べられるというのではなく、京都に行ったら食べられるとか築地に行ったら食べられるとか、そういうものではない。自分たちの目の前にあるということに気が付いた時はとてもうれしくなります。我が家では世界遺産を食べているんだ。そんな思いをしました。

## 大事な要素の一つに作法がある

漬物などの保存食や発酵食品も世界遺産に登録された和食の中にある。そして見のがせない大事な要素の一つに作法があるのですよ。私たちが義務教育の時にやっていた「いただきます」「ごちそうさまでした」、食べ物に感謝して食べましょう、残さないで食べましょう、そういうのがきつとインパクト強かったのだろうと思う。どんなに美味しいものを食べても、食べ残したり、散らかしたり、行儀悪いのは文化に値するのかわりか、疑問ですね。

すでに和食は、義務教育の学校給食からできていたのか、そんなふうには思います。だから、難しいですね。どうなのかな。幸せだったとも思うのですが、その幸せを自分は甘受していないのかとまどいを持っていたような気がします。そのとまどいが絵の表現に出ている。斎藤先生は会津の風景に限っては、どうしてもその風景の中に住んでいる人を意識したと思います。会津の風景に出会えたこと、会津の人たちに出会えたことの幸せはあつたとしても、自分はそのことに幸せを感じていいのかというところとまどいがあったのではないかと思うのです。

## 伊藤

難いですがね。どうなのかな。幸せだったとも思うのですが、その幸せを自分は甘受していないのかとまどいを持っていたような気がします。そのとまどいが絵の表現に出ている。斎藤先生は会津の風景に限っては、どうしてもその風景の中に住んでいる人を意識したと思います。会津の風景に出会えたこと、会津の人たちに出会えたことの幸せはあつたとしても、自分はそのことに幸せを感じていいのかというところとまどいがあったのではないかと思うのです。

## 川延

会津の人になる幸せと芸術家としての幸せは別だった。芸術家としての幸せはあつたのでしょうか。

## とまどいがあつたからこそ

## 伊藤

あつたと思うのです。ただ、斎藤先生は芸術家としての幸せと会津人の幸せとを分けて考えていなかったと思います。分けていたらそこにとまどいはなかった。割り切っていたか。割り切れないものがあつたからとまどいが生まれたいと思うし、それが表現に出てきていると思います。でもそのとまどいがあつたからこそ、何て言うのかな、感じる事ができた、見通すことができたということもある。

長生きしたいと思うのは、みなさんの5年先、10年先を見てみたいから。自分のことよりもそれを見てみたい。そんなことを思いながら日々を過ごしています。元気に楽しく、幸せに暮らしてあります。今一番幸せ。とてもいい時にいいところと呼ばれました。ありがとうございます。

## 塚本

ありがとうございます。金子さんの地域への根差し方のスパンは、何十年とか何百年じゃなく何千年、何万年の単位で過去と未来を繋げていると感じました。10分休憩を挟み後半のディスカッションを行います。

.....

## 塚本

では後半、6時ぐらいまでみなさんのお話も交えディスカッションをやりたいと思います。後半は福島県立博物館副館長の川延がモデレーターに入ります。

## 川延安直

みなさん、今日はお集りいただきましてありがとうございます。3人のみなさんありがとうございます。今日のお話を聞いて一つ頭に浮かんでいたのが「遠野物語」の佐々木喜善。柳田國男がいきなり遠野に行つて「遠野物語」を書いたわけじゃない。もともと遠野でいろいろな話を収集していた地元の人が出て、その方の存在が柳田を動かした。「家宝展」も見せていただきました。柳が民芸を発見した。彼は民芸を創作したわけではなく、民芸を発見したの

## ハブとなつてくださる人の存在

だから、外部のものが直接どこかに乗り込んで行つてもだめなのです。やっぱり中間領域の人というか、ハブとなつてくださる人の存在がとても大きい。そのハブとなつてくださる人と博物館、美術館がどう繋がっているかがこれから大きな課題になっていくと思います。さつき伊藤さんはよそ者による文化の発掘の可能性ということを言っていました。発掘するのも大事だけれども、一番大事なのは発掘すべき文化を創造した人、そしてそれを継承してきた人たち。偉いとか変な言い方ですけど、上位にあるわけです。そういうものを僕は発掘させてい

ただき、調査させていただくということになるわけです。そういう先達としての金子さんのような存在、佐々木喜善のような存在にどれだけ会えるか。それで文化がこれから続いていくかどうかが決まっちゃうような気がします。さつき金子さんがおっしゃっていた、2020年の今を全部記録するデジタルアーカイブ、ピッと胸に当てれば幸せ度合いが測れるもの。その幸せ度とは文化度だなど思いました。いろいろ難しく考えるよりも幸せかどうかで文化度は決まるのではないかと印象を強く持ちました。

ここから伊藤さんと大里さんに振つていき



川延

まさによそ者の目を持った人だったと思いますね。では大里さんにお聞きします。奥会津に学生が地域の調査に来ます。学生は何をつかんで帰っていくのでしょうか。

### 学生生活では体験できない経験

大里

先ほど詳しくは申し上げませんが、昨年11月に筑波大の学生たちが民俗調査で5泊6日で柳津町に来て、金子さんにも大変お世話になったのです。回覧板は事前に回していますが、何より飛び込み調査ですね。例えば、突然家に来てピンポン押して、こんにちは、信仰のことを調べているんですけど、いろいろ教えてくれませんか。傍目には完全に怪しい人ですね。現代ではなかなか難しいです。そういう飛び込み調査をどんどんする中で、金子さんのお子さんぐらいの年齢の学生たち4、5人がずっとお世話になって、地域を歩いた。普通の学生生活では体験できない経験です。

学生というのは自分の経験でもそうですけど、同世代の繋がりが強いので内にももって、あまり地域の人たち、違う年代層の人たちとの繋がりを体験しない。地域を歩いて自分の知りたいことを聞いて回るといって、その経験そのものが非常に大きな経験になる。先ほど川延さんの話された『遠野物語』の冒頭には「願わくば之を語りて平地人を戦慄せしめよ」という言葉がありますが、地域に昔から伝わっている話を聞いて、そこに暮らしていない、都会で暮らしている人たちは本当に戦慄というぐらいの衝撃を感じる。その地域の研究をずっと続けていく

いものがあると思うのです。ニンギョウマンギョウとかセンドムシを見ていて、どのような見えないものを感じますか。

### 当たり前であるからこそ

大里

今日ご紹介したニンギョウマンギョウとか民間信仰に関わるものの背景は目に見えないですよ。『家宝展』で私が本当にびっくりしたのはオシンメイサマ。あれは形としては残っているけれど、おそらく実際に使っていた方々はお亡くなりになっている。お年寄りが一人亡くなるのは図書館が一つなくなるのと同じだと言ったりしますが、お年寄りがずっと伝えてきたものというのはいくらも失われてしまったのかもしれない。みなさんが聞いているのは、おばあちゃんたちが遊ばせていた、たぶんオシラサマあそばせと言われるものだと思うのですが、わかる範囲でその地域に残っているそういったことを伝えていくのには、聞き書きとか記録があればいいのかもしれないですが、地域と人間関係ができているところが地域おこし協力隊のみなさんの強みです。ぜひ何度も足を運んで話を聞いていただきたいと思います。

当たり前前のことですが、民具がいろいろあり、中にはお膳もありましたけど、そうした当たり前のも、逆に当たり前前であるからこそ、その地域の人の使い方がむしろ大事なのではないかと。信仰に関わるものだけでなく、当たり前前の道具であっても、そこに関わっていた人々の思いを聞き取り、さらに深めていただければと思います。

わけではないかもしれないけれど、そこで知った地域の人々の暮らし、考え方は衝撃を持って学生さんたちの人生に影響を与えるのではないかと思います。

川延

「戦慄せしめよ」という言葉は強く思えますが、簡単に言えば心を動かすということですね。柳津をはじめ、いろいろなところに民俗調査で来ている学生たちは、いろいろな社会、自分の知らない世界の多様性に触れる。そこで幸せになる。金子さんは「作法」という言葉を使っています。金子さんはその作法を学びながら幸せを体験して帰っているのかな。学生が来て、何やらしてかして帰っていくと思いますけれども、金子さんは彼らにどういことを期待していますか。

金子

去年、一昨年と学生さんが来て、自分がやらなくて。民俗学的な専門知識がある、自分が何か作れる、そういうことではないです。でも西山地区で、この道具はあの人を作れる、これはあの人を知っている、あの話ならあの人ができる、そうした情報を持っています。だから学生さんが来て、あのことはあの人に聞けば、あの人に言えば、そんなことを教えてやりながら学生さんが動き回る。帰ってきて、喜んでいい話聞けた、収穫があったって。そんな顔を見ればこっちもううれしい。役に立っただなと思います。

### 謙虚な姿勢

川延

去年の家宝展を見せていただいて、とても良い試みだと思いました。視線が交差している。民俗学的な視点、美大の学生さんの視点、家宝をお持ちのお宅の人たちの視点、その三つがクロスしたところでしょうか生まれたい展覧会でした。とても面白かったのでぜひ柳津の名物にしたいなと思います。

参加者

金山町からまいりました。素敵なお話ありがとうございました。先ほど金子さんがみんなの5年後、10年後を見てみたい、長生きしたいとおっしゃったんですけど、ぜひ長生きして欲しい、お体を大事にしてください。みんなのお父ちゃんなので長生きしてください。私も金子さんのおかげでいろいろな人と繋がらせていただいた一人です。

母は柳津の砂子原の奥の鳥屋の出身、父親は郵便局員として西山郵便局で働いていて、西山地区のどこかで下宿していたらしく、西山地区とも縁があったんですけど、金子さんには本当にいろいろな方と繋がらせていただきました。金子さんの周りにはいろいろな人が寄ってきて、特に女、子どもがすごく寄ってきている。寄ってきているのは言葉の表現が悪いんですけど、いろいろな方が金子さんを頼りにして集まってきたりするように見受けられます。美味しくて喜んで食べてくれる笑顔が見たいという金子さんの気持ちももちろんあると思うんですけど、目に見えてみんなが幸せそうにしている姿以外にも、目に見えない地域と歴史とを繋ぎたいと

彼らは帰らなきゃいけない。世の中には知らないこと、知らない人がたくさんある。多様性みたいなものを十分に学んでいく。自分の世界にないものをね。本当に思うのは民俗調査に来られた人たちは、とても謙虚な姿勢が身に付くのです。自分が訪ね歩いて一つのものを発掘する、記録する。俺が作ったみたいなの、そういうものがまったくない。その研究姿勢にとっても感心します。今こちらにいらっしやる学芸員さんも同じ。自分でやることも大事だけど、自分一人で生きている人はいない。たくさんの人にお世話になりながら生きていく。誰一人として一人では生きてきてない。そういう気持ちを持っていく人たちの将来は明るいなと思います。

川延

謙虚さ、単なる追従とか媚びへつらいではなく、本当に謙虚になれるのは、謙虚になれる素晴らしい対象を見た時です。それは幸せでしょうね。その瞬間は。今日は金子さんにお運びいただいていますから、みなさんからもいろいろとお尋ねいただきたいと思えます。会場からも何かご発言をいただけたらと思います。

地域おこし協力隊…谷野しずか

柳津町地域おこし協力隊の谷野しずかと申します。勝之さんにお尋ねします。私たち地域おこし協力隊は「やないつの家宝展2020」という企画をやらせていただきました。その時に出会った民具、町民の方々から武蔵野美術大学

この年になってとても楽しい。みなさんのおかげです。みんな私に良くしてくれて、良い年回りです。みなさんに嫌われないようになるべく長生きして、片隅に置かせてほしいなと思っています。感謝するということだと思います。

### 感謝するということ

金子

ちょっと個人的な話ですけど、娘二人は中学校を卒業するともう家を離れます。高校に出ると若松に下宿、大学に行けばそのまま。その間、子どもと長い時間接触していないと、会うたびに子どもがやたら成長している。とても親のなせる技じゃない。それを思う時、娘たちはどれだけの人にお世話になっているのだろうと思わざるを得ない。現在は社会の一員として、人に迷惑かけないで生きています。やっぱり世話になった人にお礼の言葉の一つぐらい述べたいと思うのが親心というものでしょう。

さりとて、饅頭持ってそこを回ることもできなくて、ずいぶんたくさんの人たちに世話になったねって家内とよく話をします。さて、自分たちが今できること、感謝の意を示すことは何だろうと思うと、自分の目の前の人にその感謝の気持ちというか態度、言葉を示すことじゃないのかと、そんなふうにも思うのです。

自分の娘もきつと知らないところでずいぶんの人にお世話になって、美味しいもの食べさせてもらったり、言葉をかけていただいたり、勉強させてもらっているわけです。きつと人間社

の学生や斎藤清と同じように私たちもいろいろな刺激を受けました。刺激を受けて素晴らしいなと思っていました。勝之さんとしては、そんな感銘を受けている私たちにどのような印象を持っていましたか。

金子

みなさんの前でお話するのがなかなか難しい。とても熱心さがある。やっぱり若いって、熱心さも同じぐらい若いなと思う。それは未熟という意味ではないですよ。ストレートに聞きたいことは聞くということ。来年以降も糧にしていただけありがたいな。そして自分でも少し役に立ってたと思うかもしれないので、よろしくお祈りします。

谷野

ありがとうございます。なぜ質問させていただいたのかというと、私たちがやっている地域を活性化する事業は町の人に満足していただきたくてやっているの、町の人たちからのアンサーを時々聞きたいと思っています。こうして今聞かせていただきました。これから頑張っていきたいと思えました。ありがとうございます。

地域おこし協力隊…我妻泉香

大里さんに質問です。私も「家宝展」をやって、いろいろな民具を柳津町で見せていただき、お話を聞いてきました。民具は見えるものですが、その背景にあるどうしてこういう道具が使われてきたかとか、どうして残っているのかという見えないものが民具と一緒に失われてしまふと感じています。伝統行事も背景には見えな

会はそのようなもの。私が思った以前に、もうすでにそんなことはずっとやられていますよ、ごく当たり前のように、生きていくことの中で。自分もそれをやらなきゃいけないと思うので、自分が子どもを育ててもらった感謝。それを示さなきゃいけない。できることと言えば、目の前にいる人たちに喜んでもらうことで、感謝するというか、お会いしたことないけど、娘がお世話になった人たちに対する感謝の意を表す、それしかできないだろうと思う。

だから、みなさんに喜んでもらうことは自分にとって本当に幸せだと思います。それが自分にとつての感謝であって、感謝に見返りはない。自分から見返りを求めることはしちゃいけない。当然のことです。みなさんが喜んでもらえたらそれで自分も娘たちがお世話になった恩返しの一つぐらいできる、そんなふうにも思っています。

川延

単純にサービスの提供ではなく喜んでもらえるって深い話ですよ。ぜひ斎藤清美術館も福島県立博物館も喜んでいただけるようにと思っております。

### 究極の循環

金子

すいません。また私ですけど、これ知っていますか。「蚊いぶし」。蚊取り線香ではないです。蚊取り線香は蚊を殺しちゃう。これは蚊を寄せ付けないうようにする。野良仕事の時、田植えの時に蚊が寄ってこないように、後ろに付けて、太いほうに火を着ける。燻して蚊が寄ってこな



い。朝から晩までやっているわけじゃない。2時間ぐらいだろうなと思います。何でできているかという与会津木綿です。土からできた木綿を使っている。木綿の新しいやつで「さるつばかま」を作って、着て穴が開いたら繕う。それでも使って擦り切れてくると、次は雑巾、窓ふきに使う。そういう使い方をします。雑巾がポロポロになっちゃって、それでこれを作る。だから、これはポロポロになったやつ。それでも使う。ものを大事にしなきゃならんという気持ちの表れだと思います。木綿と稲藁を一つに縛ってある。きつく縛ってやると煙のまますっとな出ています。最後にどうなるかというと、灰になって煙に落ちる。究極の循環です。みなさんに循環の大事さを見ていただこうと思ったらこれが一番いいかなと思って。自分で作ったらまだまだ未熟です。作ってもらったものが「家宝展」に展示してあります。あれはみっちりできています。緩いと炎になっちゃう。灰まで残して、次の年の肥やしにする究極の循環。自分も習っておきたいと考えていました。手に取ってご覧ください。

川延

ありがとうございます。この蚊いぶしを金子さんに教えてくださる方がまだいらっしゃった。

金子

いました。

川延 次は金子さんがどなたかに教えていく。



金子

そうですね。練習して上手になりますから。

川延

ありがとうございます。では、今日の講師の3人の方からお一言ずついただいでしめたいと思います。

大里

ありがとうございます。外から来る私自身もそうですが、外から来た人を拒まずに受け入れて、学ぼうとしている人に惜しげもなく、自分の経験を伝える。体得していくというのでしょいか、地域の魅力を本当に深く理解し、何を伝えれば地域の魅力が伝わるのかまで理解をした金子さんのような方がおられる。それが、外から来る人たちの育みになっていく。そういうことに尽きるのかなと思います。

伊藤

本日はどうもありがとうございました。お話を伺っている中で異郷人の眼差しを持っているだけではやっぱりだめで、受け入れて教えてくれる人、そういう人といかに多く出会えるか、深い関係を持てるかが美術館、博物館にとって大切だと思いました。今回の「やないづの家玉展」で、金子さんもそうですし柳津の町の方々にたくさんお世話になっていきます。地域おこし協力隊、斎藤清美術館はとても幸せだと思います。斎藤先生も最初の帰郷の時に、長く離れて30歳の時に帰郷するんですけど、その時に親戚の方たち、地元の会津の人たちが温かく迎えてくれたと言っています。それで、会津が好きになって、それ以来ずっと会津を描くようになったと

おっしゃっています。斎藤先生も優しく温かく受け入れてくれる方がいたからこそ、単に生まれ故郷だからというだけじゃなくて、会津を描き続けるきっかけになったのだと、今回のお話を聞いてそんなことを思いました。私たちも地域の方と深く縁を結んで活動を続けていくには、私たち自身が謙虚にその人たちと向き合わなければいけないということを強く感じましたし、そうすることで文化を継続できればいいなと思いました。ありがとうございます。

金子

私、奥会津の一員として思うのですが、みんな幸せに生きて欲しいです。自分たちの食べ物、行事、そういうものは観光のためにあるのではなく、住んでいる私たちのためにあるのだから、自分の中で生きていくこと、暮らしていることが一番大事だと思うのです。なんかあそこに幸せそうに暮らしている地区があるよね、覗きに行ってみようかって覗きに来た人は受け入れる。

住んでいる人が喜びと幸せを持って生きる。それがやっぱり基本で、それ以外の何物でもないような気がする。観光のために躍起になっている。日本全国どこに行っても躍起になっている。しかし、ここで生きることの幸せはそうではない。ここでみんなが幸せに生きていけたらいい。そんなふうと思っています。今しばらくよろしくお願いします。

川延

どうもありがとうございました。最後にもう一度拍手をお願いします。





異郷人の幸福とためらいは、清にもあり、私の中にもあるということを知った喜び。

その上で、地域に根差した人間ではないが、自分が果たせる役割とはどんなことなのか探る必要を感じた。それとともに、異郷の者、ふるさとを持たない者が、いかにフルサートに生きるかを試していければと思う。(40代)

地域は人が繋がっていないと継続していくのは難しいと、改めて思いました。町、地区の枠を超えて、もっとみんなが協力していかなければと思います。地域の方の背中を押すような活動を期待しています。(30代)

他地域から移住してきた人(自分も含め)にとって、その地域の人とどのように繋がるかが、その後の生活、人生に大きな影響を与えるということ。斎藤清さんの眼、そして私たちの眼、それぞれ考え方は違っても、人との出会いが大切であると改めて感じました。(50代)

今の時代だからこそ原点回帰の観点が重要だと思う。一人一人が、これからの自分の在り方を考えるきっかけになったのではないかと思います。(30代)

地域の眼、外からの眼、内からの眼。多方向から見ることをもう少し意識しようと思いました。(30代)

なぜ美術館で開催するのかと思っていたが、地域とつながる「やないづの家宝展」の取り組みを行っている斎藤清美術館ならではののだとわかった。地域の中で幸せに生きることに意味を考えさせられた。建物としての博物館ではなく、地域で生きる人(いのち)と出会う中で学び合うことが大事なことで、ずっと続けて深めていってほしい。(50代)

自分の足元を見つめられました。(50代)

柳津に住みながら知らないものがあることを改めて知り、ふるさとを見直す機会になりました。地域社会が少子高齢化の波にのみこまれ、これまでの伝統的なものを捨てざるを得ない状況が見られる中、このように多くの人々に知らせ、考える機会があることは頼もしく思います。見直すチャンスがあることは、地元の人間にとって、今後の発展(？)、充実を考える上で重要で、その際に「外の人」の物の見方、考え方は大きな示唆を含んでいます。美術館、博物館の役割が問われる中、地域とその外側の世界を見直す役割がとて大切だと感じました。(60代)

金盛郁子(元柳津町地域おこし協力隊)

家宝展の前身

やないづの家宝展の構想が生まれたのは、2018年の夏に行われた斎藤清美術館の企画「まちなかアートプロジェクト」でした。これは、当時地域おこし協力隊であった宮本美貴が、企画・実施したものです。武蔵野美術大学の学生が夏に10日間ほど町に招待され、柳津町でのさまざまな人との出会いを経ながら作品を制作し、その作品を秋に柳津町中で販売するという企画です。当時、まだ柳津町に来たばかりであった私は、彼女の仕事を手伝うことにより、柳津という町について、より深く知ることができ、町の人々と関わっていくようになりました。

家宝展誕生

いざ、大学連携の企画が自分の番になって、どうしようと考えあぐねていた2019年の4月頃、私は公私問わず、常に町の方々にお世話になっていました。季節ごとの野菜をいただいたり、夕飯を二馳走になったり、一緒にお出掛けしたり…。日々デイリーな柳津に触れるなかで、私が肌で感じたことは、皆が赦しい自然の中でも、移りゆく季節の生活を丁寧に楽しみ、「ご先祖様や、目に見えない大きな存在に感謝しながら家を守り続けている」という精神性でし

た。柳津町の方々と密接に関係していく中で、そうだ、私が大学生に伝えたいのは、こんな柳津町の魅力なのだ！と感じました。エネルギーシユな美大生にとって、この柳津町での日々は、きっと彼らの感性を揺さぶり、日常に対する価値観を大きく変えるものになるのではないかと考えました。

そこで思いついたのが、「やないづの家宝展」です。この場合「家宝」は、柳津町の人々が、家で一番大切にしているものを指しています。それは、日常にありふれたモノの姿をしているかもしれませんが、付随するエピソードによって、家主の美意識や精神性を浮き彫りにする、魅力が詰まったやないづの家宝となりえます。

そんなことから、2019年度の、町と美術館を繋げる、企画は、当美術館とも連携がある武蔵野美術大学に協力をいただきながら、2段階構成で実行されました。

まず1段階目は、美大生と家主との交流がメインとなる、夏の活動でした。8月に武蔵野美術大学の学生と町内の家々を回り、家主とそれにつながるエピソードを取材します。その後、美大生は取材を経て残った印象を基に、美術館内にて公開制作をしてくれました。2段階目が、美大生の作品と、家宝&エピソードをまとめたプロジェクトの集大成「やないづの家宝展」(2018)でした。

多様性に触れること

わたしは、柳津での2年間の生活を通して、日々の生活に対する視線がすこしずつ変わっていきのを感じていました。

誰かが困っているときは助け合う、人を大切にする、季節ごとの景色を楽しむ、日々感謝をする…。本当に単純なことだけれど、いつも気持ちの余裕がなく、見える範囲の悩みに囚われ、いいかげんな生活を送っていた自分に気がつきました。そのとき、ふしぎと気持ちが満たされ、自分の世界が広がっていったような感覚を得たことを覚えています。

2018年の家宝展のコンセプトは、鑑賞者が柳津町の人々の精神性に触れることで、日常生活を再考し、自分にとって、本当に大切なものは何なのか?という問いを、今一度考えることでした。

これからも斎藤清美術館で、柳津の魅力が伝え続けていけることを、心から願っています。

※講師としてご参加いただく予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響によりご参加がかなわなくなりましたため、テキストをお寄せいただきました。

家宝展誕生秘話

第2回「清の目 根っこの目  
それぞれの地域学」に参加して  
林あゆ美

第1回に続いて参加いたしました。今回の場所はやはりいつ町立斎藤清美術館です。開催日はちょうど美術館で新しい企画展示に切り替わったタイミングでした。

講師は斎藤清美術館の学芸員である伊藤まさきさん、福島県立博物館学芸員の大里正樹さん、ブルーベリー園・農家民宿山ねこ店主の金子勝之さんの3人です。予定していた元柳津町地域おこし協力隊の金盛郁子さんは現在東京在住のため、コロナ禍の影響を考え、お話する予定の文章を寄せてくださいました。

トップバッターは伊藤さん。美術館で企画展示と同時に開催されているライブラーイコーナーの「やないづの家宝展」について、構想の始まりを、金盛さんの文章と共に話をしてくださいました。今年の家宝展も地域おこし協力隊お二人がつくられました。家宝は文字通り、家の宝物。柳津町の宝物を地域と地域おこし協力隊で見つけ出したものが展示されています。展示物の数は少ないものの、どれも存在感がある民具などです。又、美大生でもある地域おこし協力隊のお二人の作られる冊子もすごく素敵でした。さすが美大生！と思わせる秀逸なデザインと、文章もシンプルでわかりやすく、展示してあるものとの親和性高い美しい冊子です。

伊藤さんは異郷者の目線について語られました。斎藤清氏は、幼少の4歳までしか暮らしていなかった故郷を、外からの目線で見つけ描い

てきたそうです。異郷者であるがゆえに引け目を感じていたところもあり、会津の雪は生活者にとっては過酷なものであるにも関わらず、このように描いていいのだろうかという葛藤を感じながら描いていたと教えてくださいました。しかし、それ故に、誠実な視線で描かれた雪は、「会津の」雪として固有なものを描き出しているように感じます。

次の講師は民俗学を専門としている大里さん。民俗調査者の一人として柳津町と金子さんについてお話されました。毎年2月に行なわれている雪中（かぶちゅう）地区のニンギョウマングヨウというワラ人形行事について調査した時に金子さんと出会われたそうです。地区名も祭り名もインパクトがあります。地元のお祭りで、外からの観光客も求めず続いている行事。ワラ人形をつくるには長いワラが必要になるのですが、近年の農業の機械化でワラは粉碎されたの長いワラが残らないため、2018年にはとうとうニンギョウマングヨウができなくなりました。そこで、長いワラを入手して継続していくと金子さんの人脈で大規模農家からワラを譲り受け、今に至っているそうです。地元だけでは完結してやっていけない行事でも、地域を繋ぐ金子さんの存在があることで継続できました。繋ぐ存在の大事さがわかります。

金子さんが講師として話をくださったのは、自らの生活、その幸福についてです。自分は経済成長の恩恵を受けて過ごしありがたかったことや、結婚してからは、授かった娘たちが、早くに地元を離れ進学し、周りの人にどれだけお世話になったかという感謝の思いが強い話をしてくださいました。だからこそ、その感謝を今度は自分たちが別の若い人、地元の人に返し

ていこうと思われたそうです。家族、地域を大事にし、上流に住んでいるから下流の人に迷惑をかけないようにと、畑も水も大事にし、化学肥料を使わず、食べ物を作っている金子さん。住まわれている西山地区の水のおいしさが、美味しいものを作っているといえます。毎日美味しいものを食べる幸せを、金子さんのとびきりの笑顔が表し、お話を聞いているこちらも幸せな気持ちになります。

話を聞いていて、自分の住む地域についてもいろいろ思いを馳せました。私もここ会津では異郷者の一人。生まれ育ちは北海道。今の地域には家を建てるタイミングで住み始め、それでも20年以上になります。広い地区で、農家がほとんどをしめ、我が家のような非農家の割合は少ないです。村役員は10年に一度くらいの割合で回ってきて、初めての役員は住み始めてすぐの時でした。特に印象に残っているのは、歳の神の時の準備です。秋から始まる準備はカヤ刈りでした。その年ごとにカヤ担当の畑があり、そこから刈っていきます。刈ったカヤは、1月まで横にせず畑に立てて保存します。歳の神に必要な竹は村が所有している山から切ります。本番である1月の歳の神の日は朝から準備です。その日は吹雪でしたが、作業は外。カヤ、竹、ワラなど諸々をはこび、ワラで縄を編む人、竹などで組み立てていく人、手際よく進みます。ちなみに、私はワラを編む人に運ぶ係。編んでいる人は、編みながらこの家のワラはいいできだな、この家のワラは細いな、今ひとつだなといったながら作業します。どれも同じワラに見えるのですが、手でさわるとわかるのでしょうか。村の爺様たちは、歳の神を縛るのは昔からこうしたワラから編んだ縄だったけれど、いまやど

こもビニールの紐を使っている、けれど、ここはきちんと作っているのだと自慢げに教えてくださいました。吹雪にも関わらず、皆やるべきことを黙々と作業し、私などはただかワラを運んだくらいなのに、できあがった時はみなと同じく達成感を持たせてもらいました。夜になり、点灯の時間になると、家々から、竹の棒にするめや餅を刺し、それらを持った人たちが歩いてやってきました。「今年もよろしく願います」とお酒やみかんを配り、新年の挨拶を交わします。消防団の人が火をつけ、その火でするめや餅を焼きます。いい夜です。けれど、年々雪も少なくなり、準備も大変ということで、地区2カ所で行っていた歳の神も1カ所になり、家から歩いて行くには遠くなったため、子どもが大きくなってからは、あまり行かなくなりました。

地域の行事を継続していくには、時間と人付きあいの折りが重要です。フルタイムの会社員をしていると、時間を捻出して参加するのが難しい。村の爺様たちと付き合っていくのも、なかなか大変です（笑）。私など何をしても叱られてばかりで、へこんだものです。それでも、知らない世界は新鮮ですし、受け継ぐことの大事さも感じます。久しぶりの村役員の今年も、関わり始めるとおもしろい事も多いです。子どもは少なくなり子ども会はなくなり、村の人たちも多くの人は積極的に行事や村作業に関わるわけではありません。けれど、まずは役員の時くらい自分ができることをしようと思っています。

幸せに生きていくことは、住んでいる地域と繋がることにもある。金子さんの話を聞いて、ますますそう思いました。

## 第2回 柳津町レポート 岩波友紀

「連続オープンディスプレイカッション 奥会津の周り方」の三島町の第1回目に参加させていただき、今回は2回目の柳津町に参加させていただきます。三島町では地域文化を守って歴史文化基本構想についてという、わりと想像しやすいテーマでしたが、今回の柳津町の題目は「清の眼 根っこの眼 それぞれの地域学」。なかなか題名だけではどんなテーマなのか想像がつかない。地域学を「いろいろな人の眼」から見ると、いろいろな視点に気づくのだからかと興味がそそられました。

斎藤清美術館学芸員の伊藤さんの「やないづの家宝展」のお話では、普通の民家に眠っている「家宝」を、そのエピソードとともに展示するという企画の取り組みでした。美術館、博物館はなかなか一般の人の生活からはかけ離れた存在であることが多いと感じます。このような地域の宝を展示するなどの活動は、足元の地域の住民が美術館を自分たちの身近に感じることができるとは思いました。また、自分たちが価値を感じていないものが実は他の人から見れば価値があることを気付ける魅力的な企画だと思いました。「よそ者の目」で奥会津を描いた斎藤清がよそ者であるからこそ気づけた奥会津の魅力のように、この企画でも外部からきた大学生が関わる点が重要な点ではないかと感じました。昔から柳津に住み続けている人では気づかなかったような価値が、これを機会に見出せているのかもしれない。私は会津に

移住してくる前に、空き家をたくさん見せてもらいました。もう住人がいなくなり物もそのまま残っている古民家には、外部の私から見れば「お宝」のようなものがたくさんありました。モノ自身の価値だけでなく、その家の歴史、地域の歴史、生きてきた人間の歴史が怨念のように凝縮されたモノばかり。こういうものを無限に保存し続けることは不可能と思いつながら、処分されていく前になんとかならないものかと感じたことを思い起こしました。個人や家という小さな単位の歴史の重要さを感じられたり、そこから大きな歴史を見られるような企画ではないかと思えます。

農家の金子さんのお話では、滝谷川のお話が記憶に残りました。金子さんは農業や化学肥料を一切使わない自然栽培をしているとのことでした。自然栽培をする理由のひとつに、そこで穫れる農産物だけのためになく、農薬が川から下流に流れて他の人に迷惑をかけたくない、ということをお話しされていました。1つだけ、1カ所だけ何かをすれば良いのでなく、自然はすべてつながっていてサイクルにもなっている、そのことを再認識できるようにお話でした。今度ぜひお茶を飲み、ティールームへ伺いたいと思いました。

県立博物館の大里さんは、主に「藁」の文化のお話でした。ニンギョウマングヨウという稀有な藁人形行事も興味深いです。やはり近年の効率化で藁の入手が難しくなっていることも同時に興味深かったです。以前、三島町のサノカミでも藁を入手するのが困難とお聞きしたことがあったので、同じ状況なのだと思います。

した。民俗行事を続けることはいろいろな意味で難しい時代ですが、材料入手が難しいというのもひとつの大きな要因だと想像できます。機械化が進んでいない時代には有り余るほどの藁があり、それを農業を含む生活の折りの手段に使われたのも当然なことであるし、しかしそうすると、生活の中で自然に藁が確保できない現代において、その昔から続く民俗行事はどのような意味があるのだろうか。そのようなことも思っています。

題名からはあまり想像できなかった今回の柳津町のテーマは、私なりに「小さなそれぞれ視点から大きなものを見る」ことではないかなと勝手に解釈しました。個々の家の宝から見えてくるもの、自然栽培から見えてくるもの、藁から見えてくるもの。別のものを見ていると、その先に見えてくるものは共通している感じがします。奥会津でどのようなことが大切なのか、これから大切にしていかなければいけないのか。小さな視点、例えば私の個人的な視点でも重要になるのかな、と思えるような今回のオープンディスプレイカッションでした。

「地域の人が苦労している雪景色を描いて申し訳ない」という伊藤さんのお話してくれた斎藤清の言葉。斎藤清と同じく「よそ者」であり、写真で表現する者にとって、この言葉に強烈に同感できます。私が感じる会津の魅力の大半は雪景色。でもこの人たちにとって雪は邪魔者でしかない。雪に限らず他のことも同じ

です。それでも、同じものを違う視点から見ること大切だし、目に見えるものだけでなくその奥にある見えない本質を見ることが大切だと、改めて思わせてくれました。

# モーターレポート

# 奥会津の

# 森を活かす

豊かな奥会津の森。  
その生態系、保全と活用、  
森とともにくらししてきた  
人々の文化について、  
多様な視点から考えました。

Life Museum Network

Life Museum Network 2020

日時：2020年10月24日(土)14:00～16:00

会場：ただみ・ブナと川のミュージアム

講師：押部僚太さん(昭和村地域おこし協力隊)

五十嵐健太さん(アイパワーフォレスト(株)社員)／「山学校」講師)

中野陽介さん(只見町役場地域創生課ユネスコエコパーク推進係主査)／只見町ブナセンター主任指導員)

モデレーター：本間宏さん

(福島県文化財センター白河館参事兼学芸課長)／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)

## 押部僚太

昭和村地域おこし協力隊。会津の風土に興味を持ち、2018年より昭和村に移住。  
昭和村教育委員会に所属し、文化財調査業務のひとつとして、昭和村の民具整理にあたる。

## 五十嵐健太

アイパワーフォレスト(株)社員。30代半ばより山悦林業で修業を積み、アイパワーフォレスト(株)設立に際し、入社。  
特殊伐採や通常伐採を行う。月に一度開催される「山学校」で講師をつとめる。

## 中野陽介

2012年より只見町役場に勤務。只見ユネスコエコパークの登録と関連事業に携わり、自然環境・野生動物の保護・保全、  
学術調査研究に関する事業を担当する。専門は森林生態学。農学博士。

## 本間宏

福島県文化財センター白河館参事兼学芸課長として、文化財の保全・活用・研修・情報発信などの事業を進めている。  
専門は歴史学・考古学。近著に「原子力災害と博物館活動」歴史学研究会編「歴史を未来につなぐ」東大出版会(2019年)がある。

## 事務局・塚本麻衣子

「奥会津の周り方」という今回のディスカッションですが、奥会津の三島町、柳津町、今回は只見町、その後、昭和村、金山町と5町村で連続的にリレーのかたちでディスカッションしてまいります。

これまで各回にテーマを設けてきましたが、第3回の只見町では、山深いところに川が流れていて雄大な自然の中にある奥会津で、自然に根差して人々はどのような暮らしを営んできたのか、森をテーマにお話をうかがいます。今回は森林にいろいろな立場で関わっていらっしゃる方を講師にお招きしました。

講師のみなさんをご紹介します。最初にお話しいただきます押部僚太さんです。昭和村で地域おこし協力隊をされていて、民具整理などに携わっておられます。民具整理から見えてくる森林と関わる人々の暮らしについてお聞きします。

五十嵐健太さんは三島町のアイパワーフォレストという林業の会社に所属していらっしゃいます。ご自身も、木こりとしての活動の他に山とどう付き合っていくか、伐採の仕方、そうしたことを学ぶ「山学校」の講師もされています。林業の立場から山とどう関わっていくかお話を聞きます。

中野陽介さんは只見町役場地域創生課でユネスコエコパークの推進事業に関わっておられます。生態系、動植物の観点から奥会津、只見の森についてお話を聞きます。

前半はそれぞれの活動についてお話しください、後半はモデレーターの本間さんにお入りいただき、会場も交えてのディスカッションになります。モデレーターの本間宏さんは福島県文



押部僚太さん

化財センター白河館、愛称「まほろん」の学芸課長をしております。ライフミュージアムネットワークの実行委員会委員でもあり、今回、みなさんからお話を引き出していただきます。トップバッターの押部さん、よろしくお願ひします。

## 押部僚太

こんにちは。昭和村の地域おこし協力隊の押部僚太と申します。2018年から、協力隊として3年目です。高校を卒業してから協力隊として昭和村に来るまでは岐阜県の郡上八幡で建築大工の仕事をしていました。

父方の実家が金山の八町で、小さい頃からこのあたりの土地が好きで、じいさん、ばあさんっ子、昔の話を聞いたりするのが好きでした。いつかこっちに帰ってきたいと思っていました。昭和村で文化財調査業務、民俗資料の記録、整頓業務という募集があったので来させていただきました。

今日は民具の紹介をするかたちでお話しして



## ホウノキは僕がすごく好きな木

いこうと思います。木材の利用に絞って、しかもまだ身近に感じられ、イメージが付きやすいところで話していこうと思っております。

昭和村の民具整理は只見町の民具整理のやり方に倣っている部分が多くて、聞き取り調査で村の方から使っている方、昔のことを聞くというのをやっています。どうしても僕は若い世代の人間なので、経験を伴わない耳年増みたいな感じがちなのが恥ずかしいと思っております。自分の経験も含めて話せるところで話してみます。

これは鉾柄(くわがら)といって、鉾柄(え)ですが、昔は鉄の部分をも木の柄に挿して使っていました。これはホウノキの「ジネンジヨ」と呼ぶのですが、枝付きの部分です。ホウノキの枝の感じ、枝の付き方の角度がいい。しかも軽く丈夫。ということもホウノキが使われていました。ホウノキは僕がすごく好きな木です。

こっちはのは時代が異なります。ホウの枝にブナの頭を、穴を掘って挿して、くさびを打ってある。こういういい感じの枝の部分はないかななくて、この木を1本倒して2丁取ればいくらいだったそうです。他にも芋洗いと、石臼の挽木に使う、直角に生えているような枝、こういう様子のもものはなかなかなくて、欲しくなって探しても見つかるものではないです。普段から山に入っていて、見かけたら、すぐに使うわけじゃなくて取っておいたみたいです。

こっちは只見のブナセンターにも民具が展示されています。ブナセンターでは「ぶんぶん」とか「芋紡ぎ棒」と言います。ホウノキは、乾燥した時に収縮の度合いで狂うことが少なく、ツルツと仕上がって、ほどよい硬さがあるので、糸を巻いたときに切れない、じゃまをしない。細工をしても精度が狂いにくいために重宝されています。昭和村に来て、いろいろな道具を作ったり直したりを趣味と申しますか、好きでやっています。三島町の佐久間建設さんからホウの丸太を買っている作っています。

第2回の柳津町でのオープンディスカッションの時に、山ねこカフェの金子さんが、蚊いぶ

しをお持ちになってお話しされました。昭和村には蚊いぶしはない。蚊いぶしというのは、布を芯にして縄とかスゲ縄を巻いて、それに火を点けて煙を出して、虫除けにするものですが、隣の昭和村には蚊いぶしというものはありません。使っていた様子がなくて、代わりに火縄というのを使います。ヒノキの樹皮で編んだものですが、頭につけて、火を点けてタバコの火種、虫除けに使っていたものです。

### シラビとクロビとアカビ

面白いと思ったことは、昭和村の人はヒノキを三つに分けて認識していて、シラビとかクロビ、アカビと呼びます。桶にはシラビではなくクロビを使うとか。カラムシの道具、芋引き板という薄板にはシラビを使います。何回聞いても、「ヒノキはヒノキだ」と言われます。「ヒノキはヒノキ、でもシラビとクロビとアカビがある」って。いわゆるネズコ（黒っぽい色合いのヒノキ科の樹木）を「クロビ」と呼んでいるのかなと思って、「芋引き板にはクロビがいい」と言う人もいるからネズコで作ってみたのですが全然だめでした。

葉っぱを採取したり、自分で削ったり、いろいろ聞き取りをしてわかったことですが、昭和村ではシラビはサワラ、クロビがヒノキ、アカビがアスナロヒバのことを指しているようです。

だから何だと、村の人からするとそうですが、僕が岐阜にいた頃ははつきりサワラ、ヒノキ、ネズコという認識を村のお年寄りが持っていました。それが地域性によるのか、それとも昭和村に昔の分類呼称が残っているだけなのか。調査不足ですが、今どきこういふ方をしている

るところはあまりないのではないのでしょうか。

村の人は、ヒノキが生えている場所の違いで性質が変わるという認識でいるようでした。しかし葉っぱとか樹皮とか何回も調べ直してみると、どうもそういうこと（シラビはサワラ、クロビがヒノキ、アカビがアスナロヒバ）かもしれないと思いました。

火縄にするにはシラビの樹皮がいいということとです。アスナロとサワラの差ははつきりしていますが、ヒノキとサワラは注意して近づいて見ないとわかりません。ヒノキ科群で似たもの

これは昭和村の農家の解体の時、上上がった工事に参加させてもらって撮った写真です。



を煮出して、煮汁を胃腸薬として飲んでいたそうです。樹皮じゃないです。木肌とか樹皮じゃなくて木質を削って煮出して胃腸薬にした。（金子さんの紅茶に倣って）今日、僕も煮出して持ったよと思いましたが怒られそうなのでやめました。

口に入れるということで、すりこぎ。これはクワノキです。昭和村はよくサンシヨウとかホウノキとかクワノキですりこぎを作るそうです。削れて口に入るので、サンシヨウとかホウノキは香りとか味が良いので使うらしいです。クワノキは中気、脳梗塞の予防になると昔から言われているそうです。この古いものが、亡くなられたおじいさんが作ったもの、こちらの新しいのが、生きていらっしゃる75歳くらいの方が作ったもの。昔からクワノキを使っていたのですね。

### 自分で足を運んで採ってきたもので

ざつと紹介しましたが、採ってきて使うという子どもにも知って欲しい。木工教室で枝を拾ってきて、子どもと木琴を作りました。のこぎりドリルで、バチはクルミで作ってみました。去年はみんなで箸を作りました。材料をあらかじめ大人が準備して、さあ作りましょうという木工教室はどこでもできると思いますが、あの山に行くと、あの木の肌の、あの葉っぱの木を使って、自分で足を運んで採ってきたものを作るのをやりたい。そういう楽しいおもちゃ、道具を作った思い出が愛着に繋がらないかなと思っています。さっきのすりこぎを作ったお父さんが作った

家の材料はそのお家、一族が持っている山の木に左右されるので、特にここで特徴を述べることもできないのですが、ホゾ縫いに留めてあるハナセン、ダボ、クサビはこの辺の昭和村、金山町のあたりではクリの木を使うみたいです。土台はもちろんクリですが、センの類いもクリで、西のほうでは今はカシとかナラを使っているのですが、クリだというのが面白いなと思いました。木を組んでいる部分の大栓もクリ。結局、虫に食われなくて、湿気にも強くて、一番長持ちする。僕はもっと堅い木、ケヤキとかハナノキ、イタヤカエデを使っているかと思ったのですがクリでした。

民具の本を見たことがある方は目にしたことがあると思いますが、ソラカゴとかソラックチとかタガラというものがあります。タガラというのはタンガラ（炭甃）とかタンカラというのがなまってタガラになっているのですが、木を曲げてブドウの縄でつなげてある。ブドウの縄は濡れても重たくならないので、収穫物とか堆肥とか何でも入れて背負って運ぶ。

### サンナメシ

僕の今日の一押しがサンナメシです。先程只見の方に会って聞いたのですが、サンナメシと言っていました。しなやかなのです。生の間はうんと曲がる木で、乾くととても硬くなります。サンナメシと言われるから、ずっとわからなかったのですが、リヨウブの木です。たぶん見たことがあると思います。よく生えていますから。サンナメシの花は7月頃に咲きます。7月頃、蜂蜜が採れるのはこれくらいしかありません。

鎌の柄は、ミズノキで作ってサクラの樹皮がはめてあります。サクラはあまり実用的な意味はなくて、おしゃれ、かわいいねっていう部分。すこく上手だから、ポンドも何もなしで。生のうちに入れて、乾くとびちっと締まります。滑り止めですかつて聞いたら、「いや、かわいいから」って。すこくいいなと思います。

### 誰かが続けないと

私は実家が金山の八町で、杉林と雑木林があります。昔は馬もいたし、畑の肥やしとかで競うように小柴とか草を刈ってきたけれど、今は山に入る理由がなくて、うちの林もなかなかひどいことになっていて、子どもと一緒に遊ぶことすらままならないような状況です。少しずつ手入れして、せつかく爺さま、婆さまの代から村の人が手入れし続けてきたものを繋げていけないかなと思っています。

岐阜にいたときに、親方の親戚のおじいさん、90歳くらいのおじいさんが、仲間を連れて山に入って、間伐したり、下草刈りをしたり、手入れをこつこつやっていました。どうしてそこまでするのですかと聞いたら、「必要になったときによつて間に合わないから、誰かが続けないといかんやろう」って、おじいちゃんは言っていました。僕はすこく感動しました。

僕は仕事で林業ではなくて、専門家ではないですが、山の手入れを自分の楽しみというか、ライフワークで楽しんでやっていたいと思っています。

何が言いたかったのか、ちょっとよくわからなくなっていました。以上です。



くて、透き通ったいい蜂蜜が採れる木です。これを曲げて柴でも俵でも何でもこれで縛りました。ねじり柴と言いますが、これで縛りました。干割れて柔らかくなります。これで縛りました。ザルの縁とかにも使われています。昔の俵、カマスを縛るのにも使われました。柔らかいサンナメシですが、乾くととても硬くなるし、なめらかでツルツルとしていて、滑りが良く縫いやすい。性質がうんと変わる木です。

今でも村の人は山で柴を採ってくるときに、「まるく」と言うのですが、これで縛って持ってくる方が居ます。（教わってからは）僕も人に花の束をあげる時はこれで束ねます。すこく面白い木です。身近に普通にあるので、何でもこれ縛ってみると面白いです。

### 塚本

ありがとうございました。ふわりとこの辺に木の香りがして、いい気持ちです。本当に木の特性とか薬効とかを知り尽くしている人たちの知恵を子どもたちも譲り受けられたらいいなと思います。ありがとうございます。続いて五十嵐健太さん、お願いします。

### 五十嵐健太

五十嵐健太と申します。三島町のアイパワーフォレストという林業の会社から来ました。押部さんは、民具に使われた木の紹介でしたが、私は伐採で切った木の活用、山学校という里山整備のための事業の紹介をさせていただきましたと思います。

最初にちょっとした自己紹介です。私が林業を始めたのはだいたい35歳前、その辺、忘れたのですが、そのくらいから始めました。最初、父親が林業をやっているんで、一緒にやらせてくれと言ったのですが、「駄目だ」と言われた。なぜかというところ、「最初から自分の息子と同じ元でやると甘えが出る」ということと「おまえは漆のこともやっていたのだから、そつちもやれ」という話でした。最初はショックでしたが、「知り合いの林業の仲間がいるから、そつちに行つてまず修行してこい」ということで、1年半ぐら修行した。そのときに、アイパワーフォレストという会社ができあがったので、そちらに呼ばれて行くことになりました。それで今やっています。

### 特殊伐採

アイパワーフォレストは林業の会社です。林

### ハナノキ

鉈の柄はホームセンターでカシ、シラカシなどのカシが流通しているのですが、昭和村にシラカシはなくてイタヤカエデを使います。イタヤカエデをハナノキと言いますが、図鑑で「ハナノキ」を見ると違う木が出ています。昭和村で言うハナノキはイタヤカエデ。サンナメシも「サンナメシ」とか「サルナメリ」という別名の付く木は多くて、ナツツバキとかヒメシヤラ、サルスベリもそうなのかな。「サンナメシ」という名前はいろいろありますが昭和村でのサンナメシはリヨウブです。シラカシに比べて、衝撃が加わっても手に響かなくて使いやすいので、鉈とか金槌の柄は自分でハナノキを入れてみました。とても使いやすく硬い木です。

鑿の柄とか鉈の台も、今はシラカシかアカカシしか選択肢がないのですが、村の木工さんはヤマグワを採ってきて、二つ割りにしてカンナの台にしたそうです。自分で春先に山へ行って、花を見つけて場所を憶えておき、秋に切って使ったということです。

### オノオレカンバ

もう一つ、うんと堅い木で、オノオレカンバって、聞いたことがあるかもしれませんけど、オノノレって昭和村では呼んでいますが、ハナノキと並んで重宝されています。硬くて丈夫。

ワラブチに使う横筒は、できればハナノキとかオノオレカンバが良い。木槿にも丈夫でツルツとしているからオノオレカンバが調子が良い。見つかるそうです。くうれしかったそうです。昔はオノオレカンバの木の部分を削って、それ

業の会社は山で木を切っているというイメージは分かりませんが、うちがやっていることは、だいたいは特殊伐採、屋敷周りの木、危険な場所の木を切ることをメインでやっています。

昭和村だったと思うのですが、自分でやっただ中で一番高い杉の木に上らせてもらって、上から切ってこいと言われ、だいたい25mから30mぐらいの杉の木を上から中断切りにした。なぜ中断切りにするかというと、近くに建物があったからです。建物に当たらないように切る。下から切るとぶつかってしまふので、上からちょっとずつ刻んで切る。クレーンも使った。ちょっと特殊なパターンです。普通、クレーンを使う時は、ワイヤーをかけて吊す方法ですが、この時はクレーンが届かないので、ワイヤーを付けたところからひっくり返せ、その辺に木がぶら下がるからやってみると言われた。ちょうど吹雪と強風で木がすく揺れて、どこに倒れるかわからないのだからは罵声が飛んでくる。「やれやれ」「びびってんじゃねえ」って。それでやらざるをえなくて、どうなっても知らねえからなという一言を付け加えて、なんとか中断切りを無事に終えることができました。



五十嵐健太さん

こっちは、きれいに写っているから持ってきました。父親と一緒に枝を払いながら上を中断切りにしている状態。みんなで登る時は、こうやって一本ずつ、一人一人登って、どんどん作業を進めます。

登る時はワイヤー入りの胴綱を一本、予備をもう一本着けて、足には爪を一本ずつ。それを木に刺して、引っかけ登っていくだけなので、落ちたら下まで落ちこちやうか、途中で引っかかって、その辺をすりむく。

これから法律が変わって、ちゃんと上にパツ

そういうふうには伐採をメインでやっています。今はストープを使う人、自分で裏山をきれいにしたりする人が増えています。増えるのはいいのですが、結構事故の話も耳にします。そういうものを減らして、なおかつ山をきれいにしてもえたらなという試みで、山学校という里山整備事業やっています。主催はアイパワーフォレストではなく、会津自然エネルギー機構で、うちは講師としてやっています。

チエーンソーの切り方だけではなく、道具の整備、何が危険なのか、どういう木を切ったらいいのか、チエーンソーの使い方全般、山、森林を見る、そういった内容を月に1回指導しています。

意外に県内だけでなく東京、仙台、関東とか東北のいろいろなところから来て講習を受ける人が最近増えています。会津坂下には会津農林高校があるので、その農林課の生徒さんにも、木の登り方、伐採の仕方、草刈りの方法、そういったものを指導しながら、林業に携わる人が増えてほしいという願いでやっています。

### 熟練の技を使って切っているから

ただ、若い人で林業をやりたいという人がなかなかいない。というのも、やっぱり朝が早い、疲れる、危険、給料が安い。疲れる、危険、朝が早いのは当然ですが、給料が安いことについて、林業をやっていると思うことがある。依頼される方から、木を切るだけだから簡単でしょう、そんなに高くないでしょうという感じのことを言われるのです。熟練の技を使って切っているから早く切れているだけで、そういった部分でちゃんとした金額で対応していただきたいの

クアツプを取らないと駄目って言うのですけれど、さっきみたいな状態で上にバックアップなんて取れない。行政の方にどうするのだからから問い詰めると、それはちょっとわからないから、ヘルメットだけはかぶって安全にやってくれっていう回答です。

林業はほとんど法律で縛られて、こういうふうにはやらなきゃ駄目だ、ああいうふうにはやらなきゃ駄目だと言われるのですが、ほとんどこちらからも労基に行つて、こういう現状があるから、もっとこういうふうにしてほしいと常に伝えて、こちらのやりやすい仕事、体制を取ってもらう働きかけをしていかなきゃいけないと思っています。

こうやって切った木、支障木は支障木としてしか見られないので、ほぼ処分場行きになってしまします。これを買ってくれと言われても、使えないような木だったり、あるいは一本だけでは材料にすらならないとか、そういう事情もあるの、なかなか一本だけっていうのは買えないですけれども、きれいなまっすぐな木とか、そういったものは、ある程度金額で買いい取ったりしています。

### 人のわがままという都合で

切る木として、どんな木が多いかといいますと、山に行けば杉が多いですけど、家の周りや近場だと、ケヤキや柿の木、ヒノキ、ヒバ、サワラ、そういったものが多いです。

昔の人がケヤキなどは価値が出るだろうと思つて植えた。風除けに植え、柿は冬場の保存食、そういうことで植えているのですけれど、結局、大きくなりすぎて、その当時の人たちは

もっと、良い木も悪い木も選別して、悪い木はどう使おうか考え、良い木だったらちゃんと用材として使う。そして、製材所がしっかりあって、製材した木を乾燥して、ちゃんとそれを使える大工さんがいる。そういうところに職人さんたちが増えていくかどうかかわらないですが、そういうシステム、昔みたいなサイクルができあがると木の需要、使い方がもう少し良くなるかなと思っています。とりとめのない話ですが、この辺で終わりにします。

#### 塚本

五十嵐さん、ありがとうございます。続いて中野さんにお話しいただきます。よろしくお願ひします。

#### 中野陽介

只見町の中野陽介と申します。簡単な自己紹介ですが、出身は千葉県で、大学院を出て、今年で只見町に就職して9年目です。ユネスコエコパークという制度の地域おこし事業に携わって、仕事をさせてもらっています。専門は森林生態学。特にサワグルミがこういう多雪地域でどのように生きているのかを研究しております。

今日のテーマは「森を活かす」ということですが、只見の森と人という感じで話してみたいと思います。只見町全体の自然と人の関わりを概観的にご紹介して、写真を見ながら森と人の関係をご紹介できればと思います。どうぞよろしくお願ひします。

只見町は福島県の一番西の端、奥会津の一番奥で、74000haという広大な面積がありますが、その94%が山林原野、残りの6%が人の

それでいいけれど、この時代になってしまつと、すべてがじゃまもの扱いで、柿は取らない、食べない。風よけとして植えていた木も、大きくなりすぎて、今度は風が吹くと倒れそうで怖い。ケヤキは売れるでしょうと言われても、まったく売れない。だから全部切ってくれと、人のわがままという都合でうちは切っているのですけれど、やっぱりもったいない木がある場合は、そういったものは全部こっちで引き取って、同じ三島町の佐久間建設さんの森林事業部さんに声をかけて、その木を使ってもらっています。

### 桐の木はやっぱりベテランの人

山林の活用では、特に三島町は桐の木が有名で、毎年桐を伐採しています。桐の木も他の木と同じように切れるだろうと考えられがちですが、切る場所や値段が変わるので、そこを知らずに切っちゃうと価格が下がっちゃったり、傷を付けたら周りが怒られて引き取ってもらえなかつたりする。そういうものなので、桐の木はやっぱりベテランの人、切る寸法を知っている人が切っています。

桐の育て方は、漆の木と同じような感じで、いつも木の周りを刈り払って、消毒をしていくのですが、これがまた手作業になってしまつて、草刈りは根元をきれいに刈るのですが、葉っぱが残っていると葉っぱの下を虫が通つて木にくっついちゃうので、刈った草は全部手できれいにし、きれいな桐畑にして、虫にやられない、病気がつかないように管理しています。

### 山学校



中野陽介さん



住んでいるところです。資料には人口4200人と書いてありますが、たぶん今は4000人ぎりぎりくらいです。毎年100人くらい減っている過疎、高齢化が進んでいる地域です。

### なんととっても豪雪地帯

自然の特徴は、なんととっても豪雪地帯で年間の降雪量は12m。街中でも2m、3mの積雪がある地域です。

こうした気象的な非常に大きな要因からどういった自然が起きるか。この写真は、人が使い果たしたはげ山のように見えるのですが、実は人が作り出したものではなく、自然が作り出したものです。春の雪崩ですね。ザザッと下がる雪崩が山を削る。こういう爪でひっか

たような跡は、雪崩が山を削ったのです。雪食地形という雪が浸食した地形がこの只見地域には顕著に広がっています。後ろを見てください。谷間の奥のほうの山がトゲトゲしている。非常に急峻で複雑な地形ができています。

只見町はそういう地形で、ブナという樹木をまわりの木ということで紹介していますが、実はブナだけじゃなくいろいろな木、森があります。ずっと緑でわかりにくいですが、尾根、山のてっぺんのほうに黒い木が馬のたてがみ状に見えると思うのですが、あれはキタゴヨウというマツの木です。ああいう尾根のところによく出てきます。本当はこういう山の斜面にブナが出てきますが、只見の山は急で雪崩もひどいので、ブナも成長できず、こういう低木、背の小さい



スコエコパークに2014年に登録されています。

ユネスコエコパークを説明します。ユネスコがやっている制度です。人と自然との共生を実現する地域、持続可能な開発を学び、人と自然との共生を実践する地域で、国際的に認定される場所ということになっています。只見町もそういう地域であると憶えていただければと思います。

具体的に何をやるかという、自然を守るだけじゃなくて、持続可能なまちで使っていく。同じユネスコですけども、世界遺産は守るということだけ。使うということは念頭にないです。エコパークは使うということ。それを実践する人を育てる。調査・研究もやっていく。私はそれに関する仕事をやっています。普通はここから、私がやっている事業の話をするのが通例ですが、今日はそれをしないで、只見の山のもう少し具体的な様子を見ながら、人がどう関わっているのかを紹介したいと思います。

### 実は人の手がかつては入っていた

奥山から紹介します。只見の奥山。田子倉湖の奥にある山で、春、何をやるかという、山菜の採取です。非常に急斜面のところ、沢から入って斜面を登っていく。80歳近いおじいちゃんに付いて行って、足袋一つで登って採る。ゼンマイでリュックがパンパンになるまで採ります。

これをどうするかというと、ゼンマイ揉みといって、天日干しで乾燥させます。かつては只見のゼンマイは非常に良いもので、全国のゼンマイ価格を左右するほどの影響力があったそう

雪を受け流せるような樹木で構成される森林が発達します。

ブナはどこにいたのかという比較的斜面がなだらかで安定したところ。いいところにブナは生育している。こういった非常に原生的な自然環境が、5万haくらい広がっています。しかもこういうのが、今そこにも見えますが、集落のすぐ裏に原生的な自然が広がっています。その中でいろいろ希少な動植物、イヌワシ、クマ、ツキノワグマが生息し、最近見つかったのはタミハコネサンショウウオという新種でした。かわいらしいヒメサユリというユリもいます。そういう世界ですね。

### 生活文化の底流に縄文文化が

こういう中で、我々人間も暮らしているわけですが、只見地域にいつ頃から人が住み始めたかという、旧石器も見つかっている、その頃からでしょうが、本格的に住み始めたのは、たぶん縄文前期の7000年から5500年くらい前だと思われれます。この地域の人々の生活文化の底流に縄文文化があります。

こういった文化かと言いますと、まずは狩猟です。秋田のマガキも来ていましたが、この辺はまた独自の文化で、「鉄砲ぶち」という言い方をしています。こういう狩猟文化もありました。今はまた別のかたちで、鳥獣の管理でハンターさんがいらっやいます。今は駄目ですが、昔はカモシカも獲って食べていた。毛皮も現金に換金していたということです。

続いて漁労では、只見町には尾瀬を源流とする只見川と支流の伊南川という大きな河川があり、その川は全部日本海に繋がります。かつて

です。今でもおじいちゃん、おばあちゃんがやっている風景が初夏に見られます。

ゼンマイの話と関連しますが、ブナ林の中にも道がある。ゼンマイを採りに行くときの道です。ブナ林を通って行く。この道沿いのブナの木を見てみると、何か書いてあります。「昭和62年何月何日、ツネオ荷揚げ」。かつては山に小屋を建ててゼンマイを採っていました。その時に荷揚げをしたということです。こういふふうに、自分が来た日、何をしたかを特にブナの木に切りつけてあって、かつての人の生活を垣間見ることが出来ます。

ブナの本当に原生的な感じがするけれども、実はここも人の手が入っています。かつてはブナの木を切り倒して、キノコを作っていました。キノコのホダ木生産をやっていました。一見原生的に見える林にも実は人の手がかつては入っていたのです。

### コウシキ

民具の話になりますが、これは只見で除雪をする時のもの。ここでは「除雪」と言わなくて「雪掘り」と言う。雪が多く降りすぎるから掘るという感じ。今のスコップ、コウシキという道具で、ブナの木です。ブナの木からコウシキを作ります。なぜブナの木かという、雪がくつきにくく除雪がしやすいという理由でブナの木を使っていました。

### カジゴ焼

木が細いし密度も高い林では何をしていたか。ここは集落に近い。さっきまでは集落から

は日本海からサクラマスが川を上ってきて、住民の方はそれを捕獲して、山の中でなかなかタンパク源が得られないので、重要なタンパク源として食べていました。これも、下流に鹿瀬ダムができて上れなくなり、こうした文化は廃れてしまった。でも、今もイワナ、アカハラといった淡水魚を食べています。

採集ということでは山菜、キノコです。これも只見地域の方の重要な食卓のおかずで、今でも盛んに採られています。今はナメコの時期で、今日も課長から「ナメコ出てきたぞ」と「沼」が入っていました。そういう時期になっています。

農業では、かつてはカノという焼き畑が盛んでしたが、今は稲作、ソバとかを作っています。他にもいろいろ伝統的な生活文化があり、教科書や図鑑で見られるようなものが、まだこの地域では、この地域だけではなく奥会津全体で見られるのですが、残っています。この辺はまた後で詳しく紹介しようかと思えます。

### ユネスコエコパーク

まとめると、こういう自然環境、雪によって作り出される特徴的な自然環境、雪食地形と多様な森林、その中で生態的サービス、山菜、キノコ、おいしい空気、水、そういったもの恩恵を受けて人が暮らしています。人も自然を使い切ってしまうと暮らしていけないので、適切な利用と管理をしてきた。雪は大変ですけども、克服する暮らしということで、生活に繋がっていました。人と自然が概ね調和が取れたかたちで成り立ってきた地域と言える。ということ国内ではまだマイナーな制度ですけどユネ



離れた奥山でしたが、ここは集落に近い裏山です。ブナの本で、こうやってカジゴ焼きという炭焼きをした。原始的と言ったら失礼かもしれないですが、このくらいの穴を掘って、細木でも何でもいいですが、ブナの木も含めてどんどん放り込んで燃やして、最終的には蒸し焼きにして炭を作る。あまり立派な窯は作らない。それを炬燵などに使っていたということです。

ブナの本をほとんど使っていくと、だんだんブナの本じゃなくなってコナラというドングリの木の本になる。かつてはブナの本だったのが、ここも人が使ってコナラの本になった。ここでも薪や燃料を作っていた。

春の雪が固く締まった頃、春木山というのですが、雪が固く締まった頃に山に入って、木を切り、先ほど押部さんも言いましたが、樫で木



### かつての人の動きを推測できます

森の見た目、木の太さ、樹種から、かつての

一人の動きを推測できます。木の一本一本から人の生活をうかがい知ることが出来ます。この写真はちよつと変なかたちの木で、途中から木はこつこつして、枝は枝分かれしている。これはコナラです。こつちの写真はブナですが、このブナの木もこつこつして、枝が何本か出ている。こういうかたちに普通はならないです。これは人の手が関わっている。2m、3mの雪が積もる頃に木を切っている。やっぱり燃料として。そうした結果、こつちの樹形がでかがる。山形の鳥海山の麓が有名ですけど、アガリコという。只見はアガリコと言わず、モギリツキと言います。今はやられていないですけどね。

さつきの雪崩斜面の低木は何に使うかという



と、畑の豆の蔓を絡ませるのに枝を使います。ホームセンターで買うより家の近くで切ってくる。これは絡みがいいので、只見の家ではよく使っています。

### 本当に密接だったのです

それからキタゴヨウマツ。これは何に使っていたかという只見の古民家、「曲り屋」の構造材に使われていました。信州大学の井田秀行先生が一本一本建材を採取して、何の木からできているかを調べてくださった。ブナセンターの刊行物ができているので詳しくはそれを見ていただければと思います。ここのすぐ裏にキタゴヨウの林があります。家の近くの木を使って家を建てたということを知ることが出来ます。一部ブナも使っていました。

それから、マタタビ、ヤマブドウ。林に行くときよくあるのですが、こうしたものを何を作ったかという、三島町さんが有名ですが、手仕事で編み組細工を作る。実は只見もマタタビザルの本家だと只見の人は言っています。普通は竹で作っていますが、竹がないのでマタタビを使って生活用具を作ります。

今はプラスチックのものがあるので、生活用品として作られる頻度は落ちましたが、ちよつとかたちを変えて日用品、バッグなどを今のおじいちゃん、おばあちゃんが冬の間に作っています。

それから養蜂があります。山にはいろいろな木があつて花も咲きます。そこから採れる蜂蜜です。トチノキとオオバボダイジュ、この辺の

人がヤマナシと呼ぶバラ科の樹木オウラジロノキ。いろいろな樹木から蜂蜜が採れるので、地元の方は採って食べたり、さしあげたり、売ったりしているやっています。



本間宏さん

直接、木とは関係ないですけど、山には溪流があります。溪流で釣りをするとイワナが釣れる。こういうものも楽しみであり、食べ物としても使っている。それが只見の山の様子と人の関わりです。

高齢化、生活様式の変化で、そういった山と人の関係はかつてほどではなくなっているのが実情だと思います。ブナセンター、ユネスコエコパークとしてこうした関係性をいかに引き継いでいくかはなかなか難しい課題ですが、そうしたことに取り組んでいます。一つの事業として、伝承産品という部署でお土産物づくり、森から得られるもので作られたものをブランドディングして販売しています。

森から得られるもので生産量は多くなくて、産業に結びつかないとなかなか難しいですが、みなさんに知っていただき、産業に繋がれば、地域の活力に繋がると思っています。私も仕事としてその一部をやらせてもらっています。

塚本 ありがとうございます。山に間借りして住

五十嵐 言います。

押部 赤いミズノキですよ。サイノカミに餅をあぶったりしませんか。あれもミズノキ。おそろく昭和村ではダンゴノキというミズノキを指しています。

五十嵐 そういう通称でみんな言うから。

押部 そうなのです。さつきサンナメシはリヨウブだと言ったけど、リヨウブとかシラビのヒノキ、サワラもそうですけど、みんな学名なんて気にしてないので、地元の方の呼び方をしている「俺はそんなことわかんねえぞ」というようなこと。個人的には興味のあることなので聞いているのですが、やっぱり難しい、わからない。ハナノキも、図鑑にハナノキがあるので、昭和村ではハナノキはイタヤカエデです。

五十嵐 なぜ、ハナなのですか。

押部 僕もいまだにわかりません。ご存じの方、いますか。

本間 今、聞いておかないとわからなくなる話です。ごく大事です。呼び名にちゃんとその土地の由来がある。わかる人がいたら、ぜひ、聞き取



りをお願いします。

五十嵐 もう一点いいですか。今度は、中野さんに質問ですが、雪、雪崩でほとんど雪食地形になって、地表の土が削り取られていった場所は、その年何か植物が生えるのですか。毎年それが起こるわけですよ。そうすると、そこはもう何も生えない状態になるのですか。

中野 削れちゃったところは雪崩の強度、場所によるのですが、本当に雪崩の通り道のところは岩がむき出し。もうちよつと影響が少ないと草だけ。さらに影響が緩くなると木が生えるという感じですよ。

いた新妻香織さんに講演していただき、森林に関する古文書、『縁起絵巻』の写し、そうしたものを企画展に展示した記憶があります。

また、今日の話と関係しますが、どのような木をどのような道具に昔の人が利用していたのか、木製品の生産をやっていた遺跡の発掘調査をもとに花粉分析から植生の変化がわかるかというようなことを展示で紹介した覚えがありますが、10年経って全部忘れておりました。

今日、いろいろなお話を聞いて、そういえば、あの遺跡で出たホオノキの木をこんなふうに使っていたとか、奈良時代のもとのこの民具は同じだとか、「うん、うん」とうなずきながら聞かせていただきました。

私は、専門が縄文時代の考古学です。縄文時代は自然と共生した時代と言われています。それは当たり前ではない。自然を壊す限界まで縄文人はたどり着けていない。その代わり自然界にある使えるものはとことんうまく使って、なおかつそれを継続させていた。交流しながら生活していた。そういうことが、特に近年の調査、特に福島県内の調査で続々とわかってきました。

只見町の原型が縄文文化にあるというお話もあり、うん、まさにその通りだと思えました。特にブナ林と里の近さは只見の特殊性だろうと思います。同じ縄文時代でも、いろいろな小地域性があるのですが、自然との適応の仕方がそんなものを生み出していると感じるうなずきながら聞かせていただきました。

それでは、ディスカッションに行きたいと思えます。3人の方々のお話をお聞きしました。その上で、こんなことも言わなきゃいけないかった、聞いておかなきゃというのを確認する意味



で、質問・意見があれば、まずそれを出していただきます。その後で会場のみなさんにご意見を求めたいとおもっています。一番話したそうにしていただいた五十嵐さんからお願います。

### 五十嵐

押部さんに質問です。ハナノキはイタヤカエデだという話でしたが、林業の人たちとしゃべっているとハナノキ、ミズノキ、ダンゴノキと出てくる。「あれはハナだ、あれはダンゴだ」といろいろ言っている。そのダンゴノキとは何の木のことですか。

### 押部

たぶん、昭和村の人がダンゴノキ、ダンゴサシノキというのはミズノキです。ダンゴサシつて三島でも言いますか。

## 本間

押部さんから質問がありましたらお願いします。

## 押部

中野さんに質問です。パワーポイントの中で、ダイコンの写真にダイコンニユウと書いてあったのが気になったのですが、ダイコンニユウって何ですか。

## ダイコンニユウ

## 中野

ダイコンニユウ。これからの時期、冬の貯蔵方法の一つです。ダイコンを雪の中に埋めて保存する方法です。木枠を作って、そこに杉の葉っぱを敷き詰めます。ネズミとかが入ってこないように杉の葉っぱを敷き詰めると聞きました。そこにダイコンを積んでいって、藁で覆って、雪が降るのを待ちます。で、雪が保存してくれる。雪の中は0度以下にならないので、適切な温度、湿度で冬の間保存され、冬の食べたい時にそこを掘って、ダイコンを取り出して食べる。雪室と言えはいいのでしょうか。

話は飛びますが、キンニユウは薪棚です。薪を積んであるところをキンニユウ、キンニユウと言うのです。ニユウって何なのかな。

## 五十嵐

ニユウは入れておく、入れ物みたいなものですか。

## 中野

よくわからない。積んでおく場所をニユウというとか、本で読んだことがあるのですがわか

らないです。ダイコンニユウは保存の方法です。

## 昔は採草地、牧野でした

ずっと広葉樹の話をしてしまいました。五十嵐さんは杉をよく扱っているようでした。杉の林も只見にはあります。後ろを見ていただくと、山の裾野に杉が見えます。実はあそこは、昔は採草地、牧野でした。馬や牛の餌にする草、畑の肥料にする草、かやぶき屋根の茅を採る場所でした。そこに戦後の拡大造林で杉が植えられ、今の状況です。ですから50から70年ぐらいの木になっています。

只見には杉を育てる文化はあまりなくて、戦後に植えたきりになっています。全国の例に漏れず杉は売れないので、手入れもせずにいるのが現状です。せっかくなある資源を使えていないのは残念だと思っています。町の林業課も悩んでいる。どこも同じ状況だと思います。

## どういう方法で杉を使っていくかを考える

## 五十嵐

どこも一緒ですが、三島町では木の駅事業というところで杉林を間伐して、間伐した木をエネルギーとして利用し杉林もきれいにしていくという活動をしています。してはいますが、それをする年齢層が高齢者の方々がかりで、切ったりはできるけど、運び出しまではできない。じゃあどうしようかというところまで企画している町役場で案が出ない。案が出ないのだったら、聞きに来たらいいのと思うのですが、あまりそういうこともない。

## 山に行かない子どもたち

## 五十嵐

自分たちは、三島は桐の産地なので、小学校からの依頼で、小学生、中学生に桐林に行つて、間伐しなければいけない木を選び、切つてもらつてやっています。

山育ちだから、子どもたちが山に慣れ親しんでいるかというところまでではなくて山に行かない子どもたちが多いです。そういう子どもに、木を切る行為、倒れた時の音、風を切つて倒れる瞬間、土とぶつかるドーンという音、そういうところを聞いて、体感してもらおう。三島町にある桐が、どう生産されて使われていくのかを少しでも知ってもらえたらいい。

中学校も一緒で、桐の木、杉を切る。教育学部のある大学の生徒さんたちが来て木に登る体験をする。チェーンソーを持って木を切つてみる。普段見ている木は加工された木なので、もともとの状態、その倒れる瞬間、そういうところまで知って欲しい。教育学部の生徒さんたちが子どもたちに何かを伝える時に、その体験が何かきっかけになってくれるといい。そういう思いから受け入れをしています。そんな感じですよ。

## 「いつだ雪の降るとこ来んじゃねえ」

## 押部

三島町さん、只見町さんみたいに昭和村も木育という木のことに関する子どもたちへの教育が学校の授業などにあります。かといって木育

行政と民間企業がもっといろいろな会話をしながら、どういう方法で杉を使っていくかを考える。そういう場がもっとあればいいのと思います。只見でも製材所があつて切つてもいいですよ。この辺の木を切ることはあるのですか。

## 中野

木材生産のために、積極的に切つているのはあまり聞かない。支障木で出たものを、ちょっともらつてくるという話は聞きますけど。積極的な素材生産はなかなか難しい感じですよ。

## 経済的なニーズに合致しない

## 本間

今日、3人の方々のお話しをお聞きする前からおそらくテーマになるだろうと思つていたのは森林を守ることと活かすことです。「生かされる」ではないかという意見も事務局からは出たのですが、「ともに生きる」で良いのかなと思つています。人と森のためにお互いに生きる。そして、それを継続する担い手の話、ここがポイントになるだろうと思つていました。

これは私が担当している文化財保護の仕事もまったく同じです。森林を守る、森林を活かすことと文化財を守ることが現代の経済的なニーズに合致しないのです。それをやらなくても明日食べていけないわけではない。特に森林が昔はお金になつたけれど、お金にならない時代に今はなつてしまつた。

文化財保護も最近では文化庁がインバウンド、観光のために何かやれと法律まで変えました。基本的に経済的なニーズに直接合致するものではないので悩ましい。では、なくしていいもの

の先進地域ほど積極的に機運があるわけではなくて、僕はやっぱり五十嵐さんの活動がいいなと思います。昭和村は国有林が多いという事情もあるようですが。

やっぱり本間さんがおっしゃつたとおりこれからの人が大事だと思います。昔、僕はこつちに引越してくる時に祖父とけんかをしました。「こうだ雪の降るとこ来んじゃねえ」とか言われて、あまり土地や山のことを肯定的に話してくれなかつた。それが本心ではないとわかつてはいますが、ああ、うちの年寄りはおかんな、変えていくならこれからの子どもたちだと当時は感じました。

## これから僕が助けてもらう人たちのので

できれば僕も採つてくるころからやりた。足を運べば、よくわかります。柴木だからだなあとか、こんなところにキノコが生えるのかみたいなことを、子どもも言いますね。山に行つて子ども達に思い出を作つてほしいと思つけれど、木の良さ、山の良さを押し付ける気はさらさらありません。僕はあまり大きなことは考えていなくて、仲良くなった人たちとちょっと遊びたいなというところから始めています。

なのかというところでもない。自分たちが生かされている風土を作っているものだと思うのです。土地の個性、その大切さを今の子どもたち、これから生まれてくる未来の人たちにもきちんと伝えて、ちゃんと理解して生きていただきたいという思いがあります。そのために、五十嵐さんは「山学校」をなさっている。いろいろな取り組みをされている。

伝えるというところに絞つてお話をお聞きしたいと思います。今度は、中野さんから森と人の関わりについてお願いしてよろしいですか。

## 近くにいてもいいけれど

## 中野

いろいろあるのです。トレッキングでは、ガイドさんの育成をして、ガイドツアーを通して僕が紹介しような森の良さ、人との関わりを伝える。ガイドさん自身も学び、ガイドツアーに参加した方に伝えていく。そういったエコツーリズムのためのガイド育成なども仕事でやらせてもらっています。

それから福島県博の事業を引き継いでいる「こども芸術計画」があります。アーティストの岩田とも子さんに入ってもらっています。実は近くにいてもいいけれど子どもたちはなかなか森に行く機会が少ない。そういう機会をあげたいということでも子どもたちを森に連れて行き、自由に感じ取ってもらい、そこから作品を作ってもらおう。そういう仕事もさせてもらっています。

伝承産品は、地域の自然と人との関わりをお土産物を通していろいろな人に伝えてほしいという気持ちを含めながら関わっています。また、いろいろありますが、とりあえずこんな感じでは

だんだん気持ちと体が大きくなって、僕も草刈つてみようかなとか自発的に考える人が出てきたらいいなという程度です。山遊びの下見に、道の下草刈つてくるからつて言うと、小学生高学年の子とかが「あ、俺、行くよ」つて。行つてみたいって言ってくれる子、荷物持ちでもいって言ってくれる子がいて、とても気持ちが良いかなります。これから僕が助けてもらう人たちのなので。

## 僕たちの世代は

昭和村から柳津町に抜ける道、琵琶首を通つて、西山に出る道沿いにお父さんが自分で作ったような小屋がいっぱいあります。杉の丸太を番線で縛つたような小屋があつて、それがすごくいい。結構新しいものもあります。今は金にならないですけど、僕はお金になる時代は来ると思っています。今手入れをやめていいのか、僕はそうは思いません。

僕たちの世代は、楽しみながら、ちよつとお金の面では我慢して、後ろの人にもつと心の面で楽しみや経済的に足しになるように繋げられたらという気持ちでいます。

## 森を管理していたとしか思えない

## 本間

ありがとうございました。お金になるかならないか、そういう基準の中で林業と関わる人たちが続かないという悩みは現実にあると思います。また、そういう時代が必ず来ると押部さんがおっしゃいました。見直される時が来るだろうと私も思っています。





日本の建築文化はずっと木で来ました。日本の原始、古代の遺跡は世界遺産になりにくくて困っている。まほろんの館長が北海道・東北の縄文遺跡群を世界遺産にするための専門委員会の委員長をやっていますが、なかなか通らない。今、ようやく候補に選定されたところで、来年結論が出ます。木の文化財はどうしても本物が残らないのです、腐ってしまっただけ。

日本で一番古い木造建築物は法隆寺です。それ以前のものは痕跡しか残らない。痕跡しか残らないぐらい、逆に言うとも木を使ってきているのです。ずっと木とともに生きてきた。11月14日に現地説明会があるのですが、川俣町の前田遺跡という縄文時代の遺跡がすごい。新聞にも大きく出しましたが、森を管理していたとしか思えないぐらいのものが出てきています。下草を払うために使ったと思われる道具も出ています。あと、出てきたオニグルミの大きさが軒並み5cm台なのです。そんな大きなオニグルミを私は見たことがない。クルミ塚のようなものも出ていて、「これは森を管理していたな」と考えられるような内容です。漆器もものすごい量、三島町の荒屋敷遺跡を凌駕するぐらいの量が出ています。

管理というより森とともに生きていくからこそできたものだろうと感じていて、風土に見合った生き方という見方で、いつかエゴという視点からもう一度森林は見直される時が来ると勝手に私は思っております。その時までちゃんと繋ぐことが一番大事だろうと思っております。

時間はオーバーしちゃうのですけどいいですか。「参加の方々から先生へお聞きしたいこと」ご提案がありましたらどうぞ。



しゃっていました。平地というか、雪がない所からすると、雪はマイナスでしかないけれど、こっちにいと雪がいかにすごいかがわかると思っっている。

僕も、若松なのでわかりきっていないのですけれど。すみません、長くなっちゃった。雪の意味、価値をあらためて3人の方にお聞きしたいなと思いました。

本間

ありがとうございます。では、3人の方から雪がもたらすものの価値についてお話しをしてディスカッションを閉じます。ちょっと、その前をお願いします。

参加者・林あゆ美

会津若松から来ました林と申します。よろしくお願います。五十嵐さんのお話で印象に残ったのが、人間のわがままで木を育て、大きくなって手に負えなくなると切るのは頼むという。狭いながらもわが家の庭にも少し木を植えたりしています。本当に桑の木の繁殖がすごくて、やっぱり手に負えなくなると、ごめんささいと言っただけで切れない。最初はやっぱり育ててみたいということですが、思いのほか木は大きくなってしまっただけで、どうするの？ 人としてのいいのでしょうか。わがままじゃなく、なんと言っか、あるべき姿というか。

木に失礼

五十嵐

木は大きくなるものだと思う、植える人は植えた責任として、手の届く範囲で切つてあげるのはいけなさいと思います。

このあいだ塩川で見てほしいという木がありました。15mぐらいの樺の木ですが、大きくなつたら切つてほしいと。なぜ切つてほしいのですかと聞きました。「とりのトトロ」を見て、巨木に憧れて植えた」と。いつのまにかこんなに大きくなつちゃって、いっぱい葉っぱが積もつちゃって屋根が駄目になつちゃって。掃くのも大変だと。で、切つてほしいと。それって本当に木に失礼だと思ふ。そうなるのだったら自分で手の届く範囲でなんとかやるとか。アニメの世界が現実でも一緒かといったらそうでもない。アニメの世界があるとすれば、只見の奥のブナ林ではそういう巨木を見られると思うのですが、自分の家の庭にそんなでっかい木を

育てるなんていうのはおこがましいと思いません。ちよつとずつ切る。一回で切つちゃって木も死んでしまうので、ちよつとずつ切つて、力を弱めないように枝を切っていくと、なんとか生きていけると思っています。

林

わかりました。

五十嵐

切つた木で漆器の貝沼航さんに器を作ってもらうといい。漆を塗って記念の食器にしてもいいなと思っています。

林

どんな木でも漆を塗れるのですか。適したものがありませんか。

五十嵐

広葉樹のほうが適していますね。

参加者・貝沼航

近代に大切だけどなくなつてしまったものとか、なくなつていきそうなものをどう守っていくか、どう繋いでいくかで、やっぱり経済合理性に最終的に行き当たってしまう。少しずつお金に換えていくことも大事だし、価値観が変わつてそれが価値を持つようになるまでなんとか続けていくのも大切だと思ふ。なんとなく僕らの世代ぐらいから貨幣基準の価値の循環とは違う、縄文的な交換経済、暮らし、もの流れを作っていくことができたらいなと思ひます。

いという声がマーケットであれば、僕は機械を作ろうかなと思っています。今手元に3台の機械がありますから、これのコピーを作り何十台も並べて木を削つてマーケットに流通させれば、みなさんがブラコンを洗って捨てる手間が減ります。これは燃えるごみですから。消費財としてどんどん使つていただいて、それで山が循環する。最近、サーキュレーションエコノミーという言葉覚えてきたのですが、山が循環してほしい。そうすると山も循環して僕も儲かると思っっている。儲かるかどうかはさておいて、こういったものも使い道としては可能性があるのかな。ただ、どうにも技術が追いつかなくて、できたりできなかったりというところ。これから期待していただけるように技術を磨いていっばい作りたいたいと思っっています。機械そのものが複製できれば昭和村にも三島町にも木工場を作ることができそうです。どんどん作つても、どんどん木が育つてきます。いつまでも続く仕事ができればいいなと思っっています。

参加者

木の活用ということですが、実は私の家は会津の材98%ぐらいで建てた家です。建てる時に言われたことは、会津の材は節が多いけどいいのよ。枝打ちをしてちゃんと育てるといいことをしていませんから節が多い。それでもいいか、本当にいいかと念を押されたけれどOKだと言つて建てた。

我々は節がない材に慣れてきちゃっている。日本の材で建てるといって、ものすごい伝統の建物、高級住宅を見せようから、そういう価値観で見ちゃう。我々の価値観を少し変えていくことで材の使い方はいろいろ出てくると思っ

世界は変わらないけど自分の身の丈からは変えられる気がする。そんなことがこの奥会津から、一人一人の暮らしと仕事のあり方の中から、ちよつとずつ変わっていくようなことが同時多発的に増えていくといいなと思っっています。

貧乏だから安いものは買えない

僕は奥会津のおばあちゃんのごく好きな言葉があります。そのおばあちゃんの家は農家さんだったのです。く大きな家。すくいい漆器やいろいろないものがあつた。いい漆器が置かれてますねという話をしたら、「うちは、貧乏だから安いものは買えないんだよ」ということを言われました。

その言葉と出会って良かった。価値観が変わつた。普通は、お金を持つているからいいものを買うという考え方だけど、奥会津ではいいものを長く代をまたいで使っていく。お金はないけど、その代わり昔から引き継いだいいものを、ちゃんと丁寧に使っていく。変な安いものは買わない。近代的な価値観と真逆なこと。そつち側の経済をどう作るか。経済というか、なんというのか、そういう価値基準をどう作るかということかと思っっています。

前提が長くなつちゃつたのですけど、奥会津というテーマなので奥会津の雪、中野さんの話にもあつた雪が前提で、すくく大事だと思っっている。雪に閉ざされる時間がある。最近はずいぶんホームとか言われていますが、奥会津なんて何千年もステイホームしていた。だからこそ生まれる価値がある。

押部さんがおじいちゃんといけんかした。あんな雪深いところへ行つてと言われたとおつ

ています。

山が迫ってきています

それから、ロマンと夢がある話をしてきたところに、大変申し訳ないですけど、私は、三島町でも山の中に住んでいて、山に入る機会が減つてきているという話がありました。本間に今まで畑だったところも雑木が生えちゃつて、山が迫ってきています。すぐ裏の栗の木に熊柵ができていて、知らないうちに熊が来ていたという状態。

私は移住してきた人間で、ここで生まれた人間ではありませんので、やっぱり山と付き合っていくのは非常に難しいと思ひます。

だからといって、そのまましておく生活が脅かされてくる。毎年、倒木がある。家のすぐ近くで杉が倒れる。そういう状態です。放置果樹は今年だけで36本ぐらい切つてくれという申請をしている。そういうことをしながら、どう山と付き合っていくのか。住んでいる人間が年を取つて草刈りもできない、下草も払えないという集落なのです。そういう集落でどうやって山と付き合っていくのかは、移つてきて生活してみると本当に難しいと実感しているところ。すみません。最後に、あまり夢のない話をしちやいけなさいね。

本間

ありがとうございます。夢のない話とか、みなさん、その現実にも向き合つて実感されていると思うし、すぐそこまで熊が来る原因を作っているのも人間だということですよ。

つくりたいと思います。

### 冬だからできること

冬がでかいですね、自分で冬だからできること、冬にしたいこと、季節労働をやって、生活を組み立てる楽しみはある。それは強く感じています。春、夏、秋のうちにはあれをやって、冬はこれをする。普通にみなさん自然にやっていることだと思うのですが、畑ができない時は中で何か作るような、そういうことです。さっきおっしゃっていたことについてですが、今は確かに山の枝打ちをしなくて、枝節のあるような木が多い。ただ、節があるから悪い木というわけではなくて、それはその木の歴史というか、節があつて強い場合もあります。長持ちするように使つてあげればとても素敵なお家だと思います。

話が逸れてしまつたのですが、経木って何に使うのですか。

### 目黒

昔だったら、お肉屋さんで肉をくるんでいた。おにぎりをくるむ。宣伝しますと、調湿機能がそもそも木にはある。ラップにくるめば汗をかいたりする。経木はほどよく水分を吸って、乾燥すればその水分を吐き出してくれるので、おにぎりをくるめば、夕方ころまでふつぷらとした状態を保つと言われています。本当にプラスチックに代わる包装材料として有効ではないかと勝手に思っています。

### 押部

僕が見てきた機械で超仕上げカンナ盤があります。材料を突つ込むと薄く削れる機械。たぶ

ん仕組みは一緒だと思います。その機械の刃を杉の力に耐えられるようにちよつと鈍角めというか強めに研いで厚めに削つた時、そういうのが大量に出ます。僕もちよつと、この冬やってみたいです。

### 目黒

控えめに言つて、世の中を変えるインパクトがあります。

### 押部

機械を調整してやってみます。

### 本間

では、五十嵐さんお願いします。

### いろいろなものが鮮やかに感じる

### 五十嵐

そうですね、雪がもたらすものって、長年、雪国にいたのであまり思い浮かばない。雪が降ってくるおかげで、雪が融けた時に見える山の風景、新芽が出てきて淡いところがどんどん濃くなっていくところ、そういうた色の変化、それは雪があるおかげで、いろいろなものが鮮やかに感じるのかなと思っています。

林業で考えると、昔は雪で滑らせながら下まで引きずるとか、そういうかたちでやっていた。今は楕とかそういうものを使ってやるよりも重機を入れて雪を掘つてとんどんワイヤーで引つ張る。今は林業で雪の恩恵は薄くなつてい

### 本間

ると思います。

中野さんからは、雪が自然にもたらしているもの、生活にもたらしているものをたくさん発言があると思うので、ぜひお願いしたいと思います。

### 僕にとっては重い話題

### 中野

違う話でもいいですか。雪の価値って僕にとっては重い話題。僕はもともと関東育ちで、雪国に来て9年目の人間です。いろいろな実状も大変さも見せてもらつていて。雪について、しかも公務員というある種安定した立場で、雪について語るのには非常におこがましいのです。

私の実家は千葉です。千葉、新潟、佐渡島、だんだん雪深いところに来ていて、雪に魅かれるものがあるでしょう。大学の頃、星野道夫という写真家の写真がすごく好きでした。彼はアラスカの非常に厳しい自然の中で写真を撮つて、そこに暮らす人々を記録している。土地に生きるというか、もっと強くいえば地球に生きるというか、そういう価値観に非常に興味を持っていた。

2011年に大震災、原発事故があつて、やっぱり土地に生きることが自分のキーワードとしてあつた。ちょうど就職のタイミングで、何かそういうものをテーマにした仕事ができれば、そういう土地で暮らしてみたい。本当に偶然、只見に2011年に出会つて山を見ると、全然見たことのない山で、一目見て雪の影響がすごく強いのだなとわかつた。

### ここに暮らして探していきたい

さて最後に、雪の話、雪の価値という話でした。雪がもたらしてくれているもの、あると思いますので。それを、一言ずつ、押部さんからお願いします。

### 押部

僕はたかが32の若造ですけど、雪について思っていることが二つあります。一つが昭和村の機械り、糸を作っている人たち。若い人も年配の方も結構な人数いらつしやるのですが、やろうとするものすごい根気が要る。糸を繋げていく仕事の精度、続ける根気。昔の布を村の人に見せていただいたのですが、どういうエネルギーの注ぎ方をしたらこんなものが作れるのか。

### 不便さの中にいる

冬に閉ざされて、持て余すエネルギーをぶつける場所というか、不便さの中にいるということをもものづくりのエネルギーにしたというか。僕もそういうのを感じます。冬に工場に引きこもつて、冬にしかできない仕事をする。雑音が入らないというか、集中できる良さはあるなと感じています。

僕も来春からは建築大工に戻ろうと思つているのですが、大工とか屋根屋さん、百姓、一年中、僕の仕事はこれだから、これ以外やりたくないというような生活を組み立てようとするやっぱりしんどい。そういう目で見ると雪はじやまです。車は大変だし、材料を置く場所もない。大工だけで、その仕事一本で、そういう考え方で僕も来たんですけど、小粒の副業というか小遣い稼ぎもどれも真剣にやることで生き方を

雪という自然。人がどうしようもできない自然、圧倒的なものがここにはある。その中で暮らしている人って、どういう人なのだろう。都市部では自然から離れた生活がどんどん進んでいます。あえてこの厳しい自然の中に飛び込めば別の違う世界があるのではないかと思つて、ここで働いてみよう、暮らしてみようと思つたのです。

雪についての価値は、結論から言うと探している途中、まだまだここに暮らして探していきたいと思つているのが、僕のコメントになります。

### 本間

ありがとうございます。探しているということ。私も、雪国育ちですけど、学校へ行くのが大変だった。スキーを履いて行った。学校の先生もスキーで来いというので、スキーで通つたこともありました。

雪をテーマにしたミュージアムでは新潟県立歴史博物館があります。あそこの名物は火炎土器です。なぜ雪国であんな暑苦しいのを作るのだろう。雪があるからではないかと、勝手に私は思っています。

だいぶ時間を超過してしまいました。お時間ですのでディスカッションを終わりたいと思います。最後に、私から一つ、みなさんと共有できればと思つていることがあります。「森とともに生きる」というスタンス、これをきちんと、今は非常に厳しい状況ではあるけれど、これをちゃんと未来に繋ぐことが大事だと考えています。

そのために、このミュージアムをはじめ、奥会津のミュージアムが人々と自然に寄り添いな





興味深いテーマの掘り下げでした。よくペットを飼ったら最後まで面倒をみるのが大事と聞きます。今日の木の話を聞いて、木も命だと思いました。今日からできる限り手をかけ、命を大事にしていきたいと思いました。(50代)

森、木を活かすということには、いろいろな課題があることを再確認した。このことを今後活かしていきたい。(60代)

雪国での森との関わりについて聞いて面白かったです。

厳しい暮らしの中で、それゆえのいろいろな様があって、今の都会化された暮らしから見ると、価値のある豊かなものが生み出されてきたことを改めて知ることができました。(50代)

森のもの、山のものを使って暮らす人々の文化に強い魅力を感じています。

その魅力をうまく説明することがまだできないのですが、今日のディスカッションがヒントになったように思います。ありがとうございます。(20代)

森、自然との関わり方を、さまざまな視点からお聞きでき、とても学びになりました。(20代)

改めて「学ぶ」ということができるところとして、とても楽しかったです。一つのテーマをさまざまな視点から学ぶという機会はあまりないので、よい時間でした。(20代)

第3回「奥会津の森を活かす」に参加して  
林あゆ美

第1回、第2回と参加し、前知識なしに参加する楽しさを感じています。今回の場所は只見、「ただみ・ブナと川のミュージアム」です。

最初は昭和村地域おこし協力隊の押部僚さん。愛知県出身ながら、祖父の実家が奥会津にあり、じいちゃん子の押部さん、いつかこの地で生活してみたいそう。いまは昭和村教育委員会に所属し、民具の整理作業をされているそうです。

押部さんはいろいろな木や葉っぱ、道具を持ってきてくださり、それぞれの木の特性、「ご自身の好きな木の話をされました。やわらかい木は、例えば切った木を縛るのにも用いられるそうで、実際にみせてくれた木のやわらかさに「へえ」とびっくりしました。木といえば、上に高くそびえる固いもので、やわらかい木が存在していることは知りませんでした。後でそれぞれの木について調べようとメモしてきたものは、どれも聞き取りが悪かったらしく調べきれず、家のまわりにある木、庭のものも何かに使えるものがあるかもと、あらたな視点をいただきました。また、木の呼び名にも地域

性があること。地元の方は学名などに気にせず、昔からそう呼ばれていたという呼称を大事にしていることは興味を引かれます。好きな木について楽しく語る押部さんの話は、聞いているこちらにも楽しさが伝染する力がありました。

次はアイパワーフォレストで働かれている五十嵐健太さんのお話。特殊伐採の様子を写真で見せてくださいました。数mの高い木にのぼって裁断する様子は、写真からでも臨場感ばっちり、ドキドキしてしまいます。木を切るという技術を軽んじられ、対価を低く見積もられることもあるそうで、経済ってやつは！とこちらまで悔しくなります。

お願いされる仕事には、個人の方からも先祖が植えた木が大きくなりすぎてどうしようもないので切つて欲しいというものがあるそうです。人間のいうならばワガママで木を切ることにについては、ドキリとしました。かくいうわが家の庭もどんどん大きくなる木があり、これから年をとつてこの木をどうしたものかと考えはじめていたからです。

鳥が落ちていくのか、桑は常にごこかしこに生えてきます。数頭のカイコを楽しみて飼っていたときは、便利だったのですが、カイコがないとなると、ぐんぐん育つ桑の木を大きくさせすぎないよう、適度に切っていくのは必須です。食い気から庭にタラの木を植えたのです。それが成長が早く、巨木のタラの木を余所

でみたとき、こんなに大きくなっては大変と、これも手を入れるようにしています。木も命。それに気づかされました。

3人目は中野陽介さん。只見町はユネスコエコパークに認定されていますが、その推進係の仕事をされています。専門は森林生態学で、只見の森についてたつぷりの写真と共に説明してくださいました。豪雪地帯である只見は、74・753 haという広大な広さをもちながら、その94%は山林。豪雪がつくり出す地形は「雪食地形」「モザイク植生」といわれるそうです。只見の山を眺めるのはとても好きなので(山登りの体力はなく……)、雪崩によって作り出される地形というのを教えてもらい、帰りは新しい目ももつて山をみることでできました。いままでも知らなかったことを知り、自分の眼がバージョンアップされる感覚というのは、この「奥会津の周り方」に参加する醍醐味です。

また、只見の古民家は何の木でつくられているのかという調査の話も興味深く、帰りに自分のお土産として成果報告書を購入しました。「日本有数の豪雪地帯である只見町の積雪に100年以上も耐えてきた丈夫な構造や部材の樹種選択は、自然環境に適応しながら生み出された理にかなった技術である」とあり、おもしろそうです。

最後はお三方を交えたディスカッション。モ

デレターの本間宏さんは、白河の通称「まほろん」(福島県文化財センター白河館)で学芸課長をされ、ライフミュージアムネットワーク実行委員会の委員でもあります。本間さんを通じて、お三方がそれぞれ質問を交換し、森や木が奥会津の生活にどのように関わってきたかが掘り下げられました。

この奥会津の周り方はオープンディスカッションですから、最後の質疑応答が毎回もりあがります。できたばかりの「経木(きょうぎ)」のサンプルをお持ちになられた方は、杉の有効活用として、最近注目されているサーキュレーションエコノミーとしての役割も担うのではと「経木」の可能性について熱く語られました。私も生活クラブをおして「経木」を愛用しているの、地元の木でそれがつくられたら嬉しいなと期待が膨らむ話でした。

今まで、森林浴は楽しいはくらくらしか森を意識してこなかったの、初めて知る話にとっても興奮しました。森はおもしろい！というのが一番の収穫です。木は生活に活かされているのをあらためて気づかされました。わが家の狭い庭の木々を見る目も変わります。いい形で木の命をつないでいけるよう意識していかなくては。

今回の昭和村もいままら楽しみでなりません。

## 第3回

「奥会津の森を活かす」レポート  
岩波友紀

3回目となるオーブンディスプレイ「奥会津の周り方」は、只見町でした。今回のテーマが「奥会津の森を活かす」であるように、私の中でも、奥会津の一番奥である只見町は山、森林、ブナのイメージがとて強いところで、7割近くを森林が占める日本なので、このテーマは奥会津に限らず日本中どこでも関わってくるテーマだと思うし、森林がより多い地域がより過疎になっていると感じています。すでにあるこの膨大な森林というものを資源にできれば、世界が全く変わってしまうほどのものだと思います、今回のディスプレイを楽しみに聞きました。

昭和村地域おこし協力隊の押部さんは、木で作られた民具についてのお話でした。昔の民具はすぐそこにある山の木で全て賄われているということでした。今わりと持続可能な循環型の生活が注目を浴びながらも、なかなか一気に変わっていない世の中だと感じています。このような民具ひとつのお話からも、地元のものを使って作り、それが仕事での道具になり、それを用いて生産をしていく様が、持続可能な生活の底辺にあるように感じました。

しかし、その技術や知恵が失われつつあることも伺い、それは想像に難くはありませんでした。やはり生産効率、経済性を主とするとそうなるのは目に見えています。このような技術も、伝統工芸のように守っていくしかないのかという思いと、生活のための技としては生き続けられないのかということも感じます。

（奥）会津にとって、雪とは何か？  
貝沼航

今年の2月、奥会津の昭和村を訪ねた時に、道すがら一人のおじいさんと立ち話になったのだが、その時の一言がなんとも忘れがたいものだった。

「今年はほんと雪が降んなくて、みっともねんだ。なんだが見せんの恥ずかしいない。」  
雪が降らないと、景色がみっともない。見せるのが恥ずかしい。

その言い回しに一瞬驚きつつ、なるほど、なんだか妙に納得する一言でもあった。

昨シーズンは雪がほんとに降らなくて、雪かきしなくて楽だと言いながら、会津の人はみんなどこかそわそわ落ち着かない雰囲気もあった。

そうだ、それは景色がみっともなかったから。雪は大変だ、こわい、寒い、早く春になれば、そう言いながら、冬に雪がなくなっちゃうのも美しくないらしい。

今年の8月、西会津を訪ね、ゲストハウスで飲み会をしていたのだが、その時に関東から移住してきた女の子が話した内容がとても面白かった。

「私ワーカホリックみたくずっと働いてるからさ、村のばあちゃんたちが私のこと、たまに言うんだよね。〇〇さんは雪のないところから来たから諦めが悪い（笑）って。」

そうか、雪は一時的な休めの合図なのだ。問答無用で強制終了なのだ。人間の都合なんて聞いちゃくれないのだ、それが自然であり、それ

お話の中で、お金がないから高価な良いものしか持っていない、というような趣旨の言葉があり、とても印象に残っています。お金がないからこそ、良いものを大事にずっと使っていくのだと。100円ショップなどですぐにダメになるものをついついたくさん買ってしまふことを、ちよつと考え直さないと、と思いました。

林業に携わる五十嵐さんは、その立場からの森の話をしてくれました。切っても売れない、儲からないから放置されて森が荒れていくというお話でした。管理されない森林がとも増えているという話は、昔から言われていました。実際に林業に関わっていらっしゃる方から木を一本倒すことの大変さをお聞きすると、やはり経済性で考えたらそれを続けることは難しいのだと実感できます。これでは、日本の森林全てを維持していくのは気が遠くなる話です。

会津産の木を使う話もありました。私は今、自宅を改装していて、床板や壁板に木材が必要です。その多くは値段などの関係から杉を使います。できれば私も地元産の木材があればぜひ使いたいと思うのですが、個人がどうやって入手できるのか調べてもなかなかわかりません。なのでネットで売っている品を買っことにするのですが、それが九州や四国、関西からの発送です。会津にこんなにも木があるのに、なぜそんなに遠くから運んでもらわなければいけないのかと、ちよつとおかしいと思いつつもそうするしかなかったのです。私のように、地元の木材を使いたいのに、できていないという人は、他にもまだまだいるかもしれません。商売として成り立つのはわかりませんが、欲しい人に届くようなシステムや、わかりやすい情報発信がないのだろうか、伺いながら思いま

がこの地に生きる本来の理なのだ。

今年も南も北も東も西も、都市も地方も富も貧も、関係なく「ステイホーム」が訪れたが、そうだった、こちらと雪国はそんなこと数万年も繰り返してきていて蓄積してきたものがあるはずなのだ。真っ白な時間から生まれてきたものがあるはずなのだ。

雪ですべてが止まる時間というのは、なにかと不便だけれど、競争社会では不利かもしれないけれども、どうやら悪いことばかりじゃないらしい。

今回のオーブンディスプレイのテーマは、「奥会津の森を活かす」。

森を活かすことを考えることは、会津の山文化（自然と暮らし）全体を見つめ直すことに繋がっていくし、その時に「雪」という存在はダイラポッチのように横たわり、私たちを見つめ返しているように思う。

「会津にとって、雪とは何か？」

今回、そんな質問（問い）を投げかけさせていただいたが、ご登壇されていたみなさんが軽々とそのお答えをされなかったことが、まさにこの問いの答えであるように感じられた。

雪とは何か、という答えはすぐに出るものでもないし、出すべきものでもない。まして言語化すべきかどうかわからない。

でも、心のどこかで考え続けていきたい問いでもある。そこにはなにか、これからの世界で生きていくための鍵があるように思うから。

弊社の漆器も、2年前から三島町の森のしごと舎（佐久間建設）さんのご協力により、樹齢数百年のトチノキを丸太買いさせていただき、

した。

只見町の中野さんは、植生や景観の観点から只見の森のお話をしてくださいました。雪崩が山肌を削ってできる雪食地形という独特な景観のことを初めて知りました。森林の約4割が植林であると聞いたことがあり、実際どこでも山を見回すと、明らかに植林地帯だなという場所を見ないことがないくらいです。だからこそ、只見に残る自然のブナ林は貴重なんだろうし、残して引き継いでいくのは大事なのだろうと思えました。

ディスプレイを聞いて全体的に、今私たちの手元にあるものを見直すことの重要さを感じました。新しく何かを作ることが発展と思われがちですが、もともとただでたただで今そこにあるものを使えばいいのだという意識の問題だと感じました。まさに森林のような、自然からいただいている財産です。経済性と合い入れないということが必ず言われますが、ただ意識を転換するだけのことです。それだけなのにどうして実際の生活に生かされないのか、ということを考えさせられるディスプレイでした。考えさせられるだけでなく、実践していかないと何も変わらないのだろうなということも感じたので、個人レベルでもやってみようと思います。この連続ディスプレイの中で、みなさんに連携が生まれていくことも期待しています。

1本の木の生命をきちんと使い切るものづくりをはじめた。木の伐採と製材、そして1年間の乾燥、漆器づくりのそのまた奥にある森の物語を漆器の購入者に伝えていき、山の生業と現代の暮らしを繋ぐことに取り組みはじめています。伝えていて面白いのは、山の仕事には「季節の循環」がくつきりと浮かび上がってくることで、それこそが魅力であるという実感。これからそれがどう進化していくか、自分でも楽しみが多い。

さて、今日は、会津で今シーズンはじめての大雪となった。

どうやら、今年は、みっともない冬、ではならしい。

とは言え、SNSで流れてくる写真を見る度に、山間部に住む方々に、本当にご苦労様ですと頭を下げたくなる。

モニタールレポート

# 民具整理から 見えてくる 奥会津のくらし



奥会津各地には豊富な  
民具資料が残されています。  
仙台市での  
映像アーカイブ活動に学びながら、  
民具から見えてくる  
奥会津の共通性や個性、  
活用のアイデアを探りました。

日時：2020年11月14日（土）14：00～16：00  
会場：交流・観光拠点施設「喰丸小」  
講師：山口 拓（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
松尾悠亮さん（昭和村からむし工芸博物館学芸員）  
佐藤正実さん（NPO法人20世紀アーカイブ仙台副理事長）  
モデレーター：小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

- 山口 拓**  
福島県立博物館学芸員。専門は民俗学。手仕事の技術と造形物、モノと人との関係に関心を持つ。ライフミュージアムネットワークでは、民具を使って奥会津の生活を伝えるためのプログラム開発を担当。
- 松尾悠亮**  
昭和村からむし工芸博物館学芸員。2019年に同館に地域おこし協力隊として着任。からむしや昭和村の歴史、奥会津の生活文化について学び、地域の交流の場づくりを行っている。
- 佐藤正実**  
NPO法人20世紀アーカイブ仙台副理事長。3.11オモイデアーカイブ代表。大正・昭和時代の仙台の映像・写真・音楽を保存・活用する活動を行う。震災後は、震災以前の写真をもとにした沿岸部ツアーなど、沿岸部の交流を進める企画を行っている。

## 事務局・塚本麻衣子

本日もお集まりいただきありがとうございます。ごさいます。ただいまよりライフミュージアムネットワーク連続オープンディスカッション「奥会津のまわり方」第4回を開催いたします。奥会津の5町村をトークのリレーで巡っています。第1回の三島町からスタートして、今日は昭和村で行わせていただきます。夏から始めて、秋になってきました。今日は銀杏がとてもいい感じ。トークのリレーとともに季節の移り変わりも一緒に追っている感じで、主催者としても楽しいです。

## 「民具整理から見えてくる 奥会津のくらし」

今回のテーマは「民具整理から見えてくる奥会津のくらし」です。奥会津各地に山の暮らし、川の暮らしに関わる道具があります。それをこれからどう使って、どう活かしているかを見たい。考えられたら今回の場を設定いたしました。

今日の講師の方3人からそれぞれお話しただいて、後半でみなさまも交えてディスカッションを行います。まずトップバッターが福島県立博物館の学芸員山口拓です。このライフミュージアムネットワーク事業に携わっていらっしゃって、民具をみんなで楽しく使っている場づくりについて考えています。そのことについてご報告いたします。お二方は昭和村からむし工芸博物館学芸員の松尾悠亮さんです。今日はからむし工芸博物館の活用、実践についてお話しいただきます。よろしくお話しします。もう一方は仙台からお越しいただきました



山口拓

NPO法人20世紀アーカイブ仙台副理事長の佐藤正実さんです。仙台の古い映像、写真を囲んでみなさんとお話しをすることからいろいろな記憶が紡ぎ出される。そうした活動をなさっていらっしゃると思います。よろしくお話しします。

## 地域の歴史を守り伝えていくために

### 山口拓

福島県立博物館で民俗分野の学芸員をしております山口拓と申します。よろしくお話しいたします。県立博物館の学芸員でライフミュージアムネットワーク事務局もしておりますので、まず私からこのテーマを設定した意味、これから考えていきたいことをお話しします。塚本から紹介があった通り、奥会津の5町村

を巡っておりますと民具といわれる生活のための道具、生活の中で使われていたけれど残念ながら今では使われなくなっている道具をたくさん見ることが出来ます。そして、そういったものを自治体、小さなミュージアムのみならずが地域の歴史を守り伝えていくために残し、残そうとしている活動がたくさんされておりまして。ただその先はなかなか難しい問題で、全国的にも集めた民具をどう活用していくか、どう残していくかが課題として出てきている現実がございます。最初から暗い話をご紹介しましたが、みなさん知っておりますでしょうか。

## 譲渡を前提にした展示

朝日新聞のデジタル版から引用しましたが、2018年に鳥取県北栄町にある町立の資料館、北栄未来伝承館が民具などの収蔵品が増えすぎて困ってしまったため、増えすぎた収蔵品の譲渡を前提にした展示を開催した、という記事です。そして展示を見た方で民具が欲しい方は応募する。当選した方にはその民具をさしあげるという形で、580点ほど展示されていた民具の8割近く、400数十点は引き取り手がつかって引き取られていきました。

鳥取県の小さな町の資料館の試みですが、全国から応募があり、展示を見るために訪れた人がいた。で、この事例は我々民具に関わるものの中で反響を呼びました。肯定的な意見と否定的な意見とありました。この試みが正しかったのかどうか、まだ検証しているところです。ここでは、これが正しかったのかどうかは一旦置いて、こうした事態が出てきているということ、をまずみなさんに知っていただきたい。

美術館に収蔵されている美術品が同じ扱いを受ける可能性は低いと思います。ある美術館がゴッホの絵を10枚持っている、3枚ぐらいは処分していいだろう、3枚ぐらいは収蔵スペースを取るために誰かにプレゼントしようなんということにはならない。でも、民具に対してはこういうことがあった。

## 価値をどう判断するのか

町の方々はこの試みに対してある程度理解を示したということです。ポイントは、みなさんがそういったものの価値をどう判断するのかというところにあると思います。金銭的な価値判断をつけるのが民具の場合はなかなか難しい。美術品だったらお値段がついて、美術館は購入します。しかし民具の場合はほとんどが使われていたものなので、寄贈という形でただでもらうパターンが多いですし、博物館もお金を払って買おうというマインドにはならない。テレビでいまだに大人気のなんでも鑑定する番組にこういったものを持って行っても、たぶん値段がつかない。そういった面から金銭的な価値があまりないと判断される。

## うちのじいちゃんが使っていた

もちろん民具に歴史的な価値がないと私は思っていないです。ただ、会津藩の書状が出てきましたという場合は、歴史的に価値のあるものだと思ってみなさん博物館に持ってくると思っています。ところが、うちのじいちゃんが使っていた田んぼを耕すための鍬に価値があるとは、なかなか思わないわけです。我々がどこかの

宅に行つてそういったものがあり、譲つてくださいと言つても、こんなものどこにでもあるでしょう、博物館に入れるようなものじゃないでしょうという反応が返ってくる。なかなか歴史的な価値が認識されにくい。

さらに、収蔵にあつたつての問題は、同じものというか同じに見えるものがたくさんあるということですね。民具もよく見るとそれぞれに違うところがたくさんあり、それぞれの道具の使われ方も違うのですが、ぱっと見は同じような形態で用途は一緒。鎌だったら田を耕す用途は一緒なので、多少違いがあつても1本あればいいとなりがちです。

### 情報によつてものを資料に

それから形が不定形かつ大きなものがある。文書のように決まつたフォーマットがある紙の物ではないので収蔵場所を取つてしまうのが博物館にとっては大きな問題になる。こうしたことが先ほどの鳥取県の事例のように資料の除籍、極端な言い方をすれば廃棄に対して抵抗感が少ないということに繋がつていくのだと思います。

特に民具の場合はそこにあるだけでは資料にならない。整理をしなければならぬ。整理というのはただ単に場所を決めて置くだけではない、それをどのように使つていたか、誰が使つていたか、あるいはそのものにまつわる家の思い出のように、情報によつてものを資料に変えないと価値が見出しづらい。ものを資料にしていくことによつて、ただの民具、そこにある道具を見せるだけでなく、道具の裏側にある世界、背景を見せていくことが可能になるわけだ。

す。

### 一体誰のために必要なのか

先ほどの新聞の記事に戻りますが、従来の企画展来場者は主に地元住民だが、この企画展に全国から人が訪れているというふうに書いてあるのです。新聞記事ですから新聞記者の意見なのだと思いますが、「従来の企画展来場者が主に地元住民」というのは良くないことなのでしょう。全国的に歴史とか地域の文化を観光に結び付けようという動きが非常に盛んですし、お役所が積極的に推進しております。博物館もそういう施設として期待され、求められる役割が大きくなってきています。私たち福島県立博物館もそういった動きと無関係ではいられないでしょう。ですが、地域の歴史や文化を知ることが一体誰のために必要なのかを考えると、そうした考え方も変わってくるのではないかと。

### 「これ、うちにあつたよ」、「おたくでも使つていたでしょ」

県立博物館では2019年の4月に、部門展示室の民俗を「雪国会津の暮らしと祈り」というテーマでリニューアルしました。ここ喰丸小に並んでいるような雪国の道具、三島町のサイノカミ、会津若松の彼岸獅子、郷土料理の模型、籠、ザルのようなものを展示しています。当館は県立なので、県内の一地域に特化するのには難しいのですが、会津の外から来た方が会津について知ることができるように、また会津の方が地元のことや自分の体験を話すことができるよ

うにと二兎を追つて考えてみました。特に後者に関しては、年配の団体さんが公民館活動などで展示見学に来られ、私が出て行つて解説をやるうとすると、だいたい私の話は聞いていただけません。みなさん、「これ、うちにあつたよ」、「おたくでも使つていたでしょ」みたいな話が始まり、もう私はいなくてもいいですよなという感じで勝手にどんどん話をしてくださる。私はそれを聞いて逆に勉強させてもらう感じがします。そういうふうには話を話れるコミュニケーションツールとしての価値が非常に高いのです。もちろん、使つていた方の主観的な話なので、博物館資料についての情報としては学芸員のように勉強してきた人間が客観的に判断することも必要ですが、とにかく、こういうものを見るといういろいろなコミュニケーションがみなさんの中で自発的に始まつていくという現場を、何度も目撃しています。ということは、こういう道具が地域の人たちを結び付ける道具になるのではないかと私は考えています。

一方で民具の整理を巡つては、最初にあげた事例のように、民具を置く場所がない、整理をする人がいない、そのためのお金がないという問題点がある。集めた民具も資料にならずに死蔵され、どこかに押し込められて忘れられていき、10年20年経つと担当者がいなくなり、もういらぬと廃棄されてしまう。活用する方法がないなら除籍、廃棄もやむなしという悪循環が現在生まれかけている。そういう例が潜在的にたくさんあるのだからと思つております。

### 体験を通じて身体でわかること

であれば、除籍するぐらいならむしろ壊れる

す。

まで地元で使いこんでみませんかという提案もありえると思つています。小学3年生の単元として昔の暮らしを学習する授業があります。県立博物館では、例えば、昔の羽釜に触らせたり、手で回す洗濯機、洗濯板に触らせて、実際に洗濯板で洗濯させたり、石臼で粉を挽かせてみたり、そんなこともやっています。体験を通じて身体でわかるいろいろなあります。もちろん歴史を伝える資料でもあり、文化財であったりもしますから、難しい面もあるとは思いますが。そこで、博物館では資料として集める道具と別に体験のための資料、使い込んでほろほろになつてしまつてもいいですよという約束をしていただけてくる資料も徐々に増やしております。

ただこういう授業で使う民具はなかなか地域の特徴が出しづらくて、一般的なイメージの道具になりがちです。特に県立博物館の場合、いろいろなところから子どもたちがやってきますので、なかなか一つの地域に絞る、複数の地域に対応していくことが難しいという課題はあります。

### 「みんなで比べてみよう 奥会津の生活」

こういう実情がある中で他に何かやれることがないか。今このライフミュージアムネットワークで「みんなで比べてみよう奥会津の生活」という民具のプロジェクトをやろうとしております。これは奥会津のいろいろなミュージアムの特徴を活かして資料を選択しながら、地域の歴史がわかるひとまとまりのキットを作つていくというものです。民具の知識を得るため



はなく、それを通じてコミュニケーションを取つて、何かの形で楽しい場を作ることができるようなものになってほしい。民具をネタにみんなを話をして、それを記録して地域の歴史をみる。それが面白いというマインドをみなさんに植え付けていきたい。

今日はこの喰丸小学校を会場にさせていただきましたが、昭和村の教育委員会に「協力をいただき、試作版のキットを作ってもらいました。この会場の奥の部屋でやっている昭和村の民具の展示を外に持って行き、簡単に展示してみたらどんなものを選ぶかという観点でセレクトしてもらいました。子どもたちにお渡ししてもいいですし、昭和村の民具を隣の金山町に行つて金山町の人に見てもらおう、柳津町に行つて柳津町の方に見てもらおうこともできる。そうすると、柳津と昭和の違い、距離は離れているけど同じ道具を使っている、そういった気づきがあるのではないかと。そういうツールとして使えるのではないかと思っております。

ライフミュージアムネットワークの事業を通じて民具の活用を図っていきたくと考えているのですが、まだまだ民具の活用の可能性は残されていると思います。これから昭和村の松尾さん、仙台から来ていただいた佐藤さんいろいろな事例を教えていただきながらフロアのみさんと一緒にどういふことができるのか、民具、地域の歴史や文化を使って何かをしていくというのはどういふことなのかを考えていければいいなと思つています。私の話は以上です。ありがとうございました。

### 塚本

山口さんありがとうございました。民具のコミュニケーションツールとしての可能性についてお話しいただきました。この後、具体的にどんなことができるのかをお話していければと思つています。続きまして、からむし工芸博物館の松尾さんに昭和村の事例をお話しいただきたいと思つています。よろしくお願ひします。

### 松尾悠亮

昭和村からむし工芸博物館の松尾と申します。よろしくお願ひします。みなさん、からむしをこ存知ですか。からむしという植物の茎から繊維を取つて、それを新潟に売る。昭和村では長い間、その栽培をやっています。道の駅にからむし工芸博物館があります。この博物館で国の文化財に指定されている会津のからむし生産用具及びその製品が収蔵されております。

本日の内容ですが、収蔵されているからむしの民具をどう活用していくかということで、昭和村が行つて二つの取り組みを紹介させていただきます。最初からむし工芸博物館が行つている主に村外向けの布つくり実演を紹介いたします。続いて二つ目は地機講習会という村内向けに行つている機械の勉強会を紹介いたします。

### 布つくり実演

布つくり実演、今年度はやっていないのですが、からむし工芸博物館に来ていただいた方は博物館ロビーでやられている実演を「ご覧になりましたか。はい、ありがとうございます。毎年、5月から11月にかけてからむし工芸博物館のロビーで



のようになっていきます。参考に持ってきたのですが、これは私が作ったものです。最終的にこのよりかけを通して糸を完成させます。からむし工芸博物館のロビーでは、今年度はやっていないのですが、普段は畳を敷いて、村の方と昭和村の織姫さんが並んで糸づくり、布づくりの工程を見ただけのようになっています。博物館に入って正面のロビーなので、お客さんにすぐ見ていただけるようになっています。

### 博物館のお客さまと昭和村の人の交流の場になって

私の主観で布づくり実演のいいところをお話しします。博物館の展示の中でも糸づくりや、その道具は展示されています。私がやり方を説明することもありますが、ただ、それでは伝わりにくいことがあるので、実際に作っているところをお客さんに見ていただく。博物館に展示されている民具が実際に使われているところをみなさんに見ていただく。もう一つ、ここは強調したいのですが、博物館の布づくり実演の場が博物館のお客さまと昭和村の人の交流の場になっていることです。

お客さんもういろいろな方がいらっしゃるの、いろいろな関心を持った方からの質問が出ますね。で、それから、昭和村の織姫さんと昭和村に暮らしてきた方からいろいろな角度の答えも返ってきます。そうした実演の中で糸づく



松尾悠亮さん

開催されています。今年度は残念ながら新型コロナウイルスの対策のために中止となっております。この布づくり実演は後で紹介する地機講習会の受講生の方と昭和村の織姫さんが二人並んで糸づくりや布づくりをみなさんに見ていただけの形になっています。

糸績みという織機を繋げていく作業、よりかけと言って糸を完成させる作業。そして地機織りの一連の流れをお客さんに見ていただけるものだけ形になっています。梅漬けのような昭和村の食べ物文化を教えるということがあります。梅漬け、ご存知の方いらっしゃいますか。私は福岡県出身ですが、福岡では梅漬けて食べないです。梅干しです。こっちに来て梅漬けにびっくりした。その梅漬けもこの地機実演に来ている村の方からいただいて、すごく美味しいのを知りました。地機実演をやっていたら昭と村の方でお客さんに梅漬けを勧められている方もいて、村外から来た方に昭和村や会津のことを知ってもらえるいい機会になっていると私は思っています。

### 地機講習会

続いて本日二つ目の話ですが、地機講習会についてもお話しさせていただきます。地機というのは昭和村で伝統的に使われていた織機のことです。昔は昭和村の女性は中学生ぐらいになったら家で織機を習って代々伝えてきたようです。昔の花嫁修業などで教わっていたみたいですね。その昭和村の持っていた地機織りの技術も後世に残すのが難しくなっている状況があります。そういった状況もあり昭和村では地機講習会でその技術を残そうと勉強会を開いています。

説明が前後してしまうのですが、昭和村で使われている織機には2種類あります。地機と高機。地機が昭和村で伝統的に使われてきた。こういうふうになっているのかと言いますと、これは昨年度の地機講習会の作業風景ですが、一人じゃ難しいので受講生の方みんなで作業す



ることもありますし、織姫さんがベテラン受講生の方から織機のやり方を教えていただいています。

私から見ただこの地機講習会のいいところは、まず和気あいあいとした雰囲気。楽しいお茶の時間を通して、地機のことだけではなく、昭和村のいろいろなことを教える場になっていると思います。

### サツパカマ

会津から来られているみなさん。この写真は何かわかりますか。はい、サツパカマ。ありが

とうございます。ユッコギと言ったりサツパカマと言ったり、いろいろな名前があります。昭和村ではユッコギと言っています。麻でできている作業着ですが、昔はこれを着て農作業を行っていました。女性の作業着ズボンに当たるのですが、昭和村の野尻地区ではカルサンとも言っているそうです。福島県立博物館の元学芸員の方の論文を読んだ時にカルサンという言葉が出ていて、本当かなと思った。で、地機講習会に野尻地区から来られている方もいらっしゃるので本当にユッコギのことをカルサンと言うのですかと聞いたら、カルサンと言うよと教えてくれた。こうした昭和村のことに

ろいろ聞ける勉強の場にもなっています。

### お茶の時間も取り入れて

最後になりますが、民具の活用という、まずワークショップや実演を通して昔の使い方をみなさんに知ってもらおうといったやり方があると思いますが、それも教える場だけではあまり面白くないと思います。工夫できるのはやはりワークショップ、実演には地元の人を中心に織姫さんみたいな、いろいろな人をお願いしてみるのがいいと思います。そして、ワークショップ、実演にお茶の時間も取り入れてみる。世間話をしながらいろいろなことを教えていただく機会になると思っています。博物館でやるイベント、実演はどうしても勉強しいイメージがついてしまう。そうではあるけれど、学習に留まらず地域のひとと外部の人、いろいろな人を巻き込みながら、その地域の特徴を広く知ってもらう場としてのワークショップ、実演のあり方を考えてもいいのではないかと、学習の場だけではなく、人と人を繋ぐ博物館の可能性を考えています。

ありがとうございます。

### 塚本

ありがとうございます。いざ聞き取りをしますというとなさん硬くなって話したいだ

けないけれど、休憩します、終わりましたという途端にいろいろなお話が出てくる。お茶飲みの時間です「くいいなと思います。博物館がお茶飲みに遊びに来てくれるような場所になるといいですね。続きましてNPO法人20世紀アーカイブ仙台の佐藤さんから仙台の事例についてお話いただきます。よろしくお願います。

## 20世紀アーカイブ仙台

佐藤正実

みなさんこんにちは。「紹介いただきましたNPO法人20世紀アーカイブ仙台の佐藤と申します。今日はどうぞよろしくお願いたします。「風の時」編集部代表をやっており、それが生業で、出版、印刷物の製作をやっています。NPO20世紀アーカイブ仙台は、2009年ですから10年ちょっと前に作ったNPO法人です。三つの会社・団体で映像、BGM、古い写真、古い映像をアーカイブすることを目的に作ったNPO法人です。また、「3・11オモイデアーカイブ」は、東日本大震災直後に市民の方たちが記録したものを収集保存して残していこうという活動をしている市民団体です。

## 市民の方たちと一緒に市民の記憶をアーカイブする

今日は民具の活用と記録の仕方というお話ですが、私は民具を扱っているわけではありませんが、写真とか8ミリ映像を使っているように市民の方たちと一緒に市民の記憶をアーカイブするかを大きなテーマとして取り組んでいます。「参考になるかわからず不安ですが、今やっ



ていることについて大きく二つお話しします。

最初にこんな写真からご覧いただけます。私は印刷物の製作をやっていますが、仙台に青麻神社という神社がありまして、その仕事をやらせてもらっています。毎年カレンダーの製作をしています。2008年のカレンダー製作時、青麻神社の宮司さんから面白い資料を手に入れたのでそれを元にカレンダーを作ってくださいと言われました。その資料がこれです。明治5年に発行された「教草」です。松尾さんから今日午前中に現地でレクチャーを受けてきました。私はそれまでからむしということに全然知識がなかったのですが、とりあえず読み込まないと何も作れないということで一通り読んで、その年に昭和村の役場に電話をして、からむしの製造についてわかる資料を送ってください



佐藤正実さん

い、できれば写真も送ってくださいとお願いし、からむしの茎と葉っぱの写真、出来上がったものを送っていただきました。製造方法は明治5年の「教草」に描かれた絵ともちろん丸きり同じではないかもしれませんが、現在も同じように使われているのだなということ。2008年に見ていた覚えがあります。今日はその昭和村に来ていろいろとお話をさせていただけるということでありがたいと思っています。

## 「経験の同期」と「未来へのプレゼン」

さて、今日はアーカイブということでお話しさせていただきます。そもそもアーカイブってなんだということですが、一般的には、公文

書、保存記録、記録保管場所という意味合いを持たれることが多いです。2009年NPO法人20世紀アーカイブ仙台を立ち上げたという話をしましたが、その当時はアーカイブってどんな意味ですかと良く聞かれました。ただ東日本大震災発災後はよくアーカイブということが聞かれたし、報道にも使われたので、その辺りから市民権を得た感じはします。私的に思うアーカイブは「経験の同期」と「未来へのプレゼン」だと解釈しており、これは後ほど具体的に説明したいと思います。

## 「ふじ」

今日は事例を二つお話しします。一つは「どこコレ？」というイベントです。せんだいメディ

アテックと20世紀アーカイブ仙台の共同事業としてやっているものです。どんなことをやっているかという、私たち20世紀アーカイブ仙台は8ミリ映像、写真、それから音源の収集、保存、編集、活用などを行っています。写真を撮っていた方が残念ながらお亡くなりになってしまいい、そのご家族から、たくさん写真があるけれど、捨てるのももったいないので提供しますという連絡が来てお伺いすると段ボール三つぐらいの写真があつて、そこにはフィルムや紙焼きが入っていて、ものすごいボリュームになる。それをスキャンしてデータにしていくのですが、撮った場所がちゃんと記録されている場合は問題ないですけど、撮った場所がわからない、日付がわからないとなってしまうと、せっかくの写真もまったく資料的価値をなさなくなってしまう。何に使っていいかわからなくなってしまう。それではせっかくの写真も活きないというところで、せんだいメディアアテックさんと一緒に、私たちが見てもわからない写真を来場者の知識と経験で推理してもらって場所を特定していこうというイベントを2013年からスタートさせました。





がわからなくなってしまう。それを「どこコレ？」のイベントで、みなさんに情報公開すると、仙都会館ビルじゃないかという方が、「仙台の新しい建築」という冊子に、「映画は大映」と書いているものがあつたので、これじゃないのかとコピーを持ってきてくれる。仙都会館だとすれば昭和37、38年頃、私が幼稚園の時、大映劇場で映画を見ました。映画に興味はなかったけど、おばあちゃんに連れられて行った。カステラやモナカアイスを食べた記憶がありますとか、場所の特定と関係ないような記憶も含め、どんどん文字化されて写真に貼られていきます。

いろいろ調べていくと駅前のメインストリートである「青葉通」、戦後復興道路なのですが、その場所じゃないかということになり、現地に行ってみると、こんな感じになるわけです。並べてみると左側の写真がわからなかった写真、右側が同じ場所と思われる写真です。これを並べてみるとちよつとした発見がありました。左側の建物は「仙都会館」じゃないかと書かれた付箋がありまして。ここに「仙都会館ビルディング」という文字がある。それから櫛がずらりと並んで、手前の枝ぶりを見てもらってもいいですか、縮小拡大しただけの同じ木の枝ぶりが見えてくると思います。

### 使い道のある写真に生まれ変わって

というふうに、いろいろな情報を集めていくと、この写真は昭和30年代初め頃の青葉通り、奥が仙台駅というふうに写真が撮影された場所と年代が特定されていきます。となるとこの写真は使い勝手がいいもの、使い道のある写真に



生まれ変わっていきます。こういって「どこコレ？」というイベントで写真を活用することで、当時を知らない世代にも、風景に親和性、馴染みが出てきます。同じ場所で定点撮影することで場所が不明だった写真の特定と写真に対する関心の高さが生まれてきます。

### 過去と今の自分たちがどこかで断絶している

で、次に「どこコレ？」を見たある学生から、こんなことできませんかと企画を持ち込まれた事例をご紹介します。女子大生4人、ある大学の学生たちです。彼女たちは仙台生まれ仙台育ちですが、自分たちがあまり仙台に愛着が湧かないのはなぜだろうと考えたらしいんです。そ

うしたら、過去と今の自分たちがどこかで断絶しているからじゃないか、繋がったらもしかして愛着が湧くのではないかと。

### 写真は人と記憶に「コミット」するためのツール

彼女たちが考えた企画はどんなのかというと、古い写真を何枚か用意して、その写真の場所だと思ふところの写真を撮って帰ってくるというゲームを考えた。佐藤さんその審査員をしてくださいと言われて、わかりました、やりましょうということになった。

例えば、仙台に「サンモール一番町」というアーケード街があります。ここが昭和30年代の初め、どんな風景だったのかというと、こんな風景です。真ん中を車が走っています。ここは今アーケードがかかっている車が通れなくなり、左側に「ひらつか」と見えますが、これは地元で有名なパン屋さんだった。たぶん50歳代以上の人が見れば、ああ、あそこだね、と思うはずですが、20代ではこれを見ても、なかなかここにはたどり着かない。彼女たちは、自分たちで地図を作り、参加者の学生たちに渡して、同じ場所だと思ふところを写真に撮ってきてもらったんです。古いお店に行つてこの写真を見せて、ここはどこですかって聞いてみるといいよ、とヒントをひとつあげました。先ほど話にありましたけど、写真は人と記憶に「コミット」するためのツールだと私は思っています。場所の特定に加えて、なによりも会話の糸口が昭和時代の写真で生まれる、できると思つたんです。

### 「ふたつの郷(さと)」

楽なんだと思つたらいいです。今、私はやっぱりそうなのだなと思つたのですが、「個人的な記録ほど地域性に関係なく経験が共有されやすい」ということです。これは仙台で撮つた写真なのに、今ここでもそうでした。似たような思い出を持つているし、語る事ができるというのが面白いですね。

ちなみにさっき出てきたアルマイトの弁当箱、梅干を真ん中に入れて、そっだけどんだん酸化しちゃつて穴が空いたつていう話もよく聞く話ですね。

この写真は荒浜独特の漁の仕方、みんなを船をあげているところです。引つ張つて揚げています。なぜ揚げているかというと荒浜は半農半漁の町なのですが、ただ荒浜には港がない。砂浜から船を出そうとすると、波打ち際だと波



もう一つ事例を紹介します。「ふたつの郷(さと)」というもの。これは震災後にスタートした事業です。仙台市博物館、河北新報社から依頼を受けて、仙台市の沿岸部の仮設住宅を回つて話を聞き記録するヒアリングをしました。ヒアリングと言っても、ただ話を伺うのではなく、写真、または今見てもらっている蚊帳、古い家庭で使われる道具、民具を「ご覧いただいて、そこで思い出したことをどんどん話してください」というもので、毎回ライターさん3人ぐらいについていただき、出た言葉を記録していきました。2012年の6月から2013年の11月の1年半ぐらいに22回やりまして、それを最終的に1冊の本としてまとめました。

ちなみに「ふたつの郷」の意味ですが、仙台

があつてなかなか沖に出られないわけです。すると、波を分けていく船の形が必要になってきます。また、漁が終わつて砂浜に戻ってきた時は、今度は船に海水がついて、砂浜に揚げようと思つてもなかなか揚がらない。そのために、魚の脂を塗つた木を船底に置いて人力で引き揚げるわけです。

引き揚げる時には近所の子どもたちも一緒に手伝う。手伝うとバケツいっぱい魚をもらつて帰る。そういうことが昭和30年代後半までずっと行われていたことを表す写真です。

### 若い学生たちをどうやって関わらせるか

そういったものを「ふたつの郷」にまとめてみました。この「ふたつの郷」を作る時に一番意識したのは、その町の人たちの歴史は、町の人たちだけで作つてしまうと自分たちの町の良さがなかなかわかりにくい、伝わりにくいので、いかに他所の人たちを入れ込むかを意識しました。特に若い学生たちをどうやって関わらせるかというところが、実はこの本を作る時の一番のポイントでした。これが、先ほどご案内した写真をもとにみなさんがお話してくれたことを「船あがねえんだもの」というタイトルでまとめたものです。そして、船の出し入れは命がけとか、聞いたことをまとめてみました。これが数ページにわたつていくのですが、ここに学生たちをどう関わらせるかです。

### 地元の人たちに解説をしてもらう

昨日、斎藤清美術館に連れて行っていただき



たぶん、みなさんこういう写真を見たらいろいろなことが想起されるのではないのでしょうか。これは昭和32年の仙台市荒浜にある小学校の写真です。まずは右下にだるまストープがあります。それから二人一組でテーブルに座つて、椅子に座っているのがわかりますし、丸刈りの男の子たち、ワカメちゃんのような髪型の女の子たち。

この写真をご覧いただくとその地域の人たちからたくさん話が出てきます。先ほどのような20人、30人ぐらいの方々がそれぞれ思い出したことをどんどん喋つていき、その記録を取っていくというやりかたでした。これは仙台の写真ですけど、この写真で私も思い出したつていう方いらっしゃいませんか。いらっしゃいますね。どんなことを思い出されましたか。

### 参加者A

だるまストープの周りでアルマイトのお弁当を温めて食べました。私は、生まれが31年なので、給食はなくて、唯一脱脂粉乳、ミルクをいただきました。

### 佐藤

そういう話が聞きたかったです。ありがとうございます。

なるほど、そうですね。アルマイトの弁当箱。おそらく今の時代には知っている人も少ないかもしれないですね。脱脂粉乳もでしょうか。ちなみに、だるまストープはどうやって火を点けたか覚えていらっしゃいますか。

### 参加者B

ストープ当番がいて、付木として杉の枯れ葉を集めて、薪を一束持ってきて火を点けて、それでコークス、石炭に火を点ける。後片付けもした。もう一つ思いつくのは、あの二人かけの机は試験の時に隣の人の答案がよく見える。

### 杉っ葉でストープの火を点けて

### 佐藤

なるほど。ありがとうございます。実は、まったく同じ記録が仙台の荒浜という沿岸部の町にもあつて、今おっしゃつた通り杉の葉っぱ、杉っ葉でストープの火を点けていたそうです。脂分が多いのですぐに火が点くらしいですね。で、この写真を撮つた先生は、以前は仙台市の町中の学校に赴任していたそうで、この荒浜に行った時、杉っ葉で火を点けるとすぐに燃えて何と

ました。地域おこし協力隊の大学生が各家に残る家宝をまとめた展示「やないづの家宝展」をやっています。ご覧になった方も多いいと思います。まさにあの手法と同じやり方で学生に

## 新発見

関わってもらいました。実はこの冊子を作った時に、例えば方言や当時の生活を伝える文章で、

「やないづの家宝展」で昨日話を聞いてなるほどと思ったんですけど、蚊を燻す「蚊いぶし」や、「イモ洗い棒」などは地元の方にとってみれば当たり前の生活道具なのかもしれませんけど、私は聞いたことはありませんでした。それを大学生が見て関心を持ち、それに対して、地元の人たちは使い方を伝えた。それが学生たちにとっては、なるほど、こうやって使うのかという新発見があった。それを展示した。そうしたら、いつも使っている自分の生活道具が展示されて驚かれています。という話を伺ったわけです。それが学生にとっても地元にとっても新発見だったところが非常に面白いと思うんです。

また、船を揚げるため硬い栗の木に脂を塗って船底に敷いて引っ張るというお話を先ほどしましたが、この木を「パンギ」と言い、船を揚げることを「パンギアゲ」と言います。これらを写真と説明を入れることで若い世代もわかる。時代が数十年経った時にもパンギアゲ、エグリガッコってなんだということも伝わるし、他の町の方にも意味は伝わるのではないでしょう。地元の人たちからじっくりとお話を聞くことで、そのまちの文化、暮らし、震災前の営みがわかってきた。また若い大学生たちが入ることによって、それをさらに説明を加える必要があるんだということがわかってくる。地元の方とよその人が交流するということは、そのまちの良さをクローズアップさせる効果がある

## 「内者」「お年寄り」「お利口さん」

まとめになります。みなさんもよくご存じのとおり震災後、町の復興に大事な人たちは「よそ者、若者、バカ者」と言われました。それはたぶん既成概念に捉われない新しいものを作り出す人々という意味だと思のですが、逆に、それらを反対語で考えますと「内者」「お年寄り」「お利口さん」と呼べるのかもしれない。その人たちは、経験と知識を充分に持っている人と考えられるのではないかと思うのです。その人たちが二つ組み合わせることこそ町の新発見ができるのではないかと思っています。冒頭で、私的なアーカイブとしては「経験の同

期」と「未来へのプレゼン」ですと言いました。に説明しますと、たぶん事実の記録だけではなく、記憶や経験も含めてこそ、初めて人に伝わるということなんです。先ほどのアルマイトも脱脂粉乳もそうだと思うのですが、事実や正しい歴史だけではなく俗史も含める。俗史を含めるということは、生活感が必要になってきますので、イメージが共有されやすくなります。そうすると市民、町民の関わりも増えてくるはずなんです。このようにして、記録に対して市井の関わり代

## 使いつけること

が生まれるのではないのでしょうか。

「未来へのプレゼン」についてですが、アーカイブという記録し保存しただけで、終わるのですが、記録するだけでは、絶対死蔵します。死蔵させないためには、仕舞い込まないで、活用しないといけないと思っています。見て使って、伝え方を考えて、それを実践する。アーカイブ資料を10年後、50年後に伝えるためには、使いつけることで、新しく見つけた使い方もどんどん試して更新していくことが大切だと思います。それが、「未来へのプレゼン」の意味です。

## ぜひ「活用」を付け加えて

よく、「収集」、「保存」、「記録」、「編集」ということでアーカイブが語られることが多いですけど、そこにぜひ「活用」を付け加えていた

です。ね、民具、収蔵品をお譲りするって。

### 山口

業界としては結構ニュースになりました。やっぱり本音ではそう思っているところは多いだろうなと、こういう仕事をしている実感としてはあります。

### 小林

いっぱいあるし、嵩張るからもう、という見方もできる一方で、民具を使うとこういうこともできますよという事例も山口さんからお話しいただき、その一つの可能性としてみなさんに休憩時間に見ていただきましたが、キットになりえる昭和村の民具たちをお持ちいただいた。どこから持ってきたのですか。

### 山口

この会場のすぐ奥の教室です。展示されているものの中から面白そうなものをピックアップして出させていただきました。出してくれた本人もここにいたのでフロアに振ってもいいですか。民具のピックアップと一緒にやってくれたというか、ほぼやっていただいた昭和村の押部さん、どんな感じで選びましたか。

### 参加者・押部僚太

昭和村の松尾さんと同じく地域おこし協力隊で、私は村の教育委員会に所属して、文化財調査業務ということで民俗資料関係の記録を取って整理することを業務として関わっています。教育委員会ではからむし工芸博物館とはまた別に民具を村の方から寄贈していただき、それを整理しています。収蔵、整理のついたもの

だきたい。編集を終えた資料はせつせと表に出し、有償、無償問わず、仕舞い込まずに誰もが使えるように活用する。いつか再び、その資料にスポットが当たる日が来ます。その使い方を、今から未来の人に向かってプレゼンしてみたいかがでしょうか？

最後になります。「経験の同期」と「未来へのプレゼン」で何が起きるかという、希望も含めてですが、たぶん他地域との交流、そして世代間の交流が生まれます。それをやるためのアーカイブ、記録の取り方が大事になると思っています。民具のことからは離れてしまったかもしれませんが、20世紀アーカイブ仙台、風の時編集部、オモイデアーカイブで考えているアーカイブの取り方についてお話しさせていただきますました。ありがとうございました。

### 塚本

佐藤さんありがとうございます。1枚の写真真から広がって、いろいろな人が関わって巻き込まれていく。すくくヒントをいただきました。ありがとうございます。後半はモデレーターに福島県立博物館の小林めぐみが入り、講師のみなさまとディスカッションしていきます。会場のみなさまからもお話を聞きできればと思います。

.....

### 小林めぐみ

ここから進行させていただきます福島県立博物館小林です。今回、民具を切り口に、みなさんと話の場を作ったきっかけをまず山口さんから問題提起してもらいました。なかなか衝撃的

1600点ほどです。ここに並べた民具は喰丸小に場所を借りて、展示しています。そこからピックアップして並べました。山口さんのお話の中であった、ライフミュージアムネットワーク事業の民具キットプログラムで、あいつた形で代表的なものを選んで、ピックアップして、いろいろなどころでの学習に役立てる、そういう取り組みで今県立博物館さんと申し合わせしながら民具キットを作っているというところになっています。

### 山口

急に振ってしまっただけです。昭和村では、この喰丸小学校で押部さんが中心になって展示もしているし、今日もたくさんのお客様が訪れて見て行ってくれます。そういう場になっているのとても素晴らしいことだと思いますね。

その一方で佐藤さんの活動のように写真を撮りに外に出て行くのも一つの資料の活かし方場所を作ること同時に、その場所から飛び出して外に行くことで活用幅が広がっていいかなと。

## 集めることが目的ではなく

### 小林

はい。これからどうご期待です。みなさんの目の前にあるものから組み合わせて、場合によっては外に持ち出して、みなさんの場の中に持って行ってお話を聞いたり、会話が生まれたら、という活動をやってみたいということですよ。問題提起のように民具をこう使えるのではないかと山口さんから話をさせていただ



た。松尾さんからも收藏されている民具を使ってやっていたらいいことをご紹介いただきました。

松尾さんが、地元の人と昭和村を訪れた方との交流の場所ということを意識して、そこに価値を見出しているのが印象に残りました。佐藤さんがおっしゃったアーカイブと同じで、收藏が目的の事業ももちろんありますが、集めることの後に集めたものをどう使うか。集めることが目的ではなく、集めることで何をするか。集めたものがどう活かされるかという課題がある。工芸博物館の実演の場、ワークショップの場を見て、交流の役に立つものになりえると実感します。

佐藤さんのお話を聞きまして、ヒントをもらったこと、聞いてみたいと思ったことはありましたか。ちょっと考えておいてください。またあとで教えてください。

松尾さんからそんな視点をいただいて、佐藤さんから仙台でやってこられたお話をお聞きしたのですが、ああそうだなと思わせていただくことが多かった。写真の扱い方にしてもこれどこだろうという質問の投げかけ方が、答えを引き出すのにすごくフィットする。会話を生み出すところに入っていく質問の設定の仕方だと思えます。そういう枠組みの作り方で会話はどんどん出てくる。やっぱりアーカイブされてしまったものをどう活用していくかという発想の大事なところでもあると思っています。

写真、映像を使ってお話を引き出すことをされている佐藤さんから見ると「やないづの家宝展」もご紹介くださいましたが、こうやって二人から民具の活用を模索している会津の状況をご覧になって、何かアドバイス、感想がございましたら教えてください。

写真、映像を使ってお話を引き出すことをされている佐藤さんから見ると「やないづの家宝展」もご紹介くださいましたが、こうやって二人から民具の活用を模索している会津の状況をご覧になって、何かアドバイス、感想がございましたら教えてください。

佐藤さんのお話の中にもあったのですが、地元の人たちには当たり前ものだから別に言葉にする必要もない。そのまま残る、なんていうのかな、記憶とか、経験で残っていく。そこに外の人たちが入ることによって説明をしなければいけなくなる。説明をすることで言葉になっ

て残っていく。まさにそうだなと思った。残していくには、絶対に外部の眼差しが必要だと私も強く感じました。

小林  
ありがとうございます。残していくためにも活用方法が見えてくるって大事だと思う。山口さんも佐藤さんも使わないと死蔵になっていくという話をしてくださいました。私たち学芸員が、これはとても大事なものの、歴史的価値がある、だから残していきたいと思っても、収蔵庫に一体いくらかけるつもりだ、という話になる。福島県立博物館も収蔵庫は満杯。どこの館も収蔵庫問題が発生している。残すべきだと思っても残すだけはいかんともしがたくなってきたいて、こういう活用の仕方もあるというのが見えて、初めて残す意義がプラスされていくと思えます。その辺り、民俗の学芸員として山口さんからも一言。資料保全とはさまざま揺れ動く学芸員としての言葉を。

たら教えていただけますか。

佐藤

ありがとうございます。アドバイスなんておこがましいことはできないですが、山口さんと松尾さんのお話は同じことを考えていらつしやるんだなと思っていました。山口さんは民具が体験を語るコミュニケーションツールだとおっしゃっていましたし、松尾さんも来場者と昭和村の人々の交流の場、そのツールになったと。小林さんは、集めることが目的じゃなく、それは手段であって、交流が大切だということでした。先ほど金子さんが来場していたというので、イントネーションがちょっとわからないので、ど、「蚊いぶし」の正しい発音の仕方を教えてください。

参加者：金子勝之

「い」は省略して、かぶし。蚊取り線香の初期のもの。蚊取り線香は蚊を殺すけど、「かぶし」は煙で蚊を寄せ付けない。このディスプレイの2回目の時に発表させていただいたのですが、要はすべて土から生まれて土にかえるものを具体的に見て欲しいかった。そういうのを断ち切っているのは人間だと知って欲しいかった。

小林

そうですね。これは何かわからないというところから、どう使っているのか、まつわる思ひ出、そういうことが組み合わさることだぶんのもの見え方も変わってきます。場合によっては展示の仕方が変わってくる。

みなさん奥の展示はご覧になりましたか。私は、久しぶりにここにきて見たんですけど、鞍



を展示していたあの馬に衝撃を受けました。鞍の展示のために木の皮で作られた馬。思い切ったことをやったなと思った。

会場からも声を拾っていきたいと思います。松尾さんからも取り上げていただきました柳津町の齋藤清美術館、みなさんのイメージは齋藤清さんの作品を展示している美術館だと思いが、ここ数年「やないづの家宝展」という取り組みをしています。地域のみなさんのところにおじゃまして、佐藤さんにご紹介いただいたように大学生たちがその家の大切なものをお聞きして、選び、展示している。その意図、やってみての町のみなさんの反応を齋藤清美術館の伊藤たまきさんが来ているので紹介させていただきます。

参加者：伊藤たまき

佐藤さん、昨日はどうもありがとうございます。齋藤清美術館は齋藤清の作品を専門としている美術館です。地域おこし協力隊が柳津町の活性化のために来ているのですが、その中の二人、協力隊の若い人たちが美術館を拠点に、アートの観点から柳津の文化、町の魅力を見出し、活性化に繋げる活動をしています。その一環として「やないづの家宝展」をやっています。事業としては新しく、去年の春から始まったものです。地域おこし協力隊が柳津の町民の方から話を聞いて、大切にしているもの、柳津での生活の様子、生活の傍らにある道具について聞き、特に彼らが影響を受けた、面白いと思ったものをピックアップして展示しています。で、なぜ齋藤清の美術館がということになるのですけど、考えてみると齋藤清もこの会津生まれではあるけれど、実は会津に暮らしたことはほとんどなく、外側から会津を見つめていた。会津の風景、そこに生きていく会津人を外側から見つめていた人だった。齋藤清のそういう眼差しと今の地域おこし協力隊の活動を見ている。傍から地域おこし協力隊の活動を見ていてそう思いました。これは二つ並べてみたら面白いなと私は興味を持った。実際にやっているのは地域おこし協力隊の二人です。やってみて、異郷人の彼らだからこそ、面白い、残したいと思うのです。

インタビュースせていただいた町民の一人である金子勝之さんが隣にいらつしやいますが、地域おこし協力隊の二人も私も驚く、こういう生活があるのか、こういう道具があるのか、かっこいい、素敵だっと思う。金子勝之さんも、他の町民も、私たちのそういう反応を見て何を驚かしているのか、面白いです。

山口

残す意義ですか。本当にそれは難しい。最初にも言った通り、ものとして残っているからには全部残したいという欲求がある一方、そんなものを残してどうするのという意見もわかる。その点、折り合いをつけるのが難しい。

ただ、民具の場合の壊れるという状態は焼き物が壊れてしまうのとはちょっと違って、使用や経年劣化によって徐々に摩耗して、どこかが外れてしまっても、元の形に戻せます。使えない状態になってもそれなりに価値は担保される。であれば、もうある程度のものに関してはガンガン使ってしまう。使って活用に結び付けて、仮にそこで使えない状況になった時には、奥に入って死蔵されるのかもしれませんが、別のところで休んでいただくのもありかなと思います。使うことがなかなか博物館ではしづらいですけれど。

「本音では、どこかわからなければいい」

ちょっと一つだけ。昨日から、私は佐藤さんと一足先に柳津、金山、三島を回って昭和に来ているのですが、移動の間に「どコレ？」の話もみなさんより先にお聞きしていました。その時、「本音では、どこかわからなければいい」「わからないまま付箋を増やし続けていきたい」とおっしゃっていた。それってすごく面白い。民具を見てもらう時にも、これ何だろうとなったりやっぱり答えを出しちゃう。答えがわかるまでのプロセス、わからないプロセスをどうしていくかを考えると、ものの活用がもっと見えてくるのかなとヒントをいただきました。





小林

確かにその過程、みなさんがこれは何だろうと考えている時間がとても大事です。

ここでもう一度会場に戻りたいと思います。文化財行政のプロフェッショナルである方が会場にいらっしやいますので、一言ご感想いただけますか。

参加者・本間宏

白河の文化財センター白河館まほろんに勤務している本間と申します。よろしくお願ひします。文化財の話をしちゃうと、学芸員は癌という話と重なってきちゃうので、あまりその話をしたくないですね。県立博物館のエントランスホールで前に「はじまりの「ごはん」」ってやられていましたよね。あれに私は非常に影響を受けました。こうやって付箋を貼っていく方法があるのかと目から鱗が落ちたのです。

今日のテーマは地元資料の活用を通して、最後に佐藤さんが言われた他地域、他世代の交流に結びつける前向き未来志向の良い話だと

で何か繋がることがあるかもしれないですね、松尾さん。

松尾

博物館における取り組みではないですが、民具を村の福祉施設を持って行って、お年寄りからいろいろな話を聞いて、昔こうだったということも思いだしてもらって、お年寄りの記憶を喚起する効果もあるし、こちらとしても民具のいろいろなことを教えていただけると、そういう取り組みができないかと案があがってきたと、押部さんからお聞きして、それは面白いなと思いました。

小林

本当ですね。最近、各地で聞くようになった回想法ですね。民具を使って年配の方たちからいろいろお話を聞き出す。それで身体が元氣になったり、繋がったりということだと思ひます。山口さんがその辺もやり始めています。まだふんわりした感じですが、回想法の可能性をどう思ひますか。

回想法

山口

回想法と言われている心理療法の一種があります。高齢者の方、軽度の認知の障害がある方に民具でもいいですが、昔の写真、映像をご覧いただいて、昔のことを思いだしてもらおう。認知の障害がある場合、最近のことは思ひだすらしい。昔のことが思ひだしやすいらしいです。昔のことを思いだすことによって脳の働きを活性化させ、自分が生活をきちんと送って

思ひました。逆に私は後ろ向きだったなっていう話ですが、佐藤さんの取り組みを参考に「双葉高校史学部の歩み」という企画展をまほろんでやりました。「存知の通り原発事故で双葉高校は休校になっております。県立博物館の方々と一緒に双葉に入って、休校になるということで、高校の資料、部活動で集めた資料などを保護して、それを展示する。展示するからには資料も大事ですが、部活動に参加した人たちの写真、部室での勉強の様子、調査の様子、研修旅行の写真、一番多かったのは昭和50年頃の写真。高校生たちが旅行している写真などを会場に貼った。これを我々が見ても全然わからない。これに付箋を貼ってもらおう。

そこに、あちこちに避難されている方々、双葉高校卒業生の方々が集まって、一度壊れた絆を繋ぐきっかけになるのではないかと、今は思ひます。そういう取り組みをやったことがあります。

資料の展示と一緒に文化祭をやる

それ以前には、全村避難になった飯館村の資料を福島市に避難させて、福島文化センターで展示しました。あちこちに避難して仮設に住まわれているみなさんは、生活していくのに一杯だった時期で、例えば一緒にダンスやっていたメンバーとの繋がりが、一緒に川柳を詠んでいた人たちの集まりだとかが絶たれていた。そこで、資料の展示と一緒に文化祭をやるということ、村の文化祭を県の文化センターでやりました。2012年の10月です。絶たれた絆を繋ぐためにアーカイブする取り組みだったかな。

今後も、特に少子高齢化が進んでくる将来、

きたことで、今生きていられるのだと、自分の尊厳を取り戻すことができる。施設に入っている世話になっているだけの存在ではないということにもう一度、「ご本人が気づくことができる。そういう効果も期待され、そういった活動が福祉施設を中心に行われています。

博物館がそういった活動に協力することも近年は増えていきます。民具のような昔の道具を持つていくと、高齢者の方からお話が聞きやすい。昔のことを思いだすフックとか媒体になりやすいということで、博物館も協力するようになってきています。福島県立博物館としてもそういったことを県内でやっというところとしていきます。

聞き取れる時に聞き取って

本間

いいですか。何回も手をあげてすみません。ぜひ昭和村に希望を。

ここに来る前に那須を回って、那須の民具を担当している方とお話をしてきました。民具の使い方や由緒の調査を継続していただければ、今年がコロナでストップしているという話でした。今のお話でもおわかりのように昔のことはみなさんよく覚えていらっしやる。みなさん自分がいままで元氣だと思ひているかもしれないですけど、人間は必ずいつか終わりを迎える。ですから聞き取れる時に聞き取っておかないとわからなくなってしまうことがたくさんあると思うのです。こういうコロナ禍ではありませんけど、少なくとも村内の人たち限定でもぜひぜひ継続してほしいと願っております。それだけ言いたくて。

そういった資料を前に出して、特に大学生が仙台上に愛着を持てるようにどうするかという、あいつの発想はこれから参考になると思ひました。とても勉強になりました。ありがとうございます。

小林

東日本大震災と原発事故で浜通りの双葉郡のみなさんは町をあげての避難ということになった。日本の多くの場所が過疎と高齢化によって町や村や地区がなくなっていくていますが、それを双葉郡はすごく短い時間で経験させるをえなかった。

本間さんは、壊れてしまったものをもう一度戻そうとされた。そういう問題に直面している地区でゆっくりと歩みが進んでいるところであれば、まだ何かできることがあると思ひます。未来に向けてこういうアーカイブが役に立っていると考えた時、民具を介して交流の場を作っていくこと自体がもしかしたら地域が抱えるいろいろなことを解決に繋げてくれるのではないかと思ひました。

佐藤さんも被災地、仮設住宅で活動されたというご紹介をいただきました。そういう視点で考えた時に、宮城でもみなさん避難され、もとの暮らしができなくなったところから、その活動によって何かを取り戻せたのか、あるいは残すことができたのか、その辺りをさっきのお話に加えてお聞かせいただけますか。

震災を語る場を減らす原因

佐藤

町中と沿岸部で3月11日の被害でも違った被

小林

松尾さん、頑張つて継続お願いします。

10年ここに来るのが早かったら

松尾

私も今年、村の方からいろいろお話をうかがっています。先ほど紹介した地機織りも80歳代後半ぐらいが家で機織りを習っていたギリギリの世代みたいです。それより下の世代にはなかなか伝わっていない。村のいろいろな方のお話をうかがってもわからないことが多い。この前、10年ここに来るのが早かったらもつという教えてもらったのと言われました。危機感を持っていろいろ取り組んでいきたいと思ひています。

小林

そう言ってもらえることはまだ間に合うということだから、ぜひこれから頑張つていただけるとうれしいです。お時間も過ぎてしまいましたけど、よろしければもう一つだけ会場から「質問、ご意見お聞きできればと思ひます。寒くなってきましたね。

押部

民具の整理と活用がテーマですよ。私は民具整理事業を担当していますが、どちらかというと今は、民具整理では写真を撮る、寸法を取る、そういう物理的な情報をとって、モノとして整備保存することに比重がある。先ほどの回想法、認知症の進行予防への民具の活用方法なのですが、民具整理の時に必要になってくる情

災をしています。町中の人は沿岸部の人を慮つて語らない。沿岸部の人には沿岸部の人同士で被害の程度を語らない。または隣の家のことは被害が大きかったので語らないとか、結局語れる人がすくく少なく、それが一番震災を語る場を減らす原因になっていると感じています。風化は自然にしようものなので、風化はさせないというつもりはない。むしろ、風化することを前提に、風化するから記録をとらなければならぬと思ひています。仙台の町中の人があるの時のことを語るにはどうすればいいのか。

一生ニアピンなのが

そこで、先ほど本間さんがおっしゃった「3月12日ははじまりの「ごはん」」が生まれてくるのです。遠慮して語れないっていうのだけは避けなければいけない。何でもそうだと思うけど、民具の保存でも私は知らないから遠慮して語らないじゃなくて、語れるようにするにはどうすればいいのか。先ほど言ったように一生正解がわからない、一生ニアピンなのが本当は理想じゃないかなと、時々思ひます。正しい答えを導き出せないから探し続ける、語り続ける。そんな仕組みができたなら写真も映像も民具も語り続けられる、そんな感じがします。

小林

からむし工芸博物館の民具でみんながずっと昭和村のことを話したり、誰かに、その時来ていた外の方にお伝えしたり。昭和村もいろいろなこと直面していると思うのです。少子化、過疎高齢化で福島県内では昭和村の名前が出てくる。もしかしたら、民具を切り口にするこ

報は物理的な情報だけではなくて、わかりやすいところでは製作方法、材料をどこから採ったか、どの時期に採るか、そういったところは人に聞かないとわからない。

調査と活用はくっついていきます

現場で触つて仕事をしていて思うことです。調査と活用はくっついていきます。回想法の中で出てくる話が昔のことなので少し間違っていたとしても、ちょっとした一言やイントネーション一つといった情報に、大きな値打ちがあります。

そこにある皮箕は実は昔まほろんにいらっしやった國井さんが秋田県からわざわざ材料を



探ってきただった。昭和村でもこの樹皮、サワグルミの樹皮を使うのですが、昭和村の小野川のお父さんと一緒に製作したものです。そう、これは再現製作したもので、動画を撮っています。皮箆の話は何回かいろいろな方から聞いていて、実際にこれを作ったお父さんからお父さんからも聞きました。手を動かしながら初めて出てくる話が非常にたくさんありました。写真を見て、目から思いです。鼻、匂いから思いです。何より体が、何十年前に作ったきりでも体が覚えてる。

お父さん自身も楽しそう。時間が足りなくなるぐらいそこで情報が得られた。皮箆に限った話ではなく、ものを作る過程で得られる情報というのがある。先ほど松尾さんが言ってくださったように面白みのある世界ですが、確かな情報が得られるのがここ数年、10年以内。僕は来年の3月でこの仕事を離れるのですが、できれば来年度以降は感染症騒ぎの中でも対策をとった上で、聞き取り、映像を撮る、そういった調査をしながら整理する体制がつけられるといいなと思っています。

### 情報を集める場所が 交流の場になりえる

小林

ありがとうございます。最後にものだけではだめだということをおっしゃってくださいと思います。博物館はものを収める場所ですが、それだけではだめ。

佐藤さんは、お話を聞いて場所を特定したことで使える写真として活かされるようになったとおっしゃっていた。ものものだけではだめ

で、それがどういうものなのか、製作方法も使い方もわかることで初めてそれが何なのか伝わるのです。まとまっている情報は絶対必要、それが一緒にあることで死蔵から遠い民具になっっていくでしょうし、その情報を集める場所が交流の場になりえる。ということをお話している人はみんな納得してお帰りただけだと思います。

伊藤さんが言ってくださったように、外からの目で見たいものがあつたとして、今、それが存続しえるかどうかの危機的状態にあると思うのです。作り手もいないし使い手もない。かっこいいと思った世界の人たちが、今度はそれを作ったり、使ったりできるのか、暮らした方が大きく変わった中で、どのように私たちが自分たちの中に落とし込んでいけるのか。

「蚊いぶし」は自然に帰るもので作られていて、蚊を殺すのではなく避けるもの。そういう価値観も私たちは知らなくなってしまうている。そんなことも教えてくれる民具が死蔵から遠くなるように、いい活用場所をみなさんと作ってあげたいと思います。

時間オーバーしてしまいましたが、みなさんお付き合いいただきありがとうございます。今日、良い問題提起をしてくださった3人の方に拍手をお願いします。

塚本

本当にありがとうございました。たくさんのヒントをいただけたいと思います。思い出、記憶が詰まっている小学校でお話しさせていただきました。昭和村のみなさんありがとうございます。とても素敵な時間になりました。





民具を使ったコミュニケーションは考えたこともありませんでした。集めたものを使う、活用する。そのひとつがコミュニケーションというのは面白いと思いました。人は誰かと関わって生きていくのですから、コミュニケーションがとれるということは生きやすさにつながるのだなあと思いました。博物館が「しゃべり場」になってほしいです。ライフミュージアムネットワークの活動こそがコミュニケーションの源になると思います。(50代)

民具にまつわるいろいろな情報の引き出し方を知ることができた。(40代)

民具というと壊れやすいので触ってはいけないというイメージがありました。実際に触れることができてよかったです。コミュニティにつながるいろいろな活用方法が聞けたのも楽しかったです。どのように活用していくのか楽しみです。(20代)

山口さん、松尾さんのお話を伺い「日本生活図引」を思い出しました。インデックスではなく、コンテキストを示されていると感じました。モノとその背景の見つけ方という意味で、民具と写真は別のものではなく、佐藤さんのお話とつながっていると感じました。過疎や高齢化がおそらくこの地域の課題かと思いますが、開発された土地に生まれ育った者として、今の「わたし」のくらしとモノ、風土の結びつきかなさを肌で感じています。今の福島にも通じることがあるのでは、と思います。(40代)

民具は使った人がいて、それが残ることで後世の人々を結びつけることができるツールなのだと思います。活用の方法を豊かにすることで、民具を再び生き返らせ、今を生きる私たちも結び付け直し、くらしを取り戻すことができるのではないかと思います。(50代)

民具をツールとして、人と人をつなぐ。

これからの若い人を通して未来につながられることがあるというのにはわくわくします。(60代)

## 第4回

「民具整理から見えてくる奥会津のくらし」に参加して

林あゆ美

8月から毎月1回「奥会津の周り方」で奥会津に通っていると、通り道にすっかり馴染みができます。オープンディスプレイの前に、温泉に入ったり、新蕎麦をたぐったり、回を重ねる毎に、ますます奥会津が好きになります。

4回目の開催地は昭和村の喰丸小。少し早めに行つて、「昭和村民具展示」を見学しました。等身大につくられた馬がおかれ、まるで生きているかのような存在感を放ち、だからこそ、その部屋におかれている民具が実際に使われていたことが想像できます。そして、わからずくられるものの豊かさに圧倒されました。

見学後はちょうどよい時間になり、オープンディスプレイがはじまりました。今回の講師はNPO法人20世紀アーカイブ仙台副理事長の佐藤正実さん、昭和村からむし芸博物館学芸員の松尾悠亮さん、福島県立博物館学芸員でありライフミュージアムネットワーク事務局の山口拓さんの3名です。

山口さんは民具がご専門の方。民具の整理と活用について話をされました。民具の価値判断、収蔵にあたっての問題など。民具は集めているだけでなく、整理されてこそ博物館におかれる資料になるそうです。とはいえ、収集も無限にできるわけではないので、収蔵スペースをどう使うかは難題のご様子でした。

## 第4回

「民具整理から見えてくる奥会津のくらし」レポート

岩波友紀

まだ残る紅葉が日差しを浴びた光景を見ながら、心地よい気分が目指すは昭和村。旧喰丸小にたどり着くと、シンボルのイチヨウの木にはまだ半分くらいは葉っぱが残り、相変わらずの勇姿。連続オープンディスプレイ「奥会津の周り方」の4回目は、その校舎中での開催でした。会場の窓から見えるイチヨウの木が美しい。講師の方の椅子や机も学校のもので、今回の雰囲気より盛り上げてくれました。

毎回違う町村での違うテーマで行われる本ディスプレイですが、昭和村でのテーマは「民具整理から見えてくる奥会津の暮らし」。私の興味は、決して美術品でも文化財でもない「民具」をどのように残しているのか、あるいは残す価値をどのように定義づけできるのか？ということでした。県立博物館の山口さんのお話はまさにそれがテーマでした。民具は金銭的、歴史的価値がないということによって保存できるかが課題であること。保存する場所や、管理する人がいない、それゆえ民具を集めても資料にならず死蔵する。そして除籍や廃棄という結果になってしまう現実がよく理解できました。また、鳥取での例が印象に残りました。町立資料館が増えず管理しきれなくなった民具を譲渡する試みをしたところ、希望者が殺到したということです。この話のひとつの側面は、民具を資料として残そうとしても管理しきれない実態。そしてもうひとつは多くの人が民具に

また収集したものの活用として、企画展などで多くの人にみてもらうことも大事だということ。民具をネタにみんなでコミュニケーションを促進していき、人の語りを記録し地域の歴史が見えてくる、そういう面白いことをしていければという話は聞いていてワクワクしました。

松尾さんは、民具活用法についてのヒントを二つあげていただきました。一つは布づくり実演です。毎年5月から11月からむし芸博物館ロビーで開催されており（今年は新型コロナウイルス感染症防止のため中止）、からむし織研ウイルス感染防止のため中止）、からむし織研修生、通称織姫さんや、地機講習会のベテラン受講生が、一連の作業を実演されているそうです。実演を見学するだけではなく、梅漬けなど、昭和村の文化を教えてもらえる場だと松尾さんが熱く語られました。

私は今年2月に開催された昭和村からむし織の里雪まつりに参加（厳密には雪まつりは当日開催直前に強風で中止になったのですが）した折に実演をみることでできたので、その時の楽しさが蘇ってきました。雪まつりは突然中止になった為、実演担当の方々はすでに来られて準備されていたのと、ツアーで来られた方は引き返せなかったこともあり、ある程度の方が集まっていたので、実演はそのまま行われることになったのです。裂いた繊維を指で燃りかけながらつないでいく芋績み（おうみ）や、オツムギワク（糸車）を使って燃りかけて糸を完成させる燃りかけは、見飽きることがないほどおもしろく、世間話などしながら手を動かすその手仕事をほれほれました。

民具活用法の二つめは村民を対象にした地機講習会です。毎年11月から翌年3月まで開催さ

価値を感じているということでした。民具をどう価値つけて保存、伝承につなげていくかが課題なのかと思いました。また、多くの人が民具に興味があつて欲しいということであれば、現役のモノとして活用できる人が活用する方法もあるのではないかと思います。美術品や貴重な文化財ではないからなくなっていつてしまうのはやはり違和感があります。日常品として生活に必要であつたモノこそが、何か人の歴史を語るものではないかと改めて感じるので。

からむし芸博物館の松尾さんは、民具の活用という側面のお話でした。からむしは私でもよく知っている、昭和村で村一丸となって取り組み保存、継承している技術であり、特産品ですが、民具を活用するという点でも役に立っているという視点が私には新しいものでした。確かに、昔から続けられてきたものを作るのに、その道具がいる。その道具はそれが作り続けられれば、現役として残っていく。民具だけのことを考えるのではなく、生活様式、産業を守ることと一体となる事が大切なかな、という感を受けました。

20世紀アーカイブ仙台の佐藤さんは民具とは違つたお話ですが、保存、残して活用する事が共通です。写真のアーカイブについてです。私も写真をやっているのので、普段から「アーカイブ」という言葉を口にし耳にしますが、この言葉が定着したのは震災が契機だったという佐藤さんの言葉にうなずけました。津波では多くの写真が流され、記録が流されました。そのことによって昔を写した写真の貴重さを多くの人が実感したのではないかと思います。また、記録

れ、翌年6月の「からむし市」で販売、翌年11月の「村民文化祭」で展示されているそうです。この講習会でもお茶の時間が「学習の場」としてだけでなく、「人々をつなぐ場」になっているというお話でした。地元文化を継承するための講習会、なんだか憧れます。

佐藤さんはNPO法人20世紀アーカイブ仙台での活動などについて話をしてくださいました。

アーカイブとは「公文書」「保存記録」「記録保管所」があり、写真で記録したのも民具同様、いつどこで撮つたのかわからないと死蔵写真となつてしまいます。いつどこで撮つたものなのか、不明な写真はそこを逆手にとって「どこコレ？」とイベントにして、撮られた場所に心あたりのある人が付箋に書いて写真に貼るということもされたそうです。

アーカイブは経験の同期、未来へのプレゼン、他地域、多世代間の交流にもなっていく話もおもしろく、事実の記録は写真だけでなく、記憶も含め、正史だけでなく俗史も含めていく、生活感のあるイメージが共有、伝達されていく、それは本当にそうだろうと思いました。

オープンディスプレイでは、前回の講師をされた昭和村で民具整理をされている押部さんの話を聞くことができました。押部さんは今回のテーマにも深く関わりのある方で、自らも聞き取り調査をされています。昭和村地域おこし協力隊として昭和村に滞在し、任期も来年3月までと残り少なくなつてきているのをふまえ、民具の制作方法は実際につくっている人に聞くのが大事だけれど、みな高齢になつてきて

だけを目的にしたアーカイブは死蔵するという話も、印象的でした。記録してそのまま仕舞い込んではいけません。使つて、見てもらい、伝えらるという活用を続けたいとアーカイブとして完成しないということでした。自分の写真がまさに死蔵していたり、保管してあるものを全く活用していないことを思い出していました。

民具でも写真でも全てのことと共通する、残すということの意味を改めて感じさせてくれるお話でした。しかしやはり今回の保存というテーマでも経済性ということが必ず付き纏い、他のものとの喫緊な重要性を比べられると、続けていく事が難しいのは確かです。そのためただ保管するのではなくどう活用し、存在意味を持たせるかということが大きな事なのかと聞いていて感じました。写真の話に戻つてしまいましたが、「写真は見てもらうことで初めて存在する」というある方の名言を思い出します。存在するということは、人に認知してもらつたということと同義ということですね。

12月開催の次回は最後の5回目。夏に行われた1回目から季節が変わりすでに晩秋。奥会津のそれぞれの街の季節も感じながら参加できたオープンディスプレイですが、最後は美しい雪景色の中で聞けるかもしれません。

いる、確かな情報が得られるのはあと10年くらいではないかとみておられ、この期間に聞き取り調査をしっかり継続してほしいという希望を述べられました。

展示してあつた民具がどう作られてきたか、どのように使われてきたかを知ることが未来へのバトンのようにも思えました。わが家は農家ではありませんが、周りに田んぼが多いので、わらは身近に見られます。そのわらでこれだけの民具がつくられてきたのかという驚きは冒頭にも書いたのですが、とにかく強い印象が残りました。折しも県立博物館の民具室のポイント展でもわら細工が展示されていたので見てきました。本当にわら細工は美しい実用品です。

回を重ねる毎に自分の引き出しが増えてきて、周りにあるものを見る目が変わり、得られる情報の質も変わつてきています。民具がコミュニケーションツールにもなるということは自分にとって新しいことでした。

名残惜しいこのオープンディスプレイも残すところあと1回。来月はどんなお話がきけるのでしょうか。金山に行く日が楽しみです。

モニタールレポート

# 奥会津

## をつなぐ

Life Museum Network

第1部では、  
金山町玉梨地区のくらしに息づいてきた  
共同浴場や農村歌舞伎の文化、  
収集された写真から、  
地域の歴史や景観の変化、  
コミュニティの在り方について  
教えていただきました。  
第2部では、  
これまで三島町、柳津町、只見町、  
昭和村、金山町と繋いできた  
対話のリレーを振り返り、  
これからの奥会津について考えました。

日時：2020年12月19日(土)14:00～16:00 会場：金山町中央公民館

### 第1部

講師：榎本千賀子さん(新潟大学創生学部特任助教/写真家/アーキビスト)

栗城辰男さん(玉梨八町温泉組合会長)

栗城英雄さん(山入近隣会)

### 第2部

講師：板橋淳也さん(三島町教育委員会生涯学習課長)

伊藤たまきさん(やないづ町立斎藤清美術館学芸員)

中野陽介さん(只見町役場地域創生課ユネスコエコパーク推進係主査/只見町ブナセンター主任指導員)

松尾悠亮さん(昭和村からむし工芸博物館学芸員)

五ノ井智徳さん(金山町教育委員会教育係長)

モデレーター：川延安直(福島県立博物館副館長/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

### 榎本千賀子

新潟大学創生学部特任助教。2016年より金山町の映像アーカイブ事業「かねやま「村の肖像」プロジェクト」に携わり、映像資料の収集・調査・活用に取り組む。

### 栗城辰男

金山町玉梨地区在住。玉梨八町温泉組合会長。地域に愛され、コミュニティを育んできた共同浴場の管理運営を通じて、玉梨の歴史・文化を守り伝える。

### 栗城英雄

金山町山入地区在住。山入近隣会の一員として、一時途絶えていた山入歌舞伎を1990年に復活させた。江戸時代から続く農村歌舞伎の保存・継承に尽力している。

### 板橋淳也

三島町教育委員会生涯学習課長。前職は三島町生活工芸館長。三島町の生活工芸運動を継承発展させ、「生活工芸アカデミー」の開設や「工人の館」のオープンに尽力。

### 伊藤たまき

やないづ町立斎藤清美術館学芸員。会津出身で世界的に活躍した版画家・斎藤清の作品を主要なコレクションとする美術館で、斎藤清の多様な側面を新たな切り口で捉え直している。

### 中野陽介

2012年より只見町役場に勤務。只見ユネスコエコパークの登録と関連事業に携わり、自然環境・野生動物の保護・保全、学術調査研究に関する事業を担当する。

### 松尾悠亮

昭和村からむし工芸博物館学芸員。2019年、同館に地域おこし協力隊として着任。からむしや昭和村の歴史、奥会津の生活文化について学び、地域の交流の場づくりを行っている。

### 五ノ井智徳

金山町教育委員会教育係長。金山町自然教育村会館(旧玉梨小学校)に収蔵している弥平民具コレクションの保存管理などを担当し、活用方法を模索している。

### 事務局・塚本麻衣子

連続オープンディスプレイ「奥会津の周り方」第5回「奥会津をつなぐ」を始めます。本当でしたら今日は旧玉梨小学校で民具のコレクションをみなさんと囲んでお話しできればと思っています。雪の状況が心配だということに急遽こちらの会場に移りました。みなさまには急なご連絡となりましたが、どうもありがとうございます。

連続オープンディスプレイ「奥会津の周り方」8月に第1回を三島町で行って、月に1回行ってまいりました。夏から秋、今日の冬景色へと移り変わっていく奥会津の景色を楽しみながらのディスプレイになっていないかと思えます。本日は最終回です。三島町、柳津町、只見町、昭和村、そして今日



榎本千賀子さん

何度もお会いしている方もいらっしゃると思いますが、まずはみなさん初めまして。榎本千賀子と申します。本日は「金山をひらく」というタイトルで、民具、温泉、芸能の三大話という三つのトピックをお話ししたいと思います。塚本さんから紹介がりましたが、私は金山町で「かねやま「村の肖像」プロジェクト」という事業に2016年から4年間関わってきました。ご存じない方のために簡単に説明しますと、これは、金山町に暮らす人々が撮影・保存してきた地域の映像資料を対象とした映像アーカイブ・プロジェクトです。このプロジェクトでは、家族の記念写真のような、多くのご家庭に当たり前のように所蔵されてきた映像を、町のかつての暮らしを伝える映像資料と捉えて、その収集整理、保管活用を行っています。町民自身が撮影した写真と、写真にまつわる記憶を通して、町の歴史や文化を知ろう、考えようとする

というプロジェクトです。2019年には、この写真集「山のさざめき川のとろどき」を刊行することができました。プロジェクトは、この写真集をもって一段落ついたばかりというところですが、これはプロジェクトで行ったワークショップの様子を写した写真です。今日ご登壇いただく栗城英雄さんも真ん中に映っていらっしゃいます。ワークショップでは、山入地区のみならず、一緒に写真を見てお話を伺いました。このとき会場の壁に貼られていた写真も、全て地域のみなさんが提供してくださったものです。「村の肖像」プロジェクトは、写真集の刊行をもって一つの区切りを迎えましたが、現在も新しい課題に取り組みながら活動を続けています。プロジェクトで収集した1万枚以上の写真



を、どのように町の中での暮らしに活かしていくかということが、現在のプロジェクトの課題です。せっかくみなさんが提供してくださった資料を仕舞い込んでしまうのではなく、町のものとして使っていくことを今の「村の肖像」は目指しています。

また、今日お二人に来ていただいた理由でもあるのですが、金山町には、このプロジェクトが始まる以前からさまざまな活動に取り組んでいる方がいらっしゃいます。そしてもちろん、映像資料以外にも、町の中にさまざまな文化資源、自然資源があります。そういったさまざまな活動や資源と映像資料を組み合わせて活用してゆくことで、それぞれの活動や資源に良い効果をもたらすことができなにかと現在の「村の肖像」では考えています。今年には新型コロナウイルスの問題があり、計画通りには進まないことも多かったのですが、そうした中でも民具・温泉・芸能の三つのテーマを取り上げて、少しずつ聞き取りなどの活動をしてきました。今日はその中間報告というか、今こんなことをしていますというご紹介ができればと思います。また、今日はお二人のゲストに加えて、もうお一方、お話をいただきたい市川里美さんという方がこちらに座っていらっしゃいますので、後ほどご紹介したいと思います。

### 弥平民具

さて、まずは弥平民具と金山町民芸品創作研究会の話したいと思います。金山町には大きな二つの民具コレクションがあります。そのうちのひとつが弥平民具という、大雪でなければ本日の会場となるはずであった金山町自然教育村



会館(旧玉梨小学校の建物を引き継いだ建物です)に展示されている民具コレクションです。これは、玉梨の住民であった故・栗城弥平氏が収集した民具のコレクションで、1980年代に玉梨民具保存会によって整理されたものです。弥平民具は、一般的に民具とされる範囲を大きく超えた生活の道具を含み、収集整理の背景を伝える再現写真も残るなど、特色ある豊かなコレクションである一方、多くの課題を抱えたコレクションでもあります。例えば、弥平民具は、現在は限られた機会を除いて一般公開されていません。そこが一番の課題です。資料の一部に関しては道の駅にちよっとした展示コーナーがあり、そこで活用されていますが、それ以外の資料は基本的には旧玉梨小学校の展示室の中に仕舞い込まれてしまっているのです。

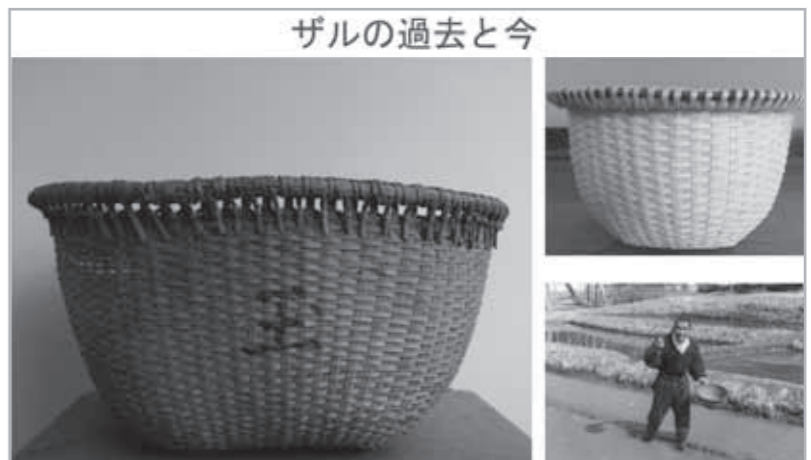


これは弥平民具の再現写真の一部です。1980年代に撮影されたもので、収集された民具を実際に使った経験のある明治、大正生まれの「老人たちが、それぞれの道具の使い方を再現してみせた」一種の演劇写真です。日常の風景を撮ったものではなく、過去を演じてみせた写真ですから、少しポーズが不自然というか誇張した感じにも見えます。しかし、そのごちなさも含めて魅力となっている写真だと思います。また、地域の人たちが、どのような雰囲気の中で民具を整理していったのか、かつての暮らしを伝えるためにどのような工夫を重ねたのかが見えてくる点でも興味深い写真です。この再現写真が撮影されたのは80年代ですから、一部にカラー写真も残っています。さらに、写真の中に車が映っているものもあります。一見すると、遠い昔の写真なのかなとも思いますが、よく見てみると80年代という近い過去が紛れ込んでいて、そうした時代の重なり合いも面白いのです。

### マタタビ細工研究会

続けて、金山町の文化活動をひとつ紹介しましょう。金山町では、金山町民芸品創作研究会という会が長く活動を続けています。奥会津の他の町村と同じように、金山町でも冬の間は植物繊維を利用した編み細工などの手仕事を「過ごすのがないでした。金山町民芸品創作研究会は、そうした冬の間の伝統的手仕事を伝える老人クラブの講習会から発展した研究会で、現在はマタタビ細工を中心に、会員それぞれが創作活動や技術を伝える「ものづくり講習会」などの伝承活動に取り組んでいらっしやいます。

また、2009年から同会は、三島町の工人まつりにも参加して、会員が制作したマタタビザルの販売を行っています。以上のような民具資料の存在と研究会の活動を踏まえて、今年の「村の肖像」プロジェクトでは、マタタビ細工研究会を実施しました。民具資料と文化活動を繋ぐことはできないだろうか。活用課題を抱える民具コレクションを、マタタビ細工の制作と伝承の場に活かさないだろうか。町内でマタタビ細工が盛り上がりを見せる一方で、新型コロナウイルスにより「ものづくり講習会」でのマタタビ教室も開講できなくなるといった困難な状況の中で、金山町民芸品創作研究会を支援する活動が何かできないか。マタタビ細工研究会は、そういった思いで実施した会で、研究会では、マタタビ細工を始めとする編み細工の創作や伝承に実際に関わってらっしゃる方々に、玉梨の弥平民具に含まれる編み細工や、「村の肖像」で集めた写真に写った民具を見てもらい、資料の活用可能性を探りました。



### 映像

菅家哲夫

マタタビの最初の頃は縁のところは壊れるのが大変だった。何で壊れるかというところ、片手で縁を持って持ち上げるから。ザルを持つ時は必ず両手で持って、こっやって重い物でも両手で持てば、結構重いものを入れても大丈夫だよ。

市川 すごく軽いザルなので、重いものを入れて大丈夫なのかなと思います。

市川 縁の作り方が同じなのは、年代が同じということですか。

菅家 いや、昔の人の作り方ってほとんどこれ。もうずっと長いことこれだった。

榎本 今回のザルが端を編み込んでいるのは、端が引つかからないようにとか、そういうところから始まっているのですか。

(中略)

若林 (昔の縁の編み方は)裏表両方に曲げるわけだから。表裏に沿って曲げる分にはいくらでも曲がるけど、その逆に裏を表にして曲げちゃうとマタタビのヒゴはパリって割れちゃう。割れやすい。(昔の縁の編み方だと)修理なんかは簡単だけど割れることもある。

### 映像終わり

### 過去のマタタビ細工と現在

音声聞き取りづらいところもたくさんあったと思いますが、研究会では、過去のマタタビ細工と現在みなさんが作っていらっしやるものの違いが多く話題に上がりました。民具コレクションの中にある昔のマタタビザルは、現在のものに比べてはるかに大きいものが多いのです。

会のなかで話された内容を少し紹介します。左の写真は「桑入れざる」といって、弥平民具のひとつです。明治の初年頃から使われていたものだといいことで、直径は60cmくらいあります。右は市川里美さんが最近作られた「米とざる」で、縁や大きさもずいぶん違います。右は過去のザルがどのような状況で使用されていたかを伝える「村の肖像」の写真資料です。研究会では、今と過去のマタタビ細工でどのような作り方の差があるのかということが多く話題に上りました。次にお見せする映像は会の様子の抜粋です。

が、その大きさを表現するために太いヒゴを使い、さらには縁も丈夫に太いものにして重いものを入れても丈夫に運べるようにしています。そして、縁の作り方も現在金山町で作られているものとはずいぶん違います。過去のものは酷使して壊れてしまったら簡単に直すことができると、昔で道具のどういうところを重視して作っているのか、生活の仕方がどう変化し、道具の使用方法がどう変わっていったのか、そうした変化について、ヒゴの作り方、縁の編み方が具体的にどのように変わったのか。こうした話が研究会では盛んに話題となりました。当日は、民具の目録には記されていない技法や材料についてもたくさん教えていただいたように思います。

また、研究会を開いたことで、私としてはこうしたお話以上に驚いたことが一つありました。この研究会に来てくださったマタタビ細工の実践者のみなさんは、他の方々に比べても、過去の民具に関心があるはずの方々です。しかし、そうした方々でさえ、弥平民具コレクションを実際には見ておらず、今回初めてコレクションを見たという方が多くいらっしやるのです。これは私には少々ショックなことでした。

今回、改めてマタタビ細工に関わる方々に民具を見てもらったところ、作り手のみなさん同士でお話が盛り上がるだけでなく、そこで話されていた内容が、マタタビ細工を理解する上で非常に参考になるものであることがわかりました。それを踏まえると、民具の活用法としては、まずは「ものづくり講習会」のマタタビ教室等で、講師の方々と生徒の方々に民具を見ていただくといった形が考えられるのかなと思います。

参加者・市川里美 市川里美です。よろしくお願ひします。

榎本 市川さんは非常にお若いですがけれどマタタビの名手です。

市川 金山に引越してきて13年になりました。マタタビを始めて10年になります。金山町には名人的方がたくさんいらっしやあって、いろいろ教えていただきながら活動を続けています。弥平民具を初めて見たのは最近のことです。昔の民具は今と違って縁や編み方の違うところがいっぱいあるなど興味津々で見えていました。もっといろいろの方に聞きながら歴史を勉強したいなという興味が湧いてきました。若い方も興味があると思いますのでこれから何かできたらいいなと思っております。

榎本 みなさんザル作りだけでも忙しいので、時間を取るの難しいとは思いますが、教室でこういうものを見る機会を設けると、生徒さんでも得るところがあるというか、刺激になるもので



栗城辰男さん

若林豊昇

かなり丈夫ですね。引張強度があるというか。

菅家

ものづくり講座とか、そういうところで言っているのは、マタタビ細工は生活用具なので、何に使うかというのを考えて作りなさいということ。マタタビのヒゴの厚さなり幅なり縁の太さ、それから高さとか、広がりとか。道具は何に使うかということを考えて作る。

今はものづくり講座でも(ヒゴの)幅をぎゅんと、例えば3.5mmとか4mmとか、5mm、5.5mmと揃える。しかし、昔の人はそういうことはしていないので丈夫です。大きいものほど厚い材料を使って、幅なんか揃えない。縁もクルッと伸ばして、それで編地に突っ込んでいくだけ。こう挟みこんで、固定して。

市川

そうですね。とてもなると思います。作っている方は昔の作り方にすごく興味があると思いますので、「ものづくり講習会」の受講生が一度旧玉梨小学校に行つて、民具を見ることはいのことだと思えます。

榎本

私自身はマタタビ細工を作ったことはないのですが、それでも、新しいものと古いものを並べて検討しながら聞いていると、なぜ過去のザルの縁がこういう形をしているのか、今のものがどうして変化しているのか、大変わかりやすかったです。ありがとうございます。

市川

ありがとうございます。

### 玉梨八町温泉のこと

榎本

次に、「人々を結ぶ湯」ということで玉梨八町温泉のことをお話していきたいと思えます。今日は玉梨八町温泉開発組合長の栗城辰男さんに「ご来場いただきありがとうございます。」

栗城辰男

よろしくお願ひします。

榎本

よろしくお願ひします。さて、現在の玉梨八町温泉周辺はこのような場所です。写真左側に



八町温泉龍の湯があり、川の対岸に玉梨温泉、さらに橋の奥側に町営のせせらぎ荘がある、町の一大観光地となっている温泉です。

玉梨八町は、箱湯、大黒湯、中井湯、八町湯という四つの温泉が狭い範囲にひしめき合うように湧く、豊かなところです。現在、中井湯は止まっていますけども、四つ全ての温泉の泉質もそれぞれ違います。また、この温泉場は、非常に古い歴史を持ち、享保年間より利用が始まったそうです。それを裏付けるように、二つのお地藏さまが川の両岸に立っています。八町温泉側に立つ子守り地藏と、玉梨温泉側に立つ箱湯の地藏さま、二つのお地藏様とも1738年の建立と刻まれています。この他にも、徳一が開湯に関わったとか、お地藏さまが子どもを助けたとか、河童の伝説であるとか、数々の伝

承が玉梨八町温泉には残されています。

### 現在とは異なる風景

しかし、玉梨八町温泉は、昭和44年の水害までは現在とは異なる風景に囲まれていました。温泉の周囲には巨石が点在し、さらにその石の一部には梵字が刻まれていたり、お宮さんが祀られていたり、特色ある景色が広がっていました。温泉は河原に自噴していて、川を挟んで大黒屋と恵比須屋の2軒の旅館が営業していました。これは温泉組合副組合長の角田紘伸さんが書いてくださったかつての温泉の地図です。ここからは写真を見ながら、栗城さんにお話を伺い、かつての温泉の景色を辿り直してみたいと思います。



栗城

それでは私から説明、と言っても私もまだ若いので、そう古いことはわかりませんが、写真を見ながら説明していきます。

橋の上流にあるでっかい石、川神石のおかげで下の温泉場は水に流されないでいた。ここに昔は梵字があったという話がありますが、私はわからなかったです。この上に石宮って、祠があって、それで水が下の温泉に入らないように見守ってくれていたという伝説があります。

榎本

野尻川はよく溢れる川だったんですね。

栗城

そうそう。大洪水になる。昭和44年災害の時

に石の上にあった祠が流れちゃって、現在はその祠をまた再現しました。あの白い桜のあたりだと思っけど、あの辺に川の上の方が見えるように祠を建てて祀っております。

榎本

川や温泉をちよと見下ろす形で今も祠があります。

栗城

写真を見る通り、今はもう影も形も何もなくなっちゃいます。

榎本

こつちにも大きい石がありますよね。

栗城

はい。これは流れる前の石ですが、あの三角の石は柵石だな。柵石という石で高さが10m、幅は5mぐらいあった。その脇が通称鼻面石で、この石に箱湯を守っていたいたいた。

榎本

かつての玉梨八町温泉付近には、名前のある五つの石があって、そのうちのいくつかには梵字が刻まれており、それぞれが信仰の対象になっていたそうです。

辰男さんたちはここでよく大きな石から川に飛び込んで遊んでいたということでしたね。

栗城

私たちは地区が違うので、ここで泳ぐのは風呂に入りきた時。その頃は八町、湯ノ上、東中井の地区の子どもらが来て、水浴びをして、



寒くなれば川を掘って温泉を出して、その温泉に浸かって温まったら、また川に入るといこうとを繰り返していた。

### 川がすごく楽しい場所だった

榎本

川がすごく楽しい場所だったということですね。温泉があることで、さらに楽しい場所になっていた。

栗木

そうそう。

榎本

この写真は梵字石が洪水後に現れて、刻んである字がよく見えるようになったところだそうです。



です。大黒天を表す字のようです。かつての玉梨温泉には、大黒屋さんという旅館がありました。たが、旅館の名前はこの梵字に因んで付けられたのかもしれない。

栗木

梵字石は今現在も残っています。

榎本

現在、巨石はこの一つしか残っていません。

栗木

高さ1m幅40cm。でっかい梵字が刻まれております。他にもいっぱい梵字石はあったみたいですが、もう全然なくなっちゃって。この梵字を刻むにあたっては、三島町の西方の大高寺と

いうお寺の人が、間方の高野寺を建てるため巡回していたところでこの話を聞き、無病息災、五穀豊稔を祈願され四つの梵字を刻み込まれたということでした。

榎本

これは大黒屋さんという旅館ですが、丸で困る2カ所にお風呂があったそうです。この温泉は戦後、昭和44年まで青年団が清掃していました。青年団にとって、温泉を管理することはお仕事でもあったのですが、楽しみであつたとも辰男さんたちから教えていただきました。

### 温泉掃除が一番の楽しみ

栗城

青年団にとってはこの温泉掃除が一番の楽しみ。

榎本

なぜ楽しかったのですか。

栗城

玉梨八町青年団は団員が40人ぐらいおりまして、会議が終われば必ず全員で温泉に行つて、亀の湯でみんなお風呂に入ったわけ。川の石が並んだところから温泉が湧いていて、そこに会議が終わってからみんなが入った。全員で男もお女も一緒、混浴ですから。背中を流して、みんな仲良くやっております。温泉は湯船の底から湧き出ていたわけで、本当の天然温泉でした。炭酸も入っておりますからポコポコポコポコ湧き出ておったわけ。

榎本 玉梨八町の人たちは、小さい頃から温泉で混浴されていて、辰男さんたちは今も「夫婦で、時間を決めて温泉に行き、ご近所の方たちとみんなで入浴するのが楽しみになっている」と聞きました。

### 毎日二人で温泉に行く

栗城 そうですね。毎日二人で温泉に行く。これが楽しみの一つです。一日の日課。温泉に入ると、家に帰って一升瓶をおっ立ててやらないと一日が終わらないです。そこに来ている角田紘伸さんも同じ時間に温泉に来て、いろいろな一日の反省をして、そして明日は何をしようと、いろいろな話をしながら毎日風呂入りしております。今はコロナでいろいろと問題があつて、本来ならば他町村の人も来て入っていただきたいところですが、なかなかそういうわけにもいかなくて、亀の湯は他町村の人はお断りということをやっております。金山町内の方はぜひ来て入ってください。

榎本

コロナが終りましたら、外の方もぜひ入りに来てください。福島でも混浴温泉はほとんど珍しくなっていますし、24時間いつでも入れるという、そういった管理の共同浴場も本当に珍しいと思います。この古い写真からも温泉周辺がみなさんの憩いの場であったことがよくわかります。これは角田勝之助さんという方が撮った写真ですが、青年団関係の集まりで若い方た



ちが、温泉にかかる弁天橋に着飾って集う様子を捉えたものです。みなさんここに写っている方たちは楽しそうだし、くつろいでらっしゃる。

栗城

楽しかったです。

### 憩いの場という景色も失われてしまった

榎本

しかし、この風景は変わってしまいました。なぜかというところ、これまでの話にも少しずつ出てきていますが、昭和33年、44年に豪雨災害が金山町を襲ったのです。そして、その結果玉梨八町温泉は大きく変わります。野尻川とその支流が氾濫してしまつた。只見川も氾濫した。玉梨八町の巨石は信仰の対象でもあり、住民のみならずにとつては、川を守ってくれる温泉を守ってくれる石として慕われていたのですが、



残念なこととその巨石が水をせき止めてしまい、被害が拡大してしまつた。

これは水害時の写真です。先ほど川の底から温泉が湧いていたというお話もありましたが、水害でそうした温泉の川底からの自噴も止まつてしまつた。そして、水害の原因とみなされた



す。玉梨八町の場合も、かつての青年団から現在の栗城さんたちまで、温泉は地域の人々が集い、親交を深める場所となつていました。その上で、温泉は観光の拠点でもあり、さらには文化の生まれる場所でもあります。例えば、玉梨温泉はつげ義春の「会津の釣り宿」という漫画の舞台となつていますが、今も旅館を営む恵比寿屋さんには、水木しげるがこの地を訪れた際に、玉梨八町温泉に残る河童伝説をもとに描いた「田舎の河童たち」という大きな水彩画が飾られています。温泉をより良い形で守ってゆくためには、温泉の持つこうした多面性を包括的に捉えてゆく必要があるように思います。

そして、「村の肖像プロジェクト」で集めた写真は、そうした温泉の捉え直しを少しお手伝いさせていただきます。



### 温泉は地域社会の拠り所

さらに温泉は地域社会の拠り所でもありま

いすることができているのではないかと考えています。金山町には玉梨八町温泉以外にも、多くの温泉がありますが、その温泉それぞれに異なった歴史と文化があります。例えば、この写真に写る本名の温泉は、ダムに沈んでしまつた今はない温泉です。写真を手掛かりに、温泉の歴史や文化を探ることで、それぞれの温泉を守り、活かしてゆくお手伝いができないかと私は思っています。辰男さんありがとうございます。まだまだお話し足りないかと思ひます。

栗城

それでは最後に。玉梨八町温泉は金山町の観光地として一番人気です。炭酸温泉が目玉です。春は桜の花、夏の青葉、秋は紅葉、野尻川、冬は雪に囲まれた真っ白な風景。四季折々の自然に囲まれた金山町をみなさんよろしくお楽しみいたします。

### 豊かな芸能の土壌

榎本

ありがとうございます。

次は栗城英雄さんにご登壇いただき、金山の芸能と山入歌舞伎についてお話しをしたいと思います。金山には非常に豊かな芸能の土壌があると私は思っています。金山町を含む旧南山御蔵入領は農村歌舞伎が非常に盛んな地域でした。奥会津博物館がまとめた「会津の歌舞伎」によりみると、金山町にはかつて14もの歌舞伎舞台があつたと言われています。

そして、歌舞伎という姿こそ取らなくなりましたが、現在の金山町でも、文化祭などの機会を通じて、踊ったり歌ったりお芝居をしたりす

巨石を取り除く河川整備が行われたことで、先ほどの巨石が並ぶみなさんの憩いの場という景色も失われてしまつた。これは水害の後の工事をしているところですが、現在ならもしかすると判断が違ったかもしれないですが、石があるから川が氾濫してしまうというので、梵字石は一つを残してダイナマイトで全部破壊するということになりました。近隣の方にお話を聞きますと、この時は耐え難くて、お布団を被って爆破の音が聞こえないようにしていたという話もありました。辰男さん、紘伸さんたちからも、非常に残念だと前の温泉を懐かしむ言葉をよく聞きます。

また、その後の玉梨八町温泉も順風満帆というわけではありませんでした。青年団の若者が減つて温泉を管理することができなくなり、昭和47年には今の玉梨八町温泉開発組合が設立されます。そして、近年になつても、水害は繰り返されます。平成20年には再度八町温泉の建物が流失してしまつた。建物の再建は平成21年に行われましたが、その後平成23年には、温泉が出なくなるという事態が発生しています。

平成29年には組合にとつて三つの温泉の管理が負担となつてきたことに加えて、町が温泉を観光資源として使いたいということが重なり、玉梨温泉は町の管理となりました。その後、辰男さんが尽力されて、湧出の止まっていた八町温泉の再ボーリングにこぎ着けたところからです。温泉を守るためには、本当にいろいろなご苦労があつた。それでもやっぱりみなさんの憩いの場であるということ、温泉を大事にされてきたのでしょうか。

### 本当に大事にできました



ることは、住民の身近な楽しみの一つとなっています。写真を見ながら、金山の芸能を簡単に振り返ってみましょう。この右の写真は戦中に行われた、出征兵士のために行われた「森の石松」のお芝居です。残念なことでもありますが、こうした芸能は一時戦争のためにも使われていたようなところもあります。この写真のお芝居で送られた兵士は亡くなってしまつたと聞いています。

こうした芝居は、戦後も盛んに行われていました。この写真は川口地区の舞台です。青年団が仮設舞台上に立っています。旧南山御蔵入領の舞台はこうした仮設のものが多かったそうです。雪があるので常設の舞台は作らず、上演の度に細木で舞台をこしらえるというのが主な方



なことを勉強させていただきました。ありがとうございました。

今日は最終回ということで「奥会津をつなぐ」がタイトルです。今後、みんなのことを知った上でどう繋いでいくかというお話をして次年度に繋げていきたいと思っています。時間も少ないですから、まずみなさんに共通のお尋ねをします。これまでおそらく5町村で体系だってミュージアム、会津に関わるということはないかと思うので、まずその経験、感想をお一人ずつに聞いていきたいと思っています。順番に「文化の泉を掘る」の回でお世話になった三島町の板橋さんからお願いいいたします。

### どこの市町村も同じ共通意識

板橋 淳也

三島町教育委員会の板橋と申します。ライフミュージアムネットワーク実行委員会の委員もやっております。第1回は三島でスタートという形にさせていただきました。私は2、3年関わっていますが、今日の金山のお話も聞いて、今回のこの事業の自分なりの感想として、どこの市町村も同じ共通意識を持っているなと思っております。価値観がそれぞれ違った分野から発見されているのであって、基本的にはみなさんの先輩たち、私たちの先輩たち、先祖の方々の生活、文化が受け継がれてきていることが奥会津5町村に共通していると思っております。今回のこのライフミュージアムの事業を今後の奥会津、私たちの三島町も含めて奥会津地域の振興、発展にどのように繋げていけるか、取り組みをどういふふうに伝えていけばいいのかが私の課題です。

川延

続いて2回目「清の眼 根っここの眼 それぞれの地域学」、こちらの会場は柳津の齋藤清美術館でした。学芸員の伊藤たまきさんからお願います。

### やっとスタートに立った

伊藤たまき

齋藤清美術館の伊藤です。私どもの柳津町では、他の4町村と違って、民具の系統立った調査、保存が全然進んでいない地域だった。私はその齋藤清美術館の学芸員としてこのライフミュージアムネットワークに関わらせていただく中で、齋藤清にとって故郷とか会津って何だったのだろうかという疑問を考えるきっかけを得ました。その中で齋藤清がむしる会津から遠く離れた、ある意味異郷人としての眼差しから故郷を見ていたからこそあいう作品、故郷のイメージを生み出したのではないかと、気づきを待たのです。

ちょうど同じ時期に当館で地域おこし協力隊として活動している者が「やないづの家宝展」という事業を始めました。地域おこし協力隊の会津出身ではない人たちが柳津での生活や町民の方との交流の中で気づいた柳津の暮らしの魅力を発見していく事業です。齋藤清の眼差しと今の地域おこし協力隊の眼差しが重なっているのではないかと、目から柳津の暮らしの魅力、暮らしの傍にあった道具たちを発掘することの大事さ、意味に気がついた。そこで私たちは家宝展を美術館の事業として始めました。当館、柳津町では民具の調査はまだまだこれからで、やっとスタートに立った感じですが、こ

のライフミュージアムネットワークに関わることでスタートに立つきっかけを得られたのは、とても大きな意味があったと思います。

町として美術館としてまずはこの事業を途絶えさせず育てて、そこからこの5町村の中でいろいろな交流事業ができたらいいなと私どもは考えています。

川延

ありがとうございます。続いて只見の中野さんをお願いいたします。

### 今まで残ってきたものの価値観

中野陽介

只見町役場の中野です。今回参加させていただき、やっぱり奥会津という広い地域でありながらも非常に共通点があるということがわかった。一方で違いもあるなどあらためて実感させてもらいました。共通しているところは過去から現在まで引き継がれている、今日の民具とかそういったもの。それはそれぞれのいろいろな歴史、背景の中で形を変えているけれど、こういう社会でも残ってきている。これから将来に向かって不透明なところがある中で、今まで残ってきたものの価値観が面白く、次に我々が考えていく部分になっていくのかなと感じておりました。奥会津の可能性を感じるということになったと思います。

川延

ありがとうございます。続いて昭和は民具整理をテーマにお話をさせていただきました、松尾さんをお願いいたします。

### 残していく方法

松尾 悠亮

昭和村から来た松尾と申します。私は5回の中で柳津の回、もちろん昭和の回、今回の全部で3回参加させていただきました。伊藤さんもおっしゃっていたのですが、柳津の回は外から見た奥会津がテーマになっていて、私も地域おこし協力隊として昭和村にやってきたのですが、そうした視点で見ると、奥会津はすごく手仕事が残っていて面白い場所じゃないかと感じています。

前回昭和村の回、今回で残していく方法をいろいろ勉強させていただきました。なかなか難しいと思うのですが、特に今日あった話で、みんなが楽しんでやること、これは残そうと思っただけではなく、地域の中で楽しみながらやるというのが個人的にはすごく大事なことでないかと思っ、今日は勉強になる話を聞かせていただきました。

川延

ありがとうございます。今日は会場をありがとうございました。最後に五ノ井さんから一言お願いいたします。

五ノ井 智徳

金山町教育委員会の五ノ井と申します。よろしく申し上げます。今日は本来ですと、最初にお話があった玉梨地区の自然教育村会館で開催予定でした。そこにある民具、旧玉梨小学校を見ていただきたかったのですが、残念ながらこの雪。入るのも厳しくて、出るのも大変という



右:板橋淳也さん  
左:伊藤たまきさん

ことで急遽変更させていただきました。

このオープンディスプレイカッションに私も何か所か参加させていただきました。その中で思ったこと、面白かったお話をちょっとしたいと思えます。只見町に参加した時、昭和村の地域おこし協力隊の押部さんは民具の調査整理のために地域おこし協力隊として入っているということ、いろいろな民具を見ている中で、民具はもろろ自然の材料を使って作っているのが、自然にある形、突起物、根っこを使って、それをそのまま民具にしているという話をなされた。例えば芋を洗う芋洗棒など。また民具に合った材料を選んで使っているという話もありました。桑の木は漢方薬にもなるそうですけど、それを使ったすりこぎ棒ですりこぐと自然と一緒に削れて漢方薬が体に取り入れられる。そういう話が聞けて面白く思いました。

### 時代や使っている場所で変化しながら

これはオープンディスプレイカッションの話ではないですが、先ほど榎本さんの話にもあった通り民具の勉強会をやりました。金山町の創作研究会の方々が作っている民具は道具もきちんと作っていて、カッターできちっと幅を揃えて作っているの、見た目は立派で大変きれいです。弥平民具の中にある民具は昔の材料そのものの民具なので形が悪かったりする。時代や使っている場所や変化しながら今のようない民具に変わってきていると思えました。今にあった形が残ってきている。そう感じました。

柳津町に参加した時は、ニンギョウウマンギョウという行事が存続の危機に陥った時、しきた

りよりも、まずは行事を残していこうとした話がありました。地域によって材料や作り方がかきたりが違うのだけど、何かしらの形として残していくことがやっぱり重要で、これから我々がやっていかなくちゃいけないと感じました。

川延

ありがとうございます。五ノ井さんお忙しい中、何回かご参加いただき感謝しております。それでは、あまり時間がないので進行させていただきます。5町村の方々から今年1年間やっただご感想ご意見をちょうだいしました。今度、それぞれの方から他の地域への何か気づいたこと、感想、印象でも構いませんので、また一言ずついただければと思います。板橋さんよろしいでしょうか。どこの方にも構いません。

### 生活の中での楽しかったものを後世の人に残す行動

板橋

私の町も編み組を今も伝えて行っています。私の前職が生活工芸館勤務ですから、そこを観点にすると、どこの町村にもそうした文化がやっぱりあるのをつくづく実感しています。ただちょっと感銘したのは金山さんの地域の文化の残し方が魅力でした。うちの町が弱いところ。芸能文化とか、生活の中での楽しかったものを後世の人に残す行動、その取り組みに私は感動しました。うちの町はどうしてもそういうところが弱いものですから。どの町にもそういう文化はあるはずで、私たちの記録にもあるのですが、今後どんなふうにならぬ町の町村



中野陽介さん

の良さを自分の町に活かしていくかとかいう取り組みがこの事業を通して展開できればいいなと思っております。

川延

ありがとうございます。私も同じようなことを思っていました。松尾さんもさっきその指摘をされていましたけど。どうやって楽しんでやるか。楽しむことによって残すという手法の提言だったと思います。続いて伊藤さんお願いします。

## 知識とか思い、そういったものを残していく

伊藤

家宝展で町民の方たちが残している民具の調査をする中で痛切に思ったのが、どう残していけばいいのかということでした。私たちは民具を見せてもらった時にこのものを残したいなと単純に思ったのですけれど、ものを残すってどうしてもキャパシティ、管理の問題が難しい。どうやって町民の方たちが残しているものを伝えていったらいいのか、守っていったらいいのか。ずっと事業をやりながら悩んでいたことです。

昭和村でのディスカッションに参加した時、ものも大事だけど、ものの使い方、民具の作り方、そうした知識を伝えていくことも実は大事だというお話があった。その時に、私自身も大事だけど、何て言うのか、知識とか思い、そういったものを残していくことも実はとても大事なのだと気がつきました。残し方に可能性、希望が見えてきたような気がして、昭和村の回

がとて心に残りました。美術館に帰ってすぐ地域おこし協力隊の二人にもこんな話があったなんて言っていた。

今日も金山町のお話の中で金山町民芸品創作研究会の映像を見せてもらいました。やっぱりものだけじゃなく、ものの使い方、作り方を通じた交流の中で伝わっている。ああいうやり方、残し方、伝え方が、これから民具調査をしていく中でキーになる考え方なのかなと思います。今日もとてもいいヒント、気づきをいろいろいただきました。ありがとうございます。

川延

柳津の場合は美術館に協力隊の方がとても深く関わってくださっていて、よく機能していますね。中野さんよろしくお願いします。

## 文化活動の中にもう一回組み込んでいく

中野

今日の発表で弥平民具のカタタビザルの縁の編み方を知りました。只見でもみなさんカタタビ細工を作っているんですけど、僕は今回見せてもらった縁の編み方は初めて見ました。只見にもああいうのがもしかしらあるかな、調べてみたいなと思った。民具を見ながらみんなで研究するカタタビ研究会をやられていることも非常に面白いと思いました。只見町は三つの村が合併してきていて、現在でも各地区の意識は結構強いもので、民具保存会も三つの集落、地区ごとに分かれているのが現状です。そういったところを交流させることも課題で、今日の発表にあつたような研究会を只見でもやっ

ら面白いなと思いました。

大量に民具が捨てられる時代になってしまつて、私が勤めているブナセンターも教育委員会でも、民具をできる限り受け入れてはいますが、いっぱいでもう入れる場所がなくなつてくる。そうすると、いつまで集めるのか、どういう意味があるのかという話になってしまふ。そこにも今日のような活用方法、みなさんの文化活動の中にもう一回組み込んでいくやり方も非常に有効なかなと学ばせていただきました。

全体を通して、自然の観点が少し弱いというか、うちしかない。ブナセンターも自然環境の保護から始まった組織です。そこが只見町の強みかもしれません。奥会津の地域に還元できるところも多いのではないかなと思います。

川延

ありがとうございます。中野さんがおっしゃったように確かにブナセンターがあるということが奥会津地域の今後の強みになると思います。これからは自然の観点、民俗学的な視点ばかりではなく生態学的な目を持って考えていけるようになればいいと思います。ありがとうございます。もう一度松尾さんよろしくお願ひします。

松尾

これまで3回参加した中で、私が面白かったのは柳津の回で大里さんがニギヨウマンギヨウの話を読まれたことです。ニギヨウマンギヨウという地域の中の行事がなかなか難しくなっているのは藁の確保ができなくなつてきているから大里さんはおっしゃっていた。

カラムシからは離れてしまいましたが、私は最

百万遍とって大きい数珠を地域の人が輪になつて回しながら、なんまいだ、なんまいだと回す行事がある。三島町さんあたりはまだ続いていますけど、雑流しとかそういう冬の行事で春に向かうために気持ちを高めていく。正月のこつゆ、冬至に食べる冬至かぼちゃってわかりますか、アンコとかぼちゃで煮込んだような食べ物、そういうものも滋養を高めるというところで冬至に食べる。そういうものを残していくのがやっぱり大事だと思います。

金山町はその他の町村にあるような博物館、例えば生活工芸館であるとか斎藤清美術館、ブナと川のミュージアム、からむし工芸博物館とかそういうものがないんですけど、今日、本当は見えていただく予定だった教育村会館は遊休施設になっていて、今、実は検討委員会を作つて、どう活用していくかを考えています。いろいろなものも繋いでいけるような施設になればいいなと私は考えています。それに向けて町内で検討委員会を開いているところです。

## ネットワークがどんどん強まっていく

川延

ありがとうございます。すごいですね、金山が今度は一気にトップになるのかもしれない。

行事や食、冬の大切さなのでしょうね。今日はこちらどう周りを雪に囲まれた環境でお話してきて良かった。単に資料を並べるところではなく、地域の行事、食、季節感、そうしたものに横串を刺せるような場所が新しく生まれると素晴らしいと思います。もうすでにあるミュージ

ムにおいて、コンセプトを掲げて、みなさんと一緒にやっていけばネットワークがどんどん強まってくと思います。あまり時間もありませんが、お互いに聞いてみたいことがあります。いかがでしょうか。では、あえてぶつけますけど、中野さんから斎藤清美術館に注文とかありますか。

中野

僕から注文ですか。そうですね。斎藤清美術館さんは斎藤清の美術品を主に扱っていて、他の5町村にはない特徴のある施設と想っています。斎藤清さんも雪を象徴的に描かれていると僕は感じています。斎藤清さんの作品で奥会津の自然を象徴的に描いている作品、自然に特化した作品はありますか。人が入っている絵は多いと思うんですけど。

伊藤

斎藤先生は会津の風景をすごく描いていて、柳津町だけではなく三島も金山も描いているし昭和とか金山の方も描いている。先ほど人が描かれていると中野さんがおっしゃっていました。斎藤先生は会津の風景に関しては、ランドスケープではなくてやっぱり暮らし、ライフ、まさにライフ、生活を描いているのではないかと私は思っています。それが斎藤先生の会津の風景画の特徴ではないかと思うのです。

それがよくわかるのが、ご指摘もありましたように人、人の暮らしの気配を感じさせる景物が描かれている、洗濯物、ポスト、そういうものを見ていると風景ではなくて、そこに生きていく人を見ていたのかなと感じます。

すいません。私が見えなさんに質問してもいい

ですか。斎藤先生は会津の風景をいっぱい描いていると喋つたのですけれど、私はどこを描いているのかわからないところがあるのです。でも地元で生きている人が見た時、これはここだよねというのが絶対あると思うのです。5町村の方のこういうネットワーク、機会を得たので、ぜひ斎藤先生の会津の風景画を見ていただき、これはここだよねと教えていただきたい。逆にそれぞれの町村、例えば斎藤先生の描いた三島町を三島町の中で展示してみよう。ここは自分が住んでいる場所だなんて、町民の方々の話し合い、交流、そういうものができたらいいなと考えています。

板橋

逆にありがとうございます。ぜひうちの町でやっていただいて。確かに斎藤先生は三島に来てよく絵を描いている。三島町民はみんな誰もがわかっていました。例えばあそこは誰々の家だつて町民の人たちは知っている。それが時代の流れによってその風景がなくなってしまう。出前で三島に来ていただいて、斎藤清さんの三島の絵を再度認識しようというのはすごくいいなと思つているので、ぜひその企画を出していただければと思います。

伊藤

三島町民の方にも斎藤先生と会った方がいらつしやる。そのストーリーなども聞けるといいな。ありがとうございます。

川延

ぜひ奥会津の方のいろいろな情報を寄せていただければと思います。本当にそんな形にできる



右:松尾悠亮さん  
左:五ノ井智徳さん

近興味を持っているいろいろな人に聞いているのですが、昭和村ではカブニユウとかデエコニユウ、ダイコンニユウと言ったりするのですが、大根などを藁で包んで外においておく。すると雪が積もつて天然の冷蔵庫みたいになって、そこから冬の間に掘り出す。居間とかに置くと乾燥してしまうので、そういう保管の仕方をしてるそうです。カブニユウも最近では、そんなに大根も作らないし、ここでも藁の確保がなかなかできなくなつてしまつて、やるどころも少なくなつてきているという話を聞いています。ニギヨウマンギヨウ以外にもいろいろなお話がある。藁を巡るいろいろなことができなくなつてきている。今回参加させていただいてすごく勉強になりました。

川延

ありがとうございます。五ノ井さんにまた戻ってきました。お願いします。

## 雪とびつづき合っていくか

五ノ井

この前の只見町の回に中野さんが豪雪地帯の特性、そこからの地形の話を読みました。雪崩で山が削られて筋状になった雪食地形とか、モザイク植生ですか、雪崩が強いところとそうでないところ、木の育ち方、木の種類が違うという話をされていました。やっぱり奥会津は雪とどう付き合っていくか。奥会津5町村、どうやって冬を耐えて春に備えるか、冬をどうやって楽しむか。春に向けていろいろなことを蓄えていくのが冬期間であつて、民具作り、伝統行事は冬が多い。サイノカミ、だんごさし、

時間もわずかですが、最後にもう一つだけ。五ノ井さんが只見の回の押部さんの話からいろいろ素材の形を活かして民具にしているという話が興味深かったとおっしゃっていました。金山のマタタビ研究会、三島の編み組の蓄積、松尾さんのところのからむしが奥会津にある。地域の自然素材、人の技を使ってのものづくりというところが奥会津の大きな特徴だと思います。松尾さんから諸先輩に聞いてみたりしますか。松尾さんから板橋さんに聞いてみようか。

松尾

今日の金山の内容と関連してお聞きしたいことがあります。自然素材を使っていたいろいろなものづくり、奥会津はその文化が残っていると。私も実は1週間ぐらい前に藁の縄織りの仕方を昭和の方に教えてもらいました。

工芸品とか民芸品というとしてもお土産というか特殊なものになってしまおうと思うんですけど、この辺りは普通の生活でものづくりをずっとやってきたのが強いと思います。そこを踏まえた上で教えていただきたいのですが、2点ありまして、三島で工芸と言っているのはどういう意味なのか。特殊な意味になってしまおうのかというのが1点目です。2点目は、今回紹介されたような地域の人がやっていたり勉強会みたいなものを三島ではやっているのか教えてください。

### 使ってなんぼの世界が工芸

板橋

ありがとうございます。三島は工芸という言葉

ら世間話しながら、隣の人から昔ながらの使い方、やり方をみんなで聞きながらものづくりをする。それを来年の農作業の時に使っていく。これが我々の生活工芸運動の第一の重要なポイント。冬になると生活工芸館は1月から2月まで毎週土日はものづくり教室をやっています。みんな集まって、意見交換をしながら、今年はコロナ対策をしながらゆっくりと行っています。

### 地域の人みんなで考えるしかない

勉強会としてはものづくり教室をやっている。松尾さんの話で藁の話が出た。藁ってお米を取った後の藁ですよ。昔の人は、米を取るために藁を作っているのではないとよく言っています。ものづくりの文化の中でもよく話が出ますが、藁ですごく大事なもので、お米だけじゃなく藁を育てるのだと。藁はものづくりの基本、神の信仰、何にでも使うのです藁は。サ

イノカミにも藁を使います。

今は本当に藁がなくなりました。サイノカミは国の重要文化財に指定されていて1月19日に各地区で行われるのですが、今一番緊急の問題は藁がないこと。どうやって藁を確保するかが問題になっています。我々教育委員会は口を酸っぱくして言っています。地域の伝統行事なのだから地域の人みんなで考えるしかない。コンバインでやっちゃうから藁がないだけで、コンバインを使わないでとりあえず藁をみなさんで取りましようということも地域の伝統を守るための一つではないか。そういう指導、お話をしながら継承していくことを考えています。生活工芸というかものづくりは生活の中で生

葉は使いません。生活工芸という名前を使っております。なぜうちの町が生活工芸という言葉を使っているかというと、今日の金山のマタタビの勉強会と同じで、もともと生活の中で使われている道具なのです。こういう山ぶどうのバッグも今風にアレンジしているだけであって、もともと生活の道具です。私が尊敬しております、2年前に95歳で亡くなられた先生は生活のために作っていた。特にお歳暮、御年始、マタタビは日常にお米を炊くのに使うから、いつもこの時期、秋口にマタタビを採る。おまわりさん、お医者さんは大変、郵便局の人も大変、いつもの感謝の意を込めてマタタビのザルを毎年作って、先生お世話になりましたとお配りしていた。近所の人たちにもお世話になったとマタタビを渡す。隣の家の人はマタタビよりほうき草を使ったホウキを作るのが得意だからとものとの交換をする。生活の中で使われている道具だったからです。そういったものを大事にしようというのがうちのコンセプト。

先祖代々から受け継がれてきたものを使う。飾るのではないです。使います。使ってなんぼの世界が工芸だということを狙いとしている。だから生活工芸、あえて工芸という言葉を使わず、生活という言葉で付け足して生活工芸という名前です。

生活の中で生まれてきたもの、先祖代々から生まれてきたもの。やはり冬になると楽しみだというおじいちゃん、おばあちゃんがいっぱいいます。なぜですか、雪がいっぱい降って大変じゃないですかと聞くと、いや編み組ができるから。ゆっくり近所の人たちとお茶飲みながらものづくりをする。お互いお茶飲みながら

松尾

ありがとうございます。昭和村のからむし工芸博物館も工芸という名前がついているので気になって質問しました。ありがとうございます。

川延

ありがとうございます。あつという間に定刻になってしまいました。最後に榎本さんから一言コメントいただけますでしょうか。

### 今現在の地域にあるもの、ちゃんと見直す

榎本

私は過去のことを探るのが自分の仕事だと最初は思っていました。しかし、仕事を進めるうちに、それだけではないと思うようになりました。今現在の地域にあるものをちゃんと見直す、そういうことが必要なのだと思います。玉梨八町温泉開発組合、山入近隣会、金山町工芸品創作研究会のみなさんの活動もそうですが、金山町にも他の町村にも、地道な活動をしている方々の営みをきちんと見てゆく必要がある。

### 点と点を結んで、新しい反応を



しかし一方で、そうした地域の中の活動が、現在のものにせよ過去のものにせよ、他のものとうまく繋がっていないこともよくあるなどというのが私の実感です。過去のことと今現在の活動を3次的に繋いでいく。今現在の資源や活動という点と点を結んで、新しい反応を起こしていく。そこに過去を繋いでいくとさらに立体的で強い構造が生まれる。そうすることで、地域の深さや複雑さをもっと知ることができ、活かすことができるのではないかと最近では考えています。今回は扱うことができなかったですが、例えば金山町には他にも、昔語りの会による重要な活動があります。昔語りの会のみなさんは、金山に残る昔話を研究し、昔話を地元言葉で語り、子どもたちに伝えていく活動をしています。このような、町内のみなさんが取り組むそれぞれの活動を連携させてゆく。その活動に、民具、写真など、さまざまな町内の資源を組み合わせる。そこに可能性があるのではないかなと思っています。

川延  
どうもありがとうございます。まだこれからさまざまなご意見をいただけそうですが、ここからは次年度のお楽しみにしたいと思います。今日は榎本さん、お二人の栗木さん本当にありがとうございます。5人の町村のみなさんありがとうございます。

奥会津5町村も同じことで、行政区を超えた分担や連携によって、もっと面白いことができるのではないかなと思います。プナセンターで取り組んでいることと三島の生活工芸館の活動を繋げたらどうなるのだろう。斎藤清の中に描かれている山の形、木の形、家の形は自然条件とどう関わっているのだろう。そんな風に、町村を超えているいろいろ繋いでゆくことができるのかなと思っています。そうした試みから生まれるものが私は楽しそうだなと思う。そのためには今のことももっと知らなくちゃいけないなと思っています。



生まれた地域、生活している地域の再認識・再発見をするきっかけになったと思う。各地域に帰り、活躍してほしい。(70代)

もともとは冬期間に生活用品や農具を作っていたことに注目が集まり、いま光明を放っている。環境に負荷をかけない、修復が容易、実は使いやすい。循環型社会と言われて久しいが、もう本気で取り組まないといけない時期である。まだ存在する道具の復活が急務ではないかと思う。

奥会津において、残っている農具・民具などのモノと、それを使っている、使っていた記憶のあるヒトの両方を掘り起こそうとしたのがこの事業だったのでないかと思う。「未来を記録する」のような、新民俗学に値するのではないだろうか。(60代)

自分たちの生活が変化していく中で、どのように苦労して続けていくかが興味深かったです。昭和村にも地機講習会があり、先人から教えてもらうことはできますが、議論するところまではいっていない。学びながら議論し、工夫していく場所に興味があります。(40代)

改めて、奥会津は各町村単体ではなく、手を取り合っていくことが、モノ・歴史・人を次世代へと繋いでいくために不可欠ではないかと感じました。(30代)

## 第5回

「奥会津をつなぐ」に参加して

林あゆ美

いよいよ最終回。三島→柳津→只見→昭和ときて、金山にやってきました。数日前からの大雪で会場変更があり、旧玉梨小学校である金山町自然教育村会館の予定が、金山町中央公民館になりました。雪国とはいえここ2年は雪が少なく、豪雪地帯の奥会津をもってしても昨年はかなり少ない雪でした。今年はいつもの雪景色をみられる季節を迎えたわけです。

今回は2部構成となり、第一部では金山町玉梨地区での共同浴場や農村歌舞伎の文化、「村の肖像プロジェクト」のお話をうかがいました。私は毎回参加するときに、いま知っていること以上のことは調べずに、テーマもあまり頭にいれずに、頭の中はなるべく真っ白にして聞くようにしていました。開催される時間と場所だけ覚えておいて、あとは行ったときのお楽しみというわけです。そうすると、思いもよらない話を聞けるのが新鮮で、すごくおもしろく感じます。

今回のテーマは、共同浴場と農村歌舞伎。どちらも自分の好みどんびしゃり嬉しくなってしまう。ちょうど参加する前に、金山町の「せせらぎ荘」で玉梨温泉と大黒湯（天然炭酸水）に入ってきたので、既に体がこのテーマを受け入れる準備を整えていたように思えたほどです。大地の恵みともいわれる温泉ですが、金山町内には泉質の異なる温泉がなんと七つもあるのです。「プチ自慢ですが私はそのうちの六つに入ったことがあります。あと一つも近い

うちに入りたいです。)

金山町の映像アーカイブ事業（かねやま「村の肖像」プロジェクト）に携わった、新潟大学創生学部特任助教の榎本千賀子さんは、温泉の歴史や温泉を包括的にとらえる視点で話してくださいました。玉梨八町温泉の組合長、栗城辰男さんは、実体験である青年団で温泉を管理していたときに、温泉の清掃をしたあとや青年団の会議のあとには、参加した全員で温泉に入り（混浴）、仲間たちとの交わりがどれほど楽しかったかを教えてくださいました。残されている写真を拝見しても、みなさん本当にいいお顔。ちなみに栗城辰男さんは、いまでも一日の日課として夫婦でお風呂に入りに行かれるそうです。金山町には町民共同浴場が24時間開放されており（私も以前入りましたが、それはいいお湯です）。一日の終わりに三々五々町民がお風呂に入るといえるのは、すこやかでいいなあとおもいます。お福分けいただいた気持ちになりました。

榎本さんは、弥平民具についても話をされました。本来予定していた会場では、この民具コレクションがみられるはずだったので、話を聞くと「ああ、みなかった」と強く思いました。一般開放されていないためか、金山町の名産品でもあるまたたび細工をしている人でも弥平コレクションを「ご覧になっていない方もいるそうです。知られていくと観光資源にもなりそうです。

もちろん榎本さん自身も、もっと多くの人にこのコレクションを見て欲しいと思われると思います。玉梨地区の栗城弥平さんが私財を投じて、江戸時代から昭和初期に使用された民具を収集

されたコレクション、私もいつか必ずみたいです。

栗城英雄（てるお）さんは「山入歌舞伎」代表の方で、金山町の芸能について教えてくださいました。今から250年程前の江戸時代に始まったとされる「山入歌舞伎」は、かつては地区ごとに一座を組んで興業を行っていたほど栄えていたそうです。檜枝岐歌舞伎のことは知っていましたが「とはいえまだ見たことはいりません、金山も芸能文化が豊かだったことを知ったのも今回の収穫です。

金山町のふるさと発信事業の動画サイト説明によると、昭和20年代後半に一時とだえていた「山入歌舞伎」ですが、地区の人が平成2年に山入近隣会という組織を母体として復活し、平成14年には芸能伝承館も完成し毎年9月5日の「山入芸能発表会」で歌舞伎が演じられるようになったとあります。平成23年の新潟・福島豪雨災害以降、発表会が中止されていましたが、住民のみなさんが継続を願い、平成25年より再び上演されることとなったそうです。

動画サイトで稽古風景をみてみましたが、やはり実際をみてみたくなりました。コロナ禍の中、オンラインの世界が広がってはいますが、それ以前から配信サービスで映像をみる娯楽も増えています。それでも、生でみる娯楽の楽しみは大きいはず。だからこそ、住民のみなさんが「山入歌舞伎」の継続を望んだのだと思います。

名古屋で働いていたときに1年に1回大須で「ロック歌舞伎スパー一座」の公演をみるのが何よりの楽しみでした。棧敷席で頼んでいたお弁当をほおばり、ビールを飲みながら観る

ロック歌舞伎は仕事や日々の憂さを吹き飛ばしてくれました。いまでもその楽しみは自分の中に残っていて、いつかまた観たいと思っています。ですが、残念ながら現在は解散されその願いは叶いませんでした。継続していくことの難しさを感じつつも、「山入歌舞伎」は地域に根ざした芸能として末永く引き継がれていくことを願ってやみません。

第2部では、いままで5町村をまわってきた対話リレーの振り返りです。私自身もコンプリートした5回目の参加ですので、みなさんと心の中ではすっかり顔見知りの気分。お久しぶりですと言いたくなる近しさを感じながら、いままでのディスカッションを自分でも振り返りながら聴き入りました。

第1回の三島は8月の雨の日に工人の館で行われ、第2回の柳津は9月の青空が美しく、赤い柳津橋を眺めながら斎藤清美術館で話を聞きました。10月、第3回の只見はいいお天気。ブナと川のみこじアムというすばらしい場所での話を聞き再訪したい場所になりました。第4回の昭和は、喰丸小で銀杏の葉の絨毯をみながら話を聞きました。第5回、最終回の金山ではしんと雪が降る寒い日、町民公民館の中は温かく熱気がありました。

5カ月の旅（のように思えました）の楽しさを今も味わっています。

この対話がいずれも継続されますように。そして、その場にまた帰ってこられますように。



# 連続オープンディスプレイカッショ 連続オープンディスプレイカッショ 「奥会津の周り方」を終えて

本間 宏  
(福島県文化財センター白河館 参事兼学芸課長 / ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)

平成23年8月のはじめ、終わりの見えない被災文化財保護活動に憔悴しきっていた私のもとに、福島県立博物館(当時)の森幸彦さんから急報が届きました。7月末の集中豪雨により、奥会津がとんでもないことになっているとの報せでした。この年3月に発生した福島第一原子力発電所の事故をきっかけに、国内すべての原子力発電所は稼働を停止してしまいました。そんな中、夏季の電力需要に備えて貯水態勢を整えていた奥会津のダムに集中豪雨が襲いかかったのです。森さんとともに現地を訪ねた私は、変わり果てた只見線や小和瀬遺跡の惨状に、言葉を失うばかりありませんでした。

奥会津には、雄大な自然に培われてきた暮らしの息吹が色濃く残っています。水力発電事業との格闘と共存、人口減少・少子高齢化という課題に向き合いつつも、歴史的な風土をたいせつにしてきた地域でした。そこに降りかかった災厄。「文明は自然と共存できず、歴史との分断を促すだけなのか」と私は考え込んでしまいました。

しかし、奥会津は遅しかったのです。三島町は、昭和40年代にすでに民俗行事の映画制作や「ふるさと運動」を開始し、昭和50年代後半には地区プライド運動、生活工芸運動、有機農業運動など、住民参加による地域づくりを進めていました。そして、20年前に策定した「第三次三島町振興計画」に基づき、住民が「学芸員」となって地区の自然・歴史・文化をとらえ直す活動に着手していました。これは凄いです。第1回のオープンディスプレイカッショでは、「足元の泉を掘れ」を合言葉に進めてきた三島町の活動の背景に、産土

(うぶすな) 神を紐帯とした地域コミュニティが失われつつあることへの危惧があったと語られました。「ミュージアムは産土になり得るか」という赤坂憲雄先生の問いかけは、5回のオープンディスプレイカッショを貫くテーマとなりました。

私は文化財に関わる仕事を長く続けていますが、一般的に「文化財」と言うと、「貴重なもの」「珍しいもの」などという価値判断を伴うイメージが強くなります。しかし、その土地の人々にとっては珍しくなくとも、異郷者の眼には極めて新鮮に映るものがあり、それが美は地域特性を反映するものであったりします。第2回のディスプレイカッショは、柳津町の方々のお宅で大切にされてきた「家宝」に着目する「家宝展」を開催したやないづ町立斎藤清美術館で開催されました。土地に根ざす人々の眼と異郷者の眼が交錯することによって見いだされる地域特性は、新たな波を生み出していきます。

只見町で開催した第3回は、森と人の関わりを基軸に議論が展開されました。「山」を有することがお金になった時代は遠ざかり、人の手が「山」に及ばなくなったことによるさまざまな弊害が起こっています。森林保全の大切さが見直される時代に向け、森に生かされてきた地域特性を守るミュージアムの取り組みのたいせつさが再確認されました。

地域特性は、その土地の自然特性に応じた生活用具とその呼称、個人宅に眠っている古記録や古文書・古絵図・古地図、個人の写真やノート・手紙・スケッチ、学校に残る子どもたちの作品や寄贈された土器・石器、地図に表現されない地元特有の地名などの中にも

埋もれています。そうした「もの」の意味を未来につないでいくためには、そこに関わった人々の記憶を記録しておくことが重要になります。昭和村で開催した第4回のディスプレイカッショでは、民具や写真などにまつわる「人々の記憶」を掘り起こす実践例が紹介され、ミュージアムの仕掛け次第では、そこで生まれる「語り」が世代間・地域間の新たな交流を生み出していくという展望が示されました。

金山町で開催された第5回のディスプレイカッショでは、民具と手仕事、温泉、芸能などの存続が、地域のコミュニティをつなぐうえで重要な役割を果たしてきたことが語られています。そうした文化は、ヒトが動物として生きるうえでは最重要なものではないのかもしれない。しかし、ヒトは文化を有するからこそ「人間」なのであって、「いのち」と「くらし」に密着した生活文化の中にこそ、その土地にとってたいせつなものが眠っているはず。

大水害の翌々年、金山町の大塩地区を訪ねた私は、水位の下がった只見川の河原から60年ぶりに姿を現した共同浴場跡に接することができました。そこでは、昭和20年代と変わらぬ姿で、勢いよく炭酸泉が吹き出していました。「たつみ荘」の奥様のお許しを得てその湯に身をゆだねた私は、かつてそこで交わされたであろう人々の会話を想像し、「記憶をつなぐ可能性は消えていない」という希望を抱くことができました。5回にわたる今回のオープンディスプレイカッショは、そのときおぼろげに抱いた希望の針路を、具体的なイメージに昇華させてくれた機会だったと思います。



日時：2021年1月11日（月・祝）13：30～15：30

会場：二本松市市民交流センター第2会議室

講師：原田雄一さん（浪江小学校津島小学校を応援する会会長／浪江町商工会顧問）

三原由起子さん（歌人）

西村慎太郎さん（人間文化研究機構国文学研究資料館准教授／NPO法人歴史資料継承機構じゃんびん代表理事）

モデレーター：川延安直（福島県立博物館副館長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

報告：平澤慎（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

※参加者は来場による参加のほか、オンラインでもご参加いただいた。

#### 原田雄一

大学卒業後、浪江町の家業・原田時計店に入る。

2011年、原発事故により二本松市に設置した浪江町商工会仮事務所に移り、避難先でも会社を再開。

2012年にまちづくりNPO新町なみえを設立、初代理事長に就任する。

2012年、浪江町商工会会長就任。2018年に退任し、同顧問に就任。

2011年より、二本松の仮校舎で再開した浪江小学校・津島小学校の支援を続けてきた。

#### 三原由起子

浪江町生まれ。実家は浪江町にあった『乗り物センター三原』。

小学生の時に浪江町のふるさと創生事業の劇団コスモスに参加し、世代を超えた交流を深める。

中学時代の恩師に勧められ、高校時代から短歌を作り始める。震災後はいわきアリオスのタイムカプセル事業等に参加。

2013年に第一歌集『ふるさととは赤』（本阿弥書店）を出版。現在、現代歌人協会会員、日本歌人クラブ参与。

#### 西村慎太郎

歴史学者。専門は日本近世史。

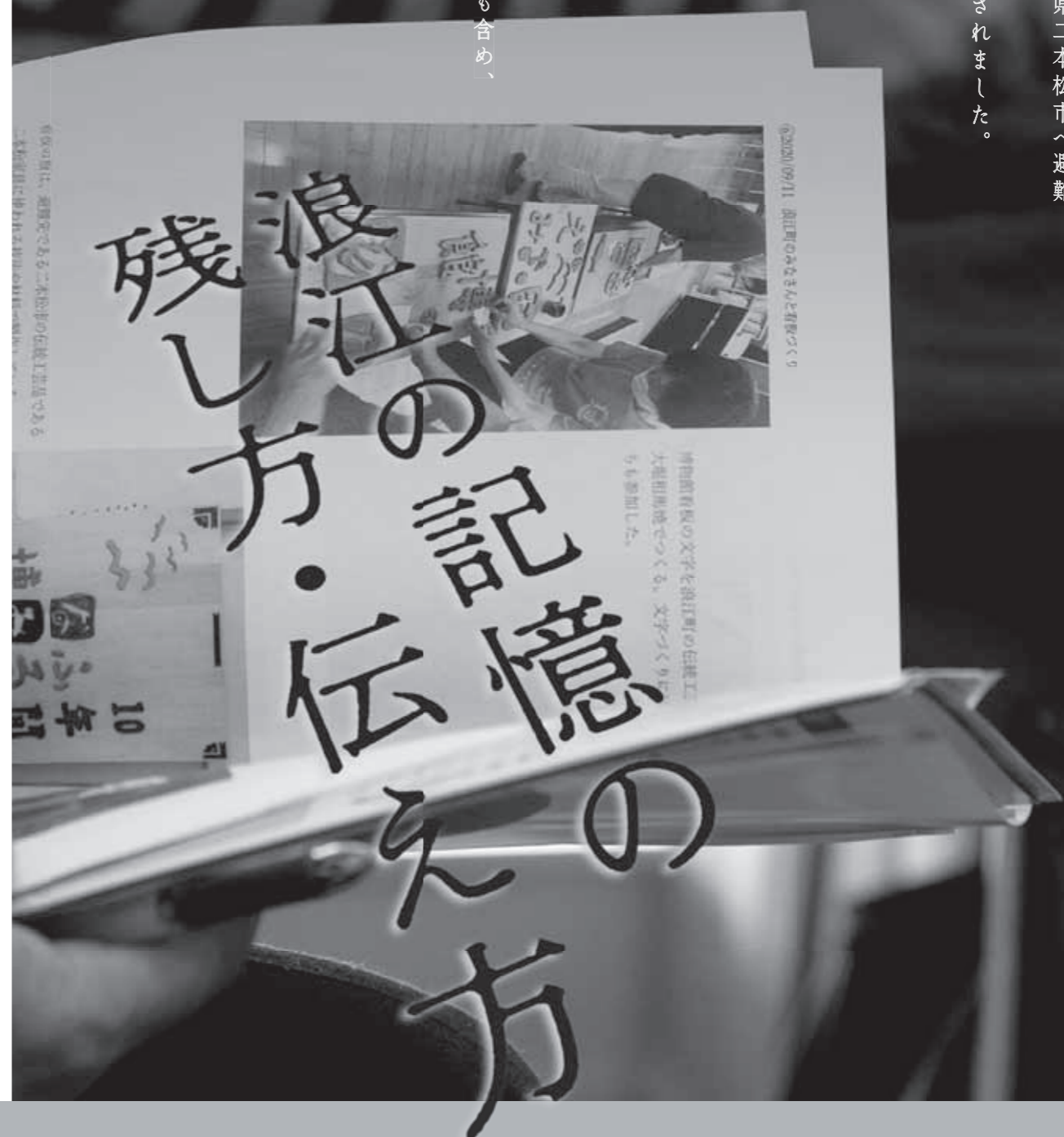
NPO法人歴史資料継承機構じゃんびんを立ち上げ、民家に残る古文書保存活動を行っている。

2012年より、浪江町・双葉町にまたがる両竹（もろたけ）地区の古代からの歴史と文化を継承しようとする活動を支援。

『大字誌両竹』を10年間で10冊刊行する企画を進行中。

『大字誌両竹』1（蕃山房）が2019年に、『大字誌両竹』2が2020年に出版された。

東日本大震災とそれに続く東京電力福島第一原子力発電所事故により、浪江町は全町避難となり、浪江町役場は福島県二本松市へ避難。町のみなさんも二本松市をはじめ全国に避難されました。浪江町立浪江小学校・津島小学校も二本松市に避難し再開されましたが、浪江小学校は昨年度で休校となり、今年度で津島小学校も休校となります。小学校が閉じることの意味や土地と結びついてきた伝統産業の在り方なども含め、浪江町の地域の記憶をいかに残し、伝え、未来の創造に繋げていくのかを、講師のみなさん、会場のみなさんとともに考えました。



事務局・小林めぐみ

ただいまより、ライフミュージアムネットワーク2020オープンディスプレイ「浪江の記憶の残し方、伝え方」を始めます。司会をさせていただきます事務局の福島県立博物館学芸員小林と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今日の趣旨を簡単に紹介させていただきます。私どもの博物館で事務局をしておりますライフミュージアムネットワークですが、今年3年目の活動になります。2011年に私たちは「いのち」であったり、みなさんが変化を余儀なくされた「くらし」であったり、そういうものがとても大切だったということ学びました。東日本大震災の経験・教訓を生かしてミュージアムとして何ができるのか考えた結果、みなさんと共有をして、未来を作ることに役立つ活動ができればということで、関係各団体のみなさんと連携しながら行っている事業になります。

今年度、この枠組みの中でプログラム開発という事業をしています。三つあるプログラム開発のうちの一つで、大堀相馬焼という浪江町の伝統工芸を取り上げています。避難されている浪江町のみなさんにとって、大堀相馬焼がどんな存在であるのか、文化財を通して町のアイデンティティを考えていければ、それが他のエリアにとっても何か大きな事故や災害が起きた時に、その地域の文化財、文化資源がよりどころになる、そのようなモデルになるのではないかと考えて、浪江のみなさんにとっての大堀相馬焼を追いかけたいと思います。

「ふるさとなみえ科」

浪江小学校、津島小学校という二本松市に仮の校舎を確保されて開校されている学校で取り組んでいらっしゃる「ふるさとなみえ科」という授業の中で、大堀相馬焼のことを児童のみなさんが学んでこられました。ライフミュージアムネットワークではプログラム開発の一環として、学校にとって、あるいは児童のみなさんにとって、大堀相馬焼はどんな存在なのかもお聞きしてまいりました。

浪江小学校は2011年に避難先の二本松市で再開され、昨年度最後の卒業生が卒業して、学校としては閉じられました。そして、もう1校の津島小学校も、今年度最後の児童となる小学6年生が卒業して閉じられます。現在、この10年間の活動を博物館というかたちで残す取り組みをしていらっしゃることで、その中でどうやって地域の歴史や、2011年からの活動を伝えていこうかと考えていらっしゃいます。その取り組みをみなさんにご紹介し、かつ、浪江町のことをどう残していけるのかを考えていきたい、そんなことをみなさんとお話しする場所を設けたいなと考えてまして、このディスプレイを企画いたしました。

この後、事務局と一緒にやっております福島県立博物館学芸員の平澤さんから、「ふるさとなみえ博物館」がどんな博物館なのかを説明させていただいて、それから講師のみなさんのお話をお聞きするかたちで進めたいと思っています。

講師のみなさまを簡単に紹介させていただきます。お一人目は今、お話ししました浪江小学校と津島小学校、二本松で再開されました二校、浪江中学校は浪江で150年ぐらいたった十日市祭というお祭りにはなくてはならない学校だったんです。というのは、その市と浪江小学校と中学校の子どもたちの作品を展示したり、そういうことでずいぶんおつきあいがありました。私、こちらへ避難して、どうしても十日市というお祭りを途絶えさせたくなかったものだから、あの年に二本松で十日市祭をやらせてもらったんです。それで真つ先に相談へ行ったのが、やはり、下川崎にできた浪江小学校だったんです。それ以来ずっと、私は何回も学校にお邪魔しました。あの当時、全国の方から浪江小学校を応援したいというオファーがずいぶんありまして、その都度ご案内したりしまして、結構つながりはあったんですね。

僕が立ち上げたわけじゃなくて、おそらくその頃応援していらした方が中心になってお作りになったんだと思います。私はただそこに名前があったもんで、知らず知らずのうちに会長をやらせてもらっている。これが本当でないかと思っています。応援したいという方々の中の末席に私がいたということです。

「応援する会」

先ほどご紹介しましたように、2011年かからずと、浪江小、津島小の応援をしてこられて、「応援する会」の会長さんをしてこられました。なぜ「応援する会」を始められたのか、

つの小学校を避難されている二本松市ですつと応援してこられた「応援する会」の会長であり、浪江町商工会の顧問をやっていらっしゃいます。原田雄一さんです。

原田雄一

原田です、よろしくお願いたします。

小林

お二人目は三原由起子さん。浪江町の出身で歌人でいらっしゃいます。言葉で浪江町を、ふるさとを表現してこられました。震災前後で表現してこられたことに変化もあると思います。表現することを通して、きょうは浪江町のこと、そして、浪江小・津島小の博物館についてもコメントをいただきます。

続いて、3番目にお話しいただきますのが、人間文化研究機構国文学研究資料館准教授でNPO法人歴史資料継承機構「じゃんびん」代表理事をしていらっしゃいます西村慎太郎さんです。西村さんは「大字誌」という本の制作に携わっていらっしゃいます。そこから、浪江町のことをいかに残し伝えていったらいいのか、小学校の博物館へのメッセージも込めてお話をいただく予定です。

西村慎太郎

西村です、よろしくお願いたします。

小林

それでは、ここで平澤さんから、浪江小学校、津島小学校の中にある、今作っていらっしゃる小さな博物館について、説明をさせていただきます。平澤さん、お願いたします。

「10年間ふるさとなみえ博物館」

事務局・平澤慎

ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局で、福島県立博物館の学芸員をしております平澤と申します。よろしくお願いたします。私から、津島小学校で作られております「10年間ふるさとなみえ博物館」について、なぜ博物館というかたちで、そしてどんなものを残していこうとしているのかということ、簡単に紹介していこうと思います。

まず、なぜ博物館なのか。二本松に避難してきた浪江小、津島小の10年間の取り組みを多くの人に見ていただいて、知ってもらう機会にしたいという思いから、博物館というかたちにしました。

なんのためにということについては、博物館の館長であります津島小学校の児童が自ら考えた使命をそのままお伝えしようと思います。一つ目が「二本松の浪江小、津島小の歴史を伝えるため」。二つ目が「10年間、浪江小・津島小の子どもたちがやってきたことを伝えるため」。そして三つ目が「東日本大震災で避難して、ふるさとがなくなり、悲しんでいる人たちを喜ばせたいという子どもたちの思いを知ってもらうため」。この三つを博物館の使命として、使命を実現するためにどんな展示としたらよいか、現在作業を行っています。

つながりの歴史

どんなものが展示されるかといいますと、二本松にきてからの10年間の浪江小、津島小の子



原田雄一さん

れてきたのかを教えてくださいませすしょうか。

## 特に義務教育の学校っていうのは地域がなくてはならない

原田

単純にいえば、子どもたちがすくくかわいかったということなんですけど、それでは理由にならないんです。やっぱり学校、特に義務教育の学校っていうのは地域がなくてはならないわけですね。あの事故でこちらに避難して、そういう地域の支えをなくした学校に、一町民として何ができるかと思つた時に、やはり集まつたみなさんと相談してできるだけ応援していきたいということが始めたと思います。ただ、いくらでも応援するのはやぶさかではなかったんですけど、決して学校の邪魔になるようなことはしたくない。ですから、「こんなことで困ってるんだ」とかね、そういうことがあったときは「みんなで応援しましょう」という、そういうふうなスタンスで今まで学校と関わらせていただいていたと思っております。

小林

今会場に来ていただいています浪江小、津島小の木村校長先生に昨年度のライブミュージアムネットワークの事業で「登壇いただきまして、二本松で開校されたからの取り組みをお話していただきました。そのときご紹介いただいた動画に原田さんの勇姿が映っていました。小学校で数名の子もたちと一緒に運動会に参加されていて、原田さんが走ったあとに見事にステンと転ばれていたような気がしましたが、

浪江のみなさんと小学生たちが和気あいあいのびのびと過ごしているのがわかって、すくくいい時間を過ごしてこれたんだらうなと思えました。

それでは、最後の質問です。そんな10年間を経て、これまでの10年間をみなさんに伝えたい、残したいということで、今年小学校では最後の一人になった小学生の館長とともに博物館づくりをしてこられているわけですが、だいたい8割、9割出上がった姿をご覧になって、原田さんはどんなふうに思われましたか。

## 考える一つのきっかけ

原田

博物館の看板を大堀相馬焼で作るという発想にはびっくりしました。私も一つ字を作らせてもらったんですけどね。この前ちょっとお邪魔して見させていただいたんですけど、嘉人くんが成長した、いろんなものに対して思いやりとか配慮を持てる子どもになったのを、ぼくはびっくりと感じたんですね。それはとりもなおさず、やはり校長先生はじめ、先生方のご協力といますか薫陶の賜物だなと実感いたしました。僕も学校の存続に関してはいろいろ手を打ったんですが、やはり僕は学校全体のエッセンスを浪江に持っていきたかったんですけどね。でもなかなかそれは叶わなくて。それがあの博物館に一つにまとめておられるということで、そこを一つ一つ見てもやはりこの10年間のいろいろが思い出されまして。

これは「記憶の残し方・伝え方」の一つの例だと思えますけど、もっと他のものに関しても考える一つのきっかけになってもらいたいな

と、そういう感じで見させてもらっております。

小林

原田さん、どうもありがとうございます。後半また、よろしく願いいたします。では、続きまして三原さんにお話しいただきたいと思えます。どうぞよろしく願ひいたします。

## プロセスを知りたい

三原

よろしく願ひいたします。三原由起子と申します。私は浪江小学校と浪江中学校の卒業生なんです。中学校時代に不登校になったことがあつ

て、それがきっかけで国語の先生に詩とか作文を書くことを勧められて、その延長線上で高校時代に短歌を作り始めて今に至ります。この前、

「10年間ふるさとなみえ博物館」を見学して、私が小学校の時にできなかった浪江の学びができてることがとてもうらやましいなという気持ちと、あと私たちが小学校の時に知らなかったことを教えてもらうことで、学ぶことがたくさんあつてとってもよかったなと思ひました。欲を言えば、作品を作る過程、プロセスを知りたいということ、作品を作る過程での思いや心が大切なので、作品とは別なかたちでそういうものを表現できたらいいんじゃないかなって思つたんですね。先ほど、平澤さんが展示案な



三原由起子さん

どもご説明してくださいんですけど、博物館を作る時の展示案も過程という意味で展示すると、もっと面白いんじゃないかなと思ひました。最近、東京ステーションギャラリーで「河鍋曉斎の底力展」を見たんですけど、それは素描とか下絵のみの展示で、そういうプロセスを展示することによってその人の力量みたいなのを表現していて、それとても興味深かったですね。だから、完成した作品だけではなく、そこに至るまでのそういうプロセスが見えたら、もっと面白いんじゃないかなと思ひました。

## 震災前に浪江を詠んだ短歌と、震災後に浪江を詠んだ短歌

次に短歌の話になるんですけども、「浪江の記憶」ということで、私は歌集「ふるさと」を2013年に本阿弥書店から出版しました。この歌集は16歳から33歳までの短歌を1冊にまとめたものなんです。そうすると、自然に震災前に浪江を詠んだ短歌と、震災後に浪江を詠んだ短歌というのが入っています。抜粋しますと、「たおやかにゆるるコスモスあぶくまの山なみに向く秋の知らせに」という歌があります。震災前って、本当に阿武隈の山並みが見えなくて、励まされるような思いがいつもあつたんですね。でも震災後に山っていうのが変わってしまったというか、線量が高い場所の象徴みたいなものになってしまった。例えば震災の時に浪江の人が津島の方に、山を目指して避難したということ、今まで穏やかだった山並みが急に違ったものとして見えてきてしまった。あと、震災前に詠んでいた「太平洋に向かってトウモロコシを食(は)む家族は同じ海を見ている」

という歌。棚塩海岸から私は海を眺めていて、

震災前のいい風景として、このことは今でも心に残っているんです。震災後に詠んだ短歌に海沿いの広すぎる空広すぎる灰色の土地、それも故郷」という歌があるんですけども、海が本当に穏やかなところから突然かたちを変えてしまったというか、震災前に詠んでいたからこそ、震災後のその海の怖さみたいなのをすくく実感しています。

次に、震災前に浪江を詠んだ短歌の中の2首を読みませす。「どうせすぐ潰れっべ」という団塊のおじさんたちのしゃがれてる声」「保守の強き地盤の上で生きている友の言葉に若さを探す」。震災前には実家がおもちゃ屋をやつてたということもあつて、浪江を盛り上げたという気持ちもあつて、商店街のイベントとかに参加したりしてたんですけどね。そうすると、やっぱり浪江で言う「おんつあま文化」にすこいぶち当たることが多くて。一度東京に出ちゃうと、その「おんつあま文化」にどうしても反発したくなつてしまつて。もうすこいつらいなと思つてた時があつたんです。原田さんは「おんつあま」じゃないから大丈夫です。

小林

福島以外の方に「おんつあま」について解説をせむ。

三原

難しいな。

原田

おじさんね。

三原

おじさんですけど、ちょっと意地悪なおじさんみたいなイメージですかね。震災前にその2首を詠んでたんですけども、結局そういうことが地続きで震災後につながつて、震災後に浪江を詠んだ短歌の「仕方ない」という口ぐせが日常になり日常をなくしてしまつた」という作品になったんだなということも思つたんですね。なので、震災前に持っていた違和感が震災後に、「ああ、こういうことだったんだ」ということにつながつたっていうのは、やっぱりそれは震災前から詠んでいなければ気づかないことだったなつて思っています。

震災後に浪江を詠んだ短歌で一番最初の歌なんですけれど、「iPad片手に震度を探る人の肩越しに見るふるさと」は「赤」。それは震災の当日、私その時原宿にいたんですけども、転職したばかりの時全然知り合ひがない状態で、たまたま同僚がiPadで地震の震度を探っているのをちょっと覗き見た時の歌なんです。それはやっぱり福島が気になって、福島を見たら、震度6強を表す赤の色が飛び込んできたっていうのがありまして、その瞬間を詠みたくて短歌にしたんです。

## 浪江が美しいと

やっぱり震災直後に浪江を詠んだ短歌を読むと、結構観念的というか、浪江に行く前は特に報道とかそういうイメージで、浪江っていうのはもう灰色のイメージだったり、もう浪江はだめなんじゃないかみたいな気持ちがあつたんですけど、震災後に浪江に行つた後に詠んだ短歌っていうのがあつて、「ひるが

える悲しみはあり三年の海、空、山なみ、ふるさと」は「青」という歌なんです。それはちょうど2014年の今日、浪江に行つた時に詠んだ歌なんです。それが「Google」の思い出というコーナーに書いてあつたんで、その部分を讀ませてください。2014年の1月11日の投稿です。

「今日は3年ぶりに浪江町に行きました。震災から3年間、怖くてネガティブなことしか考えなかつたのに、今日、浪江に行つたら、山の稜線や空や海の美しさに圧倒されてしまいました。悲しくショックなことを受け止めつつも、ふるさととは3年間放つていた私を今までのように受け入れてくれました。もしかしたらそれは震災から3年近くという月日がそうさせたのかもしれない。誤解を恐れずというと、ポジティブな気持ちになりました。ふるさとのことをあきらめかけていて、放射能汚染されていることはわかっていても、浪江が美しいと思えた自分に驚きました。これは行ってみたいと絶対にわからなかつた感情でした。」という文章があつて、行ってみたら本当に空がきれいだし、海もすこいキラキラ光つて。もちろん津波の被害とか原発の事故もあつて、私の中で行くまでは本当に暗い気持ちだったのが、行ってみたら全然印象が変わつたっていうのが、もう本当に衝撃です。それをどういうふうかFacebookでもなんでもいいから残してあることで、7年後の今日また振り返られるっていうのは、すこい大事なことだつて思つたんですね。

次に、小学校時代の恩師を詠んだ短歌というものがあるんですけど、今日は校長先生がいらっしゃってるんで、どうなのかなと思ひつつも讀ませていただきたいです。震災前、転職してす

「ごく悩んだときに、小学校のときの恩師が某小学校の校長先生をしてまして、私が悩んでいるのを知って、「じゃあ、校長室に遊びに来なさい」とおっしゃって。」「校長になった恩師を訪ねれば校長室で食べる給食」という短歌で、本当に給食を食べさせていただいたりとかして、「三原は池の中の鯨なんだよ」と励ましてくれてたんですね。それを震災前に詠んでたんですけど、震災後には「校長を退（ひ）きて原子力センターの広報となりし恩師は遠く」という歌になったんです。同じ人なんですけど、震災前には恩師の一部分しか見えてなかった。別に広報をやったことが悪いことじゃないけれども、原発事故によって恩師の別な面が見えたことで、ちょっと遠い存在になったような気がしたんですね。それってやっぱり震災前の記録を短歌として残していたことがあったからこそ、震災後にその先生のことをまた改めて考えさせられるきっかけになったんじゃないかなと思います。

あと、「みんな浪江のことだった」という短歌なんですけど。津島小学校の博物館にも子ども神輿が飾ってありましたが、お神輿をかつぐと十日市の時にお小遣いをもらえるんですよ。「わっしょい わっしょい」が疲れてきて、やけくそになってたっていうのがあって。それは私の世代もそうだったんですけど、大人になって、子ども神輿を十日市で見ている時に、やっぱり同じようにその歴史が繰り返されていて、それを一首にしたのが「子ども御輿のワッショイワッショイやけくそな掛け声さえも受け

て」

継がれている」という短歌なんです。やっぱり自分が子どもだったときと、今の子どもっていうのも結局あんまり変わらないんだなっていう気持ちも記録しておきたいなって。本当ちよっとしたことなんですから、そういう気持ちで作りました。

### 美化させないこと

そしてまとめです。一番言いたいののが、「美と美化の違いを想う美は真（まこと） 美化は偽ることと悟りぬ」という短歌を作りました。美化させないっていうことは大切なんですけど、美化させないっていうより美化させないことがすごい重要ななって思っています。

偶然にもまた、本当にこの日ために私は文章を書いてたんじゃないかっていうような、だから記録するってすごく大事だなって思うのが、2017年の7月25日「福島民友」の「みんなゆう随想」に書いていた一文です。それも読みます。「言葉にするのが難しい感情や美化したくなる感情と向き合いながら、できるだけありのままを生活者の私たちが記録していくことが後世への宝になると思うのだ。見えない心を可視化し、伝えていくことを大切にしていかなければステレオタイプの耳ざわりのよい言葉だけが後世に残ってしまうのではないかと危惧している」。2017年の私がこれを書いてるんです。まさに今、ここで言いたいことがそれなんですよね。

5年前ぐらいかな、県の高校のPTAで講演をさせていただいた後に、ある高校の先生から悩みを聞いたことがあって。作文を書かせるときに、「明るいことだけを書け」みたいなこと

礼を申し上げたいと思います。

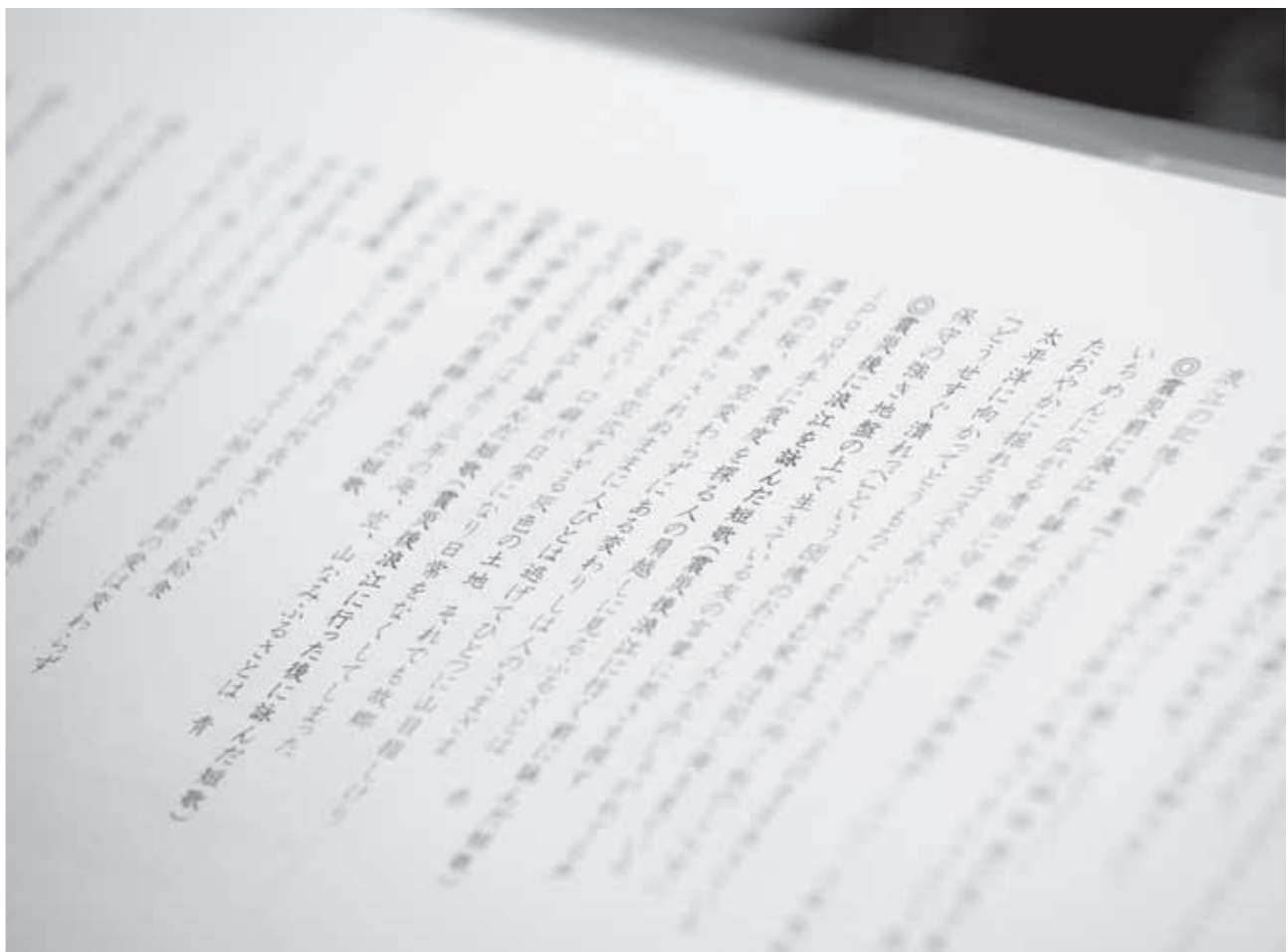
### 『大字誌』

今日まず自己紹介がてらお話をしたいのは、僕自身が浪江町と関わるきっかけになったのが、請戸地区の方々と若手の歴史研究者とで2018年に刊行いたしました「大字誌 ふるさと請戸」という本です。一緒に作った泉田邦彦さんが双葉町の両竹の出身で、「じゃあ、両竹地区でも何か作ろうよ」ということで、みんなで研究をしまして、「大字誌 両竹」というのを現在年に1冊ずつ刊行しております。本を刊行しつつ、月に2回ずつ地元の歴史に関するコラムを双葉町のポータルサイトで流させていただいております。現在、こういった大字といった単位の歴史の編纂は、もう一つ富岡町小良ヶ浜でも行っております。そういった比較的ミニマムなレベルの歴史の編纂というのをやっている過程で、今回こちらにお招きいただきました。

### 浪江の歴史の継承

今日のお話のポイントとしましては、「ふるさとなみえ科」の博物館について、まずは郷土史とか地域史の中に位置付けてみようと思っております。何よりも、あの博物館が重要なのは、地元の方と、小学校の子、先生たちが共同して一つのミュージアムを作ったということと。特にそれを浪江の歴史の継承ということをやっていることは、非常に意義が大きいと思っております。

その中で、学習の一つとして「なみえっ子カルタ」、すなわちカルタを作ることによって、



地元の文化とか歴史、自分たちの思い出を作ったということのような活動をなさっていて、これがいわゆる歴史学という歴史実践なんですね。歴史実践って何かっていうと、われわれ歴史研究者は研究をすることによって歴史を構築していく。博物館だったら展示とかたちで歴史を構築していく。では一般の人々はそういうところと離れているかというところ、そうじゃなくて、専門家ではなくても、例えばこういうところに来て浪江の歴史を改めて考えたりとか、浪江の史跡巡りをやったりとかすること、まさに歴史を実践していく。歴史家だけではなくて、一般の人たちも地域の歴史とか、あるいはもっと広い県の歴史とか、そういったものに触れるということも歴史実践という言い方がされております。この「なみえっ子カルタ」っていうのは、まさに地元の方と子どもたちが一緒にやって歴史実践を行っているという意味で非常に重要なな思っております。実際にカルタを作る。そして、カルタで遊ぶ。それによって地域の理解を深めていく。地域の歴史、思い出に対する理解を深めていくという点が、まず1点重要なな思っております。

もう1点実は重要なのが、「なみえっ子カルタ」の中でよく自身が非常に感銘を受けた句がありまして。それは「懐かしい 請戸の海で砂遊び」という句です。これ、なんてことないかもしれないけれども、子どもたちが懐かしいと思ってる、そういった思い出をその五七五に込めて詠んでる。今の小学生はもはや請戸の歴史、請戸の思い出がないので、「なつかしい 請戸の海で 砂遊び」っていうこと自体が重要な歴史資料。あそこで砂遊びしたことがすごく楽しかったんだということの後世に伝えて

いく、ある意味浪江の歴史の生き証人の最後の世代というのが、こういった五七五の中に預けられているなということで非常に感銘を受けました。

浪江の話から全国的な話に向けていきたいと思うんですけど、2000年以降、学校の学習指導要領の中でも、総合的学習の時間の中で郷土の歴史を学び活かしていくということが言われ、全国的に行われております。そのため、子どもたちが郷土史と触れ合うことが増えてきているというのが、一面であるかと思えます。

### 地域史とか郷土史というのは、衰退の一途を

一方で、現在、地域史とか郷土史というのは、衰退の一途を辿っております。この原因は二つありまして、一つは、今日は博物館学芸員、文化財担当者の方も多くいらっしゃいますけれども、この方々が非常に激務になっていて、地域の歴史、地域の郷土史を守っていくのが難しくなってきたりしていること。あともう一つは、学校教員自身が忙しくなってきたりしていること。もともとは学芸員の方とか文化財担当の方、あるいは小学校、中学校、高校の先生が関わって郷土の歴史を編んでいたのが、なかなか忙しくてできなくなっているという点があります。

また、全国的に図書館が指定管理者制度になることによって、司書さんが配置されないという事例も多く見受けられます。古文書を家で持っている、その保管方法や取り扱い方をどこに聞かかというところ、まず図書館に行こうっていうのが結構あちこちの地域で聞く話です。その

を言った国語の先生がいて、それで生徒は明るいことを書けないから、暗いことを書いていくと、「なんで明るいことを書かないんだ」とって言われて、悩んでる生徒がいるんですけど、どうしたらいいんですかって。だから、先生にもいろんな先生がいて。強いものに乗っかってうとする人もいれば、逆に弱者に目を向けてくれる人もいると思っております。

やっぱり美化をさせないっていうことがすごい大事なことなんだなって、その時に実感したし、「復興」を理由に全部なんでもよしみたいにする風潮もあると思うので、そこには抵抗していきたいっていうのが私の中にすごくあります。今までの私の短歌とか文章とかをこの機会にいろいろ振り返ってみて、過程を記憶したり記録するっていうことの大切さを本当に実感しています。何年か前に書いたことが、今すごい生きてきたりする。本当にそういうのを身を持って実感しています。

### 小林

ありがとうございます。伝え方・残し方も、伝える人・残す人の視点とか立脚点とかバイアスで姿が変わってきますから、すごく考えさせられるお話をいただいた気がします。後半のディスカッションにつなげていきたいと思えます。それでは3人目にお話を伺いたいと思います。西村さん、どうぞよろしくお願いたします。

### 西村

みなさん、こんにちは。国文学研究資料館の西村慎太郎と申します。どうぞよろしくお願いたします。まず、今回このイベントにお呼びいただきましたまして、ライフミュージアムネットワークのみなさんと、浪江町の方々に心からお





西村慎太郎さん

時に司書の方が対応してくださっていたわけですが、残念ながら指定管理という問題もありまして、なかなか司書の方に活躍していただく場がなくなっているという点があります。

この郷土史の衰退の話でいいいますと、2000年以降、三つ重要なポイントがあります。まず1点目が公務員の削減、これは小泉構造改革以来の問題です。2000年代に国家公務員は113万人いましたけれども、2011年、ちょうど震災の時には国家公務員は64万人、ほぼ半分になっております。国家公務員だけではなく、全国的に公務員削減になっている。そこで、もともとは文化財担当者が数人いたのがどんどん減っているという現状があります。

域とか中間貯蔵地域になったりとか、浪江でしたら防災集団移転促進事業の地域であったりとか、復興記念公園がこの後できてしまっています。

あそこに住んでたこの後の2世、3世の子たちが、そこをふるさとと思って興味を持つかっていうと、それはなかなか難しいだろうと思っております。

### わかりやすいものだけを残していくようにすると

そして、その中でもう一つ考えなきゃいけないのは、例えばわかりやすい残し方、浪江というと大堀相馬焼きだったり、請戸でいうと安波祭、大きなお寺でいうと大聖寺さんであったりとか、いろいろと思いつくものがあるんですが、わかりやすいものだけを残していこうとすると、どうしてもわべだけでペラペラな部分が出てきてしまう側面があります。

これは文化財的な話で申しますと、文化庁が平成22年に歴史文化基本構想というものを打ち立てて、各自自治体で総合的な文化財の保全と活用を考えましょうということを推進しました。これ自身は全然悪いことではありません。古文書だろが、お寺にある仏像だろが、さまざまなもの地域を大事に文化財として残していこうという発想です。東京都で唯一その歴史文化基本構想を作った日の出町というところは、非常に良い取り組みをしまして、地元の方々を巻き込んだかたちの文化財の保存と活用を考えようということ、地元の方々に「自分たちが持っている文化財ってどういうものがありますか」というアンケートを全戸に配りました。それに基づいて、地域の歴史文化とはどういう

関しては、最近行政学の研究で一切行政の効率化に結びついていないという見解が出ております。今、コロナの問題でも特に保健所に人が少なくなったという議論も出ていますが、ここに起因するのかなと思っております。

2点目の問題として、市町村の合併があります。これはもうみなさんご存じの通り、1999年に3232あった自治体が、2018年以降は1718。半分ぐらいになっているという状況です。福島県内でも市町村合併がありました。市町村合併によって、非常に広域化してしまっております。広域化したところ、しかも公務員削減があったんで、もともと各自自治体には文化財担当者なり、学芸員さんが1人ないし2人いたのが、広域化した大きな自治体で1人になってしまおうという状況が生まれてしまいました。そのために、なかなか自治体内の各地域に目配せがいなくなってしまうという現状があります。

3点目、先ほど学校の教員の勤務の話を書いていたのですが、2018年に文科省が出した学校教員の現状では、小学校では33%、中学校では57%が週60時間の残業になっております。ここではいわゆる三六協定とか労働基準法的な話は置いておきますが、要するにブラック企業に近いようなことが小学校、中学校で起きてしまっている。以前は小学校の先生にいろいろ聞くと歴史の話を教えてくれたり、そういった方々が地元の郷土史の集まりに参加してくださっていたのが、なかなかできなくなっているという現状があるということです。

### 浪江にとっての大きな財産

2回訪れたことがあって。これは大聖寺さんの山門入ってすぐのところにある石碑なんですけれど、京都のお公家さんの中院内府通茂という人物が詠んだ浪江の幾世橋の歌というのがありまして、それを馬場酒造さんの先祖の馬場房時が刻んで建てた碑であります。僕はもともと公家さんの研究をやったんで、この中院の歌碑があるっていうことにまず驚いて。「跡たえし ながらもあるを 幾世橋 いくよかわらず 残り残るらむ」「ここでは幾世橋を「いくよはし」って読むんですが、この歌を当時の相馬藩のお殿様であります相馬昌胤が、お公家さんの中院に自分のところの幾世橋について「その歌を詠んでくれよ」と頼んで、京都のお公家さんがわざわざ詠んだという歌です。これもある意味見やすい歴史かもしれないけれど、実際は浪江の方もあまり知らない。さまざまなコンテンツが浪江町には多く残されておりまして、ぜひこういうものを今後、子どもたちにも探してもらいたいし、大人たちもどんどん探していけるようなことができたらなと思っております。

最後にまとめですけれども、僕自身は「大字誌」というものを作らせていただいております。関係者がいたらぜひお話を聞いてほしいのが、浪江町は2017年3月までに浪江町文化財基本方針というのを策定しているはず。浪江の復興計画の中に文化財の基本方針というのを入れているはずなんです。残念ながら、浪江町がどういふふう文化財を残そうとしているのか、僕が不勉強なのかもしれませんが、なかなかわからない。ちなみにこの方針の策定にはまちづくりの業者さんが関わっていたの

そういった意味で、今回「なみえつ子カルタ」の話に限定してしまいましたが、「ふるさとなみえ科」の成果を継承していくことは、浪江の郷土史にとってとにかく不可欠なことであり、その成果と資料はやはり浪江にとっての大きな財産。これは子どもたちにとっての財産でもありますけれども、そこに関わった大人たちにとっての財産にもなっているだろうと思っております。近年では地域歴史遺産という言葉で、そこを取り巻く人たちがいて、初めて遺産として成立するんだという発想があります。やっぱりものを残すことと人々を残すこと、この二つが重要なんだろうなと思っております。

ここまでは浪江の状況、浜通りの複合災害被災地域全般のことでお話をさせていただきましたが、僕自身が東京にあります小河内ダムというダムの湖底に沈んだ村の子孫の3代目にあたります。おじいちゃんはダムの湖底にある村で生活をしておりました。小河内ダムができたのが1957年です。自分は当然ダムの思い出なんかありませんし、父ですらほとんどもう記憶にないようなところでもあります。そのダムに沈んだ村の歴史を残そうということで、当時1950年代に東京都の教育委員会が郷土芸能の調査を行ったり、あるいは山村民具の調査を行って、それぞれ無形民俗文化財と国の重要有形民俗文化財に指定されて、一応残されることにはなりました。

ただ、それは文化財行政というかたちでは残りましたが、ダム3世の僕からすると、僕らの心ふるさとは当然ダムの湖底ではない。この後、浪江にしろ大熊にしろ、例えば帰還困難区で、果たして僕が先ほどから言っている、見やすい、わかりやすい文化財ではない、さらに奥まったところまでやってきているのかどうか、少し気にならなっている部分であります。もしこの中で「ぜひ自分も『大字誌』をやってみよう」という方がいらっしやいましたら、ぜひ関わらせていただきたいと思います。いますし、何か浪江町で博物館の計画を立てたいっていうようなことがありましたら、ぜひ携わらせていただきたいと思います。所信表明演説をさせていただきます。多くの報告を終わりたいと思っております。どうもありがとうございます。

小林 西村さん、ありがとうございます。「ふるさとなみえ科」の博物館について歴史学者としてのコメントもいただきまして、ぜひ校長先生から館長にお伝えいただけたいと思います。そこからスタートして、浪江町のこと、それから被災地のこともどんなふう伝えていけたらいいの、いろんな可能性をお話しいただけた気がいたします。では、前半はこれで終了いたします。後半に移りたいと思っております。3人の講師のみなさん、ありがとうございます。

ここからは進行を担当副館長でライフミュージアムネットワーク事務局も務めております川延さんにお話しして進めていきたいと思っております。ではよろしくお願いたします。

### 川延安直

みなさん、ありがとうございます。お一人15分とは思えない濃いお話をしました。どこからお

ものであり、それを後世に残しましょうというような歴史文化基本構想を策定したんです。

しかし、実はアンケートがなかなか厄介で、地域の住民からすると目に見えやすいもの、例えば地元のお祭りとか、お寺とか里山の景観とかそういうものばかりになってしまっている。僕がやっているような古文書などは、ある程度の知識がなきゃ読み込めないし、そもそも博物館でも絵だっただけ見るけど、古文書をわざわざ見ようとする奇特な人間はあまりいない。読める人間が初めて読んで解読してわかるもので、なかなかとつきにくいと思えます。ただし、古文書に書かれていることというのは、地域の歴史にとっては非常に重要であり、そこに書かれていることから歴史を再構築できるかもしれない。今回日の出町は、そういった古文書に関する記述というのは一切なくなってしまうって、人々がわかりやすいものばかりになっちゃった。

### 自分たちしか知らない面白いもの

先ほどの「なみえつ子カルタ」は非常に面白くて、遊びと制作が非常に重要な教育だという話をしましたけれども、やっぱり次のステップが必要。「地元の郷土の歴史面白いよね」となったら、じゃあ、次にどういっかかっていうと、さらに自分たちしか知らない面白いものをどんどん発見していったらいいなと思っております。今日お配りしたレジュメの下のほうに、石碑の写真を配置させていただきました。この石碑、浪江の原田さん、三原さんにおうかがいしたところ、「初めて知った」と言われたんですが、僕はこの石碑を探すためにわざわざ

聞きにくいですが、まず、原田さん、三原さん、西村先生、みなさんがお話しになったことでもっと掘り下げてお聞きしたかった、確認したかった、そういうところはなかったですか。

三原 先ほど地域歴史遺産の話がありましたが、今の浪江の状況で、どうやったら、そういうのって叶いそうですか。

西村 いきなり何かをやるというよりも、地道にとかく1個1個重ねていくしかない。僕が作った『大字誌』にしても、いきなり『大字誌』作るぞ、ではなく、1個1個の調査、地元の人との絡み合いが必要。まずは1個1個やっていく感じ。

### 二本松の方々と交流の二つ

原田 小学校の博物館構想。それはとりもなおさず私たちが震災後、二本松にお世話になった、二本松の方々と交流の一つでもあるわけです。今まで私どもが二本松の方々からいただいた支援と、私たちがどんなことを二本松にさせてもらったか、そういうことも私はぜひ残したいです。私らはこの二本松という地域に突然来た。その中で二本松のどういう人がどう支えてくれたか、地域の交流とか、やはりそういうのを残したいな。

10年たって5%の人しか浪江に戻っていない。他の95%は町外に住んでいる。それは何なのか。そこをね、もう10年ですから、検証して

西村 それ自体、歴史資料ですね。

原田 ああ、そうかもしれないですね。ええ。

西村 実体験が書けるって一番強いですもんね。

原田 ええ。当時の子どもはそれしかなかったわけですね。まだ来て1年か2年くらいですから。

### 昔の自分に教えてもらえる

川延 三原さんのお話で「残しておいてよかった」とおっしゃっていましたね、Facebookの2014年を。

三原 まさに2014年の今日。びっくりしました。本当にこの時のための記録だったのかってびっくり。

川延 時々、そういう昔の自分に会うみたいなお話あるじゃないですか。

三原 ありますね。

川延 想定になかったと思いますが、そういうこ

いかなくちやならないと私は思っています。さつき三原さんが書いていた「仕方ない」ね、未曾有の震災だったからそれは仕方ないで、ぼくは済ませたくない。そうならないためにどんなことをすれば良かったのか、そういうことをやはり考えたい。仮定の話になるかもしれないが、それが今まで10年間、私や浪江に対していろいろなご支援をいただいた方々へのメッセージであり、恩返しかなと思っております。

川延 ありがとうございます。今回ここで話させていたでいる、この状況がとても特殊です。当たり前のようにやっていますけれど、浪江の話は二本松の駅前でしている。震災から10年という中で、あまり取り上げられてこなかったのが避難の歴史。学校の歴史も意外に残されていないと思います。

原田さんにとっては、もう二本松が懐かしい場所、いわゆる第二、第三のふるさとというのがあると思います。西村先生のお話にもありますが、「懐かしい」という言葉がとても大事だと思っています。三原さんは「見えない心」とおっしゃっていた。「見えない心」は文章化できない、語りとして残せないかもしれないけれど、そういうこと「懐かしい」という気持ちって、ちょっと近いような気がします。例えば原田さん、二本松に避難されてきてから、「ああ、懐かしいな」って思うことってありますか。二本松のことを。

原田 今はまだこっちはお世話になっているもの

とって震災の後には度々経験されますか。昔の自分の気持ちにまた出会うというか。

三原 ありますね。でも日々生きていると、こういう機会がないとなかなか振り返らないですね。振り返るきっかけがあったおかげで、今回も気づかされたことがあります。自分の歌集も、自分が書いたものってあんまり後から読み返したくなくて。正直ちょっと恥ずかしいし。だけど、時々自分の気持ちがわからなくなったり、パラパラめくってみます。そうすると結構、「ああ、あたしいいこと書いてんじゃん」とか思いますよ。「ああ、やっぱり変わってないな、自分の本質っていうのは。そんなに変わるものじゃないな」っていうことに気づかされる。だから、変化だけじゃなくて、変わらない核みたいなものを何年か後に確認できる作業でもあると思います。変化を書き残すとかじゃなくて。自分で書いたものに、昔の自分に教えてもらえるっていうか、また「これでいいんだよ」みたいに励ましてもらえるような感じだと思えます。

川延 歌碑を建てましょう。

三原 いやいやいや、そんな。でも、さっきの大聖寺さんの歌碑とか、いろんなところにあると思いますけど、やっぱり昔からやっている手段で残すっていうのは大事な事かなって思いますね。

で、思い出にまではなっていないです、正直言いますね。ただ、あの当時、避難の中で誰が生きているかわからない、情報が錯綜していた頃にね、ここでよく集まりをやっていたのです。その時にいつも、東和の方ですけど、お餅をついて持ってきてくれた。そういうあの当時のあの方々とのお付き合いはやはり懐かしいと思います。

川延 それは「なみえっ子カルタ」にあった「請戸の海で砂遊び」というのはまた違う懐かしさですね。

### 「で」っていうのは何なのか

原田 ですね。さっきの子どもさんの面白かったです。「懐かしい請戸の海で砂遊び」です。あの「で」っていうのがね、すくくこだわっちゃうんですけど、もし今、二本松で子どもたちが話すのだったら、「懐かしい請戸の海の砂遊び」になるかなと思った。

三原 そうですね。

原田 この「で」っていうのは何なのか。いろいろな意味を持たせる、面白い俳句というか、言葉だと思った。

### それ自体、歴史資料

川延 カルタについては、福島県博もお手伝いさせていただきますので、いろいろなお話を歴代の校長先生からお聞きしました。長い間作っていたのですよね。最初の頃の子どものカルタと後半の子どものカルタはやはり違う。「で」と「の」の違いが出ちゃっている。それはもしかすると、美化につながってしまう可能性を含むことなのかもしれないですが、西村先生が選んだようなカルタは、きっと最初の子、リアルな体験を持っている子のカルタですよ。

西村 そうですね。

原田 木村先生もご存じでしょうけど、あのカルタは何種類かありますよね。

参加者・木村裕之 そうです。

原田 最初はすくく生々しい、子どもたちの本当の思いが出詰まったカルタだったので。例えば「ルビー」を売っていた原田時計店とかね。多分「る」が思いつかなくて、作ったと思うけどね。「サンプラザで買い物」とかね、そういう言葉が端々に入っていた。だんだん最後になってくると、それが浄化されたというか、誰でも感じるような言葉になっていますけど、一番初めのは本当に面白かったです。もう涙出ましたよ、あれ見た時。







## 歴史を見直す

川延 西村先生、中院のお公家さんに依頼した相馬昌胤、あの人は歴史を作ろうとしていたのではないですか。

西村 そもそも相馬の家と、あと自分たちの家臣に對する思い入れが強かったのと、あとやっぱり自分が相馬の中興の祖だという意識もかなり強かった。例えば、今の幾世橋にある初発神社さんのところにかい御殿を建てたのですけれど、その額も京都のお公家さんからもらってきています。相馬藩として歴史や文化を構築しているという意識はすごく見えますね。

川延 タイミングを引き継ぐということも大事ですけど、どこかでそれを集約する時期も必要なのではないかな。

西村 そうです。歴史学的な話で言いますと、江戸時代のさまざまなタイミングに歴史を見直すというのが全国的に起こっています。まず、最初は江戸時代がある程度落ち着いた17世紀の早い段階から17世紀の後半ぐらいまで。あちこちで歴史を見直すというか、確認する作業が行われておりまして、それに類するのかなと思って見ておりました。

川延 10年目って、そういう時期ですか。

## お金に換えられないものがあるから残っている

原田 今、浪江のみなさんのいろいろなことを見てみると、文化財とかそういうものをお金で判断するような風潮がチラチラ見えてならないです。例えば、これを残したいけど残すには維持費がかかるから要らないとかね。なんで文化財を残さなくちゃならないのか、そういうことをもうちょっと、金銭的な面からじゃなく別な面から、町民というか僕らも考え直さなくちゃならない時期。10年を越しちゃったのですから。そうやって残していくことが大事じゃないかという気がします。全部お金に換算しちゃう。「お金ないから要らないよ」って。僕はそれがなんかね。

三原 同感です。

原田

もしお金だけで考えたら日本に文化財なんか残っていないはずだと思いますよ。残っていることは、お金に換えられないものがあるから残っているであって、それを今の私の世代で「お金がないから」と言ってなくすのか。もっと別な、頭を使って、県博さんにもそういうことをアドバイスしていただけたらありがたいです。僕らも本当に真摯になって、お互い腹を割って話す時期じゃないかと思うのです。

川延

いやあ、県立博物館もお金がない。残された

頭を使わないと。ただ、これも西村先生がおっしゃっていたように、お金だけの話ではなくて、体制自体が弱ってきています。

西村 そうですね。

川延

脆弱になっていると思います。だいぶ前の話、平成の大合併の頃の話をします。私もいろいろ県内の資料の調査をやったことがあるのです。何か所か取りつく島のないエリアがあった。例えば会津は民間の方でも熱心に勉強されている方が多いので、比較的教えを請うのが楽だった。とにかく難しいかったのが浜通りの相双です。誰に聞いたらいいのか。多分、昔は高校に歴史研究部とか地学部とかがありましたよね、その先生におすがりすればよかったですけど、震災の前の段階で相双はどこに行ったらいいかがよくわからなかった。もしかすると、今ここでこうしてお話していることの根っこも、それぐらい前からあったことかもしれないです。

原田

私の家内の方の親戚ですけど、祖先が相馬藩のある程度の人で古文書がいっぱいあった。でも今、家の解体が進んでいるじゃないですか。いわきに避難しているので自分のところにも置けないもので、町に寄贈したいと思った。でもやっぱり「置く場所がないから要らない」と言われて、涙こぼして話しています。

西村

実際、大熊で解体除染が進む中で、歴史資料

の救出をさせてもらっているのですが、やっぱり町にそんな余裕はない。ですが、解体除染されるのだったら、帰還困難区域で入ることができない公民館とかに一度入れて、また機会があったら別に移すという段階を踏むこともできます。浪江町は各大字がすごくいろんな歴史を持っている。古文書だったり民具だったり、さまざま持っているところなので、ぜひ今後はそういうことをやるように訴えかけていく必要があると思います。こういった場も重要だと思います。

川延 今、先生は大熊で活動をされていますが、何かアドバイスはありますか。

西村 一つ、場所が実は全国的な問題でもあります。毎年必ずどこかで水害なんなり起こります。それで歴史資料の救出をしても、やっぱり置き場が何よりも問題になります。人は集まる、お金も集まるけど、置き場がない。一方で、大熊の場合良かったのは、廃校あるいは公民館、まだ帰還困難区域なのでそこには誰も入らないというところとにかく入れちゃう。入れてからまた考えようという手順を取ったりしています。浪江が本場に「文化財レスキューやるぞ」となったら、集まる人は集まってくると思うし、後押ししてくれる人は多いと思うので、後はやる気を見せるかどうかかなと思っています。

原田

ただ、これだけ解体が進んでいますとね、相

## いつかのために、誰かのために、残しておく

川延 「失われたもの」と言うと、そもそも風景が大きく変わっていますね。特に双葉のあたり、浪江も双葉に隣接するあたりは、風景自体が根こそぎ変わる状況。そういう中で、先ほどの「懐かしさ」を思い出すのを、どうやって維持していくのか、とても難しいと思います。いろいろな文化財が仮に失われたとしても、山河が残っていればいいのかもしれないけれど、それもなるとなると、どこに拠り所を求めるか。そのあたり、三原さんは何か思うところはありますか。

三原

私は思うのですが、タイムカプセルみたいなイメージをしていて、というのは例えば「美化させないことが重要、醜さも認める」みたいなことを書いていますけど、今生きている人が今の醜さを出すと、関係が悪くなる人もいるわけですよね。「懐かしさ」といっても、私も「おんつあま」への文句を書いた短歌とかありますし、人に言えない懐かしさがあるかもしれない。美化をしないためにはそういう本音で言葉を残さなきゃいけないと思っていて、でもそれを今生きているうちに出してしまうと、いろいろな弊害があって、気まづくなっちゃったりするじゃないですか。

だから、それこそ古文書みたいになんと残しておけば、50年後、100年後、自分が亡くなった後でも、「こういう一生活者がそういうことを書いていた」みたいに、それは資料になる。だから、今それをさらけ出すためではなく、

いつかのために、誰かのために、残しておくのがすごく大事じゃないかと思うのです。だから多分、浪江の人も避難とかいろいろながあって嫌な言葉を投げかけられ、嫌な思いをしたこともあったと思う。それを飲み込まないで、ちゃんと「人間はこういうときにこういうことを言うものだ」みたいに残しておく。それを今発表しなくても、書いて保存しておけば誰かが50年後に見つけてくれて、「ああ、やっぱりこういうことがあったんだ」と。結局、記録しなければ伝わらないわけだから、本音でどこかに書いておくのが大事じゃないかと思っています。

川延

その「本音」とおっしゃるところが、きっと三原さんのおっしゃる「美は真(まこと)」「美は偽り」と。美化は偽り」と。

三原

そうですね。今「復興」というと、美化することばかりの復興になっていて。ずっと前からある文化財を美と仮定すれば、すぐ更地にして新しい建物を建てれば復興みたいなやり方は、本当に「美化」というか、嘘、偽りの感じがする。私は浪江小中学校の解体を延期してほしいという署名活動もしたのです。防災コミュニティが大事でそれを作るから壊すのだということになっていきますけど、でも、なんで学校の跡地じゃなければいけないのか。学校を残す前提で考えたら、そういう話にはならないと思うし、もともとのその土地の美しさをちゃんと行政、町民も見極めることをしなきゃいけないと思います。

川延

ありがとうございます。

西村先生の「大字」は、自転車で回って散歩できる範囲。大字誌は身体感覚としてのふるさとの歴史だと思うのですが、そういうものをこれからの浪江にまたもう一度持つてこられるものでしょうか。

**できなごじつは絶対ない**

西村

というか、むしろ、このタイミングでやっておかないと、完全に失われてしまう恐れがあると思います。すでに解体除染が進んでいる地域で、「これから、『大字誌』やります」と言っていて、果たしてできるかどうか、少し手遅れになりつつあると思っています。ただ、前向きな言い方をすれば、今回出している両竹も区の資料は流されちゃって、本当にわずかなところから紡ぎ出して作っているもので、できないことは絶対ない。最初から諦めるのじゃなく、なんらかのかたちで浪江の中の「大字」を残していこうということはやっていた方がいい。

川延

復興記念公園ができます。あの場所に立って思うのは広島市の平和記念公園です。平和記念資料館の方に教えていただいたのですが、「ここはもともとこんなにきれいな公園だったので、被害が少なくてよかったですね」と、修学旅行生が言っているというのです。そこはまったく大きな誤解で、これからできていく県内の記念公園もそんなことにならないようにしたいと思いますね。そのために小さないろいろな暮らし

がどうそこに残されていたかを残していかなきゃいけない。「大字誌」はとても大事な仕事をされていると思います。

西村

ありがとうございます。

川延

Zoom もつないでいただいていますから、カメラの向こうの方の「質問もお受けしたいと思っています。もちろん会場の方も。どなたかお聞きしてみたい方いらっしゃいますか。」

三原

そうですね。じゃあ、浪江の写真を振り続けているカメラマンの中筋純さんにお話を聞きたいと思います。

Zoom参加者・中筋純

こんにちは。原田さん、お世話になりました。ご無沙汰しております。

原田

ごちようや。

**震災当時の町民文化、大衆文化、そついったものが**

Zoom参加者・中筋

2013年からお話をいただいて、町の記録を撮らせていただいています。僕は和歌山出身ですけど、和歌山市の南の海南市の商店街の姿と規模が浪江町のものすごく似ていて、自分のふるさとがもしこうなったら、おばあちゃん



住んでいた海南の町ってこんな姿じゃないかって、そついった気持ちですつと撮り続けてきました。今、文化財の保存の話いろいろされていたのですが、撮影をしていくうちにいろいろな浪江の方、浪江を含めいろいろな浜通りの人とお話しさせてもらう機会があって、「どっかの路地裏にあった「飯屋さんの「飯が懐かしい」とか、「浪江の夜の町が楽しかった」とか、ちょっと偏っているかもしれませんが、そついった話もいろいろかがありました。震災当時の町民文化、大衆文化、そついったものが原発の事故で一瞬にして奪われてしまった。例えばそついった味の再現とか、そういうことにも取り組めたらなんて、すつとく壮大なことを考えています。

三原

中筋さんは浪江の商店街を Google のストリートビューみたいな感じで再現するために、ずつと力二さん歩きで一軒一軒の区画を撮って、年々追いついていってらっしゃる。解体が進んで、どんどん商店街が歯抜けになっていく姿もずつと記録されている。それもプロセスじゃないですか。それをちゃんと残しておくことがすつとく大切。中筋さんに出会えて本当によかったと思っています。

中筋

三原さんの「ふるさと赤」の結びの作品「二年経て浪江の町を散歩する Google ストリートビューを駆使して」。その短歌をもとに町の記録を Google みたいにはできないかなと。作品が 7.5m ぐらいになった。写真展の会場でその 7.5m を歩きながら見るといって、ちよつと

変わった体験をしてもらいます。町の中に来た人が溶け込んでくれるというか、来た方が浪江の町に体を置いてもらうような疑似体験をしてもらって、さらに自分の故郷に思いを馳せてもらえたらという願いで、一編の短歌から、今現在進行中で制作させてもらっています。

三原

ありがとうございます。

原田

今でも撮っていらっしゃるんですね。

三原

今も撮っていらして、最近だと私の実家の「乗り物センター三原」が解体されるところもちゃんと撮ってくださった。解体期限が迫るにつれどんどん解体されていって、商店街とは言えないような雰囲気になって、それがとても悲しいです。ただ、撮り始めた頃はまだ壊されていない商店街が残っている。朽ち果てていても、まだその時代を感じることができて、その記録をしてくださっていることが、本当にありがたいと思っています。

中筋

7年間ぐらい頻繁に通っちゃって。世界をいろいろ旅行していたんですけど、気がつけば浪江町に通うのが一番多くなった。和歌山、東京八王子、その次に浪江町。第三のふるさとみたいな感じになっちゃっているような現在があります。

小林

**可能であればその時の物理的な引き出しに**

木村

「どう残したいのか」、難しいですねえ。避難先再開校の浪江小学校を卒業していった子どもさんは39名。津島小学校を卒業していったお子どもさんは、今度の須藤嘉人くんが4名。合計で43名の子どもたちがこの避難先再開校を卒業していくことになりました。その43名のほとんどが現在も避難先で生活をしているため、中学校生活及び高校生活、その後も浪江町で生活することはほとんどないというのを考えると、しばらく本校で取り組んできた「ふるさとなみえ科」のような、浪江の文化に直接触れることってなかなかなんだと思うんですね。これまで原田さんや橋本さんなど後援の方々にお手数をおかけして、できるだけ本物の体験をしてもらおうというので取り組んできたことがなくなるんです。が、本物の体験の分、ちゃんと彼ら一人一人の引き出しの中にしまわれるんだらうなあって思っています。

それがおそらく、10年過ぎてたのか、20年過ぎてたのかわかりませんが、浪江を再び訪れた時ですとか、浪江の方とまた触れ合った時に、その引き出しを開けてくれるって思うんですね。そのときこそ、この学校での経

験を改めて自分で結び直す、つなぎ直すことよって、本物の浪江の文化を理解する時になるのかなと思っています。博物館は、もし可能であればその時の物理的な引き出しになってくれるといいなと思って、今、残そうと取り組んでいます。やがて、どういうかたちになるかはわからないんですけども、今回作った博物館は浪江の町に引き取ってもらって、物理的な引き出しがいつでも開けられるような状態にしておいていただけるといいなと、今、教育委員会をお願いしているところです。

Zoom参加者・原田洋二

ありがとうございます。その辺りは町の方とお話をされているんですね。

木村

はい。お願いしています。一つの部屋に全部集約するので、これをなんとか町の方に持ち帰ってほしいということをお願いをして、「わかった」と言っただいておられます。

川延

会場の方からも何かありましたらぜひ。

参加者・橋本由里子

応援する会の副会長をやっております橋本と申します。今日、本当にいろんな情報があったので、とってもよかったです。浪江小学校、津島小学校は博物館として残すんですけど、中学校も6年なり7年の歴史があったと思うんです。中学校はどうなるのか、どなたかご存じの方いたら教えてくださいたいと思います。

木村  
わからないですね。

橋本  
では、もう一つ。中学校には生徒たちが作った素晴らしい校歌があるんです。それをなんとか残したいという相談を受けているんですけど、私は誰にこれを伝えていいのかわからなかったもので、今日はすごくいいチャンスだなと思って発言させていただきました。よろしくお願います。

### 『未来の光へ』っていう歌

原田  
それでは追加でいいですか。実はそれは校歌じゃなくて、『未来の光へ』っていう歌。ちょうど震災から4、5年たった時に、浪江中学校の子どもたちが作詞をして、担当の音楽の先生が作った歌があるんですよ。素晴らしい歌です。それをね、ぼくは創成小中の校歌にしてもらいたかったんですけど、もしそうだったとしたら、子どもたちが作った歌がね、校歌になるなんて、すごいことだなと思ってたんですけど、やっぱりそれは残念ながら町の方針でできなかった。

あれをね、ぼくは第二校歌としてね、いつでも歌える状態にして学校に残してもらいたいです。町長にも頼みました。教育長にも頼んだけど、なかなか返答をもらえなかったです。でもそれは絶対やんなくちゃならないことだな。ちなみに避難した浪江の文化的な遺産の中で、一番にあげるぐらいのものではないかと思っています。

やはりいつも思うんですけど、10年たってみ

すし、短歌というのをどれだけの人が受け入れてくれるのかっていう。そういう部分ではもう少し、短歌だけじゃなくて短歌プラス文章とか、いろんなことで読んでもらえる努力をしなきゃいけないっていうのは、いつも考えています。

### 「うつつい面白いですよ」浪江に残ってるんですよ」

西村  
僕は少し感覚が違っている部分があります。出身地ではないからさらにその差もあるかもしれないんですが。僕も完全に外部の人間ということでお話聞いていただきたいんですけど、僕はあんまり使命感を持ってはやっていなくて、やっぱり地域の歴史が面白い、例えば、請戸の歴史が面白いっていう興味本位から入って、それを地元の人と一緒に「これ、こんなに面白いです」「こういう面白いものが浪江に残ってるんですよ」という感じ。浪江の何かを残していくというのはその後で、やっぱりわれわれ歴史研究者からすると面白いことを伝えたい。使命感とか義務感とはやっぱり違って、もしかししたらそれは批判されるかもしれないんですけど、そっちの方向でぼくは考えてました。

原田  
私は自分の町と次の次の世代とか、そういうかたちで残していくには、どうやって伝えたいかということを繰り返し考えてきました。

今の話ですとね、この10年が経って、浪江の町の現状はどうだったとき、何を発信しなくちゃならないか。そこにやっぱり立場とい

て、文化もそうですけど、いろんなものに関して、町はもつとメッセージを出してもらいたいですね。僕はそれを町民が望んでるんじゃないかなと思う。これは文化と関係ありませんけどね。

橋本  
一緒に頑張っていけたらいいなと思います。

三原  
やっぱり10年前に、いろんな課題が実はいっぱいあるってことが、すごく見えているんですよね。それをみんなで洗い出して向き合っていけないと、今までの私たちが住んでいた浪江町が否定されるというか、なくなっていくような危機感を感じています。

原田  
二本松に「しあわせ運べるように合唱団」というのがあって、佐藤敬子先生の方がやってらっしゃるんですけど、その合唱団がいるんだと行って歌ってくれてるんですね。すごく評判いいんですよ。肝心の町の方があれなんですけどね。

川延  
西村先生、全国的なケースとして、統廃合が進んで学校がどんどん減っていますが、校歌の残し方の事例は二存じないですか。

西村  
学校の校歌だけで展示を作って、どういうレーズが多いかランキングをつけたりしている県があって。あれは長野か。長野ですと、北の

うものがあると思うんですね。例えば現状を見て、「道の駅できました」「何々できました」「電車ができました」「こんなふうになりました、ありがとうございました」という言い方なのか。それとも、町はこうなっているけれど95%は町に帰っていない。その人たちが、いつかみんな帰って生活するんだとは思っていない、もうそこで諦めて、ここでもう死ぬまでいるしかないんだっていう状況がほとんどだと思うんですね。そういう状況を伝えるのか。これすごく難しいと思うんですね。私はやっぱり後者の方になってしまふ。なかなか帰れないものですかね。

では、そうならないためにどうすればよかったのか。よく「福島を忘れない」「原発を忘れない」と言葉がありますけれども、私はそうではなくて、今までの過程を忘れない、それを忘れないでもらいたいっていう思いがあるんですね。それをどうやって自分で作り上げていくかと、こうして今いろいろやっているんです。それを、今まで避難してお世話になった方々へのメッセージにさせてもらいたいなと、そんなふうな感じでやっております。

川延  
間もなく時間になってしまいます。最後にもう一度、一言ずつ頂戴したいと思います。西村先生から。

### 浪江の歴史の中に二本松は入ってるし、二本松の歴史の中にも浪江が入ってる

西村

方へ行けば「八ヶ岳」がどうのこうのとか、「千曲川」どうのこうのっていう歌詞が出てくる。そういったかたちで楽譜と歌詞の収集をやったりしていましたね。

今のお話でいうと、音声データや楽譜を残すことが多分重要。手軽に YouTube にあげるとか、いろんなかたちで媒体はできると思います。

川延  
保存するのは、今はそんなに難しくない。どちらかというところ、聴いていただける機会をどう捉えるかですよね。

### 校歌っていうのは世代を超えて歌える歌

三原  
新宿の「うたこえ喫茶ともしび」(現在は閉店)で、浪江の小中学校の校歌を歌う会を震災後何回も開いていたんです。そのきっかけが、浪江町出身の吉田正勝さんという方が「うたこえ喫茶ともしび」の歌手をされていて、ふるさと浪江会という会合で正勝さんと知り合って。校歌っていうのは世代を超えて歌える歌なので大事にしようということで、交流会もやってきました。そういう場で、みんなで歌い続けていくというのも一つの残し方なんじゃないかなと思います。

川延  
そうですね。

### 「受け取り方」

参加者

埼玉で復興支援の団体をやっております。誤解しているのかもしれないですけど、今日のこのタイトル「浪江の記憶の残し方・伝え方」は、浪江の次世代への伝え方なのではないでしょうか。私自身は浪江から我々のような外部の人間への伝え方というニュアンスを受け取って参加しています。そういう意味で言わせていただくと、私たちに「残し方・伝え方」の他に「受け取り方」があるんですね。それをどういうふうにしたらいいのか。今、全国で震災の記憶の風化が言われていて、それをなんとかしたい。だから今日もこうして、どうやって受け取れるのかと、思っているんですけど、なかなかこれができないんですね。

例えば三原さんの歌集、ぜひ読ませていただきたいと思うんですけど、なかなか手に取る人はいないんですよ。これは三原さんの責任じゃないんだけど、受け取らない人間の責任だけではない。あの時、日本中の国民が一瞬だけ自分ごとだと思っただけなんです。今みんな他人ごとだと思っちゃってるけど。そういう僕らに対しての発信というのが、どうなのかな。互いにもっと手を出せたらいいと思うんだけど。あるいは、僕らのような立場の人間に対して、何か注文とかアドバイスをいただければと思います。

三原  
難しいなあ。自分としては発信してるつもりではあるんですけど、歌集というのは自費出版がほとんどでもともと少部数。私の本は多分1500部ぐらい。もちろん、普通に何万部とか売れている本のように人の手に渡らないで



はい。今回こういう機会をいただきまして、どうもありがとうございます。また、「質問をいただいたみなさん、ありがとうございます」。1点だけ簡単に。先ほど原田さんが言った話で非常に重要だったのは、やっぱり津島小学校が二本松にあったということの重要性は、ある意味、浪江の歴史の中に二本松が入っている、二本松の歴史の中にも浪江が入っているということ。その物理的な要素として資料がさまざまあって、それを後世にも伝えていくべきだったというのは、本当におっしゃる通りです。僕も同じ意味合いで考えています。ですので、これは浪江と二本松の友好ではありつつも、もうお互いの歴史に入ってくるという部分をぜひ認識したいし、認識してもらいたいなと思っています。今日はどうもありがとうございます。

### 誰も代わりに残してくれる人はいない

三原

今日はありがとうございます。私、本当に話すのが下手で、「浪江の記憶の残し方・伝え方」ということで、一冊読ませていただきたいと思っています。「ふるさとを失いつつあるわれが今歌わなければ誰が歌うのか」という短歌がこの歌集にあるんですけど、結局、ふるさとを失った、原発事故で避難した本人一人一人が残さなければ誰も代わりに残してくれる人はいないんですよ。誰かに依存して、誰かにこういうふうな気持ちを書いてほしいとか残してほしいとかじゃなくて、みんな一人一人が本当にいろんな体験したと思うんですよ。細かい体験、嫌なことを言われたりとか、本当につらい思いをした

こととか、それを一人一人が意識的に残さないで、さっき言った偽りの、美化されたステレオタイプの均一化された表現で残ってしまうと思うんですよ。だから本当に一人一人が証人なんです。後々の50年後とかでもいいので、タイムカプセルみたいな感じで、今の苦しかった状況とかそういうのを記録していくということが大事だと思っています。ありがとうございます。

### 仲間とか人間関係とか、そういうものをふるさとと思って

原田

こういう機会に出させていただいた御礼と、県外からもおいでいただいた方々に今までの10年の御礼も申し上げる機会があったということ、本当にありがたいと思っています。震災後、よく言われていたのですが、この頃感謝という言葉がなかなか出てなくて、こういう機会に出させていただいたのは本当にありがたいです。

私もふるさとっていうことを常にいつも意識していました。ふるすとは、生まれたところだけがふるさとなのか。それだけだったら、僕はおそらく今もう頭が狂っちゃって、いないと思うんですね。その中で自分の生きる道を見出したっていうのは、確かに生まれたところがふるさとなんですけど、私はやはりそこですーっと培ってきた自分の仲間とか人間関係とか、そういうものをふるさとと思って、今までやってきました。

ですから、第二、第三のふるさとを作るっていうこと。それをいっぱい作っていくことが自分の人生を豊かにしていくんじゃないかなと考

えたときに、生き方を見出したような気がしていますね。それはこれからも続けていくことかなと。誰もふるさとを悪くいう人はいないですよ。石川啄木さんだって、石も追われることく出されたんですけども、でも年取ってから「ふるさとの山にむかひて言ふことなし」っていう有名な歌があります。誰でもそうなんです。私らは啄木さんみたいに石もて出されたんじゃないかと、事故で出されたわけですけど、そういう人で浪江を悪く言う人はいないわけですよ。ね。

こうやって、ふるさとをこっちから見なくちゃならない境遇になったということは、ある程度みなさんに理解していただきたいなって感じはありますけどね。でも、あとは自分の生き方の問題で、人との繋がりをきちっと絶やさないうで持っていくことが自分の一つの生きる証かなと思っています。これからも続けていきたいと思っています。今日はありがとうございます。

川延

どうもみなさんありがとうございました。

小林

みなさん、本当にありがとうございました。

最後に、私たちにみなさんと議論するきっかけをくれた須藤嘉人館長、それからこれまでの浪江小、津島小のみなさんに、ここにはいませんけれども、改めて感謝を伝えたいと思っています。

この後に議論が始まるとうれしいなということがいくつもありましたので、ぜひここから先もみなさんと考えていければと思います。今日はいろいろなかたちでご参加いただいてありがとうございました。

いくつもの「残す」があると思いました。

この10年間のプロセスを残すこと、震災前の浪江の記憶を残すこと、このふたつは残してほしいと思います。何のために残すのかははっきりすれば何を残すかがおのずと決まると言っていました。理路整然とした残し方ではない、「残り方」はないのかと思いましたが、

大字というサイズで記憶を残すことに、すごく共感できました。誰の身にも残し方があるように思います。(60代)

「博物館」として記憶を継承していく津島小学校の取り組みを起点に、「震災前から詠んでいなかったら気づかなかった」「美化させないこと」「見やすいわかりやすいじゃない、奥まったところ」「浪江と二本松双方の歴史になる」などのキーワードが紡ぎ出されていて、とても考えさせられました。

地元出身者と外部の人のスタンスの違い(双方とも重要だとも思います)も浮かび上がっていて興味深かったです。記憶や成果の継承には、当事者と外部を繋ぐ人材(育成)が不可欠だと思いました。(30代)

ディスカッションを聞きながら、「残す」と言っているけれど何を残せばいいのかと思ひ、何のために残すのかわからないと「何を残せばいいのか」考えようがないなと思ひました。ノスタルジーのため？歴史から何かを学びそれを未来に活かすため？誇りを持つため？…。自分なら残されているものに触れたとき、そこに何を求めるだろう。いろいろ考えているうちに、名もない人たちの生のいとなみに、自分の心はきつと揺さぶられるんだろうなと思ひ、どこの、だれのいとなみも、いとおしいもので、それは決して理不尽に奪われてはならないものであることを、再確認できるんだろうなと思ひました。大事なことを考えることができた気がします。ありがとうございます。(60代)

避難先での歴史が、二本松以外でも10年分あります。

現在の浪江町の新しい歴史にどう融合するのか心配です。二本松校の博物館を全町民に伝えたいです。(60代)

受けて側としての疑問が氷解したわけではありませんが、ヒントの一端をいただけたと思います。今後より深く考えていきたいと思っています。(60代)

2020年  
7月14日(火)

博物館とは何のための  
どのような場所か、福島  
県立博物館の学芸員に  
よるレクチャー。博物館  
の使命を考える。



7月30日(木)

博物館の使命に基づき  
展示案を考える。



8月31日(月)

展示候補となる資料を  
把握するため、資料の  
情報をまとめるカードを  
作る。



8月31日(月)

博物館の看板を考える。  
教室の戸を利用した看  
板を館長が発案。



9月11日(金)

浪江町のみなさんと看  
板の文字・飾りづくり。  
看板の文字は浪江町の  
伝統工芸品である大堀  
相馬焼で製作しました。  
看板の板は二本松市の  
伝統工芸品である二本  
松家具の工房が製作。



11月2日(月)

資料カードを展示で伝  
えたい内容ごとに分け、  
展示室の構成、配置案  
を考える。



11月2日(月)

展示室設営。展示案を  
もとに実際に展示する  
資料を教室へ運ぶ。



12月21日(月)

展示室設営。壁に板を  
打ち付けるなど、設営に  
あたって作業も行う。



2021年  
1月22日(金)

展示室設営。館長自ら  
パネルを制作。



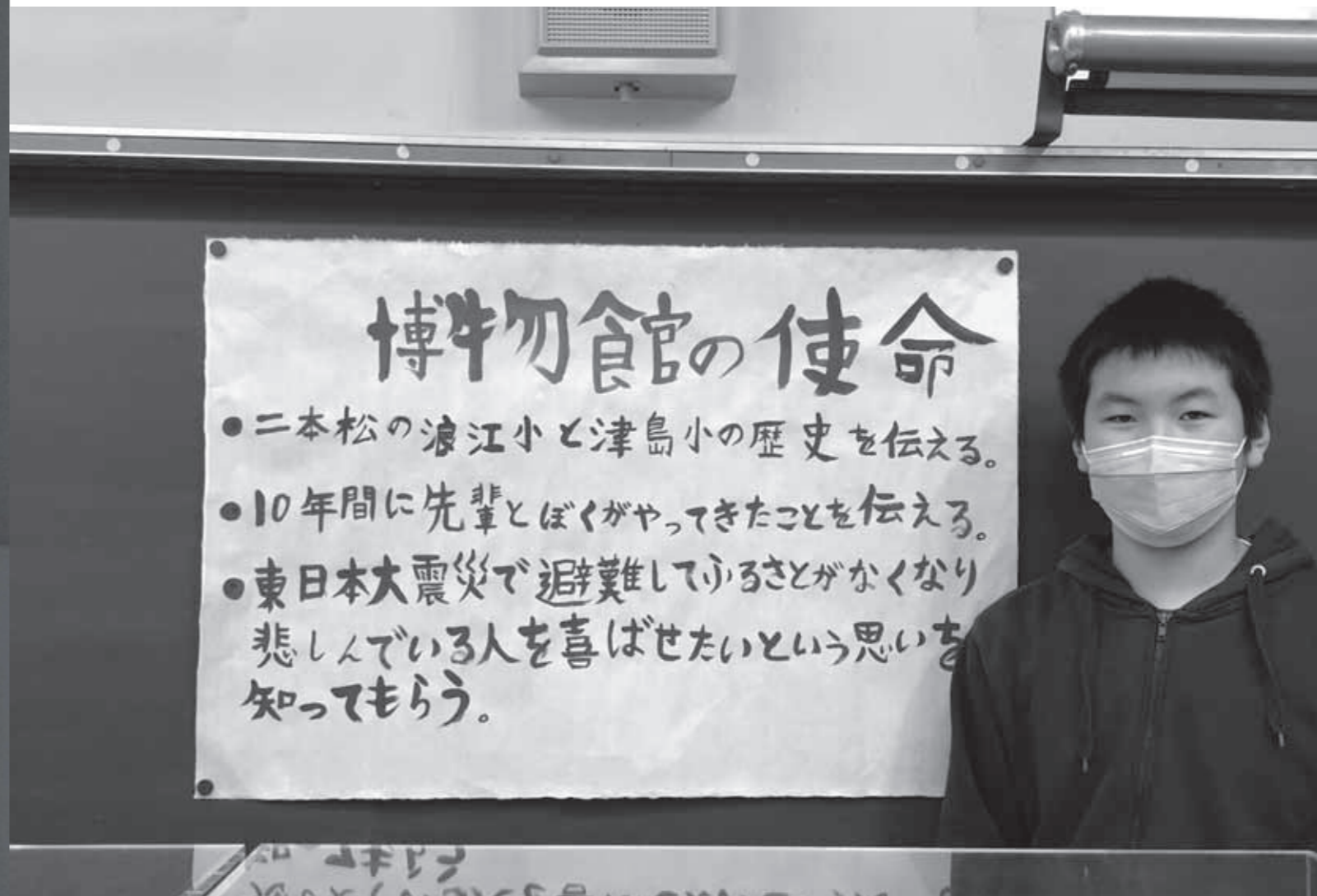
2月25日(木)

博物館の開館お披露目。  
浪江町民が参加。館長  
が展示解説を行ない、展  
示にこめたこれまでの浪  
江小・津島小児童たちの  
思いを伝えた。



プログラム開発

地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラム



浪江町立津島小学校 ふるさと浪江科

「10年間ふるさとなみえ博物館」

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故後、避難先の二本松市内で再開した浪江町立浪江小学校と津島小学校では、浪江町を離れて暮らす子どもたちがふるさとを学ぶ学習活動「ふるさとなみえ科」を行ってきました。

令和元年度で浪江小が休校になり、令和2年度で津島小も休校となること決定。「ふるさとなみえ科」最後の1年となった令和2年度は、これまでの学びを「博物館」という形でまとめ、二本松に来てからの浪江小・津島小の10年間を残し、伝える場を作りました。

博物館の名称は「10年間ふるさとなみえ博物館」。名付けたのは、初代館長として開館準備を行った津島小最後の児童・須藤嘉人さんです。10年間を三つの活動時期に分けて展示を構成し、大堀相馬焼の体験制作の成果品や子どもたちから見た浪江町の風景や文化が描かれている「なみえっ子カルタ」などさまざまな資料で、浪江小・津島小の児童たちが「東日本大震災で避難してふるさとがなくなり悲しんでいる人を喜ばせたいという思い」で活動に取り組んでいたことを伝えようとしたものです。

ライフミュージアムネットワークは、プログラム開発「地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラム」の一環として博物館づくりに携わりました。

# 合同会社 家の女たち

合同会社家の女たちは、市から指定管理を受け、島根県石見銀山の代表的商家・熊谷家住宅の管理運営を行っています。代表の太田洋子さんに、これまでの経緯や活動についてお話を聞きました。

家財の掃除に集まった主婦7名が、次第に調査研究にのめり込み、最終的に会社を立ち上げ、展示・館内ガイド・イベントの企画運営を担うまでになったこと。四季折々のイベントでは心づくしのもてなしがなされ、人々が集う場になっていること。教育施設として地域にしっかりと根付いていること。指導者・行政・家の女たちが、よいかたちで巡り合ったこと。何より家の女たちが日々丁寧に「くらし」ていることによって、重要文化財の建物が生きた家のように感じられること。地域の文化財の地域の人による再生、その素晴らしい事例とこれからの可能性を考える調査となりました。

日時：2020年11月27日（金） 11:00～14:30

リサーチ先：合同会社 家の女たち

お話を聞きした人：太田洋子さん（合同会社 家の女たち代表）

調査者：川延安直（福島県立博物館副館長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
江川トヨ子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

太田洋子

一通りご覧いただきました。ここの家財調査をしたときの報告書があります。小泉和子先生が最初からずっと指導してくださった方で、厳しくも温かい先生です。私たちは一介の主婦ですから、知識も何もなくて、ただ好奇心で。それでもみんなが一生懸命調べるので、最終的に報告書をつくるころまで指導してくださいました。

この報告書、すごく便利なんです。分野別にしてあって、全ての写真を載せているので、展示する時にここから候補を選んで収蔵庫から持ってくる事ができる。収蔵庫は出したり入れたりできちんとなくなっていなかったんですけど、コロナで開館できなくなりまして、こんなことは今後そうないかもしれないから、1回きちんとしようということで整理をしました。分野別に分けて置いてあるので、わかりやすくなっています。

塚本麻衣子

収蔵庫はお近くにあるんですか。

はい。車で5分ぐらいですかね。使わなくなった学校の体育館にいるんなもんが入れてあります。よく使うものとか、大事に保管しないといけないものは、ここ（注：熊谷家）の蔵に入れてあります。三つ蔵がありますから、そこに塗りのもの、温度変化に弱いもの、そういうものを入れてあります。

調査カードは、家什具、衣類、紙製品、道具、寝具、酒造の大きく六つに分けてあるんです。これらを分担したのかな。あとはね、宗教とか

趣味とかの分け方をして調査しました。カードにいろんなことを書き込んでいくんです。寸法とか、保管場所とか、所有者の名前とか、そういう情報をいろいろ書き込んで、あとで書き変えたり加えたり。裏には写真を貼って、まとめてファイルにしています。

すごく楽しんで

私たちは、こういうことをやったことがなかったので、先生の指導で初めてそういうことまでさしてもらったんですね。それを面白いと感じる人たちが、たまたまですけど集まった感じで、すごく楽しんでやりました。もちろんまとめたりするのは大変で、叱られながらやりましたけど。

江川トヨ子

資料整理にはどのくらいかかったんですか。

たぶんね、1年ぐらいが清掃だったと思います。そのあと、調査をしたのが1年ぐらい。それから調査結果をまとめました。開館1年前は、展示のための準備をして、座布団を作ったり、いろいろな展示品を作っていました。ですから、4年ぐらいでしょうか。

太田

先生が3、4カ月に1回来られるたびに、「ここはこうしなさい、そこはこうしなさい」と指導されて。来られたら2泊ぐらいされるんですけど、その間に集中的に調査して、「次、来るまでにここをしなさい」とって宿題を出されるという感じの指導でした。

川延安直

最初、お集まりのころは、何人ぐらいの方でやってたんですか。

最初は7人

太田

最初は7人だったと思います。みんなマスクして、泥やほりだらけのところで作業しました。昔の人ってね、ものを全然捨てないんですね。使わなくなってもね、とにかく蔵に全部しまい込んでありました。だから、あの中にこんなにあった？っていうぐらい出てくるんですよ。体育館に運んだんですけど、とにかく体育館いっぱいになるぐらいありました。

小泉先生が来られたときに、記録して保存するもの、記録はしないが使うもの、保存困難なもの、三つに分けられたんですよ。一つずつ見て、「これはいる、これはいらぬ、これはこれ」と、全部仕分けをされました。記録して保存するものを、今度は、さっきの調査カードでさらに分けていくわけですね。

塚本

パートでお仕事されたスタートのころは、週何回と決まっていたんですか。

主婦にとっては本当にやりやすい

太田

ものすごくありがたかったですけど、人によってです。週5日出る人もいれば、3日しか出ない人もいます。自分の都合で決められたんです。しかも、基本的にはある程度決まってるけど、



都合が悪くなったら、「この日は休みます」とって早めに言っておけば休めるという、ものすごく自由な出勤スタイルでしたね。それと、出勤時間が遅くて早く帰れるのもよかったです。主婦にとっては本当にやりやすい仕事、時間でした。

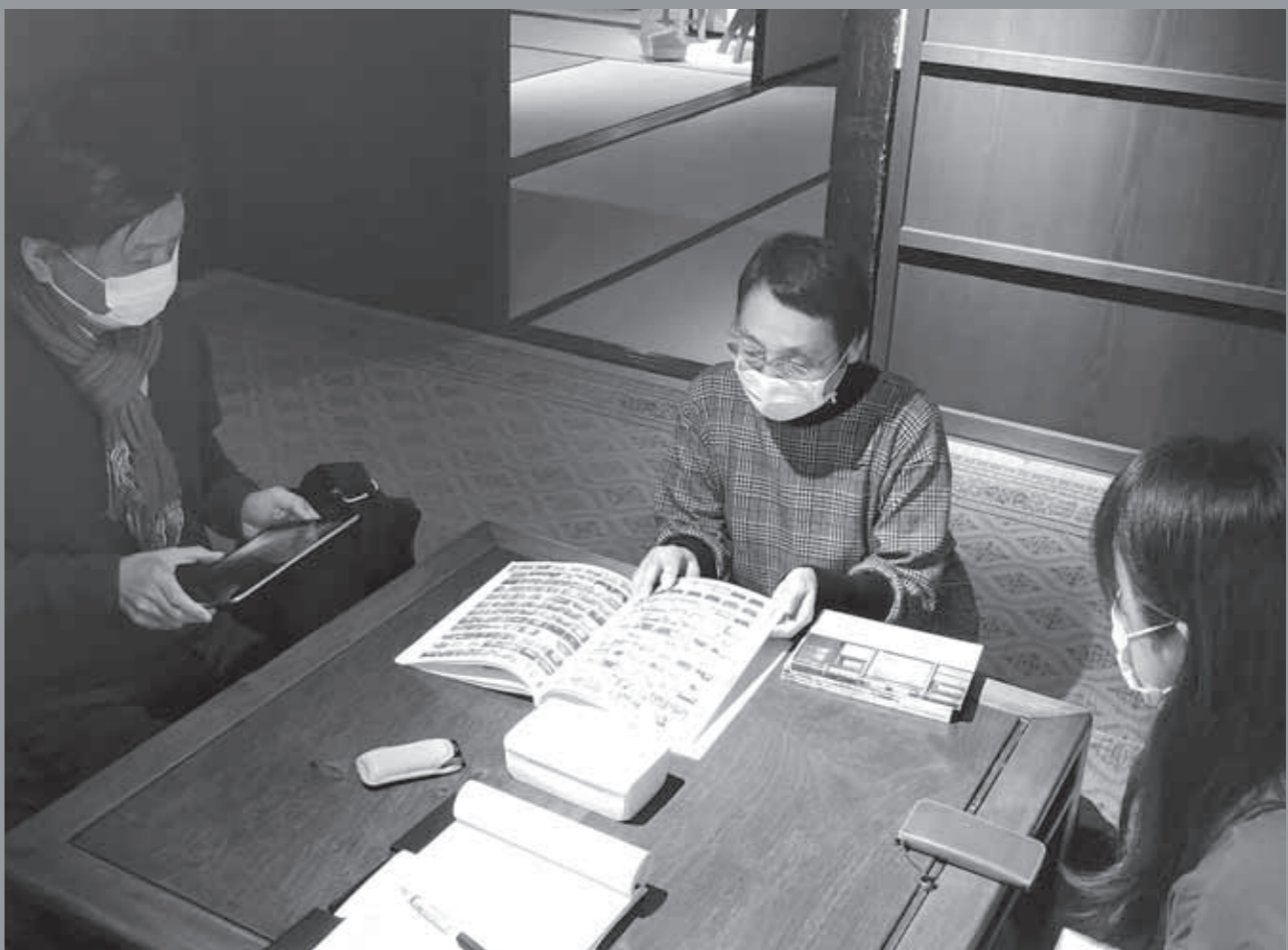
塚本

そういう仕組みを決められたのは行政の方なんです。

石見銀山課

太田

はい、市の行政です。石見銀山課です。担当の林さんという方がとても一生懸命だったんです。とにかく小泉先生の言われることをきちんと



と受け止めて、それが実現できるようにするという行政側の人だった。林さんは私たちに對しても、とても働きやすい対応をしてくださって。先生から出された次の宿題についても、「みんなやったら、どのくらいでできる」とって聞かれるわけです。『大体このぐらいかかりますかね』って言うと、「じゃあ、そのくらいでやってください」と任されるわけです。でも、任されたよりも早くできるんですよ。先生が来られると、「いやあ、なんかえらいはかどってるね」みたいになって。そんなふうには、行政の側からいついつまでにこれをしてくださいっていうのはまったくなかったです。

江川  
自分たちで決める。

太田  
そうそう。のちになって聞いたことがあるんですよ。あれは本当にやりやすかったんだけど、よくあんなふうにやってもらえませんでしたね。言ったら「だって、わからんもん」って言われても、なかなか行政はね、そういうふうには思わんですが。予算内でやらんといけんと思うと、いつまでにこれをやって、次にこれをやって、段取りをせんといけんですよ。だから、そういうことは難しいと思うんですけど、最初からそうでしたし、最後までそうでした。だから、どういふふうに通されたかわからん。

江川  
そこで自主性が出てきますよね。

**自分たちは一生懸命やるだけ**

太田  
そう思います。見たこともない道具が出て来たときに、「これ、なんだろうか、なんだろうか」って、みんなやるわけです。自分の担当のところを図書館に調べに行くんだけど、やっぱりどっかに引っかけてるんでしょうね。探してみたりして、「ここに書いてあったよ」、「この本、借りてきたよ」とか。みんな前向きでした。

江川  
「家族の」理解とかはどうだったんですか。

**「家の女たち」**

太田  
パートでやってるときは自由になってましたから、家庭中心でできたんです。開館して今15年目なんですけど、最初の5年間は市が直営でやってましたから、私はパートの一職員だったんです。だから、都合が悪かったらほかの人に代わってもらうっていうことさえできれば自由にできたんです。その次の5年間は、市が指定管理制度を取り入れることになって、小泉先生が代表になり「家の女たち」という任意団体をそのために作ったわけです。そのときに、地元責任者がいるって言われて、私が年長だったもんですから「じゃあ、あなたが、その責任者の役をなささい」と言われて。なることが決まったときに、夫には言いました。そういうことをせんといけんと思ったら、たぶん、それを第一に考えんといけんと思うので、そうなる

太田  
うん、そうですね。目標として定めはしませんが、毎日一生懸命やることで、結果的に早くなるという感じでした。自分たちは一生懸命やるだけなんです。窮屈さがまったくなくて。その自由さは本当にやりやすかったです。

川延  
小泉先生にお願いしようっていうのは、石見銀山課の方が決められたんですか。

太田  
はい、そうです。町並み全体をどういふふうを整備するか検討するときに、いろんな専門家の方をお願いして来てもらって審議会を作られたんですけど、その中に小泉先生は室内装飾や家具の専門家として来られたんです。熊谷家の調査をするときには、その先生の指導があるだろうということで声をかけられたらしいです。

川延  
当然、その段階では、今の状況をどなたも想像していなかったんですよ。

**仕事は終わりだと思った**

太田  
まったくしてないです。何年でその調査をするもんなんかも全然知らされてないですから、やって来た結果が準備期間の5年間だったなと思うんです。私自身は、その5年間が終わったときに、もう開館になりますから、仕事は終わりだと思ったんです。



先するけどいいだろうかって言ったら、「それはいい」と言ったので、その仕事を受けることにしました。

最初は任意団体だったんですけど、そのあとの5年間で市から指定管理に出すにはきちんとした組織にしなさいって言われたんで、合同会社をその次の指定を受けるまでに作りました。そのとき、代表はやっぱり近くにいるもんじゃないと駄目って言われて、太田が代表になることになって、今、5年目なんです。

川延  
5年間で、これだけかたちをお作りになった。

太田  
正直なところ、能力不足を感じております。

**全部わかるでしょ**

美術館とかこういう公開施設は若い人が窓口において、案内もそういう人がされますよね。ですから、当然、若い人の採用があるだろうと思っただけです。開館の少し前になって、「せっかくならここの案内の仕事もあの人たちにやらせてもらおう」とって、小泉先生が言われたらしいんです。私たちは、行政の人から「公開になったときに、ここの仕事をしないか」って言われたんですけど、「えっ、そんなんですか」っていう感じで驚きました。だって、道具は触ったけど、歴史のことも知らんし、なんにもわからないわけですよ。でも、先生は「あの家財調査をしたことで、中にある道具は、誰に聞かれても全部わかるでしょ」と言われて、まあ、そりゃあわかりますけど。「そういうことが大事なことで、その案内ができるっていうのは貴重なことだから、そういう人がやったほうがいいよ」とって、市の方に言われたらしいです。市もそれを了承されて、そのままの7人は続けることになり、それだけでは回らないので、もう少し増やして最初は10人ぐらいになったんじゃないですかね。ですから、私たちは大変で、歴史のことを覚えんといけんって、市からもらった資料を覚えたり、いろんな講演会に自主的に自分で行ったりしましたね。だって、聞かれたときに、「いえ、それ知りません」と言っつのもちよつとね。

江川

その、モチベーションがすごいですよ。図書館に行って調べたり、講演会に自ら行ったり。

**面白いことでしたもん**

太田  
でも、たぶんね、興味本位です。本当に。面白いことでしたもん。だけど、それがね、最初から関わった人の共通した部分でしたね。毎日、ここに来て仕事するってことが楽しかったですよ。小泉先生は普段はそんなことないんですけど、指導をされるときはとても厳しいですから、宿題をしてなかったら叱られます。

塚本  
本当に大学のゼミみたいですね。

**何があってもすることはせんといけん**

太田  
そうそう。一回、叱られたんですよ。夫の母が亡くなってね、ばたばたして、結局、その宿題をしてなかったんです。それをね、言い訳にしました。こういうことがあったので、できませんでしだって言ったらね、「それはあなたのお母さんなの」と言われて、いえ、夫の母ですって。「あ、そう」とってそれで終わりだったんですけど、いやあ、こういうことを言い訳にしたらいけんと思っつてね、本当にね、悔やんだんです。だから、何があってもすることはせんといけんっていうことなんですけど、そういうこともあり、とてもいい薬になりましたね。

江川

学びの本当の姿ですよ。面白いから学ぶ。



太田  
でもね、本当にゼロから指導してもらって、ここまでやってこれたところが本当に大きいです。展示もそうですけどね、催しに関しても、春、夏、秋、冬と、季節ごとに大きなことを考えてやりましょって言われて、春は「春高樓で花の宴」といって、2階をお花でいっぱいにして、そこでお花見弁当と一緒に楽しむ催しをします。

夏と秋は、お座敷を使ってお茶会をするんですよ。古い時代のお茶は、自分の好みのお茶碗で自分たちでお茶をたてておしゃべりしながら楽しくお茶を飲んだっていうので、その古い時代まで戻って楽しもうというお茶会です。せっかくこのお座敷を夏のしつらい、冬のしつらいと変えるわけだから、夏は夏のお座敷で、そういうお茶会をする。秋は、もう冬の寒いときのお茶会というので、毛せんを敷く。だから、しつらいも含めて楽しむ。

冬は講演会。岩城先生といって京都大学で歴史の研究をしておられる方、この熊谷家の古文書をずっと研究しておられるんですよ。毎年、その年の成果をここで初めて発表してくださって、今度が11回目ですかね。お勉強のあとは温まりましょっていうので、おでんを作ってみなさんに楽しんでもらいます。その大きな催しを四つ、ずつとやってきました。

結構大変なんですけど、全員で関わって、とにかく来られたお客さまに喜んでいただけるところにと頑張ってるんですよ。



川延  
やっぱり行政の方も偉かったと思いますね。小泉先生にお声掛けしたのもそうだし、お招きしたからにはきちんと先生のアドバイスを形になさっていく。

### ラッキーな巡り合わせ

太田  
はい。それはね、小泉先生も言われます。林さんという人がおられたからできた。それは私たちも思います。大田市が偉かったのは、その人が10年以上、ずつと関わられたということ。たいてい3年、4年ぐらいで異動しますよね。世界遺産を目指して石見銀山課ができて、現場の人から上の人まで熱意のある人がそろっていたと思うんですよ。それがつながって、現場がそのまんまのかたちでね、活きたと思うんですよ。たぶん、予算的に厳しいもんもあつたんじゃないかという気はしますが、行政は

川延  
それは、市の方針としてここに来られるんですよ。すか。

### 教育施設として

太田

はい、そうですね。これ、すごいことだと思っんですけど、この修復をするときに小泉先生が「台所は教育施設として使えるようにしておいたほうがいい」と言われたんです。「だから、かまどは見かけだけじゃなくて、実際に使えるようにきちんとつくってください。世界遺産になって当分は、たくさんの方が押し寄せると思いますが、当然、それは減ると思う。そのときに、ここが教育施設として活かされていなくて駄目だから使えるようにしておくように」と言われて、そういうふうで作ってあります。地元の小学生さんたちに、ここでご飯炊きができるんだけど来ませんかとか試験的な使い方をしてもらって、少しずつ。実際にやるとね、ものすごくいいんですよ。子どもたちも喜びけど、先生が喜ばれました。学校とは全然違う子ども姿が見られるとか。それから、いくら昔は大変だったって言っても伝わりませんよね。それが、実際にここに来て、まき割りしたり、煙たいのが目がかかったりして、やつとお昼前に「ご飯が食べられて実感するわけです。食べたらご飯がおいしいってなると、なんにも言わなくても、一番よく伝わるんですよ。それで、先生がすごい喜ばれて、その先生が転勤先の学校に行かれたときに、「熊谷家ではそういうことができるけど、行きませんか」となって、それで少しずつ増えていって、最終的に、今はほぼ全

### きちんと賃金をいただいて

太田

でも、私たちはボランティアではなく、きちんと賃金をいただいて働いたわけです。その裏付けを行政がきちんと確保してくれた。先生の言われることを実現する裏付けを、きちんとされたっていうことがやっぱり大きかったです。思います。

塚本

そうですね。楽しい、面白いという思いももちろんですけど、それを続けていくためには、ボランティアでは続けられないところもあると思うんですよ。

太田

そう思います。ボランティアってね、やっぱり責任が伴いませぬから。熱意だけでは期間もそんなに長くは無理ですし、熱意もそんなに続きませぬから。仕事としてきたからというのは大きいです。

塚本

幸福な出会いというのは、そういうことなんです。

太田

本当にそう思います。これが知りたいとか、これなんだろうとか、とても面白いんですけど、偉くも何ともないんです。片方できちんと給料をいただいて、面白いことをやらしてもらってみたいなんですよ。まあ、楽な性分かもしれ

員来ます。だから、使えるようにしてあつたというのがね、やっぱりすごいことです。

川延

そうですね。文化財の中で火を使うっていうだけで、なかなか。

### 「前からやってますよ」

太田

そう。いろんな人が驚かれます。「えっ、火、焚いてもいいんですか」と言われますけど、焚いてはいけないっていうのは全然ないんですよ。ここ何年か、文化庁が特に文化財の「活用」を重視するようになったそうですね。ですから、ここは、「前からやってますよ」と言っんですけど。

川延

先取りしてますね。

### 建物だけを直せばいいんじゃない

太田

そう。何年か前からね、視察に来られたり、いろいろ取材を受けたりしました。私たちはここしか知りませんが、小泉先生が「文化財って建物だけを直せばいいんじゃないのよ。こういう日本家屋がきちんとしつらいを整えて、いままも使われているというのは、とても大事なんだから、それを続けるように」とって、よく言われてたんですけど、ああ、それはこういうことだったんかなって、いろいろ取材を受けてからわかりました。

ませぬけど、楽しんでやつたほうがいいですね。

塚本

やっぱりスタッフの方が楽しいと、訪れた人も楽しくなると思います。

太田

それは、伝わっていればうれしいですね。まあ、ここもいいことばかりじゃなくて、お客さん、どんどん減ってるので、どうやったら増えるだろうかとかね、そういうあたりは悩みの種です。

### 血が通っている

川延

こういう古民家とか、伝統的建造物を公開するところはいっぱいありますが、偏っています。一つは観光施設、もう一つは受付に一人だけいて、あとは自由に見てください、触らないでくださいっていう、そういうところが多いです。でも、こちらはすこく血が通っているというか、ここに人がいる感じがちゃんとするんですよ。だから、それをどうやってうまくなさっているのが、実は興味があつたところなんです。それがとてもよくわかりました。

### 「一番大事なことは掃除です」

太田

先生がね、最初に「ここを公開するときに、「一番大事なことは掃除です」と言われたんです。「とにかくここも、いつもきれいにしておきなさい」と言われたんです。そのためにはどうやつたらいいかっていうのを、ものすごく考え





ました。これだけの広さですからね、毎日、全体を掃除するのは無理なんです。それで、どうしたかっていうと、全体をいくつかに分けて、月曜日はここ、火曜日はここと決めて、掃除をする日の前の日の夕方にはたきをかけて帰るんです。次の日の朝、そこを掃除するというのを、1週間たったら元に戻るように組んだんです。それを最初からずっとやってるんです。そうしたら、ほりってたまらないんですね。はたきってものすごい機能的なんです。面倒なようでもね、時間そんなにかからないんです。夕方、ばんばんばんってやって、次の日、ほりりが落ちたところをほうきで掃くっていうのをやっていくんですね。そうやって15年やってきましたから、これは胸を張ってもいいと思うんですけど、来られた方が、みんなね「どこもき

れいですね」って言われます。みんながそれをやるっていうことは、意識して大事には思っていないですけど、どこも触るわけですよ。電球が切れるとか、あそこ障子が破れるとかみたいなことも誰かが気が付くとかね、そういうのは、血が通う一つかなって思います。

### 家刀自

それから、もう一つ、「家の女たち」っていう名前は先生が付けたんですけど、これは、昔の大きな家には、家の中の仕事に関して長老格になる家刀自という年配の女の人がいて、その人が全体を差配して、食事も住まいもね、家の中が全部きちんと整うようにしていました。そういうことを目指すための、名前だっけって言われたんですね。

川延  
ああ、なるほど。

太田  
「家の女たちにしましょう」って言われて、最初は「えっ」って思ったんですけど、「ここがきちんと生活をしているように、常に整えておくように」ということで。朝来て開けて、夕方帰るんですけど、住んでいるかのように感じられるのは、思想的にも現実のやり方にしても、小泉先生の指導が行き渡ってる気がします。

### やっぱり生活のこと

川延  
お伺いしてよかった。我々、ライフミュージ

アムっていう名前ですが、ライフって命でもありますし、やっぱり生活のことなんです。それをきちんとできているミュージアムってどこなんだろうと。我々もそうありたいなと、いろいろ勉強させていただきました。

太田

いえいえ。本当に私たちは小泉先生に育ててもらって、それがかたちになっているのがここだと思っただけ。考えてみたら、ほかのところでここまでやってるところって、あんまりお話しに出なくなって思います。やっぱり行政の力は大きいと思いますよ。

川延  
そこは、強調してもいいところですね。

太田  
そうそう。そこなんです。ボランティアには限りがあると思います。みんなそんなに暇でもないし、生活もかかってますから。決して賃金としてはよくないんですけど、でも、働けばその対価があるっていうのはね、やっぱり大事なところですよ。

川延  
行政が予算化するということは、税金を使うので、そこに非常に大きな責任が発生するんですよ。みなさんにパートをお願いしたというのは、ボランティアで自主的な活動をお願いしますって言うのは、行政のやる気がまったく違うレベルのはずです。だから、林さんはやっぱり相当な覚悟でなさったことだと思えますよ。



太田  
巡り合わせもね、よかったと思いますよ。大田市としても石見銀山の世界遺産への登録をめざした時期でもあったからなんだろうね。だから、タイミングとしても、何もかもがいい具合に回ったのかなという気はします。でもやっぱりそこにはね、みんなの熱意があったと思います。だから、そのなかにちょうどいいことができたのは、ラッキーでしたね。

川延  
ありがとうございました。





日時：2021年1月17日（日）14：30～17：00

会場：コミュニティ・カフェ EMANON

事例報告：合同会社 家の女たち（代表：太田洋子さん） ※オンライン登壇

講師：高田彩さん（ビルド・フルーガス代表／塩竈市杉村惇美術館統括／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

岡部兼芳さん（はじまりの美術館長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

田尾陽一さん（認定NPO法人ふくしま再生の会理事長）

モデレーター：青砥和希さん（一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

※参加者は来場による参加のほか、オンラインでもご参加いただいた。

#### 合同会社 家の女たち（代表：太田洋子）

2006年より島根県石見銀山の代表的商家・熊谷家住宅の管理運営にあたる。

2001年、熊谷家住宅の保存修理で主婦7名が家財調査研究にあたったことをきっかけとする。

2011年、任意団体「家の女たち」（現合同会社）を立ち上げ、島根県大田市より指定管理を受け、

熊谷家住宅の維持管理、展示、館内ガイド、文化財を活用した催しの企画運営を担っている。

#### 高田彩

2004年エミリー・カー美術大学卒。アーティストネットワークのビルド・フルーガス代表。

2006年にギャラリーとしてビルドスペースを開廊。国内外でアートプロジェクトを企画運営する。

2014年より塩竈市杉村惇美術館統括。子どもたちとアートとの出会いを創り出す活動、地域に根差した美術館づくりを行っている。

#### 岡部兼芳

福祉作業所の支援員、中学校教員を経て、2003年社会福祉法人安積愛育園入職。

知的に障害のある方の創作活動支援プロジェクト「unico（ウーニコ）」に携わる。

2013年、はじまりの美術館の開館準備に携わり、2014年から同館館長。

「誰もが集える場所」として開設された美術館から、寛容で創造的な社会の実現に向けたきっかけづくりを発信し続けている。

#### 田尾陽一

元物理研究者。IT企業経営や、社会システムデザインの実証研究など活動は多岐にわたる。

2011年東京電力福島第一原子力発電所事故で全村避難となった飯館村を訪れたことをきっかけに、

認定NPO法人ふくしま再生の会を立ち上げ、飯館村を拠点に産業や生活、コミュニティの再生に取り組んでいる。

飯館村佐須地区に旧佐須小学校と仮設住宅の建材を再利用した集会所「学び舎irori」を2020年にオープン。

# 場を編む 人を結ぶ

リサーチさせていただいた

島根県の「家の女たち」のみなさんから、

オンラインで活動をご紹介いただくとともに、

塩竈の歴史ある建物を地域コミュニティの

活動拠点として活用しているミュージアム、

誰もが集える場として地域のみなさんとともに

作り上げてきた猪苗代のミュージアム、

飯館村佐須地区で交流の場の再生を行っている

認定NPO法人、

3者から講師をお招きし、

「場づくり」「コミュニティづくり」

「記憶と場所」についてお話しいただきました。

事務局・小林めぐみ

ただいまよりライブミュージアムネットワークのオープンディスカッション「場を編む人を結ぶ」を開始いたします。今日司会させていただきますます福島県立博物館の小林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、コミュニティとミュージアムというテーマのディスカッションです。このコロナの状況で、場を共有することの難しさを私たちが経験しながらではありますが、改めて場について、今日の講師のみなさんとお話をしていきたいと思っております。まず、講師のご紹介をさせていただきます。

会場のEMANONにいらっしゃる方から、まず塩竈からお越しいただきました塩竈市立杉村博物館の高田彩さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

高田彩

よろしくお願いいたします。

小林

次にお話しただくのが福島県猪苗代町にありますはじまりの美術館の館長の岡部さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

岡部兼芳

よろしくお願いいたします。

小林

そして3番目にご紹介させていただきます飯館村を拠点に活動されていますNPO法人ふくしま再生の会の代表をしていらっします田尾陽一さんです。

田尾陽一  
よろしくお願いいたします。

小林

今日は、3人のお話に先立ちまして、島根よりの家の人たちという古い建物を運営していらっしゃるみなさんからもオンラインで「報告をいただきます。家の人たちの太田さん、どうぞよろしくお願いいたします。」

太田洋子

よろしくお願いいたします。太田です。

小林

最初に少しだけ事業母体の話をさせていただきます。今日の主催ライブミュージアムネットワークは、福島県立博物館が事務局を務めて2018、2019、2020の3年間、活動をしております。ミュージアムのネットワークやみなさんとのネットワークをベースに、東日本震災のあと大切にすべきだと私たちが考えた「いのち」と「くらし」についてみなさんと考え、震災の記憶などをどう教訓にしていけるか考える場を作っていければと思っています。このライブ、「いのち」と「くらし」がいかにみなさんにとって大切か、そしてどのように捉えていったらいいかを考えるために、一つのテーマとして掲げているのがコミュニティとミュージアムです。

では、少し前置き長くなりましたが、さつき「報告を聞いてみたいと思います。島根の太田さんからお話をお聞きするにあたりまして、事務局から質問させていただきますながら進めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。」

ます。

事務局・塚本麻衣子

こんにちは。ライブミュージアムネットワーク事務局をしております塚本と申します。今日は太田さんとお話をしたいなあと思って質問役をしてみたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。島根の太田さん、お久しぶりです。よろしくお願いいたします。

まず、簡単に家の女たちについてご紹介いたします。私たちライブミュージアムネットワーク事務局は、昨年の11月末、実際に島根県に伺ってお話をお聞きしてまいりました。そして、ぜひ福島でご紹介して、多くの方に知っていただきたいと思ひまして、今日こういふかたちでご参加をお願いする運びになりました。

島根県大田市の石見銀山に、熊谷家住宅という江戸時代に石見銀山の中心的な商家として栄えていた大変立派な国の重要文化財に指定されている住宅がございます。そちらの家財の調査から始められて、展示、運営、館内のガイド、それから四季折々のイベントの企画運営などを一手に担っていらっしゃるのが、合同会社家の女たちという団体でいらっします。現在、市から指定管理を受けて熊谷家住宅の運営に当たられております。実際に伺ったのですが、単に文化財の建築を公開しているというのではまるで違う、とても親しみのある、どなたかのお宅にお邪魔したような、そういった雰囲気を感じました。その空間を生み出されていらっしやる、家の女たちのみなさんに今日お話を伺ってみたいと思います。太田さんよろしくお願いいたします。

太田

よろしくお願いいたします。

塚本

まず、そもそも始められたきっかけ、そこから家の女たちとして活動してこられた今に至るまでの経緯についてご紹介いただけますでしょうか。

我々はみんな主婦でしたから

太田

はい。では簡単にご紹介しようと思ひます。熊谷家住宅はですね、1998年に国の重要文化財に指定されました。その後、持ち主だった熊谷さんが大田市に家、土地、その中の道具類一切を寄贈されました。大田市のほうでそれを活用しようということで、まず建物の修復と家財道具等を掃除するというところから始まりました。この時に家財道具の掃除にあたることになったのが私たちで、大田市のパート職員として雇用されたのです。そして指導をしてくださったのが家具の研究者であります小泉和子先生という方。この方と大田市の担当の方がいろいろ話し合いをして、どういうふうに進めるかというのを決められたんです。それまで小泉先生は、家財調査をされるのに近くの学生さんを指導しながら一緒にやるという形を取っておられた。しかし大田市には大学がありませんので、そういう人材はおりません。それで市と相談をして、ではパートで主婦を募集しようということと、私たちが募集に応じてくることになった。家財道具の整理ということと、何十年も触っていない蔵に入っていた道具類を運び出してきれいな



にするという仕事が最初でした。ですからマスクをしてエプロンをしてほりだらけになるということを覚悟で仕事を始めたわけです。小泉先生は月に1回ぐらい東京から来て指導してくださっていました。先生は最初、どうもあまり期待されていなかったみたいなんです。1ヵ月後に来てみると思ったよりはずいぶん捗っている。あとで聞き出したんですが、学生さんたちは古い道具から虫が出てくるときや「きゃー騒いだり、汚いものを触るのに躊躇があったりするみたいなんです。我々はみんな主婦でしたから家で洗濯もしてるし掃除もしてます。そういうのをとっととやるわけです。そうすると1ヵ月後に先生が来られた時には相当捗っていて、もしかしたらこの人たちはできるかもしれないというふうに思われたそうです。

面白がってのめり込んで

少しづつ、1年ぐらいかかって、全体の掃除をしたと思ひます。先生は掃除の指導をしながら、この人たちはもしかしたら調査もできるかもしれないと思われて、掃除が終わったあとに家財調査をすることになりました。どういふものかという、道具一つに一枚調査カードがありまして、種類や材質、大きさを書き込んで、写真を撮って裏に貼っていくという調査です。みんな、先生が思っておられたよりもはるかに好奇心を持ってやったものですから、どんどん面白がってのめり込んで、家財調査もどんどん進んでいきました。今度はテーマ別にまとめてくださいますと少しづつ課題が出るようになりまして、指導していただきながら最終的には報告書を出版することができました。

もうこれで終わりだろうなと思っていたら

家財調査が終わってからは、今度は公開をするための展示品を作るとか、展示の準備をすることになり、いろんなことをやりました。展示の展示のところに布で「馳走を作ったり、展示のためのパネルを作ったり、そういうこともみんなやることになりました。5年間いろんな調査、修理をして開館を迎えることになりました。

開館の時には個人的にはもうこれで終わりと思っていたんです。たいていこういう美術館、博物館のようところは若い女性の方が受付にいて、学芸員のような方が案内をしてるのが普通だと思ひましたから。掃除から始まった私たちはもうこれで終わりだろうなと思ひていたら、小泉先生から行政のほうに、今まで5年間やってきた人たちは家財のことは全部わかるから入館者の方に説明がいくらでもできる、こういう人を使うべきだというふうな進言があったようなんです。市もそれを受け入れてくださって、それまで一緒に行動していた人たちが中のご案内の業務もするということになりました。それからが大変でした。歴史関係のことはまったくわかりませんので、資料をいただいて勉強してオープンを迎えます。最初の5年間は大田市の直営でしたから、私たちは大田市で雇われているパート職員です。その5年間が終わった時に、とてもいい形でやってもらったので団体を作って運営しませんかという話がありまして、小泉先生が代表になられて任意団体の女たちというものを作って、その時働いてい

たメンバーで運営することになりました。大田市の指定管理料をいただいて、この熊谷家と近くにある武家屋敷の河島家の2カ所を管理運営するという仕事を5年間やりました。その間に法人化しないといけないと言われてましたので、次の5年間の指定管理を受ける時に合同会社という法人になって、同じように運営を続けたいというところでした。

塚本

ありがとうございます。熊谷家住宅にお掃除のために結集された主婦のみなさんが、まさに学芸員的役割をしていくようにどんどん進まれていったということですね。どんだんのめり込んでいったとおっしゃってましたが、お仕事に携わられてどう感じられましたか。

### 勉強というのは面白いもんだ

太田

私が一番感じたのは、勉強というのは面白いもんだっていうことでした。学校に通っている間にこういう経験をしていたら道は変わったんじゃないかと思うくらい。課題を出されてそれをやらなければいけないという勉強は本当に面白くなかったですけど、これが知りたい、こういうことを調べたいと思いつながら自分で見つけていくのは本当に面白いことだなというふうに思いました。たぶん他の人たちも同じことを感じながらやっていたので、面白く仕事ができただんだと思います。それもボランティアではなくて、私たちはちゃんと賃金をいただく仕事でした。もちろん図書館に行って調べるのは自分の時間です。小泉先生がいつも言われてました

から。勉強は自分の時間でするものですよ。ままとめたり、準備のために作ったりするのは仕事の時間でその場所でするんですが、自分が知りたいと思ったことを調べに図書館に行く時間は自分の時間です。でもそれは全然苦痛ではなくて、どちらかという面白。そういうことをみんなが感じながらやっただんだと思います。

塚本

みなさんで集まって、勉強することがどんどん楽しくなっていくってこういうことが素晴らしいことだなと思います。ありがとうございます。今は展示だけではなく、場所を使っているイベントもされているとお聞きしましたが、今太田さんの後ろに写っていらっしゃるのはいくつかですか。

### ここはまさに活用の大きな場です

太田

ここはまさに活用の大きな場です。重要文化財で火を使うというところがたくさんいらっしやいます。私も最初火を焚いていいんだろーかと思っただけですけど、火を使っていけないというところは全然ないらしくて、修復をする時から、いざれ観光のお客さんは減ってくるだろう、そうなった時にせっかくこの設備が活かされるようにということで、教育施設としても充実したほうがいいと小泉先生も行政の側も考えておられて、実際に使えるようにしてあるんです。かまどは全部で10基あるんですが、全部使えます。最初はすぐ近くの学校の子どもさんたちに来てもらって体験学習してもらいました。薪を割り、マッチで火をつけて、かまどで

ご飯を炊きます。それは大変なんですけど、とても楽しんで緊張感を持ってやります。できたご飯がまたおいしくて。子どもたちも喜びますし、引率の先生も喜ばれます。その先生が別のところへ移動で移られた時に、あの体験はともいいたるところの学校でも行きましようというふうにとどろんどろんどろん広がっています。かまどを小学生はほぼ全員順番で来ています。かまどを使えるようにしたというのは、とても大きな先を見る目だったと思います。

### 建物が活きる催しを

それ以外にせっかくこれだけの立派な修復をしたところだからということで、春夏秋冬、シーズンごとにこの建物が活きる催しをしようということ、春は花をいっぱい飾って2階でお花見の食事会、「春高樓で花の宴」というイベントをします。夏と秋は「雑もの茶会」。どこかの流派が決まったものではなくて、茶の湯以前はみんなが談笑してお茶会をしていたというのを再現してやりましようということで、御馳走を少し用意して、お茶もお菓子もみんな手作りのものを出しします。そして宴の最後はお楽しみがあって、音楽だったり、演劇だったり、童謡を歌ったりということ、夏と秋にやります。どうして2回かというのを、秋の雑もの茶会」では赤い毛氈を敷いて華やかな宴になります。夏は同じ部屋ががらんと変わります。以前はしつらい替えをしていたお宅がたくさんあったんですけど、最近この「夏のしつらい」をするところがとても少なくなりました。これはぜひみなさんに味わっていただく、見ていただくだけでも涼しさと快適

### 地域の文化財に 地域のみなさんが関わって

塚本

地域の文化財をただ見るだけのものとするのではなくて、みなさんがそうやって心を込めて手入れされていることによって、その場が生きた場になっていると言いますか、人が住んでいる家のような心地良さに繋がっているのではないかと感じました。地域の文化財に地域のみなさんが関わって、そういうふうな伝えていってやるのが本場に素晴らしい活動だなというふうにお伺いして思ったところです。本当に短い時間でしたが、家の女たちのみなさんのご紹介をさせていただきます。太田さん、ありがとうございます。

太田

ありがとうございます。

小林

ありがとうございます。続きまして塩竈の杉村惇美術館で、みなさんと一緒に場を作っている高田彩さんからお話を聞きます。高田さん、どうぞよろしく願います。

### 記憶の収集と新たな記憶づくり、 記憶を蓄積する美術館

高田

ありがとうございます。塩竈市杉村惇美術館統括の高田と申します。今日はよろしくお願いたします。今日はまちの記憶の収集と新たな



高田彩さん



なところを味わっていたということ、夏に「夏の雑もの茶会」をしています。ですから参加される方も季節を楽しんで参加して下さっています。それから冬はこの辺りとても寒くて雪が降る時もあります。ですから冬は外に出かけるんじやなくて勉強をしようということ、冬に「冬に学ぶ」という行事をします。で、その時は歴史の勉強をするんですが、終わってから台所で仕込んでいたおでんをみなさんに振舞って、それをお腹いっぱい食べて温まってお帰りにいただくというふうになっています。そんなふうな建物が活きる催しというのをいろいろやっています。

塚本

ありがとうございます。子どもたちが参加す

記憶づくり、記憶を蓄積する美術館として当館の取り組みについてご紹介させていただきます。こちらが当館です。鹽竈神社がある一森山から見た美術館の姿です。右側に映っているアーチ型の天井が大講堂、左側部分に展示室とか、講習室があります。で、塩竈に「緑のない方も多いかと思えますので簡単に塩竈についてもご紹介させていただきます。宮城県中央東部に位置しまして、松島湾に望む港町です。古くから陸奥の国一宮として信仰を集めた鹽竈神社の門前町として発展しております。松島湾観光の入り口としても知られてまして、小さいですが観光都市であるとともに漁港、商港として発達した東北地方の港町です。鹽竈神社の周辺にいろんな商店が集まってるんですけど、当館



も門前町エリアのほうになります。昭和30年代は非常に賑わっていたところです。

### 市民の暮らしに関わりある場所として

当館について話を戻します。当館は昭和25年に塩竈市公民館として建てられた建物を平成26年に改修し、美術館機能を加えて誕生しております。遡ると江戸時代には当館の場所に代官所がありまして、明治時代には塩竈小学校、そして、昭和25年には塩竈公民館、昭和48年には同じ建物の中に図書館機能が併設されて、市民の暮らしに関わりある場所として今日まで使われています。

昭和32年には特徴的な大講堂が増築されております。こちらは改修後の大講堂です。9.7mの高さのアーチ型の天井が特徴になっております。地元の大工さん2名が天井部分を仕上げたと言われています。今は美術館の常設展示室になってるところは図書館として使われていたお部屋になっております。なので、年代によって市民の方の思い出が異なるんですけど、図書館時代を集われてた方はここでデートしてたんだよとか、窓から仙石線を見るのが楽しかったとか、訪れた際にさまざまな思い出を語ってくださいます。平成2年まで図書館機能を持っていましたが、図書館機能が別施設に移ってから2012年まで今度は教育委員会など市役所施設が移設されておりました。現在サロンになっているところは教育長のお部屋だったとかで、市の職員はなかなか入れなかったけど、今は入れて嬉しいとか、思い出をそこでもいろいろ話してください。公民館が誕生し



板がみなさんの記憶の中で印象に残っておりまして、映看板師を盛岡からお招きして当時のお話を伺ったり。今コロナ禍だとなかなかこういう場は開けないんですけど、まちの記憶を集めて語る場を、お茶をしながら開催しております。

### 新しい記憶を作っていくことも

これも非常に印象的だったんですけど、昭和40年代にこの大講堂で毎週末の夜にダンスパーティーが開かれていた。そこで旦那様と出会って結婚したんだよというエピソードをお聞かせくださる方が複数いらっしゃいます。その場所やその時間を追体験することを目的に、ダンスパーティー開きました。演奏する方は当時キャバレーでも演奏していた方々。私たちは当



てからは成人式ですとか、予防接種などなど、まちの大きな大会とか、イベントはすべて公民館の講堂で行われていました。昭和36年にはミスマンとコンテストが開催されたんですけど、杉村博美術館の名前になっている杉村画伯も審査員として関わられていたと言われております。改修前も味わい深かったのですが、印象的にはおどろおどろしい感じでもあり、2014年にきれいに改修されています。昭和25年からこの建物で市民のみなさんがさまざまな活動をしてきたということをお伝えしたかったので、開館する前までのお話をさせていたいただきます。

### まちの記憶というものを未来に残していく

当館は木造建築でして、一般的な美術館機能というものをもちえていないんですね。収蔵庫もありません。なので美術品の収集が実はいない条件で、まちの美術館として開館しています。震災後は財政難でもある小さなまちに誕生した美術館ということもありましたので、まちの美術館の役割を考えたい時に、この建造物が蓄積する市民の記憶がこの美術館自体を市民生活へと接続する上で重要ではないかということをお考えして、まちの記憶を収集する美術館としていきます。

杉村画伯の作品についての調査研究などはもちろんのこと、昭和20年から40年の20年間、杉村画伯は塩竈で過ごしてございまして、杉村画伯が過ごした20年間もこのまちの記憶の一つであるということで、市民にとって画伯に対する愛着を育んだり、それが誇りに繋がるんじゃない

時の記憶を収集するだけではなく、新しい記憶を作っていくことも目指しております。ちょうど仙台市内の大学生の中でスイングダンスが行っていたこともあって、大学生のスイングサークルにお声がけして一緒にその時間を過ごしていただいたんですね。ご夫婦が手を繋いでいます。この大講堂で出会ってご結婚されたというエピソードを提供してくださった方ですね。

あとは塩竈にゆかりのある岩井俊二監督に来ていただいたり、監督された「リリー・シュシュのすべて」の映画鑑賞のあとにすぐ大講堂に移動すると、その映画の中に登場するリリー・シュシュ、Samiさんが歌を披露してくださるとい、ファンの方にはたまらない企画に関しては、全国からご参加いただくプログラムにもなりました。記憶に残る新しい体験というものも積極的にこの場で作るということをしております。

他には、モデルに昭和30年代の映画をモチーフにした服装をもらってデッサン会をしたり、大好評の歌声喫茶は毎年開催しております。70、80人の中高年のみなさまが集まって、大きな声で歌を歌うというすごく幸せな光景です。あとは「暮らしの市」ですね。記憶づくりとは

また異なるんですけども、地元のお店の方々にご出展いただきながら、「知恵と工夫で暮らしを彩る」をテーマにしたマルシェを開いております。子育て世代の方がご家族で1日過ごしたいイベントにもなっておりますので、お父さんお母さんに人気のある料理創作ユニットの方を招いてのお菓子作りなどを実施しております。イベントごとに町中にバナーフラッグを掲げているんですけど、地元の仕立て屋さんに入っているだけで、「暮らしの市」でそのバナーフラッグをトートバッグに作り直すこともしています。

これは街中に飛び出ている「ART of TREAT」の仮装でお菓子巡り。こちらは杉村作品ですとか、アートの名作の造形物に仮装して町の商店街にお出かけするんですね。TICKET or TREATみたいな形で「ART of TREAT」お菓子くれないとアート作品にしちゃうぞ」を掛け声にお店の前で叫びながら町を歩き、お菓子巡りをしています。こちらも商店街の方々と一緒に場を作っています。先頭にはちんどん屋さんですとか、ジャズ隊を引き連れて、ぞろぞろと菓子巡りをします。この時はですね、漫画雑誌ガロの初代編集長の長井勝一さんが塩竈出身ということもありましたので、ガロをテーマに若手作家に造形物を作ってもらっています。若手作家にとっては塩竈の地域資源ですとか、ゆかりある人々に出会っていただく機会にもなっております。

あと「チルドレンズ・アート・ミュージアムしおがま」という取り組みもありまして、こちらは倉敷の大原美術館からプログラムの運営方法を伝授いただいて実施しているものです。基本的に6月ぐらいに研修会を地域の人々を対象に開いていたので、10月に実践の場と

かと考えております。「ひととひと、ひととまちを結び、まちが文化とつながり、その輪が新たな力を生み出したり可能性を広げていくような、つながる／ひろがる美術館」を目指して奮闘しています。活動方針としては、場づくり、人づくり、文化発信拠点づくり。今日は場づくりに関する事例をお伝えしてございまして、人づくりのほうではアーティストの支援ですとか、子どものためのプログラムなどを実施しています。

私たちは「市民とまちの記憶の収集と日常の記録」消えゆく日常から、物語を引き出し、未来へ残すこと」を掲げています。目の前の日常がある日突然消えゆくものであるということをお3・11の津波の経験で気づかされまして、震災後に誕生した美術館ということからもその必要性を感じ、この消えゆく日常から市民の人々の物語を引き出し、まちの記憶というものを未来へ残していくと地域のみなさんと取り組んでいます。

地域のみなさんというまちのことを伺っておりますと、昭和30年代の映画館について非常にキラキラとお話しくださったんですね。昭和30、40年代というのは本当に活気があった時代でもあったので、その時代のことにはキラキラするかとは思いますが、お話を聞いていた時に美術館自体が当時の映画館のような存在になりたいなと思っていて、知的好奇心を育む場、文化的な回りと交流の場を作っていくと、「まちと記憶と映画館」という事業を展開しています。小さいまちに最盛期には7件ほど映画館がありました。それをマッピングしたり、記憶を集めてそれを見える化したり。当時楽しまれていた歌声喫茶ですとか、あと映画看



「場を編む 人を結ぶ」



「場を編む 人を結ぶ」

してイベントを開く。こちらは人づくり、場づくり、文化発信拠点づくり、すべてを集約しているようなプログラムになっているんですけど、実は美術館主催ではなく市民団体が主催となって美術館と一緒に連携してやっております。市民の方々と、学校ではこういうことできないのよねとか、保育の現場ではなかなかできないのよっていう保育士の方々の提案を、じゃあここで実験的にやってみましょうという形で場を作っております。

塩竈にはたくさんのお祭りごとですとか、イベントがあります。音楽イベントのGAMA ROCKでは、会場にアートワークを持って行って、随時子どもたちが色塗り体験できるような、簡単に楽しんでいただけの出張ワークショップなども実施しております。

### さまざまな理由で立ち寄っていただけのように

イベント以外にも、もう一つの場づくりとして、ミュージアムカフェ空間というものも大切にしてあります。もちろんコーヒーを提供してのくつろぎの場の提供でもあるとともに、この空間で映画を語る「シネマ談話室」ですとか、ちょっとしたトークイベントを実施しています。今年度からは移動本屋のペンギン文庫さんが毎月本をセレクトして並べて、手に取っていただけるようにしていたり、美術館という場にさまざまな理由で立ち寄っていただけのように場を作っております。

あとは今後の活動では、「アーティストとUNB」サポーターによる歴史的建造物リサーチプログラム」。江戸時代の建物、勝面楼とい



す。今運営しているのが5人のみですね、3人常勤で2人パートさんで計5人でやっております。

### 「安心して暮らせる街づくり」と「一人ひとりが望む生活と自己実現」

設立の経緯をざっとお話しすると、うちの法人の知的に障害のある方の支援事業所、あさかあすなろ荘での創作活動が1997年に始まりました。2010年にオール・ブリュット・ジャポネ展がフランスのパリでありまして、日本の障害のある作家さんを中心に63名の作家さんが紹介されました。世界的に衝撃を与えたなんていうことも言われているんですけど、これを期にヨーロッパの巡回展があったりしました。その後、2011年に東日本大震災があり、2014年に美術館は開館しております。運営母体は社会福祉法人安積愛育園です。約50年に渡って知的に障害のある方の支援事業に取り組んできています。基本理念が、「安心して暮らせる街づくり」と「一人ひとりが望む生活と自己実現」ですね。美術館の運営に関してもこれが基本のところにあるかなと思っております。仕事のな

う建物があるんですけど、そちらが2017年に修復保存が決まりました。活用のところまではまだいいのですが、若手アーティスト支援プログラム voyage の歴代の出展作家たちに、もう一度このまちに関わってもらう取り組みとして、現在リサーチをしていただいている段階です。陶芸作家の氏家昂大さん、画家の田中望さんが勝面楼についてリサーチし、3月20日に成果発表をしていただくことになっております。

ちょっと駆け足になりましたけど、美術館の活動をご紹介させていただきました。ありがとうございます。

### 人が作っている

小林

ありがとうございます。先ほどの島根のお話もそうでしたけども、建物がただあるだけではやはり場にはならない、それをどういう場にしていけるかが人が作っているんだなということに改めて教えていただくお話だったなと思います。杉村博美術館でもカッパルがまた生まれそうですね。

では続きまして猪苗代のはじまりの美術館から来ていただきました岡部さんにお話を聞きたいと思えます。はじまりの美術館も歴史ある建物をみなさんと活用しながら場を作っているという美術館です。では岡部さんどうぞよろしくお願いたします。

岡部

はじまりの美術館の岡部と申します。よろしくお願いたします。簡単に自己紹介です。郡

にはなかなかマッチしない方に日中の時間をどんなふうに充実して過ごしてもらえかなっていう中で、利用者さんの創作活動を行ってきいて、その中で生まれた作品、すごく面白くてですね、多くの人に見てほしいと思うものも生まれてきました。そういった中で公募展に出すうちにどんどんと作品が紹介される機会が増えていって、先ほどのオール・ブリュット・ジャポネ展に結びつきました。2018年には第2回展も開催されています。この展覧会にウーニコという活動の中からうちの利用者さんの伊藤峰尾さんが出展しまして、作品が戻ったあとは国内の公立館など七つの美術館で巡回なんかもされています。海外で評価が高まった障害のある方の表現に関して、国内では全然評価がなかったこともあって、その評価をちゃんと日本に持ち帰って定着させて、あわせて障害のある方の社会的な地位の向上も図っていければいいことではないかと構想が持たれまして、その中の一として国内で専門の美術館を整備するのどうかという構想が立ち上がりました。

### 福祉・アート・町並みの保全

うちもそこに手を挙げさせていただいて、全国に10カ所程度整備しようというところで、専門家と交えガイドラインの作成も始まったんですが、そういった矢先に東日本大震災がありました。結局実現しているのはうちを含め5カ所です。そのガイドラインの中で、新築ではなく地域の価値ある建物の活用が大事なんじゃないか、福祉・アート・町並みの保全を一体的に実現でき



岡部兼芳さん

山市在住で猪苗代に通っております。もともと郡山にある社会福祉法人の職員で、美術館の開館に合わせて異動という形で館長になっております。その辺りまた後ほど触れさせていただきます。

### 誰もが集える場所として

美術館の概要をざっとお話しさせていただきます。所在地は猪苗代町で磐梯山と猪苗代湖の間ぐらいにあります。築140年の酒蔵をリノベーションして作っております。先ほどは公民館というお話もありましたが、こちらは最初は酒蔵です。18間、33m、長い梁が特徴で十八間蔵という名前も残っている建物です。コンセプトとしては人の表現が持つ力や人の繋がりが

るような場所を作っていこうというような話になりました。県内で物件調査を行っていく中で、十八間蔵に出会います。

蔵の来歴ですが、1880年頃、塩谷さんという猪苗代の名家の2代目の孫右衛門さんによって酒蔵として建築されて、十八間蔵という通称が残っています。先ほど長さが18間ぐらいと話しましたが、本来若松の鶴ヶ城の改修用に使う予定で切り出し禁止になっていた木があったそうなんです。それが明治になって払い下げになったということで、この酒蔵に使われたそうです。本当は20間で切り出してきて、山の道を持つてくるうちは良かったんですけど、町場に差し掛かって曲がりきれなくて2間切り落として18間になったんだというような逸話も残っている、そんな蔵です。当初は「志保屋」という屋号で酒蔵をやっていたようですが、明治に財を失って廃業してしまつたと聞いております。以後しばらくは資材置き場として使われていたようです。1943年頃、戦中です。いわゆる徴用工と言われる方、労働者の方の住居として使われていたこともあったようです。沼ノ倉発電所が近くにあるんですけど、その造成工事のため、何千人の方が町内にいらつしやつたそうです。戦後は1階が織物工場として使われていたり、仕切りを入れて一部が住まいになったり、2階はダンスホールになったりとおぼあちゃんが来て、上で踊ったんだよって、先ほど高田さんのお話もあったようなことがありました。裏には映画館があって、表には銭湯があつて社交場にもなっていたんだということ

で、ここ改修した時にまた人が集まれるような場所になってよかつたなって喜んでいただいた

### もったいないんじゃないか

開館当初、障害ということを知ってもらって、誰もが住みやすい町づくりが進んでいったらというところが主眼としてあつたので、美術館、アトというのは入ってきてもらいたくないかなと思つたんですが、美術館って意外と敷居が高く感じられて気軽に来てもらえるような感じではないというのがわかりました。障害は大変そう、かわいそう、関わりがたいイメージ、アートは

のを覚えてます。あとは酒販の事務所になったり、物置になったりという経緯を経て2014年に美術館として開館しております。2010年、ここで美術館をやるうかつて見つけた当初は、だいぶもうぼろぼろで、茅葺屋根にトタンを乗せて何とか凌いでるっていう感じ。このあと地震が来た時には、倒れちゃうんじゃないかなって、すごくドキドキしたのを覚えてます。何とか持ちこたえて、2014年に現在の姿になっています。

美術館の背景として、今お話ししたように障害福祉ですね。あと猪苗代町という背景ですね。鶴ヶ城に対して亀ヶ城っていうお城があつたそう、猪苗代城っていう正しい名前もあるみたいですけど、その城下町だったりもしたようです。若松の藩主、初代の保科正之が祀られている神社もあって、社殿が日光東照宮なみにあつたなんていうお話もつかっています。門前町として栄えてもいたようですが、今は生産年齢の人口減少が進んでおります。さらに東日本大震災があつて、これをどんなふう運営に反映していくんだということを常に念頭に置きながらやっております。

### 福祉だったり、地域だったり、震災ついでということ

高尚で特別な近寄りたくないイメージ、なんているのがあって。どちら言葉では知ってるけど、イメージが先行して実はよく知らなくて、とりあえず自分とは関係ないと思ってる。知らないことが恐ろしく、拒絶に繋がっているということを実感しました。これって、触れる機会が少ないために自分とは関係ないものと思ってしまうってんじゃないかというふうに感じました。で、本当にそうなのかなって思いながらやってきました。見方を変えると、実はそれは私たちがの中や、身近にあるもので、新しい発見だったり、新しい発想だったり、不便さや不可解さの中に見出される革新性だったり、既存の価値を見直させるような切り口が潜んでいるものじゃないか。これって本当は、自分と関係ないものとしていたのはもったいないんじゃないか。創造的な視点が育まれて社会、社会って多くの人のもの見方や考え方の総称なのかと思うんですが、そういったものが変わっていく、変容するきっかけになっていくものなんじゃないかな、というふうに感じています。

震災のあとになお感じたのは、障害を震災や原発事故なんか置き換えても言えるんじゃないかなということ。美術館のミッションとしては、それぞれ今までやってきた中の気づき、やりながら手探ってきたことが自分たちの向かっていく方向をだんだんと明らかにしてくれていくというふうに感じています。

場づくりとしては、いろいろ。展覧会、オハコカフェ、SNS、プロジェクト、イベント、アーカイブと六つに分類しておりますが、今回ちょっと駆け足ですが展覧会、プロジェクト、イベントを紹介させていただきます。

展覧会は自主企画展の他に、福島県の委託で公募展を実施したりとか、あとは持ちかけていただいた共催企画などを行っております。自主企画はテーマを一つ設けて、福祉だったり、地域だったり、震災ついでということをもう一回考え直すような、それをベースにしたところから考えていくような形を取っています。一つ展示を「紹介すると、だいぶ長い展覧会名なんですけど」あなたが感じていることと、わたしが感じていることはちがうかもしれない。展覧会名は「あなたを感じていることと、わたしを感じていることとはちがうかもしれない」展。そのままだろっていう方もいるかもしれないですけど、でもそれって普段は忘れちゃってるかもしれない、みんな自分と同じように感じていると思いがちなんじゃないかということ、いろいろな展示物をお借りしてきてます。同じものを見たり触ったり同じ行為をしても、その先にある感じていることは違う。「みる」「さわる」「かじる」「はなす」を通じて「ちがうかもしれない」という前提に立って、ともに思索する試みの展覧会。これは仕掛けを作ったとして、最初は美術館ということ通常通り鑑賞するスタイルで、戻ってくる時には全部触っても大丈夫、というように展示で構成して、一度に二度おいしい展覧会になっていきます。今コロナの状況でなかなかこういってことが難しくなりつつあるんですけど、実際に見て来たあとにカフェでみんなで話してもらったりとか、実際に話す機会が取れない方は自分が見た場所に言葉を残してつもらったりとか、あとから来た人と間接的に対話ができるような仕掛けも作ってみました。

「学び舎」 というスペースも作られました。これまでの活動の中で生まれた場のこと、飯館村のことをこれからお聞きいたします。では田尾さんどうぞよろしくお願いたします。

### これからが場づくりなんじゃないかな

3人の方のお話を聞いてですね、場づくりというのがやっぱりキーワードになってると思うんですけど、それで飯館村は私、この6月で丸10年になるんですけど、現在でもどんな家を解体して、家としての場がなくなっている状況にあるんですね。これからが場づくりなんじゃないかなと思います。それを意識的にやるために、今日勉強するために先輩たちの場づくりの話を紛れこんだんです。

私たちは支援者として関わるつもりはまったくななくて、協働者というか、協働して自分たちの問題として関わるということ、この10年間でだんだん増えてきて300人ぐらいの個人会員がいます。大学が10数、研究機関、その他団体会員みたいな人たちがたくさん集まっています。みんな自分の問題だということが原則だと思えますね。

私たちが、最初に飯館村に行った時に菅野宗夫さんという村の人に会っていて、これから全村避難だぞっていう時で、これはもう誰もいないところでもできないかと思って帰ろうかなと思ったら、「いや、ここへみなさんが来るんだら毎週、毎週、自分は避難したところからここへ帰ってくる」ということで、宗夫さんご夫妻とおじいちゃんが付き合ってくれたわけです。

### 根付いたものにしていくには

あとプロジェクトですね。一つご紹介するのは開館前から実施してる「寄り合い」。自分が住む町に、ほんど美術館という箱だけができて、それが珍しいうちだけ見に来てあとはいいやってなるんじゃないかと、そこに根付いたものにしていくにはどうしたらいいだろうっていうところから、まずその地域に住んでいるキーパーソンに話を聞いたり、アイデア出しを一緒にしてもらったりしてありました。開館後も定期的に美術館に集まって、冬場はカフェスペースにコタツを出して、こんなふうが集まっているいろいろお茶飲みしながらどんなことができたかなと話し合いをしました。で、その中で生まれたものの一つが「あいはせMAP」。せっかく美術館でできたのに美術館だけ来て、ばっか帰っちゃったんではもったいないよね、なんていうことで、美術館と駅の間をせひ楽しんで帰ってもらいたいと、自分がおすすめる場所をマッピングして、コラムを書いたり、巡り先のモデルを作ったりとかしています。これデザインーさんもイラストを描いた人も全部猪苗代の人です。

イベントは、展覧会の関連イベント、マルシェイベント、地域の方とのイベント、季節に応じたイベントをして、直接美術館に関心がなくともいろんな方が来てもらえるような切り口づくりをしています。十八間蔵の十八をどこかに残したいということで、カフェの名前をオハコ(十八番)カフェというんですけど、なお地域の方の十八番をここに持ち寄っている人々とシェアする場所にしたら面白いんじゃないかなということ、「オハコの会」を実施しています。

イベントは、展覧会の関連イベント、マルシェイベント、地域の方とのイベント、季節に応じたイベントをして、直接美術館に関心がなくともいろんな方が来てもらえるような切り口づくりをしています。十八間蔵の十八をどこかに残したいということで、カフェの名前をオハコ(十八番)カフェというんですけど、なお地域の方の十八番をここに持ち寄っている人々とシェアする場所にしたら面白いんじゃないかなということ、「オハコの会」を実施しています。

ね。それでだんだん村民の方が増えていった。最初の6年間、避難指示が出ているとは言え、昼間は活動してよかったんです。だけど宿泊しづらいけない。宿泊できないということは、さっきの場の問題として我々非常に困ったんですが、周辺の保原とか、霊山とかいろいろんなところの宿泊場所を転々しました。

それから現在いるんな場を作ることへ向かって活動しています。

福島では避難していた人たちの仮設住宅をかなりの比率で、福島県木材を使ったログハウスで作っていた。建築家に入ってもらうと、県の払い下げの仮設住宅ログハウスを二つばかり改装デザインしました。みなさんも来ていただければ泊れますし、すごく快適な場所になります。これが去年オープンしましたログハウス。まさにこれエコログというんですが、南会津の工務店の芳賀沼製作さんがやってくれて、泊まり込みで建設してくれました。

### 我々は場を作っていくかないと駄目なんだ



田尾陽一さん



地域の郷土料理のニシンの山椒漬けをみんなで作ったり、民話の会の方に民話を披露してもらったり、裏側のお墓で夏場は怪談をやったりね。こんな活動もしています。

### 何かが始まるはじまりの場所

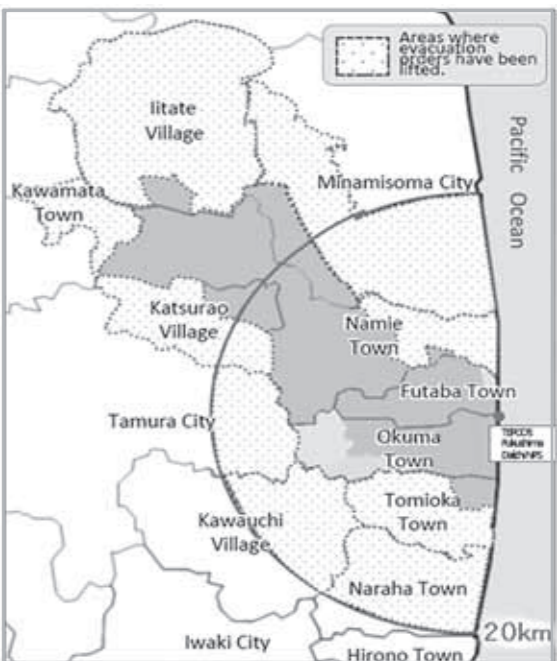
最後に美術館という場について。美術館はいぶ手狭で収納もないんですけど、オフィスもなくてですね、スタッフは常に受付とか、カフェスペースに出て作業をしております。なので、来た人とコミュニケーションを取りやすくなってあります。特別な用事がなくても遊びに来てくれる人たちもいたり、なんか面白いことがここに来るとあるんじゃないかととりあえず来

小林

岡部さん、ありがとうございます。誰でもこの場であることが大前提にあることで、無理なく、本来ですとなかなか出会うことができないこと、思考の中に入ってきていかなかったものにも出合える場になっているのかなと改めて思いました。

それでは4人目の方にお話を聞きさせていただきます。飯館村を拠点に活動してらっしゃいますNPO法人ふくしま再生の会から田尾陽一さんにお越しいただきました。田尾さんは2011年から福島に来られて、飯館村の方、村外の方、県外の方と一緒にNPOを立ち上げられて、福島復興に向けた活動をしてこられました。このNPO自体が外とみなさんを繋ぐ交流の場でもあったと思いますが、近年完全に拠点を飯館村に移されて、その中で外の方が飯館村に宿泊できる場づくりをされたり、昨





2020年10月4日に「学び舎 1101」が竣工式を迎え、西側のガーデンに村民が全村から、さらにふくしま再生の会会員、アーティスト、学生が集まりました。郡山からキッチンカーが来てくれて、村の中でできているお米とか、野菜とか、お酒も含めて村内でできたもので郡山の一流シェフが料理を作ってくれました。放射能はほとんど大丈夫ですから、それを僕らも測りながら一緒にやっています。これはすごい料理でした。住民の人が作ると郷土料理ができるんだけど、一種の都会風のコース料理になると、それはまた美味しいんですよね。飯館牛を提供してもらって、牛肉も使いました。会場の正面にとめたトラックの上で地元の堀内流民謡飯館同好会が、わーっとやっています。ギターで最近の歌を歌った人もいますし、昔の小学生の書いた作文を朗読した看護師さんがいらして、これはすごい心を込めた朗読で涙をよびまし



浪江町を通って、阿武隈の山の上を通って道です。国道399号は現在帰還困難区域に入っている部分がある。飯館は長泥以外開通しているんですけど、長泥が2年先に開通したら、私はロマンチック街道開通させようよってみなさんにアピールしている。星空がすごくきれいであちこちに郷土料理があって、これを原発事故前にロマンチック街道と県がアピールして、五つの市町村が協議会を作って今でもやっている。飯館には東北大学の惑星観測所に巨大な電波望遠鏡がある。要するに阿武隈山系はたぶん日本一、世界の中でも星空がきれい。除染しないと開通しない。やっぱり原発事故から立ち直っていくには山林を通っていく山並みを通るルート、これをみんなで開通させて、そこを通って星空を見たり、食べ物を作ったりということが再生の目標なのです。まずは帰還困難区域を通る道路の開通を後押ししていく。帰還困難区域の解除まで何年かかるかわからないわけですよ。そういうことで、家をもう諦めた人もいます。私の知ってる方々にも、とにかく方針が全然出てないから諦めちゃうんだっていう人たちもまだまだいるわけですよ。そこをどうするか、私としては、私としては場所を作り、その場所を点から線に繋いで、それからさらに面に繋いでいく。

書いた本人が前地区長で、そこに座って食べてるんですね。そういうようなイベントが行われました。福島県の農産物にキッチンカーを走らせる。農産物の雰囲気の中で美味しい地産の料理を食べるといのはすごいアイデアだと思いましたが、このやり方をやってみたっていいことですよ。これは困り屋なんですよ、この時は役場の若い人たちがあわわっと集まりました。料理をした。その隣は宿泊場所なので泊まれる。福島のかかりの人がそうである。車がなくて移動できない。ところがアルコールを飲むと車で帰れない。ここは隣に泊まれますので、安心して来れる。そういう場所がようやくできました。これは民間ベースで作ったんですけど、基金を相当集めました。全国的に、建物の半分は農泊事業を利用しました。3年前、仙台に申請に行きましたら、農政局の人が本場に原発被害地が農泊事業に応募するか、信じられない。いや、やりますよって。我々は場所を作っていくと駄目なんだと。こういうことを言いましたら半分出してもらえました。そういう経緯です。

### ワイワイ、ガヤガヤ、ワクワク空間を



2020年10月4日に「学び舎 1101」が竣工式を迎え、西側のガーデンに村民が全村から、さらにふくしま再生の会会員、アーティスト、学生が集まりました。郡山からキッチンカーが来てくれて、村の中でできているお米とか、野菜とか、お酒も含めて村内でできたもので郡山の一流シェフが料理を作ってくれました。放射能はほとんど大丈夫ですから、それを僕らも測りながら一緒にやっています。これはすごい料理でした。住民の人が作ると郷土料理ができるんだけど、一種の都会風のコース料理になると、それはまた美味しいんですよね。飯館牛を提供してもらって、牛肉も使いました。会場の正面にとめたトラックの上で地元の堀内流民謡飯館同好会が、わーっとやっています。ギターで最近の歌を歌った人もいますし、昔の小学生の書いた作文を朗読した看護師さんがいらして、これはすごい心を込めた朗読で涙をよびまし

浪江町を通って、阿武隈の山の上を通って道です。国道399号は現在帰還困難区域に入っている部分がある。飯館は長泥以外開通しているんですけど、長泥が2年先に開通したら、私はロマンチック街道開通させようよってみなさんにアピールしている。星空がすごくきれいであちこちに郷土料理があって、これを原発事故前にロマンチック街道と県がアピールして、五つの市町村が協議会を作って今でもやっている。飯館には東北大学の惑星観測所に巨大な電波望遠鏡がある。要するに阿武隈山系はたぶん日本一、世界の中でも星空がきれい。除染しないと開通しない。やっぱり原発事故から立ち直っていくには山林を通っていく山並みを通るルート、これをみんなで開通させて、そこを通って星空を見たり、食べ物を作ったりということが再生の目標なのです。まずは帰還困難区域を通る道路の開通を後押ししていく。帰還困難区域の解除まで何年かかるかわからないわけですよ。そういうことで、家をもう諦めた人もいます。私の知ってる方々にも、とにかく方針が全然出てないから諦めちゃうんだっていう人たちもまだまだいるわけですよ。そこをどうするか、私としては、私としては場所を作り、その場所を点から線に繋いで、それからさらに面に繋いでいく。

ういうことになるか。これについて、自然科学をやっている人間は徹底的に調査・分析して住民の人に知らせる必要があると思います。それで見通しがどうなんだっていうことを絶えずやっていかなきゃ駄目。そういう科学調査拠点でもあり、場づくりの中にアーティストも、技術者も、住民も、自分たちの問題だと思えば、全世界の人が集まるような場を作り再生を図っていくというのが私たちの展望です。この地域を一種の世界的な公園、公園っていうとなんか妙な気がするけど、何て言うんでしょうかね、エココロジミュージアムにしちゃうと。入るのはかなり危険だということももちろん我々は測定してるからわかるんですけど、それを避けて何とかアプローチしていく。住民の人たち、避難してまだ帰れない人たちと協働した一つのミュージアム運動っていうのかな、エコミュージアムっていう概念あります。そういう話に発展していく場づくりというのが重要なんじゃないかというふうに私は思ってる。以上です。

青砥和希  
よろしくお願ひします。  
この4名と会場の方と二期一会のころもあると思うんです。お互いに聞いてみたいことをですね、一人一つ質問をしていただこうかなと思います。  
島根の太田さん、全体への感想でも構いませんし、どなたかお三方に聞いてみたいことなどは質問いかがでしょうか。

### 場を点から線に繋いで、それからさらに面に繋いでいく

ツリーズもコロナが収束すれば受け入れた。コロナの前は、20カ国ぐらいから来てます。私、ツリーのコンダクターでもあるので案内してるんですけど、非常に福島に関心があつて、日本の農村部はきれいだったという印象をもつて、その上で人の気持ちとか、原発事故の歴史を聞いて帰っていくんですね、世界への発信源、発信地をここでも作ろう、さらにもっとインパクトのあるかたちで作ろうというのが場づくりの方針であるということ。例えばチェルノブイリを見に行くのはダーツツリーズって言う人もいますよね。我々はカラフルツリーズムって言うのをやっていますという話です。

あぶくまロマンチック街道っていうのは国道399号。ずっと阿武隈山系を辿っていくと一番北のほうに飯館村があるんですね。南のほうから言えば、川内、田村、都路、それから葛尾、

個人のアイディアなんですけど、何年も除染しない状態の森林、そして、その生態系、自然環境そのものが、人間のいない空間になっていく。それが長年、10年、20年、30年続くこと

太田  
今お三方にお話を聞かせていただいて、まったく違うなと思ったのはそれぞれの方みんな自分たちでいろいろなことを考えておられるっていうところ。私たちには指導者がいます、その指導者のもとにやってきましたので、一人ずつの力って本場に小さいものなんです。自分たちでやっていけることを少しずつやっていくっていうのがこれからの課題かなと思ってるんですけど、みなさんのお話を聞かせていただいて、これを何とか自分たちの力としていきたいと思ひました。感想ですけど。

### 自分たちの問題だと思つて、全世界の人が

あぶくまロマンチック街道っていうのは国道399号。ずっと阿武隈山系を辿っていくと一番北のほうに飯館村があるんですね。南のほうから言えば、川内、田村、都路、それから葛尾、

個人のアイディアなんですけど、何年も除染しない状態の森林、そして、その生態系、自然環境そのものが、人間のいない空間になっていく。それが長年、10年、20年、30年続くこと

小林  
田尾さんから最近作られました「学び舎 1101」のご紹介を含め、これから作ろうとしていらっしゃる場のお話もしていただきました。どうもありがとうございます。

青砥  
ありがとうございます。熊谷家住宅のこれまでの経緯をうかがっていて私が思ったのは、場所って作り手と使い手、あるいは教える側と教えられる側、そういう関係がどんどん入れ替わっていくということが今日のお話の共通点だったかなと。美術館とか、重要文化財に指定を受けているとか、そういう看板はあるんですけど、それはアーティストがアートのことを教

### 場を編む

あぶくまロマンチック街道っていうのは国道399号。ずっと阿武隈山系を辿っていくと一番北のほうに飯館村があるんですね。南のほうから言えば、川内、田村、都路、それから葛尾、

個人のアイディアなんですけど、何年も除染しない状態の森林、そして、その生態系、自然環境そのものが、人間のいない空間になっていく。それが長年、10年、20年、30年続くこと

小林  
田尾さんから最近作られました「学び舎 1101」のご紹介を含め、これから作ろうとしていらっしゃる場のお話もしていただきました。どうもありがとうございます。

青砥  
ありがとうございます。熊谷家住宅のこれまでの経緯をうかがっていて私が思ったのは、場所って作り手と使い手、あるいは教える側と教えられる側、そういう関係がどんどん入れ替わっていくということが今日のお話の共通点だったかなと。美術館とか、重要文化財に指定を受けているとか、そういう看板はあるんですけど、それはアーティストがアートのことを教





た。

田尾さん、いかがでしょうか。

田尾

岡部さんが言われた障害のある人たちとアートを繋げるっていうか、社会構造っていう言葉もあったんですけど、社会的な構造を作っていくそのフィロソフィーですよ、それはどうでしょうか。

とにかく面白いんです、

目の前にいる方が

岡部

私は最初にお話ししたように支援員だったので、障害のある方と一緒に過ごしてたんですけど、こういう言い方は既存の価値観からだと憚られるかもしれないんですけど、とにかく面白いんです、目の前にいる方が。もうその方が好きになっちゃって、この人のことを知ってほしいっていうか。自分は支援員という立場なんですけど、「支援」なんてことはおこがましいっていう気持ちが高まりまして。その方から自分の価値観が起ったことが衝撃的で、何でこの人がここに押し込められてないといけないんだらうと思うようになりました。地域の中にいてももらったほうが周りの人による影響を与えて、そこから同心円に面白さが広がっていくんじゃないかなって。その方自身はすごく生きづらさがあって一人では暮らしていけなかったり、ご家族が大変だったっていうことがあって。でも、それって社会構造の中で双方向的に解決していけば、もっと豊かになっていくものなんじゃないかなってところがベースに

はあります。

田尾

すごく大事なことをおっしゃったんだと思います。「ふくしま再生の会」って一種の会員組織の空間ですよ。それをどういう考えで作るかかっていうときに、私たちは完全に現地で協働して継続して事実をもとにして活動すると言っているんです。「この指とまれ方式」っていうのをやっているんです。要するに私みたいな、リーダーみたいに使われている人間が計画を立てて、原発被害地はこういうプログラムでこうやれと、こうやるんだよと人を集めることを、私たちはやらない。

原発事故というのは、推進リードしてきた政府、東京電力、科学者が一番最初に思考停止したんですよ。それであまり信用できなくなりました。苦しんでる住民も科学者も行政も、思考を解放するにはどうしたらいいか、僕は考えた。そのためには「この指とまれ方式」。最初からプログラムはありません。みんな来て自分で考えてください。で、こういうことやりますよって言った途端に、なるほど面白そうだってみんな集まる。「この面白い」っていう概念がね、平気で喋れるような空間じゃないと駄目だと思わんです。自分の興味っていう意味で「面白い」から、やっててすごく爽快な気がする。

新しい公共空間の創造

原発被害地でこういうことをやるのは、おこがましいかなって遠慮する人も正直いるんですよ。そういう遠慮意識を解放して、私の言葉だと新しい公共空間の創造を行うと言っているわ。か。

この家と近づいた

太田

先ほどもご紹介した春夏秋冬の大きな行事はそれはそれでとても素晴らしいと思ってるんですけど、もうちょっと地元の人たちと関わりが深いものがないかと思ってる時に、小泉和子先生の生家が昭和のくらし博物館になっておりまして、そこでやっている家事教室をこちらでもすると、身近にみなさんに寄っていただけるんじゃないかということで、3年前から始めました。最初にじゃあその建物で味噌作りをしてみようということで、ちょうど面白いお話をしてくださる麹屋さんが近くにいらっしやっただけで、その方をお願いして麴の話を含めた味噌作りをしたんです。次の年になると同じ時期にあの味噌作り今年はしませんかという問い合わせがあったりして。若い方が子どもさんと一緒に参加したいと申し込まれることが結構ありまして、そういう感じで若い人たちが集まってくださってるっていうことがとてもいいなと思っています。そこから、昔の家事をもう少し見直して、衣食住で何かできないだろうかというところで、食で言えば今の味噌作り、衣で言えば縫物ですね、それから住、住まいで言えばしつらいを変える、夏と冬で建具をがらりと変えるということをごはしてるんですけど、それを催しとして募集して一緒にやってみたい。そうすると、今まで全然来られないよう

けです。公共っていう概念が日本では国のことを意味するとか、個人主義は駄目で公共のためなどに使われるんですね。本当の意味の公共は人々が集まって思考停止しないで議論して、異論を排さないで新しいことを考えて行動する、面白い空間を作っていく、そういうのを公共空間って言うんだと私は思ってるんです。だから新しい公共空間を作っていくのは、それぞれの人間なんだと思います。

青砥

新しい言葉が出ました。公共空間。そうですね。EMANON も白河市の委託事業でやっている場所でもありますし、そういう意味では塩竈の杉村博美術館と共通しているところもあると思うんですけど、ただ税金でやっている、やってないっていう意味の公共ではないというふうにいる公共という言葉を使いました。

一人一人の小さな物語

今日の高田さんの発表の中で、町の記憶を残していくための場所なんだっていう話があったんですけど、それで思い出したのはこのEMANON も隣に本屋さんがありまして、今は若い人があまり行かない本屋さんなんですけど、聞く話によると当時は男子校と女子高の真ん中にこの本屋さんがあるので、そこに男子校の生徒と女子高の生徒が集まって、本棚と本棚の隙間でアイコンタクトでコミュニケーションをとっていた、そんな話を聞くこともあってですね。そういう一人一人の小さな物語が古い町、歴史のあるところには溜まっているんだなと、そんな話を聞いたことを思い出していました。

な方々が参加してくださるようになって、何だかこの家と近づいた感じがあるなという実感が  
ありました。それを少しずつ充実すればいいと  
思っていたところにコロナがあって、昨年はそ  
の計画がほとんどできなかったですけど、もう  
ちょっと身近な感じのことができるといいなと  
いうふうに思っています。

ちょっと青砥さんにお尋ねしたいのですが、  
中高生と一緒に集える場を作ろうと思われ  
たきっかけは何かあったんでしょうか。

### 一人一人の物語になるような景色、 場所、そういうものを高校生に 届けたい

青砥

場がなかったからですかね、僕が高校生の時  
に。使っている空間というのは町の中によくつ  
かあって、今もどの町にもあるんだらうと思  
うんだけど、あなたが関与している、手を出して  
いい、話していいという、そういう場というの  
はなかったと記憶しています。

今、太田さんに聞かれて思い出したのは、高  
校生のとき、どこの町にでもあるような風景の  
記憶しか持っていなかったような気がするん  
です。よく僕は高校生に、この町で過ごす最後の  
3年間だというふうに言うんです。ここで自分  
の一人一人の物語になるような景色、場所、そ  
ういうものを高校生に届けたいなという気持ち  
で場所を作ってきたかなというふうに思ってい  
ます。そんな思いで始めました。

じゃあ、ちょっとパスして高田さん、よろし  
いですか。

### 生きた証をみんなで残していこうよ

高田

自分がまちの記憶を意識し始めたのは、最初  
の紹介でもお伝えしましたが、震災の経験だっ  
たんですね。目の前にあった家が瞬間にな  
くなり、目の前の風景が儂いものであるとい  
うことに気づかされた。月日が流れるうちに、本  
当にここに家はあったのだからと、記憶が  
曖昧になって不安になった。そこから焦りがう  
まれた、まちの記憶を収集しようという意識に繋  
がったのかなと思っています。写真やテキスト  
に残すことによって自分たちが生きた証を残し  
ていきたいなと思って、2011年以降、徐々  
に始めました。

市に呼び掛けて写真を集め始めたり、エビ  
ソードを聞き始めたり。そうしていくうちにど  
んどんと、形がなくてもその風景が呼び起こつ  
てくる、見えるようになってきたんですね。  
まちの風景、景観っていうものは時代によって  
変わるとは思っています。けれど、形がなくても  
そういった記録だったり、その個々人の生々し  
いエピソードが残れば、それを読むことによつ  
てその先人たちの歩みがきちんと体に浸透し、  
それによって「私は今その上に生きているんだ」  
と感じることができると。なにか新しい取り組み  
をする際、はじめは地域の方に受け入れてもら  
えないこともあります。豊かな歴史文化があ  
り、さまざまな思いと誇りがあるからこそ譲れ  
ないもの、守るべきものがあるのだと理解する  
ことができてからは、それらを受け継ぎたくな  
るようになります。考え方や見え方が変わつ  
たんですね。昔からずっとそういう思いで受  
け継がれてきたんだと思うんですけど、自分自

すごく大事ですね。ありがとうございます。岡  
部さん。お願いします。

### 文化についてもしかして遺伝子なのかな

岡部

今、高田さんがおっしゃったこととだいぶ重  
なるかもしれないんですけど、場所と記憶、災  
厄の中の場、若い人と語るということというのは、  
全部繋がってるなと思いがらうかがってまし  
た。

身が経験を通して変わったので、こういったも  
のを活かしていきたいなと思ったんです。生き  
た証をみんなで残していこうよって。それがま  
ちのアイデンティティになり、まちの文化に  
なっていく。それに美術館という場で取り組ん  
でもいいのではないかなと思ってやっています。  
ちょっとまとまりないんですけど、場と記憶は私  
にとってはそのような感じなんです。

### 場所からだったらできる

青砥

なるほど。ありがとうございます。商売柄、  
高校生と話してばかりなんですけど、みんな  
僕らが震災を覚えている最後の世代だから記憶  
を継承しなきゃならないんじゃないか、じゃあ  
どうしたらいいですかということ相談してく  
れるんです。それはやっぱり、個人の力でやっ  
ていくのってすごく難しい。場所からだったら  
できるかもしれない。誰かが知っていることを教  
わるんじゃないかと、みんなで残していくって  
いう共同作業が場所を媒介にできると、僕に  
どうしていいですか聞いてくれる高校生に  
対する一つの答えになるかなと思いました。

高田

欲求って大事だなんて。残したい欲求。残さ  
なきゃという気持ちを大切にすると、本当にい  
ろいろが繋がります。

青砥

これは残したいって思うもの、声かもしれない  
いし触覚かもしれないし視覚かもしれないです  
けど、そういうものに出会っていくというのは



世代に繋いでいくという縦の繋がりはわかり  
じゃなくて、横の繋がりもあると思うんですね。  
今学ばれていること、すくいいなって思うこ  
とが共有できるっていうか、そういう意味合い  
の場が求められている。

田尾さんのお話にありましたけど、誰かにや  
らされるということではなくて、自分がなんか  
ワクワクドキドキする。そして前の人はこんな  
ことを考えていたんだみたいなを受け継いで  
いくっていうような。災害も貴重な経験だと思  
うんですね、やっぱり。人としての貴重な経  
験で、他人事にしておくのは本当に何も学びが  
ないというか。それを若い人も含めて一緒に共  
有していく、そのようなことなのかなと。

青砥

ありがとうございます。次の世代に受け継い  
でいくためには二舟が文化なんだ。

岡部

そうですね。文化って単体で使われるより、  
食文化だったり歴史文化だったりアートと文化  
みたいにセットになってるじゃないですか。  
やっぱり総称しているというか、何か大事なも  
のを言わんとしてるんだらうなっていうのを感じ  
ます。文化センターとか、本当はそういうた  
めの箱なんだらうなっていうのを改めて遡って  
考えたりします。

青砥

ありがとうございます。若い人と関わってる  
と、主体的に事業に参加したほうがより良い事  
業だとか、自分らしく高校生が関わられるための  
仕組みを考えようっていう、そういう問いと向

き合う場面がすく多いんです。

でも、この建物で言うとな、この天井とかかっ  
こいいよね。たぶん昔ここで火を焚いて、うま  
いこと黒くなっている。そっちの部屋よりも  
こっちの部屋の天井がめっちゃきれいなんです  
ね。高校生がこっちのデザインが好きだから、  
ここ全部木を剥がして塗っちゃったほうがいい  
のかっていうと、そうじゃないだろうと思うん  
です。これは大事なものだっていうのをき  
ちんと言葉と表現にして伝えていきながら、で  
も自分たちがやりたいようにやれる部分はいつ  
も作ってあげるとかね。これは大事なもので、  
私は残したいんだっていうことを伝えることも  
役割なのかなというふうに思いました。ありが  
とうございます。田尾さんいかがでしょうか。

### 自然と人間の共生する場

田尾

なんかえらく難しい話になってきたな。私が  
住んでいる飯館村の若手の人たち、若手だけ  
じゃないけど、生活と生きていく場を失ったん  
ですよ。今村に戻っている人が20%強かな、  
昼間だけ来る人もいるからわからないですけ  
ど。6000人が12000人になった。そのぐ  
らいの人が戻って来ない。だけど、戻っ  
てこない人はどういふふうか考えているのか  
な。何を失ったのかな。物理的な場所、そこに  
住めなくなったということもそうだけど、何て  
言うんですかね、若い人でもみんな飯館村に愛  
着を持ってると思うんですよ。おじいちゃん  
がいた、おばあちゃんがいた、親が生活してたっ  
ていうので、断片的な記憶が残っている。  
私なんか今80に近いんだけど、4歳の時に広



島で原爆を見ちゃったので、考え方の基礎にその記憶が刻まれている。このままいくとアメリカ兵の命が大変失われるから、市民30万人ぐらい殺してもいいかなっていう判断、そういう人間も世の中にいるっていうことですね。それはおかしいと考えた日本人も、戦争に負けたんだから仕方ないと考えた日本人もいる。そういう社会的な記憶というよりは残りますね、やっぱりね。

だから飯館から逃げざるを得なかったという記憶ってのは、やっぱり若手も含めてどうしても残る。経済的には飯館に戻っても生活はできない、動め先がないと若い人は判断する。それをいい方向で再生していくとはどういうことなのか、そこで希望を生む場を作ろうっていうのはどういうことなのか、ということを考えるのはすごく意味があると思いますね、僕はね。ちょっと抽象的になっちゃうかもしれないけど、原発事故が何を壊したのかっていうことなんです。ここは簡単にもうまとめちゃうんですけど、自然と人間の関係性を壊したんだと思うんですよ。自然の中で生きる人間の共生、自然と共生している空間を壊したっていうこと。経済成長のために原発が必要であるという論理で、実は持続してきた人間の生活、自然の中で生きていた人の生活を壊しちゃった。それは凄まじい自己矛盾ですよ。これは記憶とは言えない。記憶というより、若い人が考えていくと同じことに行き当たると私は思っている。自然と人間の共生する場っていうのはほとんどなくなっちゃってしまってますね。僕はそれでコロナが起っちゃったって思っている。自然の中にはウイルスも入ってるような気がするから。そこどう

やって共生するかっていうふうに必死で人間は考えなきゃいけないのに、自然をぶっ壊して、自然はそもそも人間のためにあるだけなんだというふうにも思っている傾向がある。だから、そこら辺をもう一回見直すところに若い人が頑張ってもらえるといいなって私は思っている。年寄りが喋っていたり、若い人が断片的に何か思ったこと、この記憶を知ることが出来るわけだから、小説を書く人は物語としてそれを書く人もいるし、アート表現をする人もいますね。僕は物理学をやったものだから数字のデータでしか表現できない。あまり感動を呼ばない表現なんだけど、そこら辺を総合的に考える若い人が増えていく必要がある。二度とこういう災厄を起こさないためにはどうしたらいいかって考えるのが場の最大の役割なので、そういう記憶を呼び覚ましてみんなでワイワイガヤガヤと楽しみながら、自然と共生する場を拡大したほうが地球のためにはいいんだよ、みたいな話をやっていく必要があるんじゃないかと、そう思ってるんですよ。

### 場所って共有物

青砥

ありがとうございます。自然と人間の共生とおっしゃっていただいたんですけど、場所って共有物だなと思うんですね。僕はここEMANONの代表をしているんですけど、当たり前なんですけど、もはや僕だけのものではないというか、みんな好き勝手に使っているんですね。自覚的かどうかはわからないんですけど、人間として他者が同じ場所にいるとどう共生したらいいのか、一緒にこの空間を使うにはどう





したらいいだろうという問いがその場にいる人には生まれると思っています。それが特定の場所を持つ意味なのか。自然と人間の共生ということと、一つ一つの場所の中で人が集まって何かやっているというこの意味の共通点なのか。田尾さんのお話を聞いて思っていました。

最後に、会場に来ている人の中で、これから場所を始めたいという人がいるのを把握して、これから場所を始めたい、作りたいという人に何か伝えることがあるとすれば何を伝えますか。一言でいただけると嬉しいです。じゃあ島根から、太田さんからよろしいですか。

**太田**  
やってみたいと思ったとにかく動いてみたらいんじゃないかなと思います。以上です。

**青砥**  
ありがとうございます。じゃあ高田さんいかがですか。

**高田**  
多様な価値観を受け入れてくれる場を目指す、ですかね。そうすると本当いろいろな方が交流してくれるのかなと思います。

**青砥**  
ありがとうございます。岡部さん。

**岡部**  
自分だけでやろうとは思わなくていい、ということですかね。思いがあって何か始めようと思ったら共感してくれる人はいっぱいいると思う

ので、自分だけで抱えて、これもあれもと思わないほうがいいと。自分だけじゃできない。

**青砥**  
勇気の出る言葉です。ありがとうございます。田尾さんも一言何かありますか。

**田尾**  
ワイワイ、ガヤガヤ、ワクワクする空間を作ると。それでそこに何かうるさいじじいがいたら、「うるせい」と言う。

**青砥**  
すぐ行動に移せるアドバイスで大変心強い言葉でした。ありがとうございます。

**小林**  
みなさんありがとうございました。長時間に渡りましたが、お付き合いくださいましてありがとうございます。みなさん本当にありがとうございました。

ご登壇者それぞれの運営理念や取り組みをうかがい、自分とは違う視点での考え方を知ることができ、非常に刺激をいただきました。田尾さんがおっしゃっていた「わいわい、がやがや、わくわくできる場所」という言葉がとても印象的でした。アフターコロナの社会ではオンラインが常識になり、リアルに人が集う場は今以上に価値ある貴重な場になると思います。福島県内にそのような場をたくさん作っていいですね。(40代)

多様な場所の4人の話がどこか共通しており、実践することでクリアになっていく志向性について考えました。対話の場はありそうでないものです。対話を重ねてアーカイブすることで、思いを記録できるような気もします。記録することで足跡を残せる。(30代)

非常に共感する内容ばかりで面白かったです。人と人がつながる場が、今だからこそ必要かと。(40代)  
これからの自分の動きを考える時間になりました。(40代)

「場を編む」という視点と、その必要性に気付かされた。(50代)

人の意見を聞き、考えを知り、そこから自分の思いが生じて、大変楽しく面白かったです。(20代)

家の女性たちの具体的なエピソード、面白く聞きました。はたきをかけるタイミングが文化をつくるのかと。オンラインで参加していましたが、今この場も編まれていると感じました。(60代)

# 参加者の声

# 痕跡、ストーリー、拠りどころ 白河市本町9番地から思うこと

青砥 和希  
(一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)

どこに暮らしてもいい時代にあつて、あえて特定の場所が求められる理由はあるのだろうか？と考えることがあります。

わたしは、誰かが手を入れたことが見えたり触れられたりする場所を運営しています。改築当時、高校生と一緒に作業をしたその痕跡を、誰かが見つけられる。その場所には、当時を知っている語り部がいて、語り部に語られた経験を持つ誰かがいる。2015年の秋、白河市本町9番地で新しい場所をつくる時、自分だけではなく、誰かと一緒につくることだけは欠かせないと思いました。一枚の黒板も一つの椅子も、わたしやあなたが塗ったり組み立てたもの。そこに関わった一人一人がその場所にどのように関わったのか、語り部が起るような場所。場所の痕跡が、自分が抱えてきた自分の物語をお互いに話すきっかけになります。お互いがストーリーを語ることで、お互いのことがわかる。そうしてはじめて、その場所に一人一人の個人としての存在が浮かび上がってくる。

一人一人の個人の存在の大切さは言わずもがなです。しかし一方で、個人対個人の関係のもろさを、現代の私たちは知っています。たったひとつのつながりは、一度切れてしまつたら終わってしまいます。血縁や学校縁などの特

定の属性に限定したつながりもそうです。場所を媒介とした双方向の／複数性のつながりは、そのもろさを補ってくれます。場所の中で、誰かと誰かが対立してしまうこともあるかもしれない。けれどその時には誰かがまたそれをつなぎとめてくれる。場所は、知らず知らずのうちに、お互いがお互いを支え合う可能性に満ちています。従来、集落とか寄り合いがそういう場所だった時代がありました。だから、現代の10代にとつても、自分の場所だと思ふことができる拠りどころが、地域にこそあつて欲しいと思っています。

地方の高校生は、ほとんど必ず一度、その土地を離れる存在です。移動が、現代の私たちの文明として若者に宿命付けられている。だから、いつでも戻れる場所を、高校生のうちに一つ、地域の中に持つ。帰ってくる場所がその土地で続いていくためには、毎年のように入学し卒業して入れ替わっていく高校生が、その場所に自分たちの物語を持ってもらうことが何より大切です。いまそこにいる高校生が、その場所を求め必要としないならばその場所は途絶えてしまう。まちの歴史と文化が息づく空間に根付きながら、いつでも目の前の高校生が求めるものに応えて、この場所を編み続ける。それが現代にあつてなお場所が果たせる役割だと思っています。

# 舞鶴引揚記念館

周囲を山に囲まれた深い入り江から、古来天然の良港として栄えてきた舞鶴。

近代以降は日本海側唯一の海軍鎮守府が置かれ、軍港としての歴史を重ねました。

太平洋戦争終結後は、シベリアや中国からの引揚者が帰国後初めて日本の地を踏む引揚港のまちともなります。

舞鶴引揚記念館は、引揚者や戦争経験者からの願いを受けて引揚の歴史と平和の尊さを伝えるミュージアムとして

昭和63年（1988）に開館しました。

その後、戦争の記憶が薄れるとともに利用者減を経験しますが、引揚港としてのまちの記憶を伝え、

あらたな未来を創造する場として

平成27年（2015）にリニューアル。

同年には市民との協働が実り、その収蔵資料570点がユネスコ世界記憶遺産に認定されました。

地域の誇りを育む場、協働の生まれる場としての

リニューアルの経緯や世代を渡る平和の継承の実践について

山下美晴館長、学芸員の長嶺睦さん、

前館長でボランティアを率いる宮本光彦さんにお話しを

伺いました。

日時：2020年11月18日（水） 9：30～17：30

リサーチ先：舞鶴引揚記念館

お話を伺った人：山下美晴さん（舞鶴引揚記念館館長）

長嶺睦さん（舞鶴引揚記念館学芸員）

宮本光彦さん（NPO 法人舞鶴引揚語り部の会理事長）

調査者：岡村幸宣（原爆の図丸木美術館学芸員・専務理事／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

川延安直（福島県立博物館副館長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

山下美晴

「COM京都大会に関わらせていただいたこともあって、地方からでも国内外の連携に繋がれるということを感じています。こういったネットワークに関わらせていただくのは大変ありがたいですし、私どもの力にしていければいいなと思います。限られた時間ではありますが、よろしく願います。」

小林めぐみ

よろしく願います。

山下

うちの学芸員は3人。1人は舞鶴出身。長嶺は沖繩出身で京都の大学に来て、他のところも経験してから。もう1人の保存担当は静岡から。いろいろな視点から話が聞けるのはいいです。それでは、館内のご案内から。



長嶺睦さん

自分たちの労苦を伝えてほしい

長嶺睦

この記念館は32年前の1988年に開館しました。戦後にシベリアに抑留された人たちが自分たちの労苦を伝えてほしい、自分たちが祖国への第一歩を踏み出した場所に歴史を伝える施設を作ってほしいということで、7400万円の寄付を募りました。足りない分を舞鶴市と京都府が出して作ったのがこの館です。32年前に寄付できるといのは日本では珍しいと思います。

今から5年前と3年前に2回に分けて大規模リニューアル工事をしました。全部でおおよそ8億円ぐらいかかったのですが、人口8万人の市でリニューアルに8億円かけるのはなかなか大変なこと。セミナールームなど大体のミュージアムにあるようなものがなかったの。子どもたちが来館しても抑留の歴史や展示の解説など、お話しできる場所もなかったのですが、リニューアルでセミナールームを増設して見学の前に歴史や展示資料の解説ができるようになりました。そもそもここが開館した時は、抑留体験者の人たちが来て自分たちの過去を回想するような場でもありません。体験者の方が赤紙を見ては「ああ、こんな自分ももろたわ」、千人針を見ては「ああ、こんなお母ちゃんに作ってもらたわ」とか展示資料を見て過去を回想していました。体験者自身が説明してくれることもあったのでリニューアルするまで詳しいキャンペーンがなかったのです。

小林

物を見ればわかった。

長嶺

回想する場であり体験者が多く訪れて体験者自身が語り部をしていたので、詳しいキャプションがなくてもよかったです。32年前は展示資料を解説してくれる戦時体験者がたくさんいた。例えば戦時中に中学生ぐらいだった人たちでも、「千人針をお兄ちゃんのために作ったんや」といった話を一緒に見学に来た子どもや孫にしてくれる。しかし、そういう人たちは今ではほとんどいない。

小林

30年ってそうですね。パネルもリニューアルにあたって、新たに追加されたのですか。

長嶺

戦時下や戦後の社会状況とかいろいろ考えて作りました。一つ指摘されているのは、加害の歴史がない。歴史は多面的なので、もちろんそれも僕は大変なことだと思っていますが、その辺のバランスをどうしていくかは考えないといけない。

やったやられたの繰り返し  
連鎖を止めない

一方で、侵略した結果、シベリア抑留があったという話は、ストーリーになってしまいがちなので、何回も検討していかないといけない。僕らが伝えたいのは、やったやられたが戦争で、戦争はその繰り返しだということ。しかしそれを止めなきゃいけないということに気づいてもらうためのミュージアムを作っていくかという思いがない。いろんな考えの人がいるので100%

達成はできないにしても、やったやられたの繰り返しの連鎖を止めないといけない。シベリア抑留で大変な思いをさせられた、だから仕方ないな、それは答えとしては間違っている。展示は基本的にあんまり難しい言葉を使わないようにしています。歴史用語は仕方ないですけど、大人が子どもを連れてきて、「こういうことだよ」と説明できるような、高校生くらいの来館者が見てなるほどと思うような程度にしています。

照明はかなり明るくしています

長嶺

お気づきだと思いますが館内の照明はかなり明るくしています。これは意図的にそうしています。ここに来た若い人たちの感想は何かという、「怖い」、「気持ちが悪む」、「二度と来たくない」、なんです。僕自身は沖繩戦の研究をしていて沖繩の資料館にもたくさん行くんですけど、友達から言われるのは、「なんでお前、あんなところに何回も何回も行けるの?」「なんか、気持ちが悪むのか」と言われます。特に沖繩に遊びに行った友達に言われるのが、「ひめゆりの資料館行ったけど、二度と行きたくない。せっかく沖繩行ったのに、帰ったあとも思い出したらブルーになる」。でも、あの展示が現実なんだ。だけど、現在では、受け止めきれない人がほとんどです。戦争を知らない世代の人の精神的負担を軽減する意図もあって、展示室全体を明るくしました。

岡村幸宣

資料収集はされているのですか。

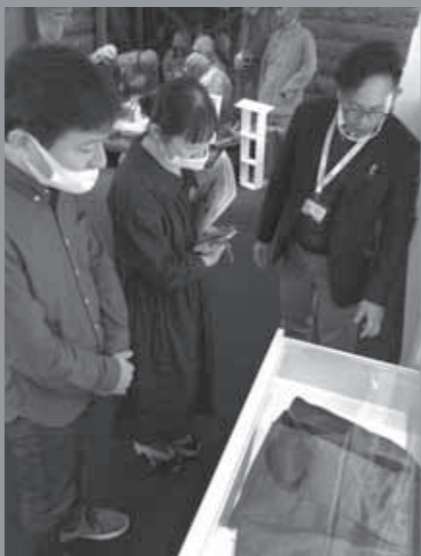


捨てられるぐらいだったら受け入れよう

長嶺 今もしています。積極的収集ではなくて、どちらかという体験者やそのご親族の方からの寄贈をお待ちしている感じですが、今でもほとんど来ます。収蔵庫のキャパシティのこともあり、お断りさせていただくこともあります。ただ一方で、もう自分の代で終わるんや、下がないからどうせ捨てるって言われたら、捨てられるぐらいだったら受け入れようと判断することもありません。

岡村 難しいところですね。

長嶺 難しいです。バランス見ながら資料の受け入れをしていくしかない。資料寄贈の問い合わせだけでも年間100件ぐらいはあります。そのうち、実際寄贈いただけるのは30件、40件ぐらいです。



長嶺 そうですね。リニューアルする前は、西日の当たる場所に展示されていて少し焼けてます。

小林 大事にしておられたんですね。

長嶺 そうですね。リニューアルする前は、西日の当たる場所に展示されていて少し焼けてます。

小林 ちよっと焼けちゃったんですか。

長嶺 そうなんです。あと絵画は1300点収蔵されています。リニューアル前は絵画の活用が全然できてなかったんです。

岡村 展示はしてないんですか。

長嶺 展示は企画展でします。絵画を保護する観点から常設はしていません。常設すると乾燥や色落ちなどを防ぐために、こまめに入れ替えていかないといいのですが、マンパワーがどうしても足りないのととても厳しい。企画

画展で展示したり、バナーや展示パネルで活用しています。

小林 企画展は年にどれぐらいなさっていますか。

長嶺 4回です。これは抑留体験者の人が作った人形ですよ。

岡村 強いんですね。

長嶺 立体で自分の記憶を残すという発想。

岡村 広島市は被爆人形を提供した。

長嶺 ああ、ありましたね。

岡村 ビジュアル的にやっぱり強いですね。子どもにとって。

長嶺 体験者の人が作ったので、やっぱりリアリティがあるのかな。もちろん主観も入っているでしょうけど。後からマネキンを追加したんです。監視の兵士とか。

岡村 あれだけちよっと作風が違う。

だから。

岡村 このすころくも作ったんですか。

### 作ることが精神的な支えになる

長嶺 それも手作りです。彼らがこれを作った時の心情をいろいろ手記に書いているんですけど、作っている時は楽しいんですって。こんなスプレー作ってたって食べるものはないんですけど、作ることが精神的な支えになる。食べる物がない、毎日働かされる、毎日が死ぬ、いつ帰してもらえるかわからないという不安な中で、人間ってそういう心の支えになるものがないと絶対生きていけないのだと思います。

岡村 東北の震災であっても、そうだと思う。家が流されちゃった、家族が死んじゃった。仮設に住んでいるけど、いつになったら自分のお家を再建できるだろうとか、いつになったら元の生活に戻れるだろうっていう不安な毎日の中で、仕事も行かなくちゃいけない、子どもの面倒もみなくちゃいけない、でも一方で楽しいことがある。あれは、いろいろな不安も少なからず軽減されるのではないのでしょうか。

小林 生み出すことですよね、何かをね。

長嶺 人間にとってすごく大切、苦しい中でも楽しんでとか喜びとか、そういうのがないと、人間は絶対生きていけないことを抑留体験者は伝えて

長嶺 監視がないと、と製作者が思ったのじゃないかな。

岡村 体験者の方が作られたと聞いて、すごく面白いなと思った。

長嶺 僕も5年前にリニューアルする時に偶然知ったんです。抑留画を描いていた吉田勇さんという奈良の人ですけど、その方が亡くなって、遺族の方が、絵画をもらって欲しいと申し出ました。その絵を見せてほしいとお返事したら、200何十点もあると言うので、奈良に行ったんですよ。自宅の画廊みたいなところに置かれてあって、その中にこれ（収容所の模型）の下絵みたいなのがあった。「これお父さんが描かれたんですか」「そうだと思いますよ、ここにサインあるし」と。吉田さんのご子息曰く、絵を父が描いて、それを京都市の誰々さんにお願いをして作らせたみたいだと。展示しているラゲリにそういう経過があったのかと、その時はじめて知りました。実はリニューアルする時にこれを作り替えようという話もしていたんです。

小林 それをしたらやっぱりね。

長嶺 しなくて本当によかったなと思う。でもちよちやい子どもが来るとみんなの前で泣くんですよ。目線が小さい子の目線なんです。

くれていると思います。だから音楽会なんかも開いてました。収容所によつては30人ぐらいで音楽団を作っていました。例えば黒柳徹子さんのお父さんの黒柳守綱さんとか、いろいろな人が音楽団の結成に携わっていくのですけど、こういう音楽の演奏や鑑賞が楽しみになることもありました。三波春夫さんも抑留体験者で、毎週土曜日に収容所で浪曲を歌っていたそう、そういうことが抑留中の楽しみになっていました。こういう麻雀牌を自分で作って収容所の仲間と麻雀をしたりする人もいました。ほかにも花札と将棋と囲碁もありますよ。全部手作りです。麻雀も花札も囲碁も将棋も全部賭けですよ。何賭けるかって言ったら、パンとか食べるもの賭けるのです。

岡村 ああ、命がけだ。

### 苦境の中でどうやって人間が生きてきたのか

長嶺 命がけです。でもそのぐらい、食べるものも大事だけれど、賭け事が好きな人にとっては心の支えでもある。人間ってどんなに物質に満たされていて、やっぱり精神的支えがないと生きていけないところがある。

シベリア抑留では、60万人抑留されて6万人の方が亡くなっている。大変な数です。全体の1割が亡くなって、9割が生きて帰ってきた。本当に大変なことですよ。あの過酷な状況の中で生きて帰ってきた。ドイツとイタリアも抑留されていますが、彼らの死亡率は40%以上といわ



小林 このくらいに、しゃがんで。

岡村 それを排除してこういう風潮は強い。

### 怖いと思ったその気持ちが正しい

長嶺 強いです。そこは違うな。ちゃんと説明が必要ですよ。大人の人に対しても、僕らぐらいの世代の人たちに対しても。みなさんが怖いと思ったその気持ちが正しい。あつてはいけないということはこの模型を作った体験者は伝えたかった。これを見て何とも思わないほうがむしろ怖い。これを怖いと思ったその気持ちが正しい気

岡村 すこいですね。

長嶺 この煙草ケースもそうだし、あのスプーンも、全部一から作るんです。そのへんに落ちている釘とか針金を拾ってきて、ペチカと呼ばれる暖炉で溶かして、レンガをどこから取ってきて、それに型を彫って、ペチカで溶かした金属を流して。道具がないので、線路を敷く作業へ行つた時にとってきて、叩いて磨いて、ああいうのを作るんです。全部手作りです。記念館には何百本もの手作りスプーンの寄贈資料が収蔵されています。

小林 それは確かに持って帰ってこられるでしょうね。そうやって作った、命をつなぐためのもの

それは確かに持って帰ってこられるでしょうね。そうやって作った、命をつなぐためのもの



をしていたのですが、ランニングコストがともかかることが判明して断念しました。

**川延** ここに來ただけでも寒いと感じます。

**小林** ちよつと首がうすら寒い。

**長嶺**

横浜だったと思うのですが、マイナス30℃を体験できる施設があるらしいですけど、そこで聞いたのが、段階を経て出入りしないと心臓に負担がかかるらしく、肉体的な負担も大きいこともわかって、高齢の方の来館者も多いので安全を考慮して断念しました。

**岡村** 客層の問題が後楽園遊園地なんかにありますね。

**長嶺**

抑留生活体験室は基本的に触っていい展示で、ここに寝転がって、今コロナがあるから、看板立てて触らないでねってことにしてあるんですけど、基本的には全部触っていい展示です。

ここに展示しているのは実際に日本陸軍で使っていたもの。あの手ぬぐいも靴下も実際に使っていたもの。この壁のモニターは実際にシベリアに行つて撮ってきたシベリアマツで。

なるべく本物に近いように再現する時にも検証して、ロシアの軍事公文書館に保管されている写真、抑留体験記を読んで再現したのでは

**小林** すべてあるのですか。

**川延** こういうちよつちやい船も。

**山下**

引揚船というと、客船の興安丸とかが象徴的ですけど、こうして貨物船の船底にゴザをひいて帰ってこられた人は多い。

**小林**

出迎える時のおもてなしは、どういうことをしていらっしゃったのですか。

**長嶺**

舞鶴の人たちはシベリアから帰ってきた人のために、彼らがふるさとへ向かう直前に駅のホームでお茶を配るんですけど、芋を配ったり、おにぎり配ったり、みかん配ったり、たくわんを配ったりいろいろです。そのうち子どもたちを集めて慰問のための歌や踊りをしたり、花火を打ち上げたりしていました。

**山下**

この周辺だけじゃなくて、舞鶴の全部の地域の小学生、中学生が順番に行く。船が1回入ったら3日から1週間ぐらいいらっしゃるので、その間に行くんですね。大阪の舞鶴ご出身者の会にご説明に行った時に、小学生が慰問したと言ったら、参加者の中から、「いやいや中学校も、僕、行ったでえ」って言うて。

**小林**

現実に近い。ただ抑留体験者の人たちが言うのは、「こんなにきれいちやうって」と言われました。

実際に部屋の中はこんな感じだと思えます。ある抑留者の体験記の中に、部屋に温度計があつて、だいたいいつも15℃ぐらいだったらしいです。

**岡村** ここが増築部分ですね。

**引揚記念館が舞鶴にあることの意味**

**長嶺**

ええ、増築しています。抑留の話だけだったのが、「岸壁の母」を展示に追加して、当時の引き揚げの様子を再現しました。この引揚記念館が舞鶴にあることの意味がちゃんと位置づけられていなかった。舞鶴での引き揚げの様子、舞鶴の人たちが11年間にわたって何回もおもてなしをして、お迎えをして、ここから送っていったという展示がなかったので、リニューアルした時にそうした展示を追加しました。

**小林**

市民のみなさんにとって大事ですね、こういう場所があるのは。

**長嶺**

そうですね。昭和33年に最後の船が帰ってきたからまだ60年ぐらしか経っていないので、実際に自分も子どもの時に港に迎えに行つたという人が舞鶴にはたくさんいて、それを今のうちに次に伝えていかないといけない。

本人がいらっしゃった。

**お迎えした側としての体験者**

**山下**

「そこ加えてねー」言うて。帰ってこられたご体験者は、特にシベリア抑留というか兵隊さんで行つておられる方は、もう90歳後半とか100歳超えておられて、生存者はだんだん残念ながら少なくなつていきます。舞鶴でそういった方々をお迎えした市民は、昭和33年まで引揚がありましたから、まだまだ70歳代でも80歳代でも、お迎えした側としての体験者はいてくださる。そういう方の何人かは今も語り部で活動していただいています。

**小林**

確かに両方必要ですね。抑留で大変な思いをされた方と迎えた側と。そうやって迎えた方の気持ちもわかると。

**まちの歴史として 伝えなきゃいけない**

**山下**

体験者の手記集や館内のモニターのところなどにも載せていますが、自分たちが苦労して帰ってきて日本ではどんなふうを迎えられるのか、複雑な思いをもってお帰りになった時に、思いもよらなかつた歓迎や市民の人たちの手作りのおもてなしが、本当にうれしかったと書いていただいています。言葉にならない、帰つても人には言えないような経験を人々を信用できなくなる荒んだ気持ち、舞鶴の人たちが手を

れています。日本人抑留者の死亡率と全然違つた。その違いに何かあるのかわからないですけど、日本人はこういう楽しみを自分たちで作り出していく。毎日、人が死ぬのその中で、自分一人の楽しみであったり、みんなの楽しみであったり、そういうのがあるからこそ、どこにか毎日、一日一日を生きていけた。だから、シベリア抑留体験者からすると、こういう展示って、つらく苦しかったことを伝えてほしいと思う彼らの意に沿わないかもしれないです。やっぱり「大変やつたっていうことを伝えてほしい」と言うんです。もちろんそれも伝えますけど、その大変だったっていうことも併せて、苦境の中でどうやって人間が生きてきたのかも知らないといけない。それは、東日本大震災を生き抜いてきた人たちにも、実は知って欲しいなと思つていきます。絶対にこんな苦しい状態って長くは続かないし、未来がそんな暗くないっていうことを、福島の人知ってほしいなって、いつも思っています。

**小林** ありがとうございます。

**長嶺**

これは丸太の持ち上げ体験です。こういった展示は本当にオーソドックスなものです。でもそういったものが受けいられる。

**抑留生活体験室**

**小林**

抑留生活体験室。

**岡村** 引揚援護局はしばらくあつたのですか。

**長嶺**

昭和33年までありました。もともと海軍の施設でした。海軍の初年兵を育成するための施設として昭和19年にできました。終戦でそのまま援護局に転用されていく。海上自衛隊がちよつと使つて、国立工業高等専門学校が使つて、最後は昭和40年に全部撤去されて、現在の工業団地になりました。そのあとに援護局跡近くの丘に記念公園ができて、さらに後に引揚記念館ができました。

**小林**

こちらの船も力作ですね。



**この館はみなさんのお気持ちが集まって立ち上がった**

**山下**

本当に思いを込めてしっかり作ってください。引揚船と言っても、体験者のみなさんにとっては、やっぱりご自分が乗ってこられたお船は特別な船なので、1船1船こうして作ってくださいているのは大変ありがたいです。この館はみなさんのお気持ちが集まって立ち上がった感じがあります。舞鶴に入港した引揚船は32種類です。1隻だけ図面も写真もなく、作れていないお船があるらしいですが、あ

**川延** マイナス30℃がどうかという体験。

**長嶺**

最初はそれを再現する部屋にしようという話

**長嶺** そうですね。あれも寄贈品です。

**岡村** 作られる方がいらつっしゃるのですか。

**長嶺**

趣味の会が大阪にあつて、その方たちが残っている船の図面と写真をもとに作られて、寄贈していただきました。

**山下**

30年経っています。この館ができる時に少しづつ無償でいただいたものです。紙で作られていて、30年経っているのですが、ほとんど色褪せない。

**小林**

そうですね。すごいクオリティですね。

振ったり、自分たちの食べ物を減らして差し入れてくれたり、そういうことで少しずつ解きほぐされて、戦後の新しい一歩を踏み出そうという気持ちになった。そういう手記を見ますと、舞鶴の歓迎は引揚者に大きな影響を与えたという点でもやっぱりすごいことだったし、まちの歴史として伝えなきゃいけない。引き揚げは遠い国で起こった出来事ではなくて、まちの歴史として伝えるのが私たちの役目の一つと考えています。

長嶺

引揚港が全国で全部で18港ある中で記念館が建っているのは佐世保とここ。ここがこういうふうに継承できたのは、田端ハナさんがいたからです。田端さんが引揚者を最初に迎えに行つて、市内の女性たちと13年間ずっとお世話をして、引き揚げが終わった後も、帰ってこられなかった人たちが、亡くなった人たちが、そういう人たちのための慰霊祭をしたいと寄付を集めて慰霊碑を建てたりするのです。すごいリーダーシップの強い人だったと思います。この記念館も抑留者の声でと最初に説明したのですが、実は田端さんがすごく関わっているのです。地元の人で、こういう歴史を伝えていかないとけないという思いをもって牽引してくれる人がいたんですね。たくさんある引揚港の中でも、こういう規模の記念館が建てられたのは、田端さんのような人がいるってことが大きかったと思います。記憶を継承していくいろいろな方法があると思うのですが、形にできたのは田端さんがいたからこそよく思います。そうじゃないと、なかなか行政主導では難しいと思います。みんなの声、1人のリーダーシップをもつ

た人がいることが大きかったと思います。

山下

舞鶴の市民の歓迎は、最初は数人の女性の有志から、それが婦人会活動になり、どんどん近隣の女性の婦人会も参画してくださった。引き揚げでは、時に女性の力はすごく大きい。この記念館のリニューアル前の展示は、こういう市民、舞鶴の人のお迎えというコーナーはなかったのです。苦勞して帰ってこられた人を温かく迎えるのは当たり前だった。それを特別のことのように言うのはと、あえて詳しい展示はしていませんでした。それが、長嶺学芸員は外から来たこともあって、いやそれはすごいことだと。まちの歴史としてきちんと展示をして発信すべきだという意見で、リニューアルの際に一つのコーナーを作ったのです。

小林

舞鶴の子どもさんたちにももちろん、こういうことをしてきた地域なのだとわかるのは大事です。

### ふるさと学習として

山下

市内の小学校で、以前は来る学校、来ない学校があったのですが、ふるさと学習として位置づけができるようになり、市内の小学校6年生が全校来館してくれるようになったのは、まちの歴史を地域として伝えるべきだと学校の先生もわかっていたからだと思います。館内の語り部活動でお世話になっているの

小林

舞鶴の子たちが向こうに行くこともあるんですか。

長嶺

あります。去年は市民訪問団というかたちで、大人も行ったのですが、高校生も行きました。本当は今年、レスリングの子たちと柔道の子たちをウズベクに行かせる予定だったんですが、それもコロナの影響でなくなりました。戦争で大変だけど、そんな歴史を乗り越えて、新しい未来を作っていくのはやっぱり今いる僕たちだと。やられたらやり返したくなる気持ちはわからないでもないけど、そんなことをいつまでもやっていたら終わらないんです。

小林

子どもたちに渡しちゃだめですね。

長嶺

広島のと舞鶴は肉じゃが発祥の地だとお互いに言っていて仲良く戦ってます。

小林

海軍関係ですか。もしかして。

長嶺

そうですね。東郷平八郎がイギリスに留学した時のビーフシチューがおいしかったから、それを再現するために呉で始めたとなってますが、こっちはこっちで舞鶴が発祥だと、お互い討論会を開いて仲良く戦いながらお互いの地域振興を図っている。舞鶴の肉じゃがの会のおばちゃんがいるんですけど、向こうの肉じゃがの会の

は、NPO法人「舞鶴・引揚語りの会」さんですけれども、だいたい1日2名ずつぐらい来ていただいています。予約の多い時は、人数を増やしてください。こういうご案内も。

小林

連絡があって、予約でガイドさんをつけていらっしゃるのですか。

山下

ガイドさんは予約を受けられるほど人数はいらっしやらないので。お声かけいただくかたち。学校や人権学習とか遺族会で引揚をしつかり学びたいというところには、別に対応させていただきます。

小林

待ち続けた人たちのこともだんだんわからなくなっちゃいますよね。

山下

「岸壁の母」と書いてありますが、昭和40年代に大ヒットした、セリフ入りの歌で、そのセリフの中に舞鶴って入っているものですが、若い時に出張に行くと、「ああ、「岸壁の母」の舞鶴だね」と言われました。今はもうほとんどそういうのはありません。たぶん若い方は、「岸壁の母」と言ってもピンとこないと思いますね。

### 旧ソ連との関係を未来に向かってどうしていくか

長嶺

ここが最後のコーナーです。抑留も引揚も大

うなこともあり、資料が少ない中でわからんとだらけになってきています。軍隊って一体なんなのか、特に近代の日本の軍隊とはどのような組織・体制だったのか詳細がわからない部分が多いです。明治、大正ぐらいまではわかるけど、今は昭和の軍隊がわかんないですね。

小林

あまりに近いというか、自分たちの中にあり過ぎて、残したくない動きが出ちゃった。

長嶺

完全否定してしまつたために、明らかにされるべきだったことが明らかにされずに、そのまま失われてしまった。平和教育は平和教育でもちろん大事。でも軍事史研究も大事だと思う。そこが全部わからなくなつてしまつた以上、何も言えないとなると、そこそ未来に不安を残すのではないかと思う。

小林

本当ですよ。わからないからこそ、また繰り返してしまつたら。

長嶺

そうですね。否定するのではなくて、そこをよく知らないといけない。敵じゃないですけど相手をよく知らないといけないし、中身をよく知らないといけないと思います。

山下

海外からのお客様は、コロナになる前は、団体旅行などで台湾からたくさんお越しいただいていました。日本に対する親しみもあって、台

変だった。抑留地であった旧ソ連との関係を未来に向かってどうしていくかをここで展示したかったのです。出港地だったナホトカ市と舞鶴市は姉妹都市です。旧ソ連の時代にソ連の町と日本の町が姉妹都市を結ぶことは、かなり大変なことだったようです。昭和36年、1961年に姉妹都市締結をしたのですが、日本で初めて当時の旧ソ連の町と姉妹都市をしたのが舞鶴です。冷戦下ですごい偉業を成し遂げたと思います。

小林

まだ戦後からそうたつてないですね。15年ぐらい。

長嶺

これは5月、6月頃に桟橋から見た風景です。抑留された人たちが帰って来た時、舞鶴の山を見たらすごくきれいだったことを多くの手記にみることが出来ます。一年中、天気が悪くても、その景色を見られるようにしておこうと思って展示をつくりました。

抑留地の一つ、旧ソ連のウズベキスタンと交流があります。向こうにナヴォイ劇場という日本人が作った劇場があり、ジャリル・スルタノフさんという館長さんがいらした。そういうことがあるので、東京オリンピックのホストタウンとして、レスリングと柔道の選手団を舞鶴でお受けしようということになった。本当は今年8月に来るはずやったんですけど、1年延びちゃって。ウズベキスタンからスルタノフさん、大使、スポーツ大臣、それと向こうのオリンピック委員会の会長さんが来た。



湾でも「岸壁の母」が流行したみたいです。ここは「岸壁の母記念館」と紹介される場合もあるみたいですね。

40代、50代や若い方も来られて、たぶん家族なのでしょいか。多いときは毎週のように。

また、舞鶴は海外からクルーズ船が入港してさまざまな国の方が来られますが、クルーズのお客様も来館されます。欧米からは、個人でここまで来られる方は少ないですね。

川延

気になっているところは、通常よくあるパターンでは、徐々に入館者が減少し、そのままフェードアウトしてしまうのが多いですけど、ユネスコの件が大きかったとはいえ、それでもそこから大きくもう一度やり直していこ

う、さらにグレードアップしようというあたりに結びついていく、そのモチベーションもたいなものをもう一度お伺いできたらと思います。

### あり方検討委員会

山下

ありがとうございます。資料の中に入館者数をざっと書かせていただいでいて、傾向はなんとなく見ていただけかと思えます。舞鶴市が博物館の建設を財政的にも当初はなかなか厳しい中でやろうとして、体験者や市民のみなさんからのお力添えや、「寄附もいただいでいてスタートしたのですが、開館当初は思いのほかお越しいただいて、たぶん市としてもびっくりしたと思います。平成3年に20万人ぐらいドーンと増えた。人口10万足らずの町で、その倍以上の方がおみえになった。平成6年には急いで増築したのですけれども、平成10年、20年になりますとだんだん右肩下がりになっていた。当初は体験者が振り返られて、やっぱりこういうことを忘れちゃいけない、伝えることが大事だと思いを新たにいただいで、「自分の子どもさんとか、隊のお仲間とかで語り継ぎをしていた。そういう方々がだんだん、「旅行も難しい年齢になられて、ちよつと減ってきたというのもあると思います。

平成20年を過ぎて、もちろん市の税金も投入させていただいでいる中で、ではこの引揚記念館を今後どういったかたちにするのか、しっかりと検討しようということで、平成22年にあり方検討委員会が開かれました。これは諮問機関として市長の方から諮問させていただいて、委員としては田久保忠衛・平和祈念事業特別基金顧

山下

いえいえ。引揚記念館の館長になる以前は、私は市の観光部門におりました。外から引揚記念館を見ていたはずですけど、いざ現場に来ると、来館者が引揚に対する関心、ご興味を持って来られている人ばかりではない、というのをすごく実感しました。当時、団体ですと、いわゆる観光客様で、楽しくバスの中もお酒をお召し上がりになって、お立ち寄り先として「岸壁の母」の舞台だということでおみえいただくことが割と多い印象もありました。「引揚記念館って、海から引き揚げたものを展示しているかと思っていた」と仰る方もいて驚いたのを覚えています。これでは引き揚げ、抑留という言葉も5年、10年後、もう誰も知らなくなるのではなにかというくらい、衝撃というか危機感がありました。

私は舞鶴に、学生の時は別ですけど、いましたので、引き揚げはもう当たり前、あつて当たり前、みんな知っているという、何となく漠然とした認識の中でした。

実はユネスコの記憶遺産は、このあり方検討委員会を担当していた課長が、福岡県田川市の山本作兵衛さんの「炭鉱記録画」が日本で1件だけ記憶遺産になったという報道を見て、ああそんなのがあるのだと認識して。舞鶴にはたくさん絵があるので、初めは絵画がいんじやないって。じゃどうやって取り組むのですかと言うと、それはわからない。どうしていいかわからないけどそういうのあるよって。そういう段階が平成24年の4月でした。4月に舞鶴市の市民参加のまちづくりで文化庁長官表彰を授賞した二緑で、文化庁の担当者の方から5月に田川市で世界記憶遺産のシンポジウムがあると教

問(当時)を委員長に、近現代史の専門家として東京女子大学の黒沢文貴教授などの専門家と、抑留体験者の佐藤清さんなど。佐藤さんは、記念館に数十点の抑留体験画を寄贈いただいでおります。委員会では、平和が当たり前の時代だからこそ、具体的になぜ大切なのかを発信するこついった施設が、これからますます重要になる、ということでも継続するという結論は出ました。しかし、同じことをしていたのではギリ貧になっていく。続けたほうがいいという結論ですが、発展させていくために、それまでの委託や指定管理ではなく、原点に戻って市がきちんと方向性に沿った事業をしていくべきと、引揚記念館の運営を直営化するご提案をいただいであります。

実は諮問した期間のなかで、市長の交代がありました。あとで当時の先生たちから聞くと、自分たちが1年かけて議論してきたことが新しい市長に答申となるので、どうなるだろうと思っていたそうです。現在の市長は引揚記念館をもちろん知っていましたけれど、詳しい経過はわかりません。それでも3月に答申をいただいた時に、やはりこれは大切なことだし、しっかりと受け止めようということで、1年さらに検討を市の中で重ねました。そして、平成24年4月から管理体制を指定管理者制度から市の直営化に変更することになりました。決定後にも、官から民への時代に民から官へ戻して、一体メリットは何かとか、官になったらどう変わるのだとか、そういったご意見をたくさんいただき、議会でも議論をいただいたと聞いております。実はその時、私は別の部署におりましたので、それを横目で、大変だなあと思いつながら見ていました。

文化庁の方から伺ったのは、当時日本で一番ユネスコの世界記憶遺産に詳しい人もシンポジウムに行かれると。それは当時の京都国立博物館の栗原祐司副館長さんですけど、もともと文化庁で、世界記憶遺産を日本で取り込みたいと思っていた方だそうです。田川市の世界記憶遺産関係の委員をしておられ、シンポジウムに行った時にその栗原さんとの出会いもありました。ユネスコの記憶遺産の担当者の方がわざわざパリからおみえになって講演しておられました。その時に、記憶遺産というのは、このままではなくなってしまう、消失してしまう脅威のある記録資料で、また世界的に重要で、かつ人類が共有すべき資料を登録することによって保護する、そういった目的の制度なのだというこ

とをおっしゃっていた。これはもううちの資料にびつたりと。さらに国際平和に資するものというようなこともおっしゃっていたので、勝手にそう理解して、これはいいなと思ひまして、「栗原さん、一度京都でお会いさせてください」というのが始まりでした。本当にきっかけをいただいた。

長嶺

記念館が探していたというよりも、運命的な出会いみたいなものが偶然重なってできました。ここを管理していた前任の担当課の課長がたまたま見かけて、こういうのがあつてことを知って、たまたま文化庁長官が来られて、それがきっかけで田川市でシンポジウムがあることを知って、栗原さんに会うことができた。トントン拍子に見えますけど、運命的な出会い

その時に市の部署が「創造的な事業を展開します」という答弁をして4月を迎えた。そして、「創造的な事業を展開します」を館長として私が引き継いだわけです。「創造的な事業ってどういうふうにやればいいか」ということから、直営化が始まりました。

川延

結果として直営化に結びつくわけですが、それまでの数年間のいろいろな下準備が一番大変だったと思います。検討委員会を設けなければいけない、そのあたりの考え方はどうでしたか。

山下

きっかけはですね、一番は入館者数の減少、たぶんそれ一点かなという感じです。

長嶺

当時、指定管理者制度から市の直営にする際に、行政主導ではなく、いろいろな方の専門的な視点をというところがあつたのかなと思ひます。

川延

ゴールを見据えてというより入館者減の状況に対してどうするのだと。

長嶺

いろいろな答えがある中で、識者を集めて意見を承り、そこで行政が判断を下していくという流れだったのかと思ひます。「承知の通り、郵政民営化に伴って指定管理者制度がどんどん進んで、こういう公立の館もどんどん指定管理になっていく中で、それを外して行政に戻して

だったと思ひます。山下も僕もユネスコの世界記憶遺産のことはまったく知りませんでしたし、田川市さんの存在自体もその時初めて知つた。すごく運命的なものを感じますね。

山下

田川市さんが抜群に素晴らしかった。惜しげもなくいろいろな資料や情報をくださった。当時はまだ申請書のマニュアルみたいなものの翻訳も、国にもなくて、それを自分たちで翻訳されたものをいただいたり、申請書を見せていただいたり、いろいろな情報を頂戴しました。なかなかそういう苦労して作り上げたものを他に提供してくださるのは、難しいと思ひますが、親切にご協力いただきました。それは本当にすばらしい、感謝しています。

長嶺

2例目にあつた「御堂関白記」と「慶長遣欧使節資料」は県とか国主導で申請を出したものです。実際、現場の方に話を聞きにいったのですが、「いやちよつと、あんまりよくわからな

山下

登録となって本当にありがたかつたのですが、当初は登録まで至ることができるとは、正直思ひていませんでした。ただ、世界的に重要な資料であることは確信がありましたし、引き揚げや抑留のことを知る人がだんだん少なくなつていく、そういう危機感があつて、登録を

いくという当時としては逆行する流れ。今から10年前、そういうのをまた行政主導でやつていくのには、いろいろな批判がある中で、きちつとした諮問を受けるべきというところがあつたと思ひます。それはすごくいいことだと思ひますし、結果、今のかたちが出来上がった。

川延

直営化を目指しての検討委員会ではなく、実質的に検討委員会が検討した結果の結論としての直営化。すばらしい委員会ですね。

山下

シナリオありきではないご意見をいただいた。市が聞きますという姿勢を示したこともありますし、先生がたが関心を高く持っていたいた成果だと思ひます。

あり方検討委員会はすばらしいものでしたけど、体制はですね、舞鶴市の人事異動の内示はだいたい毎年3月の下旬ぐらいで、次年度は4月から始まりますので、個人的にも準備の期間はほほなく。長嶺も当初は、正職員ではなくて学芸員として嘱託で来たかたちでした。ですから十分な準備ができてスタートしたわけではありませぬ。

川延

タイミングがすごいと思うのですが、直営化して3ヶ月後に世界記憶遺産に手を挙げる。ということ、もう少し長く動きがあつたのですか。

### ユネスコの世界記憶遺産

人にまず思ひ出していただくことと、あつて当たり前前の施設ではないということとを、取り組みを進めることによって関心を高めていただけたらと、登録を目指すとなれば、早く表明したかったです。その前には、市役所内の了解を得ておかないといけません。

5月の時点では、思ひが先行し私自身が、まだ世界記憶遺産への登録について、どんな資料作成があり、どういう行程があつて、スケジュールはどうなるといった、具体的なことまで把握できていなく、庁内へも十分説明しきれなかつた。ですから、当然なのですが「もう少し、準備をしっかりとってから、取り組んでも遅くはないのでは」という意見もありました。

最終判断したのが市長です。引揚記念館に収蔵してある資料は世界記憶遺産の登録を目指す資格があるものなのかを確認し、あるのであれば挑戦するのはいいのではないかと。その後、先ほどの栗原副館長にご相談に行かせていただいで、「登録になるかどうかはわからないけれども登録に値する資料じゃないですか」とおっしゃっていたいただきました。それでは、登録を目指す取り組みを10年かかろうが20年かかろうが、とりあえず市民のみなさんと共有しスタートしたいという思ひを強くし、結果、7月に世界記憶遺産への取り組みを表明しました。

始めた時は、十分な戦略は立てられなくて手探りでした。あとから聞いた話ですが、取材していただいた新聞記者さんも小さなまちのユネスコへの取り組みに、大きなことを言い始めたなと思ひていただくと、登録後に笑つてお話しされたくらいでした。

川延

ずっと追い風が吹いてくる感じでしたね、戦後70年でもあり。

長嶺

タイムリングが良かったと思います。それは後から振り返ってですけど、

山下

来ていただきましたね、いろいろな方に。

長嶺

ユネスコという名前に、たぶん誰しもがちょっと眉をひそめて見ていたと思います。「世界遺産、何を言ってるんや」「またこんなこと言うて」と心の中で思っていた人はたくさんいたと思います。だからその当時、誰に言われたか覚えてないですが、「ほんまに登録するんですか」って言われて、そんな冗談で言うかって少し感情的になったことを覚えてます。「いや、話題作りなんかと思つて」とかも言われましたし。

山下

まるっきり、間違いでもないですけどね。この歴史、引揚記念館という博物館を知っていただく、1人でも多く、少しでも広くついで一念でした。この取り組みを通じて、1人でも多くの方に記念館、引揚の歴史、舞鶴のことを知っていただく、それでも十分かなと思つていました。

小林

登録になることで知っていたら。

登録されなくても、取り組みをすることで関心を高めていければいいと思つていましたが、やっぱり登録されたら効果がすごい。単純に人が増えたとかそういうことではなく、例えば学校でも、記憶遺産になった、じゃあ記念館と一緒にやる、それを自分たちも発信する、世界とつながれる。そういうふうに捉えていただけで、市内の学校さんもより積極的に関わっていただけになった。どっちかというとうちがこう伝えたいということ、それももちろん大事で一生懸命やりましたが、記憶遺産になったことで学校も子どもたちも記憶遺産のことを何か自分たちで伝えよう、世界に発信しようみたいな気持ちで、双方向になってくるのがすごく感じられました。

### 町の人たちの意識が変わった

長嶺

町の人の意識が変わつたと思います。山下が言ったように、いつまでも引揚の記憶を継承していくだけに重きを置くのではなく、赤れんが倉庫群をもっと推していこう、もっと未来志向でいこうという中で、ここの資料が再評価されました。しかもユネスコという世界の機関から再評価されたというところが、舞鶴の人たちにとって驚きだったんだと思うんです。例えば一般の方には、徳川家の嫁入り道具のきらびやかところが良かったりするわけじゃないですか。ああいうものは「ああきれいやねえ」って。なんであんな汚い葉書がって思っている人もいます。でもそうじゃなくて、その中身がこうやって評価された。世界的に評価されたというところが、驚きだったのではないかと思

山下

地域としてつながないと、引揚の史実を継承することは、なかなか難しいと思つていましたので、まずは地域の方と何か一緒にできることが世界記憶遺産への登録を目指すことである。一時期まちの引揚記念館への関心が低下して、引揚のまちをいつまでも引ぎずらないで、赤れんが倉庫を活用した赤れんがのまちのイメージが強く打ち出されました。れんがは暖かい色ですし、当初は異国情緒的な景観の良さを前面に押し出しているという時代ではなかったと思います。

岡村

そういう中で、地域を大事にさせることもとても重要だと思つてんですけど、東京まで行つて説明会もなさっている、そのへんの戦略は。

山下

一つには、世界記憶遺産の申請には、国内選考があるという点ですね。一つの国から2件しか出せないなかで、候補が4件になったのです。中には、国宝の文書もあり、どうみても舞鶴の資料が一番知名度が低い。

みなさん舞鶴ってどこ？というところからということもあり、首都圏で発信して、少しでも目に触れていくことが大事かなと、地元ももちろんですけど、国内選考に向けては、やはり広く発信かと、首都圏に向けても展開しました。メディアを使ったパブリシティ戦略や企画展など。ありがたかったのは、新宿に抑留や引き揚げなどをテーマにした「平和祈念展示資料館」

います。登録がきっかけで、近くの若浦中学校の子どもたちも、自分たちが毎日通うところに世界遺産があつて、なんかわからんけどすごいみたいに意識が変わつていく。そこは僕らも予想しなかったことなんです。僕らはこれをきっかけに知ってほしいというだけだったんで、意識が変わるっていうところが大きかった。報道でよくあるのは、「入館者数が増えました。でも2年たつたら減りました」とか。そこにだけフィーチャーされやすいんですけど、そうじゃなくて、実は水面下で何が起つたかについて、子どもからお年寄りまで町の人たちの意識が変わつた。

### 学校が来てくれるようになった

その価値付けがされたというところ、もう一つは、学校が来てくれるようになった。ミュージアムの方はよくわかると思つてんですけど、やっぱり学校になんぼ来てくださいますか、1年ごつしり行事が決まつていて、その中に入り込むのは大変。先生も、もちろんここに来て子どもたちに学習してほしいという気持ちはあつても、運動会がある、授業参観ある、なんとか参観もある、もういろいろな行事が詰まつていて、総合学習も一杯なのに入れ込むのは厳しい中で、でもやっぱり世界遺産になったものが自分の町にある。しかも6年生の国語の授業の中に世界遺産のことについて書かれている部分があるらしい。そこをリンクしやすいで使えるって。それも後で知つたことですけど。だから学校の授業とリンクしやすくなつてきた。学校も来やすくなつた。いろいろな効果がそうやって生まれていった。特に一番大きかったのが、町

があり、お力を借りて連携してシンポジウムも開催できました。また、ご縁があつて東京の若い劇団さんとなりがりができて、シベリア抑留や舞鶴港の引き揚げの史実を劇にしてみらつて、東京で上演していただいた時は、多くの若い人たちが観に来てくださつて、展示だけではなかなか伝わらない部分で、いろいろなアプリチを使つてやりました。今から思うと必死にやりましたね。

小林

創造的な活動、事業にみるみるなつていかけたのですね。

### お空の上からいろいろなチャンスを開いているのだ

山下

そうしていると、お声かけていただいたり、いろいろとチャンスを開いただけたり。そういうのはすごくありがたかったですね。有識者の先生も本当にすばらしい先生方で、会議だけじゃなく、いろいろな人を紹介していただいたり。人の出会いがすごかつたと思います。市長は、抑留体験者の人たちや引揚者の人たちがお空の上からいろいろなチャンスを開いているのだと、よく言いますが、本当にそう思うくらい多くの方に手を差し伸べていただいたというのが大きかつたと思います。

小林

ユネスコのこの制度を使うことで、外からの価値付けをして、それによってみなさんの認識を変えようということはこのミュージアムが率先

の人たちの意識が変わつた。予算的にも事業が広がり、展開しやすくなつたり。リニューアル事業についても影響はあつたと思います。

山下

それは大事なことです。それは大事なことです。

川延

それは大事なことです。

山下

リニューアル工事は財政的な件もあり、2期に分けたのです。地方財政は厳しいですので、ひよつとしたら1期で終わっていたかもしれない。2期は国の地方創生関連の補助金が採択されて、記憶遺産登録資料を保存する新たな収蔵庫を作ることができました。

長嶺

地方のこんな小さい博物館が、文化庁の大きな補助金取りに行くのはかなりハードルが高いと思う。日本に5000から6000ぐらいミュージアムがある中で、それを取りに行くとなつたら、やはり大変ですよ。やっぱり記念館が補助金を受けられるのは、この世界記憶遺産のおかげかなと勝手に思っているんです。入館者数ももちろん大事ですけど、内容的にも経済的支援があることが非常に大きい。それが館を維持していく、継続していく、それこそSDGsです。サステイナブルにしていこうというツールと言つたら怒られますけど。

小林

よい循環になつたんですね。どんどんと。

してなされている。市直営になつたタイムリングももちろんプラスだつたと思うのです。そういうふうにするのと自体をミュージアムがやり、そこから活動を広げていく。さつき展示だけではおつしやつていましたが、展示がベースですけど、それだけじゃだめだと私たちがすごく感じていて。本当に膨らみ方、広がり方が、すごいですよね、館としての役割、活動とか。

山下

いろいろなことがつながつたことでできたなと思ひます。

川延

こちらの資料が遺産として大切なものなのは当然わかるのですが、選ばれたのは、何か当事者として、ここが決め手だつたという思いはありますか。

長嶺

これが決め手というのは僕らにはわからない。委員さん方しかわからないことですね。どれもいい資料だという評価があつたと僕は記憶しています。

川延

選ばれて、登録されて、変わったのはどういうことですか。どうプラスに働いていきましたか。

### 双方向になつてくる

山下

実は想定以上にたくさんありまして。最初は

長嶺  
そうですね。入館者数にばかり目がいきがちですけど、もちろん入館者数は施設にとつて大事ですけど、それはあくまで館を見る一つの指標にすぎなくて、何をしていくのか、どう続けていくのか。もちろん人が来ないとダメですけど、去年10万人で、今年12万人だつたから喜んでいたら、次の年9万人かもしれない。もちろんコロナのことなんて誰も予測していませんでした。

小林

ずっと上がり続けるほうが本当はおかしいですよ。

長嶺

おかしいです、絶対それはあり得ない。日本の人口は減っていますし、人口が減っている上に、外国人がどんなに來るかなんてわからないです。上がり続けるなんて絶対あり得ないです。全体で見て、それで少しづつ上がつているのであればいいと思う。

小林

数字じゃない部分の手応えとか成果、後に伝えるという部分ですよ。

長嶺

そこが大事だと思います。この間も富岡製糸場の担当の方とお話をしました。やっぱり入館者

が世界遺産に登録されて以降、減っている。そこばかりがフィーチャーされるけど、実はそうじゃなくて、同じように町の人の意識が変わって、ボランティアさんたちの気持ちも変わる。国宝という枠を超えて世界的な遺産になったというところで、町の人やボランティアさんの意識も変わったし、富岡市の中で予算が組みやすくなったという話もしていました。

### 語り部養成講座に中学生3人が

山下

館内の語り部は、もともと平成の前半の頃までは抑留体験者の方が中心で語り部活動をしてくださったので、80歳過ぎるとでなくなると、体験者のご要望で平成16年から「語り部養成講座」を市で開催をしていて、受講された方々に今、館内の案内をやっていただいています。「自分は引き揚げ体験はないけれども、舞鶴で迎えた体験をお持ちの方や親世代から聞いている、そういう方々もいらっやいます。それもまた平成20年ころには関心が薄れた時期があって、養成講座しても人が集まらなくなると、中断していました。私どもが館に来た平成24年時には20人ぐらいの登録ですけど、来られるのは7、8人がいっぱい、心配な状況でした。でも、何も関心が高まっていないうのやっても、たぶん一緒だろうなと。彼に市民講座を担当してもらって。

長嶺

したのでですけど、やっぱりそれ以上、人が集まらなかつたですね。

山下

大人はなんとなく構えちゃいますけど、子どもたちがしているのを見たら、彼女たちの方が慣れている。不便とか壁とあまり感じずに、楽しくやっていると感じがする。そういう世代に合っていると思いますね。ですからぜひ、いろいろなところと交流してもらえたらいいなと思っています。ぜひ機会をいただけたらうれしいです。何かシンポジウムの中に組み込んで。

川延

岡村さんのところは若い世代が結構いらっや。そうですか、それはぜひ中高校生の語り部の子たちと出会ってもらいたかったのですが、学校の予定と会わずで残念です。

川延

ここまでリニューアルのこと、記憶遺産の認定のことをお聞きしたのですが、行政や館だけではなくて、いろいろな方との取り組みもお聞きしたいと思いました。今日はお話をお聞かさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

宮本光彦

はいえい、私でお役に立てるかわかりませんが、記憶遺産に登録になって、じゃあここでやってみようとなったら、やっぱりそれなりに来てくださいました。20人定員で。1年目は17人でした。次の年からも20人ずつ開講して、今、70人ぐらいに増えました。その中で、平成28年の語り部養成講座に中学生3人が初めて手を挙げてくれたんです。学校の先生から「今度こんな講座あるらしいよ」とお知らせいただいたみたいで。この一番近くの中学校です。60代、70代ぐらいの方が中心で語り部養成講座にお見えになるぐらいでしたので、せっかくそうやってやる気を出したのもうれいことなので、とりあえずやってみようかと。語り部の会さんが講師になってやってくださるのですが、そしたら12講座、見事に修了しました。全部、完全に参加して、その後活躍してくれました。その3人の姿を見て後輩が、「なんか先輩かっこいい」というので、今も毎年、養成講座に中学生や高校生が参加してくれて、現在24名に増えました。学校生活もありますので、いつも案内はできないですけども、イベントですとか、外からの教育旅行の時に来て交流をしたり、コロナ禍でも他市の同世代の学生とリモート交流などの活動をしています。それが記憶遺産の登録後の財産の一つだと思います。最近では舞鶴市内だけでなく市外の、隣の町の高校生や、今年は東京からの参加もありました。東京の高校生。それにもびっくりしました。

彼はおじいさんがシベリア抑留体験者です。まだ高校生ですけど、学校に卒業研究の科目があつて、その中でシベリア抑留を調べることになった。東京の新宿に平和記念展示資料館があるんですけど、そこで舞鶴に記念館があることを知って、いろいろ調べて、卒業研究の準備をしていく中で、毎日ネットでうちのホームページを見ていたといいます。そして語り部養成講座があるのを知って、応募してきました。夜行バスでやってきて、その日のうちにまた夜行バスで東京へ帰るのだから、すごいです。

小林

へー、すごい。

長嶺

高校生だからできるんだと思います。東京都内の大学に進学することが決まっていた、大学生になったら1回ぐらい来たいって言っていました。本当にすごいなと思います。そういう子たちが来てくれるのはやっぱりうれしいです。

小林

さつき展示室で教えていただいたように、布いと思っちゃう子がいる一方で、こうやって自分で来たい、おじいさまというきつかけがあるにしても、さらに調べて、自分で説明をするところにもなっていくのは、かなりの思い、意志が自分の中にあるのだからと想像されるのです。

長嶺

そうだと思います。

長嶺



宮本光彦さん

私は前館長です。語り部養成講座を平成16年から17、18、19、20、21年までやりましたが平成22年からは受講申込者が集まらなかつたので、語り部養成講座は21年で途切れましたが、世界遺産を起点にして平成27年からまた語り部養成講座がスタートしました。それは世界遺産の動きもあって、再度、養成講座を募集されまして、世界遺産のおかげだと思いますが、養成講座に申し込まれる方が多くおられました。

### NPO法人舞鶴引揚語り部の会

宮本

いろいろな経緯があります。この記念館ができから35年ほどになります。最初、シベリア抑留に関わる資料を引揚者を中心に、この記念館に寄付していただきました。それをもとに説明すべきだということで、体験者、兵隊であった人、戦争に関わることの動員をされた方、ある

### 記念館にとってもすごい希望

山下

語り部さんは70人いても、引き揚げ体験者としてはお二人になりました。こういう方々から中高校生まで3世代の語り部さんでつながってきたのは、記念館にとってもすごい希望です。舞鶴だけでなくいろいろなところの若い世代と交流してってもらいたい。舞鶴の子どもたちは、大学進学の時にもちを出ていくことが多いので、舞鶴にいる期間にこういう関心を持ってもらって、何かやりたい子たちにはいろいろな体験をしてもらって、外へ出てもらいたいことを思って、それで帰ってもらえたら一番いいですけど、またそこで伝えてもらう。そういうことができればいいなと思っています。いろいろな交流の機会をいただけたら。

長嶺

福島の子たちと彼女たちとの交流、今、福島が抱えている課題、今の問題を情報交換できた方がいいですよ。

小林

本当ですね。

山下

リモートでも十分です。埼玉の方でもお伝えいただけましたら、すごい。

川延

岡村さんのところは最近リモートをすごく使いなして、広がっています。

回の講習でした。それでは人が集まらないのでは？ということ平成27年からは4日間。それも土曜日の午後。そういったことを27年度からずっと今日までやっているわけです。平成24年に私が入ったんですけど、その時のメンバーは17、18人やったと思います。そのうち実際に語り部をする人が11人くらいだったと思います。そして私も入らせていただきました。

### 語り部の会とは二人三脚で

館長時代、語り部の会とは二人三脚で私は持論で会員のみなさんに言っておりました。片方が欠けて動かないのではここは成り立たん施設やという思いをずっと語り部の会さんにも伝えておりました。何でも言うてくたさい、一緒に動かそうやないかと。

いきなり理事をせえと言われて、今年で5年目です。私が入ってからでも会員も亡くなっていかれます。一方では養成講座をしていただいていたので、今年の3月現在で会員数は60名。昨年、養成講座をされたのですが、コロナで延期になって今年の夏に終わりました。そして、養成講座修了生が10名入っていたので、今の会員数は70名。実働はだいたい35名くらいです。先月と今月は大変忙しくて、動員人数が先月で延170名です。2人体制が原則です。1日4人体制ですね。普通、30日であれば120人でもいいのですが、今月は、160人体制ですね。むちゃくちゃの動員でした。

うれしいことに先月から多くの学校が来館されました。コロナ感染防止のため10人に対して会員を1人付けています。今までは15人くらいで1名体制でしたが、これは絶対にできないと

思いました。実人員が35名くらいですのね。でもなんとか乗り切れました。1週間で2回出てきてもらってボケ防止という思いがありましたが、先月と今月については無理をいって10回程出てきてもらった会員が多く居ました。

なんとか乗り切れそうです。今年入られた人はまだ戦力になりません。また、去年入られた人もトータルでは案内できないでしょうね。年に数人ずつ育っていきますけど、1人でも語り部に入っていたらそれだけで我々としては力がつくと思っています。

募集は年齢制限もしていません。「申し込まれた以上は断るわけにいかんやろ」と子どもたちにも受講してもらうことについてお受けしたのです。卒業間近になった時に、理事会で「さて、この子らが卒業したらどうしたらええんやろな」と悩みました。こっちは、やっぱりいいしという思いがありました。法人ですので、「学生からも年会費をもらうわけにいかんやろ。」「どうしたらいいやろ、サポートする役で、サポーターでいこうか」といって提案したら理事会もOK。それで発足したんです。昨年まで残っていた人が12名、今年の方が12名入ってこられましたので24名。これの運営は非常に難しいです。

小林

どういう点でしょうか。

宮本  
 学業が主です。それと遊びが次です。そこを割ってこへ来るということになると非常に難しい。今、試行錯誤しながらやっています。最初は28人が入っています。その子らはやめまし

は同じなので。シベリア抑留されずに死んだ人もまたおられますね、抑留中に死んだ人もおられますし、戦争で中国に渡って死んだ人もいる。いろいろな人がおられるわけです。そういう問題もあるし、満州の引揚も一部からんでいます。満州の問題も難しいですね。昨日たまたま82歳のおじいちゃんが来て、小学校1年の時、7歳の時、お父さんが通信会社、電話局に勤めていて、平壤からソウルに出張していった。その間に戦争で封鎖になってしもって、2年間、お父ちゃんはソウルに、その方とお母ちゃんとお兄ちゃんは北朝鮮のほうに。そういう悲惨な話を聞いてました。戦争になったら、長男だけはとにかく生きて連れて帰ってほしい、その人は次男ですけど、その当時は長男次男では重みが全然違いました。「再会した時、お父さんはどんな気持ちやったるうね」と言うて、そんな話をして、ちょっとシュンとさされました。

これでは答えになってませんね。シベリアで亡くなった人、帰ってきた人、もう一つ分けると、墓もわからない人、どこで死んだかわからない人があります。昨年、私は市長等とウズベキスタンに一緒に行ってきました。ウズベキスタンには日本人墓地があつて、ちゃんとお参りもしてきましたけれど、それすらないところがある。いまだにわからないという方もおられる。そういう方が来られても、それは辛いところですけど、我々は淡々とシベリア抑留の話をせざるを得ないのです。

やっぱり語り部は中立の立場です。「ソ連が悪いね」って言われても「そうですね」とは言えない。「当時のソ連は」というような言い方をせざるを得ないわけで、ソ連が悪い、どこそ

た。やっぱり高校3年ですの進学で。サポーターについては毎年更新手続きを出してもらっています。毎年「入りますか、入りませんか?」「忙しくなったらやめてもいいよ」と。そういうやり方をしていきますが、今年はコロナもあつたので、イベントの時に我々のお手伝いをしていただきました。

小林

館長をなさっていた時に、語り部の会と館は両輪、どちらが欠けてもだめだと思っていたとおっしゃっていました。どうしてそう思われたのですか。

### 誇りと使命感と喜び

宮本

私が特に会員に言っているのは誇りですね。ここで語り部をやる誇り。同時に、やらなければならぬという使命感。ここで語り部ができるってすごいやんとみんな思ってくれと。日本でここしかない、引揚港として実際に受け入れをし、シベリア抑留者の寄付でできた所は。当時2億3800万くらいの建物ですけど、そのうち7400万ほどが引揚者の寄付です。国からは一銭ももらっていません。日本にここしかない施設でしゃべれる誇り、同時にそんな施設を絶やしてはならん、やっぱり引き継いでいかないかんという使命感が生まれてこそ、みなさんのやりがいができるのではないのでしょうか。

そして、喜びというのを最後につけるんです。この年になって何十名の方と知り合いになれる。男性なんか現役を終わったら社会に出ていくことすら嫌う人がおられるでしょう。そう

こが悪い、中国が悪いと言われれば、我々はあくまでも「そうですね」と反論はしません。いろいろなお客さんがおられます。お金を払ってここに入館されています。気分悪くして帰られると元も子もないので。答えになっていますか。

小林

ありがとうございます。ご自分の経験してこられたこと、見聞きされたこともお話されるのですか。

### 多くの引き出しを持つ

宮本

みんな同じ思いを持っていますけど、私は体験者じゃない。何度しゃべっても体験者にはかないませんね。いくらお話してもかかないません。やっぱり体験者ですから。じゃあ我々が武器とするものは何かと言ったら、多くの引き出しを持つ、それしかないと思います。引き出しと言言葉をみなさん使うようになりましてけど、質問に対してすべて答えられるようにならないと。「よくわかったよ」と言ってもらえないと。わからん、わからんでは満足して帰ってもらえませんか。実は私、語り部になった時に、「お前みたいな講師にしゃべってもらったって、所詮、講師じゃ」と言われたことがあります。

小林

どういう方でしたか。

宮本  
 お客さん、多分お酒飲んでいたと思いますね。数人のグループでした。やっぱり、そういうふ

いった中で、ここへ出てきて、語り部を通しての縁で知り合いになって、仲間同士でアホ口たいて、今日終わって、また明日ねという格好。これは喜びではないかと思っています。ですから、誇りと使命感と喜びという思いで私はやっているし、みなさんもそういう思いを持って語り部をされていると思っています。

冗談で、「みなさんボケ防止ですか?」と。同時に「暇つぶしでしょ?」と。私、わざといじわる言うのです。正直、暇つぶし、ボケ防止ですよ。それが先ほどの三つに加わったら言うことない。そういう思いをみなさんも多分持つておられるので、ここへこうして来られるんだと思います。

小林

記念館にとつて語り部の会は、どんな存在だと思えますか。

宮本

私もここにおりましたが、行政って発信力の限度がありますやん。金を使うことはできるけど。本当のとうか、一緒にやって発信するのはこういったボランティアがあつてこそ。そういう意味では必要ですね。

小林

ですよね。もう一つ。福島のことを話す時に、当事者という言葉がよく使われます。

宮本

当事者ね。震災にあつた当事者とか。

小林

うに捉えられるわけです。じゃあ何を武器にしたらいいのか。すべての質問に答えられる、そして、ある程度満足していただけるお話を、それしかないです。みんなもそれは同じだと思います。体験者にはかないません。

小林

体験している方はどうしたって少なくなっていく。体験者に直接お会いになっている方が第二世代になり、ご自分で勉強して、いろいろな方から聞いてお話をする形に変わっていくかざるを得ないですね。

川延

質問を変えさせていただと、中学生のサポーターをご紹介いただきましたが、理事長の世代から中学生が入ってこられた段階で、何か変化がありましたか。

宮本

最終的にはしゃべらなくても、サポーターが勉強してくれて、興味を持った、それだけでも満足と思つてやらないとかわいそうではないと思います。せっかく「やります」と言つて手を挙げてくれたんなら、現実にはしゃべらなくても。しかし、現実には先ほど言ったように、勉強が主遊びが次ですので、来られる時に来て、イベントがあつたら来てもらうという格好でいいと私は思っています。

しかし、何かやらないと、というのが今年の動きです。子どもたちに伝える、それでまず我々の目的はクリアしている。伝えなければならぬ。答えになりませんか?

被災した人、避難した人、関係者といえれば日本人全員が関係者でもある。どこが正しいということはないですが、いろいろな言葉が渦巻いていて。戦争のことにも同じようなことがあつたのではないかと。語り部のみなさんが話している時、初期の頃ですが、抑留されていた方、戻られた方、こちらで受け入れた方のように実際に自分たちが経験した方が話す時と、その方から聞いたことを話す方たちの間で、難しいこと、うまく受け継いだことが両方あつたと思います。どうだったのでしょうか。

### 中立の立場です

宮本

難しいところですね。まず、いろいろなお客さんがおられる。シベリア抑留中どんな悲惨なことがあつたとしても、帰ってきた人に「いいですわね」と一言言われる方がおられます。それは向こうで「ご主人等を亡くした方です。それが一つ。また違う面からは、実際に体験された人も含めて、帰ってきたばかりに赤と言われるという話は多くの方から出ますね。それともう一つが、やっぱり今もソ連は憎い、ロシアに変わつても憎いと言う方はおられます。先ほどの話、生きて帰ってきた家はいいですね、という衝撃。話をしても、それ言われると。例えば震災で亡くなった方の中でも遺骨が帰ってきた人と帰つてこない人では雲泥の差やと思うんです。そこだと思えます。そこはフォロワーが難しいところですね。聞く側になりますね、今度は逆に。それを言われると話をしようがないです。ただ、こんな苦勞をされたのは事実ですよということはお伝えしますが、苦しい思い

川延

理事長の世代は実際の当事者の方からお話を伺えた。次世代の子どもたちは、それはできなくなる。その辺で違いを意識されることはありますか。

### 伝えていくには、一緒に手探りで

宮本

子どもたちが来たら、必ず体験者に来ていただいて体験したことをお話していただく。これに勝るものはないですね。この後どうするかは、今後手探りになっていくと思います。インパクトを与えるようなことはしていかないといいはありますけど。それはやっぱり体験、服を着たり、帽子をかぶったり、手袋をはめたり。そういった品物で語り継がざるを得ないですね。多分ビデオで見せても、あまりインパクトがないと私は思っています。伝えていくには、一緒に手探りでせざるを得ない。また今年も養成講座の募集時期なので、中学生、高校生は拒否せずに受け入れましょうと一応記念館と合意はしております。

岡村

語り部の方もサポーターの方も受講する内容は一緒ですか。

宮本

一緒です。難しいです。「がんばれよ」としか言葉がないです。やっぱり補講をせざるを得ないですね。例えば、中高生用の語り部の資料を作り、配りました。それで自分なりの言葉で文章にしなさいと。一字一句、「てにをはまで書いてら君たちのものやない」とわざと箇条書

きて原稿を渡してあります。それでもつて、自分で文章を作りなさいというのが今年までのスタイルです。

できるだけわかりやすくしたつもりですが、例えば第二シベリア鉄道建設で森林伐採をさせられてたくさん死んでいった、枕木一本に一人は死んだと言われるという所で、「枕木」の言葉を知りません。今は極端な話、湯たんぼを知らない子がいます。そういうところをどう伝えるかという難しさは出てきます。

**岡村** 実際は引揚を経験された方の成り代わり、生まれ変わりがこの記念館なのかなという気がします。

### 地域でつないでいく、地域で伝える

**山下** そうですね、今までシベリア抑留者等から直に語っていた部分がなく、その代理者としての役割はうまくいっていると思います。体験者だけの体験ではなく、取り組みの中で、いろいろなメンバーがいます。「白樺日誌」の冊子を作ってもらったり。女性グループがまちの中に入って聞きまわって、冊子を自分たちのお金で作ってくださったり、そういった活動の中で記念館だけじゃなく、地域でつないでいく、地域で伝えるのが舞鶴のキーワードかと思っています。

**岡村** す、こいですよね。語り部の会の方たちとまた別にそういうグループがある。

**山下** それはすこいはつきりします。  
**岡村** そこでケンカが起きて困っちゃいますかね。そういうことは実際にありますか。

**宮本** ケンカは聞いたことないですけど。  
**岡村** 口論みたいなことは起きたりしますか。

**宮本** 今はあまりないですね。叱られたっていう人はいます。「とにかく聞き流すのですよ」と。お客様ですので、あくまでも。それに対抗しても、その持論で来られる方もおられますのでね。それを覆す、直すっていうのは絶対に止めて下さい。考え方もいろいろありますし、事実わからないこともある。ですから、押し付けは絶対に止めてくださいと言っております。

**川延** 理事長さんがおっしゃっていた資料として渡してあげるものは、人数などのいわゆるバックデータですか。

**宮本** バックデータもありますし、コピーをどこからか取っている場合は、確実にどこからとった

**宮本** はい、たくさんありますね。引揚記念館に開くグループは私達だけではなく、もう一つ記念碑を守る会もありますし。

**山下** ミニ劇みたいなを作りました。会員だけで15分くらいの無言劇みたいな音楽と映像とナレーションで。それがだんだん子どもを参加させ、女性ばかりだったのを男性に協力してもらい、15分の無言劇ですけど、そこに参加することで子どもたちの印象に残った。

**岡村** 語り部の方とこういう冊子の編集をなさる方は、かぶっていらっしゃいますか？

**山下** いらっしゃいますが、全然違う団体。

**岡村** ある意味、自分の得意分野、関心のある分野でみなさんが参加している。

**山下** 作ったのは、もともと男女共同参画をすすめる女性団体です。いろいろ引揚を知っていたことによって女性がすごく活動して、核になって、やっていった。2年くらいかけて、苦勞して証言を集めてくださった。

**小林** 大事な仕事ですよ。どんどんわからなくなるような気がするのです。

かえるようにしてください。

**小林** 引用元がわかるように。

**川延** それは重要です。1回受講して認定されたら次年度はどうなるのですか、継続ですか。また講座に参加するのですか。

**山下** 修了証をお渡しして、講座的には終わりです。後は会に所属されたら、そこで研鑽を積んでいただく。研修会とかをしていただくので。

### 得意なところを作ってください

**宮本** 今年はコロナの関係で十分に研修ができませんでした。まず、ここの記念館を休日に一日借り切って、実践をやる。その時に「とにかく先輩がしゃべること全部メモをとりなさい」と。「その中で一つ得意なところを作ってください」。実践が今回はできていませんで、理事が来ている日に受講し、それを実践という形にしました。「基本的に1月からデビューしてください」と。デビューといっても先輩と一緒に、2人体制ないし3人体制。

**川延** 海外の方もいらっしゃって、外国語対応はどうですか。

**山下**

### 同じことをするのが協働ではない

**山下** 市が全部、記念館が全部やれるわけではなくそれぞれ役割を分担する。同じことをするのが協働ではないと思ってるので、一つの目標を立てて、それぞれの役割分担をして、関係をつなぎながら進んでいく。

**宮本** やっぱり誇りでしょうね。使命感になっている。伝えなければという思いが。

**川延** 岡村さんのところには、サポーターがいっぱいいらっしゃる。

**岡村** うちの場合は美術館をお金で支えるサポーターが1500人います。

**山下** うらやましいです。

**岡村** でも、日常的な美術館の仕事を支えてくれる方たちもいます。ただ、館内の説明まではまだやっていない。今は職員がやっているけど、特にコロナの影響が大きくて、解説をする人の数を増やさないといけないという状況が出来つつある。前は大人数でできたけど。

**小林**

語り部対応としては、今はしていませんね。

台湾語、英語のパンフレットや、館内の展示解説は5か国対応しています。特に博物館関係者とか大学関係には長嶺が通訳しながら話しています。今年から英語人材の養成を少ししてもらって、そういう講座を3回します。英語人材として助けていただけの方が1人でも2人でもあれば。常に通訳が一緒に来るわけではないので。

**川延** 語り部に若い方もいれば90代の方もいらっしゃる。みなさんの関係性や雰囲気、お互いの交流はどうですか。

**宮本** サポーターと会員との交流はありません。記念館が主催するイベントの時のお手伝いです。昨年なら例えばサツマイモを蒸すでしょ。それを来館者等に配る役とか。基本的にはサポーター担当理事とサポーターとの交流しかありません。難しいですね。

**小林** ありがとうございます。

**川延** 館長がお書きになっている、企業版ふるさと納税をうまくお使いになったということ。それが企業名の書いてある展示室のパネルのことですか。

分けななきゃいけないからですね。

**岡村** そうです。遠隔の話もある。こつちから向こうに行くとか、もう成立しない。果たしてうちでこういうことができるのかなと思いつながら聞かせていただきました。こういうカリキュラムを組んで、それを受講する方が語り部になっていく。けれどもその語り部が何を語るかはみなさんそれぞれにゆだねるわけですか。

**宮本** そうです。基本ベースがあるわけです。

**岡村** なるほど。自分の主張を押し付けちゃいけないとか、そういうところはありますよね。

**宮本** そうです、先ほど言った通りです。ですから、原稿は必ず自分で作らせるようになっていきます。私も渡しません。ただ資料は渡します、勉強をされますので。

### 当事者性の近さと思入れの強さ

**岡村** そこがちょっと心配です。この時代の事って思いの強い方がいらっしゃる。自分の思いをどんどん引きずっていつっちゃうのを、果たして抑制できるのか。若い世代は当事者性がそれこそ薄い。当事者性の近さと思入れの強さをどう抑制するかという問題は結構難しいと思いがら聞かせていただきました。それが必ずしも夕

長嶺

抑留生活体験室は、企業版ふるさと納税というかたちでいただいた予算で展示室を作ったのです。この館は公立ではあるんですけど、寄付が基本になってきた館だった経過もあり、そんな行きやすかったのだと思います。まだ日本では寄付をする文化が根付いていなくて、欧米とは違いますよね、寄付した代わりの見返りというのがどうしてもあるのではないのでしょうか。欧米も、タックスリダクションといって減税していくメリットがあります。そういう企業とミュージアムの関わりが少しずつでもできればいい。単純にお金を寄付して何か税金的なバックがあるだけではなく、本当に来ていただいたり、こつちが企業さんにお伺いしたり、そういう社会的な繋がりができれば、それはとてもいいことだと思います。

**川延** あの部屋を作りますという、かなり特化したふるさと納税ですか。

**山下** そうですね、企業版ふるさと納税は引き揚げの史実継承プロジェクトとして、今回リニューアルする引揚記念館の設備・増設に使うとさせていただきます。

**川延** それは舞鶴市として。

**山下** そうです。企業に引揚記念館を見ていただく

### 引き揚げの史実継承プロジェクト



て、その趣旨をご理解いただき、「寄付を抑留体験室に使用させていただきます。地方創成の交付金がありますが、ハードにも充当できるので、増築部分はそれを半分使わせてもらうなど使えるものはいろいろと。それは庁内の担当部署の力を借りたりと、いろいろなどころが連携している。記念館だけの力で、このスタッフだけで集めたお金ではないです。そこはやはり公立の強みかと思えます。

**管理、維持して、続けていくのに**

長嶺

だいぶ前に「博物館研究」にも書いてありましたが、ミュージアムはいい意味で稼いでいけないといけない。管理、維持して、続けていくのに絶対にお金は付いて回ります。それをどう稼いでいくか。金もうけしようとはみじんも思っていません。でも運営していくには特に美術館はものすごく莫大なお金がかかります。みなさんに見ていただくためには、やはり裏で努力をしていかなければいけないと、本当に僕もここに来て痛いほどよくわかります。もうこれは永遠の課題として常にあります。これをしたから次もうまくいくかというと、きつとうまうまいかないこともあるだろうし、企業版ふるさと納税で今回ある程度集められましたけど、次もまたうまくいくかというと、今のコロナの状況を見てると来年は、大半の企業さんも自分の会社を守らないといけないので、誰かのためのお金はないですとなってしまうだろうし。入館料だけではやはり収入は限られていますね。それ以外のところで、どうミュージアムが稼いでいくかが重要になってくると思います。

川延  
ここが続くことが一番ですから。この場所が残され、次の時代につないでいけることが一番の目的。今、多くの人に見てもらうことだけではない。

岡村

それはすごく、うちの館も痛感しているところ。来てくれる人も大事だけど、来ないけど支えたいという人も大事に思っていかなないと。

山下

本当におっしゃるとおりですね。

長嶺

今月号の「博物館研究」に山梨県立博物館の方が「予言の鳥」という「あまびえ」みたいな妖怪の絵がすごく経済効果をもたらしていると紹介している。館にそういう「予言の鳥」のような資料を大切にしたいと寄付が集まってきているそうです。有料で画像貸し出しをしているようですが、貸出を無料にしたら、逆に金が入ってきたようです。県の収入にもなるし、思わぬところで利点が発生しますね。みなさんに大事に思ってもらおうというのが大事だと思います。

岡村

この館もリニューアルの時に報道に出て、やはり抑留体験者で寄付をくれた人が何人かいました。そういう人たちの思いがまた入ってくるし。大事に思ってくれる人が寄付してくださる。

山下  
うちの語り部さんと、子どものころに引き揚げた体験者が寄贈されたものです。引揚船の中で亡くなった女の子のエピソードを「自分で簡単に物語にもして絵本風なものを作ってくださいます。」

川延

女の子のことはもうわからないですね。

山下

たまたま乗り合わせたみたいです。

長嶺

たまたま船で一緒だったというだけで。

**本物の力はすごいなと**

山下

体験者の話を聞くインパクトがやっぱりあって、ある小学校で子どもたちがふるさと学習の後に、自分たちでもっと伝えたいと、館のPRビデオを作ってくれて、地域の公民館でのブースの展示を自分たちで作ってくれた。「なんでそんなことをしてくれようと思ったの？」と聞きましたら、体験者の語り部さんの話を聞いて、多分その子たちは語り部さんは高齢で自分ではそういうことができないだろうと思ったんですね。じゃあ、自分たちがあげようと思った。ここでの1回の出会いですけど、本物の力はすごいなと改めて思いました。

川延

お花のオリジナルを作ったのはその方ですか。

今のお話も一例ですけど、入館者数以外で何か関心を持たれていると実感した例はありますか。体験者の遺族とのつながりが気になっていきます。抑留体験者、引き揚げて来られた方たちの「遺族とはどういう関係がありますか。」

長嶺

こちらから積極的に何かアプローチしているようなことは実はないです。むしろ、寄贈者としてこちら側から来られる。本人ではなく、本人が亡くなられて、遺品整理の中から出てきたものをうちにくれるという関係です。こちらからも「案内申し上げているのですけれど。館の維持のために、またお気持ちがあつたら、ふるさと納税で舞鶴市に寄付してもらえたらと思います」と案内したら、大体のみなさんはしてくださいます。

引き揚げ体験者の人でうちの活動を新聞で知って寄付してくださった方もいます。県博さんだったいろいろな資料、地域と繋がりのある資料もたくさんあると思います。そういうのが地域の人たちにとって大切だということがわかると、やっぱりそれを残すためには税金だけだったり、入館料だけでは無理だと、みなさんの意識が変わっていかなければミュージアムの維持は難しくなってくるのではと思います。

小林

そうですね。残したいと思う人がいなければ残っていくのは難しい。

川延

今、展示されている資料は、お使いになっていた当事者の方を特定できるのですか。

山下  
息子とか娘には語らないけど孫には語ることもお聞きします。あなたもそうじゃない。

長嶺

そうですね。うちの祖母も母には何も言わなかったみたいですけど、僕には言える。親子だと聞きにくかったり、言いくかかったりするのですかね。親子の関係と祖父母と孫の関係は違うじゃないですか。

岡村

それは沖縄戦の体験ということですよ。沖縄戦の体験を聞くことと引揚記念館で働くことの関係はどうお考えですか。

長嶺

どうですかね、僕もこういうところで働くなんて夢にも思わなかったの。多分一生大学の職員で終わるだろうと思っていた。これも何かのお導きですかね。

山下

その辺が学芸員というか専攻を目指したきっかけではないの。

長嶺

それは関係ないです。本当は考古学をやりたいくて東京の大学を受けたんですけど受からなくて、京都の大学に行くことになりました。そこで考古学とか文化財保存修復学をやっていたの

長嶺  
できます、ほとんどできます。引越したり、亡くなっておられたりというのがありますけど。

山下

反対に特定できないものはお受けしていないとかたちになると思います。

川延

展示を拝見して印象に残ったのは、亡くなった女の子に作ってあげたお花。

長嶺

あれはレプリカなんですけど。



ですけど、ひよんなことから沖縄戦の研究を卒業研究することになった。ぜんぜん興味ないわけではなかったですけど。そうしたら気が付いたらここにいました。

岡村

満蒙の記念館にいたスタッフの方もおじいちゃんから話を聞いて卒論にされたと言っていました。おじいちゃんですよ。

長嶺

祖母から孫に伝えるのはいややすい。子どもには言えないけど。

小林

やはりサポーターのかたち。

山下

ぜんぜん関係のない子ももちろんいますが、地元の子たちのおじいちゃん、おばあちゃんは目の前を引き揚げ船が通って行くのを見た世代。そういう意味で地域性もあると思います。ユネスコ登録の意義とか感動を一過性のものではないように、何か次に継承できるものをということで、条例で引き揚げの日を制定しました。

小林

10月7日。

山下

記憶遺産の効果もですけど、引き揚げの日を制定したことで、これを通して事業が次に展開できるようにになりました。今、「市民と共同で進める舞鶴引き揚げの日認知度100%」プロ

ジエクト」というのをやっています。3年間で市民みんなが知っているようにしようと。

小林 制度になっていく辺りがすごいですね。

川延 多分20年、30年後の人が聞いたら、絶対これは長期計画だと思うよね。

山下 結構行き当たりばったりです。

川延 ぜんぜんそうは見えません。

長嶺 同じことがボンと出てくるので、それに対応していったら何となくかたちになった。記憶遺産もそうです。

山下 登録後、ICOM国際博物館会議も日本ではじめての開催地がちょうど京都となりました。当館の有識者でもある京都国立博物館の栗原副館長から本大会の前年にプレ大会が近隣の地域で開催されると伺って、世界記憶遺産に登録され、国際的な交流発信に繋がればと、プレ大会について挑戦したいと思い、いろいろ誘致の活動もして実現しました。

川延 持っていますね。

小林 今後、力を入れていきたい、新しくしたい、ブラッシュアップしていきたいと考えていらっしゃることはありますか。運営と語り部さんとの関係は、だいぶお聞きしてきましたが、何かありましたら教えていただければ。

**資料を保存、継承していくこと**

山下 一番の課題は資料の保存を体系的にやっていくということ。交流とか活用の部分はわりとやりやすいですし、目に付くところですからね、やはり資料を保存、継承していくことは、博物館の根本であり、難しさもあります。うちの代表的資料の「白樺日誌」にしても、調査結果では今後何らかの処理が必要だとわかっています。そこにはお金もいりますし、体制もいります。今後の長期計画、中期計画でそこはしっかり道筋を立てなければいけない。個人的にはそれがすごく課題。そして、体制ですね、この館のスタッフの体制。当初は学芸員は彼1人だったのが、今は3人。館長としてはそこですかね、やっぱり、体制をどう維持できるかは、館長の仕事と思っています。

長嶺 どうですか、学芸員さんとしては？  
もう、やらなあかんことがいっぱいあります。

山下 資料の情報を外に出すのがまだまだできていないので、そこが悩みですね。

山下 そういう意味では「持っていますね」と思います。

長嶺 ICOMの大会が京都であって、それも偶然と言ったらあれですけど、栗原さんが一生懸命頑張って日本に誘致した事業です。その前からいからICOMに参加したらという提案を栗原さんからいただいていた。その時はまだ京都での大会とかなくて、せっかく記憶遺産に登録されたし、僕は最初ミュンヘンに行かせてもらってICOMの国際委員会に参加させていただきました。

山下 国際委員会が30ぐらいいろいろなテーマであって、それは毎年開かれています。日本博物館協会の補助をいただいて、彼が何年間か参加しながら実績を積んでもらった。

長嶺 そうしたら京都大会が決まったんです。  
小林 なるほど、持っている。

川延 持っていると言いかいようがないよね。

小林 もう2、3年早くお会いできていれば、ICOMで一緒にできたかも知れないですね。

長嶺 恥ずかしながら、資料閲覧のシステムがまだないので。外部から資料を見せて欲しいということがあつて、本来であればご覧いただけないといけないんですけど、そういうスペースもなくて。外に収蔵庫が一つあるだけで、全室埋まっている。本来は資料を閲覧し、一時的に保管する場所ですが、そこまで埋まってしまう。だから、物理的に見せられない。対応できる職員も少ない。すべてデジタルアーカイブはしてあるけど、そんなたいそうなものではないです。僕がバイトの人をお願いして、画像の撮影方法を教えて撮ったものだから。それをデジタル上で見せていくシステムを作っていくかというけない。

かつ、ここまで来なくて今ネットがあるので、ネットでアクセスして見るというシステムを作っていないといけないのですが、それもできていないし、まずそれですかね。地方の館でそんなことまで、できている館なんてほとんどないでしょうか。

今回のコロナでデジタル化が進むと言われていますけど、リモートとかは進むでしょうけど、こういうデジタル化ってどうだろう。来年そういう補助金が出るかなと思って、目を凝らしています。集めてある証言も早く編集して、ネット上で見られるように。それはいろいろな館がやっておられて、広島も沖縄もとうの昔にやっている。それをうちも、ネット上である程度見られるようにして、この館に誘導していければいいなと思っています。

山下 初めはそういうのを出し過ぎると、反対に館

山下 本当ですね。

長嶺 そうですね。次はチェコのプラハです。

山下 国際的な交流の中で、子どもたちの関わりを今後どうしていくか。次世代への継承から次世代による継承を始めていく中で。

岡村 このサポーターと関わることで国際交流にもつながっていくというのが認知されてくると、また大きな意味を持ちますね。

山下 そうなのですが、今は国際交流的な事業は文化庁の補助を活用しています。海外調査や展示など。それがなかったら予算が厳しいですね。

川延 文化庁、いい仕事をなさっていますね。有効に使われています。

小林 県単独となると厳しいですからね。

長嶺 復興支援の予算から出てくるものはないのですか。

小林 復興予算は本当に被災者の直接支援の予算み

まで人が来なくなるのではないかと、「見たかったら来てください」みたいなイメージでいたのですが、そもそも存在を知られていない。そこに何があるのか、行って何が見られるのかが明らかになっていない。やはり本物の力というのはすごいので、それをデジタル、ネットで見たとしても、その価値をわかってもらった方が来るきっかけとなるというお話をいただいて、「ああ、そうだな」と。確かにこうしているだけでは本当に知られないままになってしまふ。世界記憶遺産登録のイメージだけでは限界があると思っています。

長嶺 ある程度情報を公開していかないとあかん。確かにそれはそうだと思います。僕だって興味あるものがあつたとしても、ここから福島に行くと思うとやはりすごく遠い。遠いとやはり躊躇してしまうわけです。もし行って期待外れだったらどうしよう。それでもいいかと思って僕は行くんですけど。でも事前に見られると、「こんなもんもあるやん！すごいな、見に行こう」となります。その先生がおっしゃるには「そもそもデータで見て満足する人は、館まで来ないよ」と。

川延 それはそうだと思います、おっしゃるとおり。

長嶺 本当に見たいと思う人は、やはり事前に見て「やっぱりこれは見よう」と必ず来るから。

たいなのが多くて、あまり文化的なところではないですね。

**もう一つの私たちの財産です**

山下 有識者のお話が出たので話しますと、あり方検討委員会は一度終わって、ユネスコに登録する時から、また新たな先生方に関わっていただきました。登録された後も保存活用計画の進捗管理やいろいろな大学に呼んでくださったたり、書き物で発信してくださったたり。今も本当にお世話になっている。それがもう一つの私たちの財産です。

川延 運営協議会のような機能でしょうか。

山下 そうですね。そこまでシステムチックにはできていないですけど。いろいろな方から手を差し伸べていただいた。いろいろなチャンスを提供して、手を握るかどうかが、そこを私どもとしては逃さないように、しっかり目を開いていく必要がある。せっかくいいチャンスがあつても、それを逃してしまつと、なかなか前に進んで行かないです。ちょっとでも前に進むうとしないと、時代の流れの方が本当にすごいスピードなので。ちょっとずつ前に進もうとしていても外から見たら多分現状維持ぐらい。同じことをしては多分後退しているように見える。

小林 長時間どうもありがとうございました。



# 「記憶遺産」の再発見に 必要なこと

岡村 幸宣  
(原爆の図丸木美術館学芸員・専務理事/ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)

東京から4時間超、初めて舞鶴を訪れました。横須賀、呉、佐世保と、かつて海軍のあつた街を訪れたことがあります。いずれも共通する独特の気配を感じました。歴史に対する誇りと複雑な感情が分け難く入り混じるような気配でしょうか。

敗戦後、13年間にわたって約66万人の引揚者(その多くはシベリア抑留者)を迎え入れてきた舞鶴港を見下ろす記念公園の一角に、舞鶴引揚記念館があります。開館は1988年。他のアジア太平洋戦争に関する博物館・資料館と同様、歳月の経過とともに入館者は減少傾向にありましたが、2012年に指定管理者制度から舞鶴市直営へ運営体制を見直すという画期的な決断をして、2016年には「白樺日誌」(白樺の皮を剥いでストーブの煤をインク代わりにして綴った文章や歌)など570点の抑留体験の記録や引揚関連資料のユネスコ世界記憶遺産登録を実現させました。そうした取り組みが地域の人たちの関心を呼び起こし、現在も中高生を含む「語り部」活動を活発に行っているそうです。そんな実践活動の様子を、山下美術館長や長嶺睦学芸員、NPO法人舞鶴・引揚語りの会の宮本光彦理事長のみなさんに詳しくお聞きしました。

実のところ、私の勤務する原爆の図丸木美術館でも、2011年に山本作兵衛の「炭鉱記録画」が、国内初の世界記憶遺産に登録されたという劇的なニュースが流れた際には、「原爆の図」も記憶遺産登録を」という提案が理事会内で挙がっていました。その後、国内選考過程の変更などもあり、実際に登録に向けて動くことはなかったのですが、舞鶴引揚記念館の事例は、自分たちにとってありえ

たかもしれない「もうひとつの未来」として、関心をもっていたのです。

聞き取りのなかで印象に残ったのは、世界記憶遺産の登録は一時的な入館者増につながったものの、その効果は永遠に続くわけではないということでした。実際、提供いただいた年間入館者数の推移のグラフを見ると、登録後たしかに2年ほどは数字が増えています。最盛期には及びません。そして現在は再び緩やかな下降傾向にあることがわかります。しかし、山下館長は、むしろ行政も含めた地域の方々の意識や関心の変化が重要であった、と話されていました。表面的な数字ではなく、その内側の問題です。地域の「負の遺産」といった認識を反転させ、歴史を伝える資源として見直されていく過程は、山本作兵衛の「炭鉱記録画」にも重なるように思いました。

どのようなきっかけであれ、過去に残された遺産の意味を再発見し、現代においてどう活用できるかを考え、新たに関心をもってかわりをもつ人たちの協働を実現させなければ、世代を超えて歴史をつなぐことはできません。世界記憶遺産登録はひとつのきっかけになりましたが、本当に重要なのは周囲の人たちとの協働が実現できる開かれた体制、そしてそれを可能にする「場」づくりなのだと思います。このことを、あらためて考えさせられました。

館内の展示は、2015年と2018年の2度にわたってリニューアルされ、主に日本の大陸進出、シベリア抑留生活と、引き揚げを迎え入れた舞鶴市民という三つのパートに分かれています。長年の収集活動の成果をあ

らわす実物資料や体験画、記録映像も充実しています。とりわけ印象的だったのは、シベリア抑留体験をもつ方々が、みずから下絵を描き、作成したという、収容所様子を再現した等身大の人形たちでした。痩せこけた身体、土色の顔にくぼんだ眼。手作り感あふれる素朴な人形は、数年前の広島平和記念資料館の「被爆人形」撤去騒動が示すように、実物資料を重視する現代の博物館展示の潮流からは外れているように見えます。しかし、

実物ではないものによって再現可能な状況を可視化するという力業がもたらす説得力は、そこに託された思いも含めて、決して蔑ろにはできないと感じました。リニューアルに際して意識的に整えられたという明るい空間と快適な環境の中で、ぼつりと取り残されたような再現人形の周囲には、そこだけ寒々としたシベリアの気配が漂っているような気がしたので。

広々とした引揚記念公園の中には「平和の群像」や「異国の丘」「岸壁の母」歌碑などのモニュメントが立ち、展望台からは復元された引揚桟橋や舞鶴引揚援護局跡地を見下ろせます。ちょうど秋の紅葉がともきれいで、自動演奏によるカリヨンの「紅葉」の鐘の音がよく似合っていました。

館内に開店したばかりのレストランでは、初めて「肉じゃがカレー」なるものを食べましたが、カレーライスも肉じゃがも旧日本海軍が生み出した料理とのこと、私たちの生活の中に知らぬうちに溶け込んでいる戦争の記憶を、五感を通して実感したのでした。

# 蜜ノ木

三重県伊賀市鳥ヶ原（旧鳥ヶ原村）には、画家の岩名泰岳さんを中心とした「蜜ノ木」というグループがあります。岩名さんの創作活動の原点には、市町村合併でなくなった鳥ヶ原村の記憶を残したいという思いがあったそうです。東日本大震災をきっかけに鳥ヶ原に戻った岩名さんは、地域の同年代の若者と「蜜ノ木」を立ち上げ、メンバーとともに地域の歴史のリサーチ、伝統行事への参加、作品制作、展覧会など、地域に根差した活動を続けて来られました。今回の調査では、岩名さんに鳥ヶ原を案内いただきながら、「蜜ノ木」の背景や、主宰する思いについてお聞きしました。緩やかな文化青年団「蜜ノ木」。そのユニークなミュージアムの活動を知る調査となりました。

日時：2020年12月1日（火） 10：00～17：30  
リサーチ先：蜜ノ木  
お話をお聞きした人：岩名泰岳さん（蜜ノ木主宰）  
岩名江里子さん（蜜ノ木メンバー）

調査者：佐藤李青（公益財団法人東京都歴史文化財団アートカウンシル東京プログラムオフィサー／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）  
小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）



## 昔は縫製工場でした

岩名泰岳（以下岩名）

ここは、昔は縫製工場でした。村の人たちが働いていたらしいです。そこが閉じて、その後陶芸家の方がしばらく家族で住んでいました。僕が前に住んでいた家は狭い家で、アトリエは山間の手づくりの小屋みたいなところで、場所を探していたのです。自分の制作もできて、ちよつと広いスペースがあつて人が集まれるような場所を探していたら、たまたまここが空くと聞いたので、大家さんにお話しして貸してほんで、ちよつと自分たちで直して。

小林めぐみ

ここ居心地いい感じですね。あ、藤森武の写真集がありますね。数年前、福島県立博物館で展示をやりました。会津の仏さまも撮っていらっしやるので。

岩名

この辺の木津川沿いは十一面観音を祀っているお寺が多くて、白洲正子さんが、観音さまがあるお寺を回って、本にもなっています。

岩名

これがうちの村の仏像です。

塚本麻衣子

立派ですね。

岩名

十一面観音です。

塚本

ちよつと怖い系ですね。

岩名

そうですね。圧がありますね。体のポリウーラムがあつて、背もでかい。2048年に開帳される。

塚本

33年に1回。すごいです。

岩名

でも、今はやっぱり、こういう地方のお寺は運営が大変です。特に、ここのお寺は檀家さん

がほほいしない。村の人たちの寄付でやりくりしているのですけどなかなかね。

小林

お二人には、2、3回、会津でお会いしているのですが、実はまだライフミュージアムネットワークのことを、ちゃんとお話ししていないと思いつつここにきています。今日はそこから始めたいと思っています。

岩名

記録集では見せていただきました。

小林

東日本大震災があつて、福島県立博物館は何ができるのか、私たちも考えてできることをやろうと動いてきました。震災遺産保全プロジェクトでは、津波で被災した資料、原発事故で避難されたみなさんが避難所運営に使っていたもの、その時の記録、そういう資料を収集してきました。

岩名

震災後。

## 「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」

小林

震災後すぐではなく2013年ぐらいかと思うのですが、それがまず一つ。もう一つありました。博物館はみなさんが集まる場でもあつたので、その機能を外に持ち出して、みなさんが集まる場を作れないか。

同時に全町避難、全村避難が出てしまつて、地域のみなさんが自分たちの暮らししてきた地域からこそつとなくなること、その土地の記憶が途絶えてしまうのではないかと不安の声が出ていました。それをなんとかしたかった。どんな暮らしをしていたかお話を聞き、避難して初めて一緒に同じ仮設住宅で暮らすようになった方々がコミュニケーションを取れるようにということで一緒に場所を作りました。無理やりじゃなくなんとなく場を作りながらお話しして、お互いを知る機会にする。そういうことをしてきました。そういうアートプロジェクト系の「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」を6年間、2012年から行いました。始めるちよつと前に李青さんと出会うのです。2011年に東京都は「N-Support Tohoku-Tokyo」という、福島、宮城、岩手での支援活動を始めていて、福島県の事業と一緒にやりませんかと声を掛けてくださり、2011年から東京都と事業をさせていただき、並行して「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」をやっていました。

震災から5、6年やっていたのですけど、被災地も、落ち着くという言葉が適切かどうかはあるにしても、震災直後の状況からはだいぶ変わって、暮らしもできるようになってきた。だからその難しい問題も出たのですけど、「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」は2017年で終了させました。その後、では博物館として今度は何を目指していくかを考えた時に、震災から5年、6年と「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」をやつて改めて実感したのは、亡くなった方もたくさんいらっしゃつたし、暮らしを大きく変えなくてはいけない方もいらつした。「いのち」「くらし」

てなんだろうというのを考えなきゃいけないということでした。

## さまざまなネットワーク

「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」は実行委員会形式でいろいろな方と組んで行いました。さつきお話しした「Art Support Tohoku-Tokyo」も東京都と私たち、地域のNPOさんも入っていた。そういうさまざまなネットワークで事業をやっていくと博物館単体で事業をやるよりも、社会で何が起きていて、何が必要なのか、みなさんの意見も聞いて事業ができると思って。それで、ネットワークを基盤にして「いのち」と「くらし」を考えていければと思う、新しい事業が始まりました。それがライフミュージアムネットワーク。

「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」や、「Art Support Tohoku-Tokyo」は被災者の方に直接向き合う仮設住宅や復興公営住宅での事業も多かったのですが、ライフミュージアムでは震災で起きたことをどうやってこれからの糧にしていけるかを考えたいと思ったのです。2011年だけの記憶に終わってしまうのではなく、それが今に繋がって、未来がどう変わっていくのかも一緒に考えたい。

その時に、私たちだけで、今の福島を考えるとではなく、日本全国で行われているいろいろな活動、ミュージアムの事例を勉強して、それを福島にもう一度伝えて、福島だったらどんなことができるのかも考えたい、考えられるのではないかと、県内、県外での事例調査、デイスカッション、場づくりをやるようになりました。これまでの記録集で見えていただいたように、

方を支援する団体の理事長さんです。外の人と障害のある方たちを繋ぐ活動をしてもらって、博物館の機能を考える時にいろいろなご意見をいただける。さまざまな方に入っていたと思います。

## 「Art Support Tohoku-Tokyo」

佐藤

「Art Support Tohoku-Tokyo」という事業は、震災の後に東北3県、宮城、岩手、福島を東京都として支援するという話が出て、警察や消防の派遣に加えて、今私たちがいる財団の事業のやり方を使って芸術文化の部分でも何かできないかと始まりました。今のアーツカウンシル東京、当時の東京都歴史文化財団のチームが動かしています。事業として始まったのが2011年の7月かな。

## 現地のメンバーと一緒に

もともと都内でNPOの人、一般社団法人の人、各エリアでプロジェクトをやっている人たちと一緒に事業をする。「東京アートポイント計画」をやっていました。

そのやり方を使って東北で何か支援ができないか、アーティストを派遣したり事業を持っていくより、現地で必要なものを現地のメンバーと一緒に作ってプロジェクトを立ち上げたり、既に動いている活動を支援するというやり方を被災地支援事業のスキームでできないかというので始まったのが「Art Support Tohoku-Tokyo」です。

都内で事業をやっていましたが、東北3県で

県内・県外あちこちでお話を聞き、福島のみなさんにもお伝えして、福島で起きたことをどうしていったらいいかを一緒に考える。それでこうしてお話を聞きにまいりました。前置きでございまして、はい。

## みなさんが感じた喪失感

鳥ヶ原のことで、教えていただけたらいいなと思っていたのは、合併で村がなくなったのがスタートにあったということ。それは、震災とか原発事故の避難でみなさんが感じた喪失感とすこく重なるところがあると思った。岩名さんはここに暮らしていられしやるから全然違うのですが、合併がもたらすものも良いこと悪いこと両方ありますよね。失われてしまったという感覚に対してどんなことをしてこられたのかを教えてくださいたら、福島に持って帰れるものがあるような気がしておじゃましました。

岩名江里子（以下江里子）

客観的に見て泰岳さんのやっていることはそういうことだと思う。私がかここに引越してきたのは2年前（2018年）で、まだそこまでわからない。今日は私も一緒にお話を聞いたらと思います。

岩名

最初にこういうのを始めようと言ったのは、福島県博、小林さんたちからだったので。

## 「会津・漆の芸術祭」

小林

やっていたわけじゃないので、それぞれの場所に誰がいるか、福島でどうすればいいかといった時に、都内の知っている人にもまず県博に行っただけがいいと言われて、それで川延さんと小林さんを紹介された。それが6月から8月くらい。

小林

うん、その頃かな。

佐藤

それからずっと一緒にやって、いろいろな所に連れていってもらって、福島県で事業を作った。5年経った頃に一緒にやっていたメンバー、各地の人にインタビューをしたものが冊子になりました。

5年目くらいまでは現場で事業を作り、何がやれるかをずっと考えて、5年目くらいから少し落ちていて、支援も減っていったって、落ち着くというか活動が減る時期があって、その時にこのインタビュー集を作りました。

江里子

6年目。

## 通年で一緒に事業を作る、チームを支援する

佐藤

はい。そこからは毎年1冊ずつジャーナルを作っています。今は単発でイベントをやるよりも、通年で一緒に事業を作る、チームを支援するというのが事業の目的でもあるので、複数年で関わるチームがだんだんできてくる。

東北3県でも、宮城でやっている人が岩手で

「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」に先立って、2010年から「会津・漆の芸術祭」をやりました。会津若松市と喜多方市、昭和村と三島町で。

博物館の来館者数がどんどん減っていました。自主企画の企画展を中心にやっていて、予算も今よりは余裕があったので、ちょっと難しいかもしれないけど、学芸員の研究成果をストレートにかたちにする、そういうスタイルを続けていて、良い展示だという評価もあったのですが、一方で来館者が減っていき、常設展もリニューアルしないまま20年近く経って、これはいかんぞ、公共の施設なので、ちゃんと活動を循環していかなないと役割が果たせないと思った。

## 足を運んでもらうのを待っているだけじゃなく

それで、博物館に足を運んでもらうのを待っているだけじゃなく、地域で何かかたちにしていけないかと思ひ芸術祭というかたちを取りました。研究成果をストレートに出すだけではなく、それを作家さんにお伝えして、面白がってくださいる方が作品に取り入れて、作品というかたちで伝えて、見せてくれる。そういうことをあちこちでやってみました。

賛同する作家さん、ちょっとずれていると思う作家さん、それぞれでしたが、作家さんたちと1年やって、2年目、3年目までやるぞという時に、東日本大震災だった。

東日本大震災でストップした2年目の準備でしたが、「コンセプトを「東北へのエール」にして、みなさんからの東北へのメッセージを見てもらう、そういう芸術祭をやることになったのです。

やっている活動を意外と知らない。だんだんエリアが充実してくると、そこだけで考える状態みたいになる。その時に、せっかく東京から行って3県で動いているのだから、隣県の情報を行き来させ、一緒に事業をしてはいないけど近くにいる人に会いに行って話を聞くということをメディア作りをしながらやる。それを6年目以降やっています。

各現場でやっている人は、震災後ずっと事業をやって、10年経ってきている感じがあります。福島でやる事業は、やっぱり県博のみなさんに誘われ、連れられて動いてきて、それでライフミュージアムに混ぜていただき、こうして今も動いている感じですよ。

事業自体、今年10年で一区切。最初は2年って言っていたのですよね。

小林

それが10年、すごいことです。

岩名

10年はすごいです。

佐藤

仮設住宅は2年って決まっている。東北では延びていますけど。

小林

まだ建っています。

佐藤

この支援事業も、支援と言ったらまず2年だろうとスタートした。

2011年の秋に2年目の芸術祭ができるようになって、2012年までやって博物館主催の事業は終わりました。漆は人と自然の関係性でできている。そのメッセージは震災後に伝えるべきものだと思ってやっていたんですが、その枠組みだけでは、どうしても被災地の浜通りに出て行く理由にならないし、被災した人たちに直接接するのが難しかったんですね。

ならば、震災に真っ向から向き合ったコンセプトの事業を別に立てようと、「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」を始めました。「Art Support Tohoku-Tokyo」については、李青さんからお願います。

佐藤李青

「アーツカウンシル東京」の名刺をお渡ししましたが、今日はライフミュージアムネットワークの実行委員会委員のメンバーとして来ました。

岩名

委員の人も何人かいらつしゃるのですか。

小林

10人くらいの方に実行委員会の委員をやっていたと思います。

江里子

いろいろなところから。

小林

はい。今日「一緒にするはずだった浜松のNPOのクリエイティブサポートレッツの久保田さんはミュージアム系ではなく、障害のある

10年やっていただいたからこそ実感ですが、関わった人たちのネットワーク、スキル、経験値が上がった。それをくださったのはすこく大きいとあらためて思います。見えないところですよ。

佐藤

ジャーナルは最初、東北の事例をいろいろ紹介していたのですが、今4まで出して、この時はもう東北の話ではなく、これは阪神・淡路の時の鳥袋道浩さんの作品です。「人間性回復のチャンス」。

岩名

鳥袋さん、こんなんやっていたんですね。

佐藤

これは「自分の家の近くに出した作品で、撮影の日が3月11日なのです、1995年」。

岩名

ああ、すごい。

## 東北だけの話じゃなく

佐藤

震災の後に、いろいろな所で展示された。ライフミュージアムと同じように、東北の経験があっているいろいろな経験をみんなが気に始めた。震災遺構の話やメモリアル施設が最近東北でもすこく議論になってきた。その時に、その伝え方が原爆の伝え方にもあったよねとか、今まで話と繋がっている。そこと並び立って、どう

いふふうに伝えていくかという課題がここ数年出てきていて、その中で東北だけの話じゃなく、今まであった出来事も混ざってくる。

岩名

そういうのは大きい、面白いですね。

## 自分たちの土地の記憶とオーバーラップさせて

小林

「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」でも後半は、作品化した福島の出來事を県外に持っていった成果展をしました。福島の発信でありつつ、開催地のみなさんが自分たちの土地の記憶とオーバーラップさせて考えてくださるきっかけになった。ライフミュージアムでリサーチ行ってお話を聞いた広島の方が、福島の伝承施設がどうなっていくかすごく気に掛けてくださるようになった。そういう相互作用になっている気がします。この活動は強いものではないけれど、緩やかな、網のようにみなさんと繋がる縁ができていけば、それが今度何かの時に、福島で起きたことをお渡しすることで役に立てる。そんなことを思ったりしています。

岩名

そうですね、次に繋げていきますよね。

小林

岩名さんはなぜ始めようと思ったのか聞いてもいいですか。

## トトロの世界みたいな

岩名

僕は1987年生まれで、子どもの頃に暮らしていたのは上野市駅、お城の近くです。お城の前の小学校に小学校2年生まで通っていた。

当時ここは鳥ヶ原村ですけど、ここにたまたま親戚がいて、両親も田舎の暮らしがたくたく、ちよと空き家があったので、そこに家族で引っ越して、小学3年生の春から転校したので。城下町っぽい所からこういう農村、村みたいな所に来て、なんかジブリのトトロの家みたい。引っ越した家はほんとにトトロの家みたいな感じで、なんだかぼろぼろの井戸があった。横に正月堂の山 森。

そういう田舎、学校のクラスも1学年が僕の頃で28人、それでも多いくらいで、中学3年生まで育った。ちよと中学2年生の時かな、数年後に市町村合併がおこるって聞いた。伊賀上野市駅の周辺は上野市で、周辺にいくつかの村があった。戦後にも1回合併があって、周辺にある小さい村がどんどん合併して、2004年にこの鳥ヶ原も合併して伊賀市に変わる。2004年だったか、高校生の時でしたけど、それが起こる数年前の中学校の頃からもう数年後に合併するかもしれないという感じの話があった。

## 大切なものがなくなっていく

人も減っていく中で、村として独立してやっていくのは厳しいから仕方がない。だけどやっぱり合併しちゃうと、これまで村でやってきた事業とかが駄目になる。自分たちの住んでいる場所の地名だけ残り生活は続いていくけど、村の行事やそういう大切なものがなくなっていく。

ミーハーですね、ミーハー。

## 絵を教えてください

岩名

声をかけた。このあいだテレビ見ましたって。本人は伊賀上野出身で、アトリエもこっちにあって、たまに描きに来ていて、その帰りだつて、電車でいろいろお話しした。偶然、すごく有名な芸術家に電車で会って、この人に教えてもらいたい、絵を見てもらいたいと思った。電帳を調べたら、伊賀上野のアトリエの住所があったって、そこに手紙を出して、絵を教えてくださいと。大阪で弟子を集めて合評会みたいなことをやっていた。そこに高校生から通うようになって、毎日作品を作って、月に1回の合評会に見せに行くようになったのです。これまでは、伊賀で図書館にある画集を見て、美術部で油絵を独学で描いていたんですけど、たまたま現代アートの作家さんに出会ったのがきっかけで、現代アートの世界に進んでいった。

小林

お手紙を出した時の心境は、最初に村のことを残したい、その選択肢として絵を選んだ時の気持ちの延長だったのですか。そのための表現の幅をもっと広げて豊かにするためにスキルアップしていきかけたのですか。

## もっといろいろなものを吸収したいし

岩名

そういうことがクラスの授業でも話されたりした。

僕は子どもの時に途中から来た子どもで、よ者だから、逆にここがふるさとだって思いが強く、中学校の時に村議会議員の人に村を守ってほしいって手紙を友だちと出したことを覚えている。

## この場所の記憶を残すものを

そういう問題が起きた時、自分が育った場所がなくなっていくという感覚がすごく強くて。それまでアートとか文学的なものに全然興味がなく、友だちとゲームしたり漫画読んで読んで過ごしていた。それが、そういう問題が起きた時に自分が何かを作って、この場所の記憶を残すものを作れないかなと結構考えるようになった。それで、学校の図書室に行って小説を読み始めた。古いシャガールの画集もあった。シャガールの初期作品は、ロシアの村で、彼がユダヤ人のコミュニニティにいる、それが素朴に描かれている。

そういうふるさとを題材にした絵を見て、現実を写しているわけじゃないし、土地を記録するのなら写真を撮ってもいいけど、絵はまた違うすごい記録の仕方だと思った。それから作品を作り始めるようになって、それが中学2年生の終わり、3年生ぐらい、将来は美術の世界に行こうと思うようになったのです。

小林

そうですね。なぜ、合併によって絵を描く方に岩名さんが行ったのが気になっていました。

そうですね。それはありました。

やっぱり、美術に進みたいと言った時、周りの大人たちは、こんな田舎で絵を描いていても食べていけないと。高校の先生も公民館とかで展示会をしていて、地元で完結しちゃう。もちろんみんながそうではないですけど。ここ鳥ヶ原で作っている作品ももっといろいろなものを吸収したいし、自分も外に繋がっていかないとけない。

その時に現代アート、抽象画の日本の美術のバイオニア的な人に出会った。大阪行くと、関西で発表している大人の作家さんたちと出会って、いろいろな交流があった。その近くで美術を勉強したいと思っていた。周りに美大とかなないから、元永さんが客員教授をやっている滋賀県大津の成安造形大学を勧めてもらって、そこに行つて4年間絵の勉強をした。美大に行くとも今度のもっと新しい同世代の仲間とか先生たち、新しいアートに出会った。

中学時代は村がなくなっていく、故郷を失う喪失感があって、それで表現を始めて、高校時代はもっと自分の表現の幅、人間関係を広げていこうと頑張っていた。大学に行って作家活動を考えた時、都会的と言うと変だけど、いろいろな表現の作家さんたちがいる中で大学3年生ぐらいの時に、もう一回地元を題材にした作品を作ろうと思った。

## 鳥ヶ原の森でスケッチを始めて

自分が子どもの頃に遊んでいた鳥ヶ原の森でスケッチを始めて、地元の歴史、言い伝えを聞いて、自分のルーツを作品にしていこうと思うようになって、それで地元を題材に絵を作り始

江里子

なぜでしょうね。なぜ絵に行つたのでしょうか。

シャガールの画集と出会ったのが大きいですが、佐藤 やっぱり画集は置いておくものですね。

小林

自分が考えていることをかたちにする、伝える手段はいろいろある。その中で岩名さんが絵を選んだのはなぜなのかな。

岩名

高校生の時に三重県の美術展に初めて入選した。「村の魂」というタイトルの大きい絵を描いて、それが入選したのです。

江里子

絵の写真とか現物は無いの。

岩名

現物は鳥ヶ原の中学校にある。結構でかい絵です。だから、絵が上手になりたい、アーティストになりたいって美術の道に入ったわけじゃない。なんて言うのかな、自分が住んでいる場所が、市町村合併でなくなっていくというので、自分の考え方が10代の頃が変わった。

## 自分の人生は自分の場所で生きていきたい

そして、なんとなくみんなが認識していたのは、やっぱり、こういう所に住んでいると、大人になって働く場所があまりない。ないから、

めるようになったのです。

ドイツの美術に興味があったので大学卒業後にドイツの美大に行きました。こういうローカルな場所で作品を作っているの、違う環境の美術を勉強したいと思ってドイツに。デュッセルドルフ芸術大学に研究生みたいなかたちで入れてもらって、2年間勉強していました。ドイツに留学中に東日本大震災が起こった。

小林

2011年だったですね。

## 社会とか地域のことをもう一回考えるように

岩名

そうですね。ドイツのテレビでも震災がすごく報道された。福島原発のこと、津波のことも周りのドイツ人のアーティストもいろいろな話をしていた。

留学している時は、どちらかと言うと、自分の作品をどういう展示会に出すか、自分の作家活動をどうするかを中心に考えていた。

震災が起きて、社会とか地域のことをもう一回考えるようになった。それがきっかけで、ヨーロッパ、東京で作家活動をするのではなく、地元鳥ヶ原に戻って作家活動、地域をテーマにした作品作り、そういうプロジェクト的なものを作ろうと思うようになりました。

小林

東日本大震災がきっかけというあたりをもう少しお聞きしたいです。視点をふるさとの鳥ヶ原にして、表現する対象も変わっていく。帰帰

テレビの「たけしの誰でもピカソ」に出ていた。戦後の前衛芸術特集かなにかで。それを見ていた。そしたら、学校の帰りの電車でその人がいた。田舎の駅なので、人はあまりいないじゃないですか。すごく目立っているのを見て、友だちとあ、こないだテレビに出ていた人だって。

江里子

勉強できる子は進学校に行つて都会でいい仕事を探す。地元の高校に行つて、そのまま地元の工場とか市役所に勤める。パターン化されているという現実がある。なんとなく子どもながら同級生たちも、そう思っていたと思う。そういうのとは違う、自分の人生は自分の場所で生きていきたい、そういうのはありました。

## 元永定正

それで、高校に行つても絵を描いていたのですけど、元永定正という伊賀市出身の芸術家について、戦後に「具体」という芸術運動があった。佐藤さんは知つていると思いますが、戦後の抽象絵画運動みたいなのが関西でもあったのです。そこに伊賀から参加していた作家さんで、大正生まれの人だったのですが、谷川俊太郎と絵本を作つたりした。その人が伊賀上野にいらつしゃつて、たまたま高校の帰りの電車の中で出会った。

小林

たまたまとはどういうことですか、話しかけたの？

岩名

テレビの「たけしの誰でもピカソ」に出ていた。戦後の前衛芸術特集かなにかで。それを見ていた。そしたら、学校の帰りの電車でその人がいた。田舎の駅なので、人はあまりいないじゃないですか。すごく目立っているのを見て、友だちとあ、こないだテレビに出ていた人だって。

したということかもしれないですけど、その心情とか考え方の変化をもう少し詳しくお聞きしてもいいですか。

**その時期に重なって起きていた**

岩名

いろいろな要素がその時期に重なって起きていた気がする。自分の周りでも。ヨーロッパは移民の問題があって、僕がいた頃はそこまではなかったですけど、帰国した後にテロが起きて始めて、その後、ギリシャ危機、EUの問題にも繋がっていく。

当時、語学学校に通っていたのですが、ある月から、ギリシャ人、イタリア人、スペイン人が急が増えた。休み時間に話をしていると、もう母国じゃ仕事がない、だけどドイツはまだ仕事があるから、家族を置いてきて働く。今からドイツ語を勉強して働きたいという人が急が増えた。そういう社会の変わり目であるいろいろなことが起きていました。

**社会にコミットメントした芸術を**

それまでは、絵を中心に描いていて、絵で完結。自分が作品を作ること、自分の作品が全てで、それがどこで展示されるかとか、そういうことを考えて活動していた。けど、もっと社会にコミットメントした芸術をしようと思ったのは、やっぱり震災、ヨーロッパの状況の変化。

アフガニスタン人の同級生が一人いた。彼はアフガニスタンで絵の勉強をしていたけど、戦争が起きて避難してドイツに引っ越してきてドイツで絵の勉強をしていた。そういう人に出会

う環境は、ふるさとに戻って芸術をしたいと考えるきっかけになりました。

小林

芸術活動をしようにと思って戻ってこられた島ヶ原はどうでしたか。

**地方に移住する人が急激に増えた**

岩名

帰ってきて思ったのは、村と周辺の雰囲気ですごく変わってきていた。震災以降、地方に移住する人が急激に増えた。しかも若い世代。僕らが子どもの頃は退職してちよっと田舎にという人はいたけど、結構若い人たちが田舎を求めて移住して来る。島ヶ原の隣に京都府の南山城村があります。僕が帰国したら山奥に現代アートのギャラリーができて、テクノポップ系の音楽をやっている人たちが、ドイツ、ベルリンから来た。農家、空き家を改装したカフェが急にでき始めた。

村に住んでいる人たちだけのコミュニティみたいなのがあったのが、やっぱり震災以降だと思うのですが、僕が帰って来た時に村の風景がすごく変わってきて、結構時代の流れ、変化を感じました。

小林

帰って来たら、少し周りも変わっていて、そこで「蜜ノ木」を始めようと思っただけです。

**ヨゼフ・ボイスが教えていた**

岩名

も調査に来てくれた学芸員さんたちがそこにわかってリサーチに参加してくださったり、秘密結社感がアップ。

(映像視聴)

**正月堂のご開帳**

映像は地元のケーブルテレビが作ってくれたもの。正月堂のご開帳に合わせて作った。正月堂というお寺は、村での歴史も古い象徴的なお



「蜜ノ木」を始めようと思ったのはドイツにいた時から。例えば、日本では宮沢賢治が農民芸術、羅須地人協会をやっていた。僕が留学していたデュッセルドルフの芸術大学で、もう亡くなったけどヨゼフ・ボイスが教えていた。

彼は、「全ての人は芸術家である」という有名な言葉を残して市民と芸術プロジェクトをやっていた人です。櫻の木をドイツのいろいろな町に植えるとか。その活動の記録を地元の美術館でまとまって見られた。作品づくりじゃなく、もっと社会や地域の人たちと結び付いた芸術を作っていたこととドイツにいた時から考えていました。東北との繋がりで言うと、2011年の

震災の後に奈良県で「はならあと」(奈良・町家の芸術祭 ENOZONO)という芸術祭があって、三瀬夏之介さんと一緒に登壇させていただいた。三瀬さんはその頃東北画を始めていた。東北でいろいろやっているという話を聞いて、僕もそういうのを伊賀に戻ってやりたいですと話し合いをした。だんだん、地元に戻ってただアトリエで作品を作っているだけじゃなく、もっと地域とコミットメントした仕事をしたいと思

うようになりました。それで、こっちに帰って来て、村に残っている同級生の子たちに声をかけ始めた。就活に失敗したとか、外に出て仕事したかったけど家の事情で村に残って地元の仕事をせざるを得ない、けど自分も何かしたいと、そう思っている子たちが何人かいて、そういう子たちにもう一回村で何か起こすことをしようと言った。小林

そういう話になぜなったのですか。たまたま村の人たちのリアクションはいろいろですね。必ずしもみんないいとは思っていません。講になる時もお寺にクレームの電話があった。村のおじいちゃんたちが「イベント気分でやられちゃ困る」と言うから、住職のところに通って正月堂の歴史の資料をいただいで読んだ。文句を言ったおじいさんより僕のほうが詳しくな

た。江里子 女性が頭屋になった時もバッシングがあったみたい。お酒を注いでくれないとか。

岩名

「蜜ノ木」に関わっている人たちは、みんなそれぞれの視点で関わっている。僕はアート、土地の記憶をリサーチするという視点で運営していますが、農業をやっている人もいれば、温泉施設で働いている人もいます。なんとなく友達が集まっているから加わるという人もいますし、江里子さんみたいに大人になってからこの村に来て仕事をしている人もいます。みんな「蜜ノ木」に対して感じていることは違う。やっていること

と違って、鬼の目玉、耳、そういうものを付ける作業をして、いろいろな飾りものを毎年作る。小林 数年間活動されてきて村の方たちのリアクションはどうですか。

「イベント気分でやられちゃ困る」

岩名

今日、時間があつたら通ろうと思えますが、村の資料館があります。伊賀市になる前の村立の資料館。村の年表がそこにあるんですけど、2004年で終わっちゃっている。つまり、合併後は村の歴史を記録することがもうできない。その資料館も永久休館みたいな状態。

**みんなそれぞれの視点**

岩名

「蜜ノ木」に関わっている人たちは、みんなそれぞれの視点で関わっている。僕はアート、土地の記憶をリサーチするという視点で運営していますが、農業をやっている人もいれば、温泉施設で働いている人もいます。なんとなく友達が集まっているから加わるという人もいますし、江里子さんみたいに大人になってからこの村に来て仕事をしている人もいます。みんな「蜜ノ木」に対して感じていることは違う。やっていること

会ったとか、飲んだとか。

**郵便配達員さんで 画家になられたかたのおじさんがいて**

岩名

たまたま会って声をかけた子たちが何人かいた。もう一つは、村に戻って来てアトリエを探していたら、たまたま村外れに使われてないアトリエがあるのを教えてもらった。行ってみたら、もう廃墟になっていましたが、結構大きいスペースの手作り小屋みたい。

昔、島ヶ原村の郵便配達員さんで画家になりたかったおじさんがいて、その人が自分で建てたアトリエだった。その人は、そこを自分の制作拠点、村の人たちが集まるコミュニティにしようと思っていられないけど、建ててまだオープンしないうちに亡くなってしまった。それからもう10年以上、廃墟になっている場所、建物があると聞いて、アトリエにしたいなと思ってお借りしました。

**アトリエの掃除をしているうちに**

10年ぐらい放置されていて草だらけ、ごみもいっぱい置いてあって、それを自分で片付け始めた。その時に手伝ってくれる同級生の子たち、地元の友だちと一緒にアトリエの掃除をしているうちに、だんだん、人が集まってきて、それが「蜜ノ木」になっていく。

多い時は20人ぐらいいたかな。その後は流動的になっています。この数年はメンバーがメンバじゃないかの境界線が。イベントがあると突然人が集まってきてくれたり、例えば、昨日

小林 中はもう見られないのですか。

**パブリックに継承していくことができない**

岩名

どうだろうね。市が管理している。結局、なんだかよくわからない場所になっちゃっている。この土地の記憶、記録をもうパブリックに継承していくことができない。

村の人たちに取材すると、昔は郷土史を調べている人が村に何人かいらつした。そういう人たちがいなくなっちゃって、行政的にも資料館は動かなくなっちゃって、村の年表は2004年以降更新されていない。そういうのは僕の中で、「蜜ノ木」の活動で重点を置いてやりたいことです。

ただ、自分はやっぱり作家なので、昔の資料を集めて、いわゆる郷土史研究的なものとか、資料館的なことをするんじゃなくて、さっきもご開帳のインタビューで言っていたように、村の記憶の断片みたいなものを、アートとか、自分たち、「蜜ノ木」みたいに村に関わっている若い人たちが関われるかたちで発信し、使われなくなつた資料などをいただくことも多いので、それをもとに作品を作るとかして、土地の記憶が紡げなくなつた後に、その土地の記憶の断片と自分たちがしていることをもう一回繋ぐことを自分の手法でやってきたと思うのです。

小林

預けてくださる、資料をくださるということ、村の人から託されている部分もあるので

しようか。

## 青年団が集まって、自分たちが本を作った

岩名

全然知らなかった村のことを知ることがある。ご開帳の時に、1927年かな、この村の青年団と周辺の六つの村の青年団が集まって、自分たちが本を作ったことがあったらしい。当時の青年団の20代の人たちが、自分たちの生活、まさにライフミュージアムネットワーク的な村の人たちのネットワークを作ろうという本です。

小林

本を作ることでネットワークを作るみたいな感じですか。

岩名

昭和初期、関東大震災の後の恐慌の時代、すごい不況で村の若い人たちが都会に仕事を探しに出て行った時代で、土地に残された人たちが、周辺の人たちと繋がって地域をよくしていく、変えていこうという本を作っていたらしい。それをいただいたのです。

それって、90年後の今、村が過疎化で人がいなくなって、村の記憶を保存、紹介できなくなっていく中で、「蜜ノ木」ができて展示会をしているのと繋がっている。

小林

うん。重なっています。

岩名

でも外に発信することとはまた違い、ここ自体がある意味コミュニティじゃないですか。仕事でやっているとか、地域おこしをしようというだけでやっているわけではなく、こういう「蜜ノ木」という所に人が集まってくる。たぶん、小林さんたちがここに来るのも、こういう場所があるから。

でも外に発信することとはまた違い、ここ自体がある意味コミュニティじゃないですか。仕事でやっているとか、地域おこしをしようというだけでやっているわけではなく、こういう「蜜ノ木」という所に人が集まってくる。たぶん、小林さんたちがここに来るのも、こういう場所があるから。

小林

あるからですよ。

岩名

外の人との接点となる場所でもある。場所に



でもこの活動も数年で解体されていく。「蜜ノ木」も、ああいうニュースで、若者たちが村を盛り上げています、みたいにパターン化されて紹介されるけれど、でもやっぱり。

小林

現実はそのようなことじゃない。

## 現実も含めて「蜜ノ木」の活動

岩名

現実には、やっぱり20代の頃は実家暮らしで、休みの日は村の中でみんなが集まってワイワイできるけど、30歳になれば、就職もしないといけない、家族ができれば家族の時間も作らなきゃいけない。実際にこういう村だと、昔はと

こういう表に出る活動に関わっている人たちには、また別の、その人たちの人生と現実がある。「蜜ノ木」で農業をやりたいとプロジェクトを立ち上げてても続かない人も現れたりする。そういう現実も含めて「蜜ノ木」の活動なのかなと思います。

「蜜ノ木」の活動ではないですが、青年団の本を手に入れたのをきっかけに、90年前の村の人たちが書いた言葉を引用した作品のシリーズを作った兵庫県のギャラリーで展示会をしました。

小林

人が変わったり抜ける人がいたりしても活動は継続されていますね。ここ1、2年で、何か

ついて、今は、どういう人たちが参加できたかいいの結構考えています。

## ミュージアムの

小林

お話を聞いていると、やっていらつしやることとがミュージアム的です。岩名さんの活動はむしろ作家としての仕事ですけど、丁寧にリサーチをして資料的なものも展示して、過去の記録を集めてそれをベースに作品を制作している。現地を歩いて調べ、集まる場になることを意識して、すごくミュージアム的。行政がやっているのではないからこそ面白い。

## 当時生きていた人たちが何をしていたか

岩名

そうですね。村でそういう機能がなくなっちゃったから、すべてはできないですけど、自分がそういう機能をインディペンデントな状態で果たす。青年団の本のような資料も実際に収集している。今は村の人たちもほとんど知らないものもある。逆に、若い人たちが村の人たちも知らないようなものを見せる。

でも、青年団の文芸運動はこの村だけじゃなく、いろいろな地域でもあったので、この村限定じゃなく、ある時代に、当時生きていた人たちが何をしていたかの一つの記憶だと思う。

「くずれる家」という展示会で展示したものは、伊賀地域、伊賀全体の近代の画家の作品です。今、伊賀はとにかく忍者推しですけど、戦前は伊賀って洋画がすごく盛んだった時代があったら

考えていらつしやることはありますか。

江里子

一番最近の活動は「歩く日」。今年の4月、緊急事態宣言が発動されて、みんなどこにも行けない状況になって。

## ただ散歩するだけではない

岩名

4月の終わりぐらい、鳥ヶ原は感染者もいなかった。なのに、県外に移動できない、自宅待機となって、じゃあもう一回自分たちの身近な所を見つめ直してみよう、単純に言えば外を歩く。リフレッシュにもいい。そういうのを「蜜ノ木」の20代ぐらいの子たちとするようになって、村を散歩するんですけど、ただ散歩するだけではない。村に疫病にまつわるお堂があったそこにお参りしました。若者だけで集まっているので、若者が感染を撒き散らしているのな、田舎だから監視もあるじゃないですか。自粛を要請されて出歩けない時期に、若者だけが集まって歩いているのは、不快じゃないけど、なんでこの時期にと。

小林

マイナスな感じで見られる。

岩名

そういうのは全然なかったです。そもそも誰も外に出ていないから。そう思う人がいたかもしれないけど、でも疫病退散に由来するお堂を若い人たちがお参りしている、そういう行動は村の人たちに考えてもらえる問題とっていま

しい。自分の師匠、自分に教えてくれた人を辿っていくと伊賀地方に洋画が伝わった時期もリアルにクリアにわかるのです。当時の新聞記事もあります。

ただ、伊賀市に美術館がないので、東京に移住して活躍した人はアーカイブが残っているんですけど、ずっと地元で活動していた人たちのものは、もう家族が全部捨てちゃったとか、市役所に寄贈されて廊下に飾られていたらまだいいけど、倉庫からほぼ出てこないということがある。それを2年ぐらい前から調査するようになった。ご遺族の方から作品をお借りし当時の資料を集めてうちのアトリエで展示会をしました。

小林

調査、研究、展示。

江里子

この時はいろいろな新聞社が取材してくれて、たくさん新聞に載った。これはその一つでその時に作った冊子です。

## 学芸員さんも一緒に

岩名

伊賀には美術館がないんですけど、三重県立美術館の学芸員さんも一緒に調査に加わった。三重県立美術館の研究発表の広報誌がきっかけで県立美術館の学芸員さんたちも伊賀地方の調査で発見した資料を美術館でもまとめてくださった。この地域の美術の歴史の年表も作って

す。

小林

「行こう」と言ったら、みんなが「行こう、行こう」みたいな感じですか。

## 全然知らなかった六地藏に

江里子

4回くらいやったかな。次はどこに行くかを散歩の最後に話して、彼らの知っている所、泰岳さんも知らない所に、みんな26、27歳の同級生なのでですけど、彼らが次はどこに行こうと決めてくれていましたね。竹藪の中にある、全然知らなかった六地藏に連れて行ってくれました。

## 昔ここにいた人の記憶

岩名

その後、三重県立美術館で開催された「#ステイミュージアム」という展示会の中で「非常時の美術」という、美術館のコレクションを活かして、近代日本に起きた非常時、スペイン風邪の流行、関東大震災、戦時中に作られた作品、美術館のコレクション、三重県ゆかりの作家の作品と資料を見せる展示会が開かれました。そこで僕も東日本大震災の時にドイツで作った作品とこのコロナ禍で作った作品を出展しました。村の祠、誰かのお墓、痕跡はあるけど風化して誰のお墓であるかわからない、けどそこには何か昔ここにいた人の記憶があるというのを題材にしたシリーズです。それが展示されていて、その作品の前に「蜜ノ木」の子たちとお参りに行っている写真、コロナ禍での写真、散歩をしようにと「蜜ノ木」の人たちに書いた手紙、それ

小林

それは岩名さんからアプローチしたのですか。一緒にやりませんか。

## それまでできなかったリサーチをしたい

岩名

何年前かに県の美術館の人に伊賀地域の美術について、昔はどうでしたかと聞いたら、何もないなお返事。当時の県の美術館は、やっぱり東京とかで成功した作家たち、知名度のある作家は取り上げるけど、ローカルな周辺部までリサーチできていないと話をされていた。だけど、若い学芸員さんたちは、それまでできなかったリサーチをしたとお話されていたので、お話ししたら一緒にできるかもと思って。

たまたま戦後に伊賀地域で現代アートの活動をしていたおじいちゃんに出会って、伊賀でもいろいろ昔やってたよと聞いた。ああ、あるじゃん、と。それで、その人に資料もまだ残っていると聞いたので、県立美術館の学芸員さんたちにこういうのが出てきそうなので一緒にやりませんかと言って、始まったのです。

調査するだけじゃなく、そういう作品をまた地元の人たちに、地元の人だけじゃないですけど、もう一回発表する場所を作りたいと作品を借りてきて展示会をする。

小林

伊賀上野からのリアクションはどうでしたか。

岩名

結構たくさん人は来てくれましたよ。



江里子  
遺族の方もいらっしゃった。

岩名  
市の文化関係の人たちも、こういうのがあったのですかと見に来てくださった。

小林  
土地の歴史一つのものだけじゃないですからね。当たり前ですが、いろいろなものが要素としてある。忍者ももちろんその一つだけど、近代に美術が盛んだったというの、間違いない要素の一つですね。

岩名  
この時も、昔こういうのがありましたというだけではなく、近くの空き家で伊賀出身で活動している若いアーティストの作品とか「蜜ノ木」に参加している村の人たちの言葉を書いた板、そういうものと一緒に展示して、この土地の過去の記録だけじゃなく、それが現代とどう繋がっていかまで紹介したのが2018年。

小林  
またやって欲しいという声は。

岩名  
どうなのかな。講演には呼ばれるようになりましてけど。伊賀の文化の研究をしている人がかなり高齢だし、専門の学芸員さんもしらっしゃらない。市役所の文化交流課が市役所の持っている昔の作品を市役所でキャプション付けて紹介してくれるようになった。

小林  
今の市のやっていること、考え方を見ているかぎりではということですね。今後、流れが変わったりすれば変わるかもしれないですね。

### 消費されるのは違う仕事を

岩名  
もちろんそうですね。今のこのスタンス、忍者推しのインバウンド観光、そういう地域の面白いものとして消費されるのは違う仕事をしないといけない。もちろん「蜜ノ木」でやったことを市役所の人たちが見て、結果的に伊賀市の絵画とかもちゃんとやろうと言ってくれるのはうれしいです。

小林  
ゲリラの立ち位置を守りながらですか。

江里子  
泰岳さんも忍者の末裔ですよ。

小林  
そうですね。いました末裔が。

岩名  
おばあちゃんが言っていたから、本当かどうかわからない。

江里子  
そういう可能性があるかと。

小林  
市に作品の収蔵があるのですね。

江里子  
そうですね。ちょこちょこ。市長さんがすごく美術に興味があって、収集している。自分のコレクションを持っている。

岩名  
市長が持っている資料に戦前の伊賀の絵画グループの新聞もあって、僕にコピーをくれた。

江里子  
泰岳さん、「蜜ノ木」がやっているこういうことが、圧力をかけている感じもしますよね。

岩名  
ね。美術館もこうやって動いてくださった。伊賀の年配の人たちがやっている美術サークルでも、行き場がなくなっている昔の画家の絵を市に寄贈しようと今年から動いてくれるらしい。僕はインディペンデントだから、ずっとそういう活動はできないけど、こういうのが一つきっかけになっていくと、動いてくれる人たちが、また別に発生して、結果的にいろいろな人たちが動いてくれるのは、いいことかなと思います。

小林  
お二人は、忍者イメージを固定化させようという意識的にやっている伊賀上野の今の状況をどう考えていらっしゃいますか。忍者に絞って伊賀上野を外に出している感じがありますけど。

小林  
目の前に忍者がいた。

佐藤  
合併した旧村も含めて「伊賀市」になっている時に、「伊賀」のアイデンティティというか、旧村の人たちも伊賀であるという感じですか。

### 自分たちの村のアイデンティティ

岩名  
伊賀というアイデンティティはあんまりね。僕は複雑なアイデンティティだけど、鳥ヶ原で育った人たちは鳥ヶ原というアイデンティティが強い。他にもいろいろな村があるけど、その人たちは、伊賀という市駅、お城の周辺。昔は伊賀上野と呼ばれていた町が伊賀というアイデンティティです。合併された村の人たちは、どちらかというと、自分たちの村のアイデンティティが強いのかな。

小林  
連合体みたいな雰囲気があるかな。

### 実はすごく多文化都市

岩名  
新興の団地、工業団地もできている。そこは大人になってから働きに来た人が家を建てる。うちの村の人たちが自由な場所として工業団地に引っ越していく。地方の小さい町ですけど、みんなそれぞれレイヤー、アイデンティティが違うのかなと思います。

### どこもかしこも忍者

江里子  
私は初めてこっちに来た時、うわあ、どこもかしこも忍者だと思って、若干ウザイというか。トイレのマークも忍者だったりする。最近はどう慣れてしまったので、何も思わないですけど、もつたいないと思います。もちろん忍者はわかりやすいし、海外の人も日本といったら忍者。私が留学していた時に、日本のことを全然知らない人も忍者は知っている。「忍者ってまだいるの」みたいな。忍者って、かなりインターナショナルなコンテンツなのだという認識があって、だからそこに焦点を置いて、伊賀市が取り組んでいるのは、観光としてはありだと思うのですが、美術館とか博物館と関わりはないし、もつたいないと思いますね。

小林  
もう一つは芭蕉。芭蕉と忍者、この二つが強いので、もうちょっとバラエティに富んでいた方がいいと思います。

岩名  
それは大きいですね。周辺の農村も合併して今の伊賀市になっていますが、忍者は、昔上野市がほそぼそと観光としてやっていたものが、今は周辺の農村も飲みこんで市をあげてあいうインバウンド向けの忍者推しの町になって、町の名前、駅の名前も変わり、中心部とその周辺、昔の鳥ヶ原みたいな村との格差ができる。一方で市の中心部は観光資源がありそうな場所でいます。

小林  
その工業地帯には南米の労働者の人たちも来ていて、実はすごく多文化都市です。だけど、僕らの子どもの頃からそうでしたけど外国人労働者の人たちは、そういう人たちのコミュニティがある。工場と外国人のコミュニティがあって、だけど、町は忍者の町ですとか言っただけ、統一しようとしている。いろいろなレイヤーがあって、「蜜ノ木」は、その中で伊賀市の辺境で起きていること、忘却されそうな記憶を調べています。

小林  
〜正月堂にて〜

小林  
小さいお子さんも修正会に参加していらっしゃいましたが、大人になってその時は戻ってくる子もいますか。

堂番・山菅善文  
修正会の日やったら戻ってきてくれる。みんな参加してくれます。

小林  
日本で一番遅い秋祭りが12月20日に。

小林  
これからですね。なぜ秋祭りが12月なのですか。

### 昔から、僕が生まれた時からもう

山菅  
昔から、僕が生まれた時からもう始まっていた。5年くらい前、担い手不足で、若い人

ンバウンド、忍者観光のテーマパーク化がすごく進んだ。

周辺の村は資料館もなくなり、文化的なブレイヤーもいなくなっていく。研究している人発信する人も減っていくからお金も回ってこない。そのギャップがどんどん発生している。

### 抵抗運動的な視点

「蜜ノ木」ができる過程に対抗じゃないけど抵抗運動的な視点は強くあった。村で育った子、鳥ヶ原で育った子たちからすると、どんどん自分たちのアイデンティティが失われていく、居場所がなくなっていくという感覚が強かった。そういうものに対する抵抗じゃないですけど、インディペンデントでできる範囲で、失われていくもの、忘却されたものを自分たちで手に入れる。それをアートとかかたちで戦っていく、インバウンドとかテーマパークとは違う土地の記憶を残していこう、というのは僕には結構ありますね。

江里子  
今市は市の文化関連の委員もさせてもらっていて、複雑な立場です。自分で決めているのは、自分の作品は、東京のギャラリー、美術館では展示、発表させてもらうけど、伊賀市で発表することは基本的にしないようにしています。

岩名  
でも、ここではしているからね。

岩名  
そうそう。鳥ヶ原で自分のフィールドを作って自分で戦うので、地域の人に見てもらいたいんですけど、やっぱり、市の観光的視点の観光

小林  
12月20日はもう年の瀬ですね。

小林  
神輿の担ぎ手がおらなかつたんです。それで11月の3日に変えたんです。そやけどまた今年から12月20日に戻したんです。

### 鳥ヶ原団子

山菅  
そうですね。秋祭りにお餅を搗くんです。祭りの鳥ヶ原団子といって、親類縁者に配るんです。祭りの団子、餅搗いたらね、もうあと5日ほどしたら正月の餅つかないかん。餅搗きはつきりしてる話やね。まだ百姓多いですからね、餅米なんか自分で作っていたので、そういうことができると思うんです。

小林  
なるほど、そこは鳥ヶ原がすごく豊かな部分ですね。

山菅  
1年通したらな、餅を供える行事ばかりですわ。

小林  
どんなお団子ですか。

### 餅に家紋を

山菅  
よもぎ餅、よもぎを入れた団子とか。餡なしの団子です。ほんで餅に家紋を捺すんです。家

紋がある家は家紋を捺して、それを重箱にどつと詰めてね、餅をね。それを配るんですわ。

小林 岩名さんはそれをいつも見てるんですか。

岩名 うん。見ています。

山菅 もともと上野市ちゅうところは、上野天神祭ってあるんですけど、甘酒作っているところがあるんですわ、新年に。

小林 近いですけど、結構違う部分もあるんですね。



山菅 そうです。その甘酒も、いまやったら瓶に入れて売っていますけど、重箱に入れるんですね。

小林 硬い甘酒ですけれど。

山菅 硬い甘酒。

山菅 生粋の甘酒ですわ。もうドロツとして、ほんまにおかゆの硬いみたいなの、朝粥の硬めの感じですよ。

小林 面白いですね。堂番はどれくらいやっていらっしゃるのですか。

山菅 僕ももう75やけん、35歳くらいからです。

岩名 今の僕と同じくらいの歳ですね。

### 「いじり居座りついで」

山菅 先代の住職といろいろ付き合ひさせてもらっていたんでね。そんなんもう自然とね、ここに居座りついでもろうたんです。

小林 そうでしたか。ずっとここを守ってこられたのですか。

山菅 餅を搗く、お供えものづくりは昔は男の人だけでやってたのですか。

山菅 そう。男だけです。そやから家の中のおくどさん、台所も結界作ってそこから女性入れへん、そんなんでした。

岩名 そうですね。仏事というか、神事に近いね。

塚本 新しい講ができて、参加させていただきとお願ひする時、何か決まりごとや儀式みたいなものはあるのですか。やらせてくださいと言ったら入れるのですか。

山菅 一応しきたりは聞いてもらっているんですけど、みんな普通に参加してくれています。

小林 鳥ヶ原じゃない外の人たちが、講に参加するのはいかがですか。

山菅 一般の人はそんなん別に何も思っていないんじゃないですか。もともとそういう行事なんや。

小林 私たちの博物館は会津にあるんですけど、会津でも小正月の行事が地区のみなさんだけではできなくて、外から一緒にやってもらう方に入ってもらってやってる。でもそうすること

岩名 そうそう、僕たちもこのお寺のことを教えてもらっている。

山菅 修正会の時は、ここに5段のお餅をこのぐらいい積むんです。その上に鬼の面が乗るんです。シュロで作った。

小林 みんな講のグループの人たちで、手づくりで作られるのですか。

山菅 ええ、そうです。昔は正月からずっとその準備にかかっていました。

小林 なぜ鬼が出てくるのですか。なぜ仏様に鬼をあげているのだろーと思ひながら見ていました。

山菅 僕もそのいわれは聞いていないんだけどね。鬼の面のないところもあったんです。昔は11ほど講があった。昔は、餅が高すぎて鬼が乗らんなんだ。ほんでおひねりだけ乗せた、そういう講もあったんです。

岩名 昔はけんか祭りみたいな感じだった。

山菅 そうそう、もう講と講同士、おうたらもう。

山菅 観音さんのご開帳には一日最高で800人から1000人ちゅうときありました。一番遠いところは沖繩から、ほんで北海道の札幌から。

小林 すこいですね。それだけみなさん楽しみにと言っか、お会いするのを待っていらっしゃるのですね、全国各地で。

### 一生に2回ぐらいいしか見られへん

山菅 地元の人是一生に2回ぐらいいしか見られへん。こゝ、屋根があれで、平成11年に屋根を吹き替えたので、その時に一応特別開帳ということにして、それから33年目で平成27年に正式にご開帳したんですわ。

岩名 このお堂の周りには昔はもっといういろいろあった。大昔。

小林 昔の絵図があるのですね。たくさん建物があつたんだ。

岩名 観音山はこのあたり、今、山になっているところにも、建物が昔はあつた。このあと回つてきます。

昔11ぐらい講があつたんです。それでいったん、六つになつたんかな、それから七つ。もう「蜜ノ木」さんなんか出てくれへんだったら、もう五つぐらいで終わっているからさ。

小林 貴重な一つですね。行事以外の時も地域のみなさんはよくここに来られるのですか。

### 「どこに行く」と言ったら、「観音さん」

山菅 地域のみんなはね、「どこに行く」と言ったら「観音さん」ちゅうてね、ここお参りしてくれていますから。正月堂とか言わない。観音さん言ったら、もうここやって決まっているんですわ。

岩名 お祭りのお供えに鬼が積んであつたじゃないですか、その日の晩に、お堂の番、寝ずの番がある。

### 昔の食料難の時ね

山菅 昔ね、ここへお餅を供えたら、そのお餅を盗みに来た。昔の食料難の時ね、そういうことが続いていたな。堂番がこの灯明を消さんようにね。お餅も盗みに来る人がいるんで泊まる。あつここに隙間空けてあつたですね、明かりをのぞけるように。

岩名



山菅 なんて僕が早うしたかかって言うたらな、明るいうちに回つてもらえって言うたので。暗くなつたら山なんか暗いので。

江里子 では山にお参りに。

小林 ありがとうございます。今日一日、お話を聞いて、岩名さんたちのやっていらっしゃるアートという手段、アートプロジェクトが、地域の

〜アトリエにて〜



同じ責任を果たしていきながら  
さらに踏み出していく

地域の人と信頼感を作っていくとか、「蜜ノ木」もやっぱりアートグループではなくて、村の人たち外から来た人たちが関わる場所。その土地で生活する人と同じ責任を果たしていきながらさらに踏み出していくのを同時にしないといけない。修正会で講を立ち上げたのも、一回立ち上げたからには。

小林  
続けていかなば。

岩名  
そういう責任はやっぱり発生する。「コミュニティの内部で、生活とそこから生まれてくる芸術は一緒にあると思います。」

小林  
農業をやっている方、別のお仕事をしている方が絵を描き始める。絵を描くことが特殊というか、大人になってからは基本作家の人じゃないと描かないじゃないですか。それがとても暮らして近くなっている。なんて言うのか、この「蜜ノ木」の活動自体が、私はアートプロジェクトという言葉を使ってしまうんですけど、何か別のものですか。

岩名  
確かにアートプロジェクトとはまたちよっと違うと思う。

小林  
始まりの「蜜の木」。

岩名  
観音山を題材にした作品はこれ。山で折れた切り株、折れた木。これは修正会で来ているお坊さんたちを描いた油絵。  
上野市周辺の村の集まりを阿山郡と言っていたのですが、これが戦前の島ヶ原村の青年団ですね。

小林  
よく取ってありましたね。昭和2年。

昔の村の青年団的な  
岩名  
「蜜ノ木」って、村の若い子たちが活動して、地域の行事もやっているの、アートコレクティブというより昔の村の青年団的な側面が強い部分もある。で、僕らが。

江里子  
その現代版。

岩名  
僕らが知っている、僕らの親たちがやっている村の青年団は、地域のお祭の屋台を手伝っている、子どものキャンプを手伝っている、どちらかというと体育会系な活動。青年団ってそういうイメージだった。

岩名  
これが発見されて、文芸活動を村の青年団の人たちがしていた、短い期間ではあったのですが、そういうことをしていたのを初めて知った。

小林  
暮らしているか、この地域の一つになっているというか。

岩名  
地域での社会実験という言い方は変ですが、何と云うのでしょうか。コミュニティなのか場所なのか。

小林  
僕、学生時代に「蜜の木」\*という名前の抽象画を大学の卒業制作展で作って、その時に、初めて「蜜の木」という名前ができた。絵が最初だった、絵の題名だったのです。

岩名  
\*作品名は「蜜の木」と表記  
小林  
なぜ、「蜜の木」だったのですか。

伊賀の美術史年表

岩名  
これが、さっき言った、伊賀の美術史と一緒に調査してくださった三重県立美術館の学芸員の原さんが作ってくださった年表です。これまで伊賀の美術史年表はなかったの、初めて「蜜ノ木」でリサーチしました。僕はこういうのを作れない。だから学芸員さんが。そういうことができる人が一緒に調べてくださって、初めて美術館がない場所での土地の画家、いろいろな活動をしてきた人たちの年表ができた。展示会が終わってからもアトリエにずっと貼ってある。普段、ここで僕は作品を作っている。

小林  
この辺が次の個展に向けて作っている新作です。リサーチに来てくださるってお聞きしたので、年代別に今日のリサーチに合った作品を何

小林  
全国的にもあったのですよね。

岩名  
東北は盛んだったと思います。

江里子  
サークル活動って言っていた。

岩名  
それは戦後。いくつか波があったみたいで、1920年代は大正デモクラシーの時代の影響を受けていた。終戦直後は、青年団の歌舞伎やくざ踊りというのが全国的に流行した。それが終わって文化活動に変わっていく。

佐藤  
「白樺」とか文学ですね。

小林  
こういう青年団の活動は会津だと消防団。青年団が消防団をやっているようなところもある。

もっと別のことで  
地域に貢献したいと

岩名  
うちの村も似ていますね。青年団が解散しちゃって消防団をやっている。地域にもよるけど、消防団とか村社会な感じ、先輩後輩みたいな。まあ、楽しい人は楽しいし村には必要ではあるけれど、子どもの時にバシリだった子はすつとバシリみたいな。移住してきた人も何かやらないと

点か配列しました。

「蜜の木」

岩名  
これが大学の4年生の卒業制作で作った「蜜の木」というタイトルの作品です。これは大学時代に、さっき回っていた観音山をテーマに作品を作り始めた時の観音山に行つて描いたスケッチです。畑を耕している人のスケッチ、山の中で浮かんだ言葉、そういうものをいろいろ描いたり消したり。

小林  
あの山を回っている時に、こういう木の穴、うろから樹液が流れているイメージを見つけて。それがどんどん抽象化されていって、この「蜜の木」になった。



いといけないとか。

小林  
そういう既存の村の若者たちの集まりで生きづらいと思っている人たち、もっと別のことで地域に貢献したいと思っている人たちが集まれる場所として「蜜ノ木」は作るうと。

岩名  
そういう消防団、地元付き合いに参加できない子は初期の頃のメンバーには多くて。消防団とかに入らないと、今度は、「おまえは村のために貢献していないじゃないか」とか言われるけど、「蜜ノ木」ができる、正月堂の行事、地域の記憶を守り、外から来た人たちもオープンに交流できる面もあると思うので、そういうものを作れたかった。

小林  
岩名さんが島ヶ原のことを作品で表現しているのと同じような視点、別の手段で、「蜜ノ木」のメンバーが島ヶ原をかたちにしたたり、視覚化できるようにしたり、外に何か伝わるようなことをしている人はいますか。



岩名  
これが最初の作品ですね。

岩名  
そうそう、そうそう。

江里子  
みんないろいろ「蜜ノ木」を持っている。  
岩名  
そうそう、そうそう。

岩名  
これが最初の作品ですね。

江里子

「蜜ノ木」の活動は、岩名が言ったように、この村をベースにというのは違うと思う。みんなそれぞれ。「蜜ノ木」の松岡さんは「蜜ノ木」を立ち上げた頃、震災のボランティアをしていた。

岩名

岩手に災害ボランティアに行っていた子が「蜜ノ木」結成メンバーにいた。その子は、「蜜ノ木」ができた直後、村の災害と3・11の災害を繋げる展示みたいなのを公民館でした。彼女は今、伊賀市の社会福祉協議会で引きこもり支援をやっている。

江里子

彼女は「蜜ノ木」で、村で何かしたいという思いが最初はすごくあった。今は社協。社会福祉協議会でもそういうことができると気持ち、そこに力を入れているようです。

小林

なるほど。スタートが「蜜ノ木」で今は違う方法、手段を見つけている。

### 心の中では今もずっとメンバー

岩名

全然来ていなくて、メンバーじゃないと思っていた人と数年ぶりに会って話したら、心の中では今もずっとメンバーですって。アートグループというガチツとしたものから、もっと流動的な感じに変わってきている。

江里子

このあいだやった「歩く日」という散歩は彼らにとってもとても居心地が良かったと思う。まあ、散歩するだけだから。で、やっぱり「くずれる家」みたいな展覧会になると、自分たちも作品を作らなきゃいけないので、もう嫌になっちゃう。

小林

そうですね。それが楽しい人ばかりではないからね。

### みなさんバックグラウンドが全然違う

江里子

アーティスト・コレクティブとは違う。みなさんバックグラウンドが全然違うので。彼らの価値観も大切にしながら、どうやっていくか泰岳さんはいろいろ悩んでいて。それで新陳代謝がよくなってる感じ。

岩名

時代によって、村の子たちの雰囲気全然違う。初期には、もうちょっと文化的なものに触れたい、コミットしたいと村の子たちも望んでいる感じがした。だから、アトリ工、展覧会をみんなと一緒にやろうとか、ほかの地域から来て起業しようとしている人と会って話を聞くと、そういう回数はすごく多かった。

この数年、今中心にいる子たちは雰囲気違う。そういう文化的なもの、知的なものにアクセスするのがしんどいみたい。

小林

緩やかな感じですね。

岩名

そういう傾向は近年強くなってきていると思う。今の僕も組織化されて計画に沿ってやっていくのではなく、基本的に正月堂の修正会は、年に1回みんな集まってくる時期なので、それを軸にした緩い感じの人たちがいいのかなと思います。

小林

そういう意味では、修正会に参加することになったことは「蜜ノ木」にとって大きいですが、毎年必ずあるものが一つある。それが地域に密接に関わる。

岩名

フォーラムでお話ししようと思っていました。震災以降は、急に田舎にいろいろな人たちが移住してきた。それはかなりインディペンデントな時代だった。

### どんどん環境は変わってきている

今日は、隣村まで回れなかったけど、ギャラリィをやったり、廃校でコンサートをしたり、それってかなりインディペンデントで運動的。いろいろなジャンルの人が移住してきて、村で何かをやりたい人たちが好きに集まる時代が数年続いた。

「蜜ノ木」もその頃にできていたので、その一つです。だけど、数年経つてくると都会に帰っ

江里子

彼らは消防団にも所属して、「蜜ノ木」にも所属して、仕事もしている。僕たち忙しいですみたいな感じですよ。

小林

岩名さんとしては、最初の思惑と違ってきていますか。

### それが村にも広がっているのをひしひしと感じて

岩名

どうですかね。初めからこういう目標でというの決めていなかった。ただ、2015年くらいは世界でもランプが当選し、アンチリベラリズム的なパワーがすごく強くなっていったと思う。それが村にも広がっているのをひしひしと感じている。地域の新しい暮らしを作ろうと言っていた「蜜ノ木」の子たちと隣村の人たちのプロジェクトも終了した。

そういう時代の変化も感じている。それが、一緒に活動している地域の人たちの感情的な面にももろに出てくるようになった。それとのせめぎ合いと調整。

だけど、今いる「蜜ノ木」の子たちが望んでいるものだけを全て僕が提供しちゃうと、他の人たちがアクセスできない村の中だけの交流になっちゃう。彼らの負担も起きないように、最初にある程度やってきた地域の記憶、外の人たちとの交流、そういうものもちゃんと繋ぎ続けていく。やっぱりそういう対応をしないといけない状況に来ていると思います。

ていく人もいれば、さっきの「蜜ノ木」メンバーの子のようにどこかに就職して自分がやりたいこともできてくる。どんどん環境は変わってきている。

いろいろなプロジェクトがなくなっていきましたが、「蜜ノ木」には地元で暮らしている人が多いので、家庭ができ、就職で離れていく人もいるけれど、お祭が残っていて、そこには集まってくる。

僕はまだここに拠点があるので、今日のようにいろいろな活動が記録されていく。2010年代からのこの10年間の地方、こういう山間部の文化的な変化を「蜜ノ木」のアーカイブを読み返していると感じます。

江里子

「PLAY」というイベントは地域密着型だった。隣村の南山城村の人と「蜜ノ木」の松岡さんがメインで、「蜜ノ木」の子たちも手伝ったプロジェクト。半年かけて、1カ月に1回、イベントをいろいろな場所で、伊賀市、隣の南山城、笠置町で開催した。その松岡さんは今、社協に行つて、南山城の人は東京の実家に戻つて、もう一人の人は九州に引越すことになった。

### 全体的に「蜜ノ木」という感じ

泰岳さんは仕事が絵画の制作なので、ずっと続けてやっていますが、みんなスポットでいろいろやっている。みんなで一緒にやったり、ばらばらにやったり、それが全体的に「蜜ノ木」という感じですね。「蜜ノ木」自体、かたちを変えて流動的にその場に合せながら、考えながら少しずつ変化し、続けている。

佐藤

定期的に集まっているのですか。

岩名

やっぱり時期によります。みんなが集まりたいと言っていた時期だと2週間に1回ペースで集まって何か勉強会をする。

小林

何の勉強会ですか。

岩名

その当時はいろいろな人がいました。地域おこしで来ているデザイナーの人とか。そういう人たちに、大学生、就活している子たちもいたので、いろいろな働き方、選択肢に今は田舎でもいろいろ会えるという話をした。

僕がやっていた頃は各地でやっている地域アートプロジェクト、こういう地域ではこういうアートがあるとかアートのことをいろいろ紹介する。そういうのを江里子さんが来る前、結構やっていた。

佐藤

所属するには、何かあるのですか。あなたはもう今日から「蜜ノ木」みたいなの。

### フワツと

江里子

フワツとさせています。

佐藤

自称でいい。

### 同級生たちの野良作業

岩名

森のアトリ工を掃除している写真があったけど、同級生たちの野良作業的な感じ。最初に集まったメンバーは、ほぼ村で育った同級生で、みんな村に思っていることがいろいろあって何かやりたかった。メンバーも江里子さんみたいに、大人になってからここに来る人が加わり多様化してきている。それによって、徐々に活動内容が変わってきています。

江里子

ある程度新陳代謝がいいというか、そうしていかないと続かない。やっぱり、反発もありませんね。

岩名

やっぱり、文化的なことに対する拒絶感が強い人たちが結構いて、むしろそっちが多い。我々はそういうアートとか芸術、地域の記憶を伝える行くことに価値を感じてやっている。そればかりやろうとするとすごい反発がある。もっと友達同士でバーベキューしたいのに、なんでリサーチとかアートばかりって。

小林

「蜜ノ木」の中ですか。

岩名

そうそう。

江里子

そんな感じ。フワツとだよな。

岩名

プロジェクト、展覧会をする時に声をかける、一緒に調査する人たちも「蜜ノ木」に関わってくれている人たちだと思つ。

江里子

メンバーというとガチツとしているけど「蜜ノ木」です」という感じ。

小林

不思議な存在ですね。

# ミュージアムする！ ミュージアムする！

佐藤李青

(公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京プログラムオフィサー／  
ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)

ライフミュージアムネットワークでは

「ミュージアムに何ができるのか？」という問いを常に考えてきたように思います。ミュージアム「で」何ができるか？本事業を主導する福島県立博物館が「施設」をもつ以上は、これもまた切実な問いです。けれども、震災後の福島の経験をひとつの媒介として、各地のミュージアム実践にふれてきたライフミュージアムネットワークは、常にミュージアムの「機能」を議論してきたのだと思います。ミュージアム実践——この言葉は、歴史学者の保刈実さんの歴史実践（歴史する＝Doing History）と、言葉に倣っています（※1）。歴史家が語るものだけが、歴史ではない。複数の歴史実践が「共奏」することが可能なのではないか。そう指摘した保刈さんの言葉を、今回の伊賀リサーチの後に思い起こしていました。それは三重県伊賀市鳥ヶ原で「蜜ノ木」というグループを立ち上げ、独自に土地の歴史を紡ぐ（受け継ぐ）活動をされている画家の岩名泰岳さんのお話を伺い、まさに「ミュージアムする」ものだと感じたからでした。

「蜜ノ木」は、事前に読んだ資料では以下のように紹介されていました。

三重県伊賀市鳥ヶ原地区（旧鳥ヶ原村）に暮らす20代の若者たち十数名が、2013年に結成した鳥ヶ原村民芸術「蜜の木」を前身とする「蜜ノ木」の活動は、展覧会やイベントの企画のみならず、空き家の再生から地域の寄合や祭礼への参加まで多岐にわたり、いわゆるアート・コレクティブというよりは、旧来の青年団のそれに近い（※2）

近年の芸術祭やアートプロジェクトの議論

を思い浮かべながら、ある土地（地域）を舞台とした芸術活動を行うものと期待しつつ、実際に現地を訪れ、話を伺うなかで「旧来の青年団のそれに近い」という言葉が的確であることを知りました。「蜜ノ木」にとって、鳥ヶ原という土地は決して芸術活動の「舞台」ではなく、日々の生活を営む場そのものであり、そこから芸術が立ち上がっていくようなものである、と。

なぜ、鳥ヶ原で「蜜ノ木」を結成したのか？その問いかけに岩名さんは自らが絵を描いてきた経緯を話してくれました。2004年に岩名さんが暮らす鳥ヶ原は伊賀市に合併されました。自らが住む土地（の名前）がなくなってしまう。それを知った岩名さんは、どうすれば鳥ヶ原の記憶を残すことができるかを考えはじめ、そのなかでシャガールの絵に出会ったそうです。亡命の作家であるシャガールの絵に、ある土地の記憶を残す術としての絵画を見出す。そうして絵を描きはじめて岩名さんは、あるとき地元の電車で具体のメンバーでもあった画家の元永定正さんに出会います。話をするなかで元永さんが伊賀出身だと知り、それをきっかけに関西のアーティストたちのコミュニティに触れ、絵を描くことを、より深く学んでいったそうです。大学へ進学し、卒業後にはドイツのデュッセルドルフへ留学。「デュッセルドルフは、ヨーゼフ・ボイスがいた街で……」。岩名さんは街の説明のなかでボイスのことを語っていました。「すべての人間は芸術家である」という考えを提唱したボイスの話を聞きながら、岩名さんが2011年の震災後に帰国し、「蜜ノ木」を結成した理由

がつかっていくように感じました。そして、ある土地での暮らしの具体的な出会いによって立ち上がる表現のありようを改めて考えさせられました。例えば1920年代のバリ、戦後のアメリカなど美術の大きな「流れ」の多くは地名も一緒に語られます。わたしたちは（国や都市と比べれば、一見小さく見える）生活圏のなかで現れてくる表現とその土壌のありように目を凝らす必要があるのかもしれない（たとえば、震災から10年が経つ東北各地では、どんな表現が立ち上がってきているのだろうか？ ついそんなことを考えてしまいました）。

鳥ヶ原の記憶をどう残していくのか？ 岩名さんの問題意識に呼応するように「蜜ノ木」はメンバー自らの表現だけでなく、地域の美術家たちの作品や活動の掘り起こしも行なっていました。岩名さんのアトリエには伊賀の美術動向の年表が掲げられていましたが、「蜜ノ木」にかかわる美術館の学芸員の方が作成したものだとも聞きました。

異なる技術をもった人たちが集まり、土地の歴史をそれぞれの方法で、いろんな人にアクセス可能なかたちに変えていく。施設はないけれど、その活動の総体は、まさにミュージアムの機能を体現したものだともいえます。

「2004年以降の鳥ヶ原の年表は更新されていない……」。合併とともに閉鎖された鳥ヶ原の資料館を入口からのぞきながら、岩名さんはそう話をしてくださいました。そして、その年表を更新していくような活動が「蜜ノ木」なのだとも。「蜜ノ木」のミュージアム実践とは、鳥ヶ原に「ミュージアム」がなくなった

後に生まれた活動でもありました。ミュージアムがなくとも、ミュージアム実践は可能なのでしよう。しかし、どっちなかではなく、どちらも共に土地の記憶を奏であろうようなありかたを考えることが、今回のリサーチからの宿題なのだと思います。

※1 保刈実「ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践」岩波現代文庫、2018年。  
※2 「消滅した村落を照らす小さな光。副田一穂評蜜ノ木「くすねる家」展」ウェブ版美術手帖、2018年12月3日。

▶ <https://bijutsutecho.com/magazine/review/18918>





日時：2021年1月24日（日）13：30～15：30

会場：福島県立博物館講堂

講師：吉岡宏高さん（NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団理事長）

山下美晴さん（舞鶴引揚記念館長）

岩名泰岳さん（画家・〈蜜ノ木〉主宰）

モデレーター：川延安直（福島県立博物館副館長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

※講師3名はオンラインでの参加。参加者は来場による参加のほか、オンラインでもご参加いただきました。

#### 吉岡宏高

北海道三笠市出身。福島大学卒業後、製糖会社・シンクタンク勤務を経てまちづくりコーディネーターとして独立。

2004～2019年、札幌国際大学観光学部で教壇に立つ。

1999年から空知産炭地域で「負の遺産」と捉えられてきた炭鉱遺産をもとにした地域活動を実践し、

2007年にNPO法人炭鉱の記憶推進事業団設立。炭鉱遺産でのアートプロジェクトなどを展開してきた。

2018年、夕張市石炭博物館の指定管理を受託し館長に就任。日本遺産〈炭鉄港〉の仕掛人でもある。

#### 山下美晴

京都府舞鶴市出身。2012年、直営になった舞鶴引揚記念館の初代館長に就任し現在に至る。

同記念館の資料をユネスコの「世界記憶遺産」とする活動をけん引。2015年の認定に導いた。

開館30周年を迎えた2018年、展示や施設のリニューアルも実現。NPO法人「舞鶴・引揚語りの会」との協働により、

引き揚げの記憶を次世代に継承する場を生み出している。

#### 岩名泰岳

三重県伊賀市出身。成安造形大学卒業後、ドイツのデュッセルドルフ芸術アカデミーで絵画を学ぶ。

2011年の東日本大震災をきっかけに、故郷で地域に関わりながらの芸術活動を志す。

帰郷後、同世代の人々と〈蜜ノ木〉を立ち上げる。

地域の歴史を学び、その成果を紹介する展覧会を企画したり、

地域の伝統行事に参加するなど、ゆるやかな連帯の中で土地に息づく活動を続けている。

ミュージアムは土地の記憶に向き合う装置です。  
土地の記憶を調べ、伝えるモノを集め、収蔵し、  
土地の記憶を語り合い、学び合う場をつくります。  
しかし、そのような活動は  
ミュージアムに限ったことではありません。  
本フォーラムでは、NPO法人による土地の記憶の再生、  
記念館における土地の記憶の次世代への継承、  
土地の記憶を探りながら地域の文化を創っている芸術活動という  
三つの事例を講師からお聞きし、  
ミュージアム的な機能の多様な展開に学びながら、  
土地の記憶に向き合うことが何を生み出すのかを考えました。

# 地の記憶を苗床に

空知・島ヶ原・舞鶴に学ぶ「ミュージアム的」なこと

事務局・小林めぐみ

今日は博物館に来ていただきましてありがとうございます。今日司会をさせていただきます。ライフミュージアムネットワーク事務局で、県立博物館学芸員の小林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日開催いたしますライフミュージアムネットワークのフォーラム「地の記憶を苗床に」は、ライフミュージアムネットワークの今年度の最後の事業になります。少しだけライフミュージアムネットワークの説明をさせていただきます。この事業は2011年、東日本大震災のあとに、私たちが学んだ「いのち」の大切さや、「くらし」の大切さについて、あらためて福島の歴史や今に学びながら、みなさんと考えていく場をつくっていききたい。博物館としてできる役割を、ミュージアムや他の方々とのネットワークのなかで実現していきたいと思っております。今年度3年目になっていきます。

本日は、その集大成のフォーラムとして企画しました。3人の講師の方をお招きし、本来でしたらここに3人の方に来ていただいております。ただ、コロナウイルスの感染状況の悪化に伴いまして、今日は残念ですがオンラインでご出演いただきとうかたちになりました。併せて、参加者のみなさまも、それぞれの状況により、オンラインと来場といずれかを選んでいただいております。

では、あらためまして講師の3人を「紹介したい」と思います。今日のこの「地の記憶を苗床に」空知・島ヶ原・舞鶴に学ぶ「ミュージアムの」なこと「は、今年度「いのち」と「くらし」をミュー

ジウムとして考え、みなさんと場をつくっていくための先進事例としてライフミュージアムネットワークが学びに行った地域、それから、これまで勉強させていただいた地域から講師として来ていただいて、参加者のみなさんと、三つのエリアでなされていることを勉強して、では福島はどうしようかということもディスカッションしていければと思っております。

では、講師の一人目、北海道の空知地方から、NPO法人炭鉱（ヤマ）の記憶推進事業団理事長で、夕張の石炭博物館の館長でもいらっしゃいます吉岡宏高さん。吉岡さん、どうぞよろしくお願いたします。

吉岡宏高

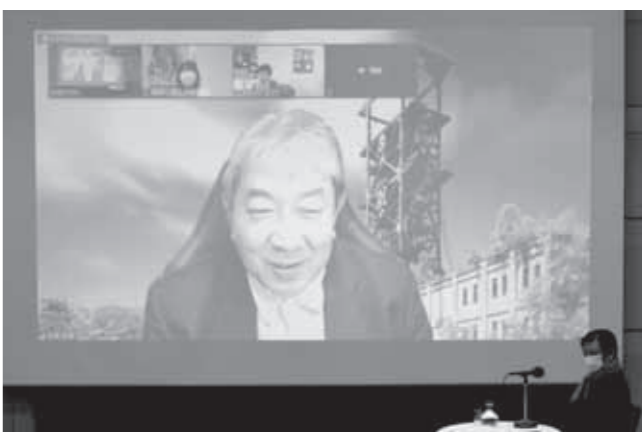
引き続き、京都からご参加いただいております。京都の日本海側に位置します舞鶴の引揚記念館の館長をしていらっしゃいます山下さん。山下さん、どうぞよろしくお願いたします。

山下美晴

どうぞよろしくお願いたします。

小林

そして、3人目。三重県の島ヶ原という地区で、「蜜ノ木」というグループを作り、地域のことを学んだり表現したりという活動をしていらっしゃいます、「蜜ノ木」主宰で画家の岩名泰岳さん。岩名さん、どうぞよろしくお願いたします。



吉岡宏高さん

す。

岩名泰岳  
こんにちは、岩名です。

小林

それでは、早速、みなさんのお話を順にお聞きしてまいります。最初は、北海道から吉岡宏高さんにお聞きいたします。吉岡さん、どうぞよろしくお願いたします。

空知産炭地域

北海道空知産炭地域で、炭鉱遺産をもとにした地域の活性化を行っている吉岡といます。

したが、お金をかけて寂しくしているような状況でした。

翻って、日本の人口推移を見てみると、江戸時代は約3千万人くらいで準準的に推移していましたが、明治時代に入ると産業革命が契機となり一気人口が増加します。1900、2000年の100年間で、約1億人増えているのです。しかし、今後は2000、2100年の100年間のうちに、明治維新の頃の人口に戻ってしまうと推計されています。

空知では、もうすでに明治期の人口に戻ってしまった。だから、街中で高校のグラウンドにヒグマの通った足跡があったり大騒ぎになっているのですが、明治に戻ってしまったのですから何も不思議はないのです。

私たちの活動を通じて、「すでに起きた未来

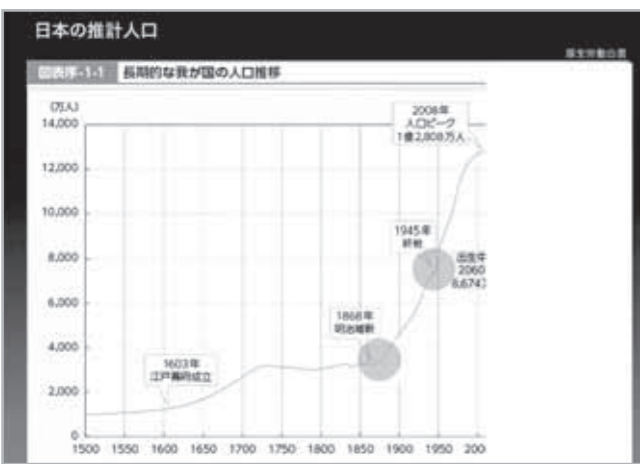


今、この空知を中心にして、小樽・室蘭と一緒に取り組みを進めています。小樽という全国的に有名な観光地ですが、かつての勢いはなくて、人口は昭和の初めぐらいに戻ってしまいました。室蘭は、重厚長大産業の典型である鉄鋼業がどんどん下り坂になっていて、最盛期18万人の人口が、今は9万人と半分になってしまいました。それでも、まだ第二次大戦中ぐらいに戻っただけです。わが空知の炭鉱エリアはどうなのかという、小樽・室蘭を表すグラフの軸線からはみ出してしまいます。

すでに起きた未来がここにある

夕張というのは、空知最大の炭鉱都市で、最盛期1960年の人口は12万人。その時の札幌は約60万人ですから、札幌対夕張の比率は4対1くらいでした。現在は札幌190万人、夕張は8000人を切っており、もう比率は無制限のようなものです。

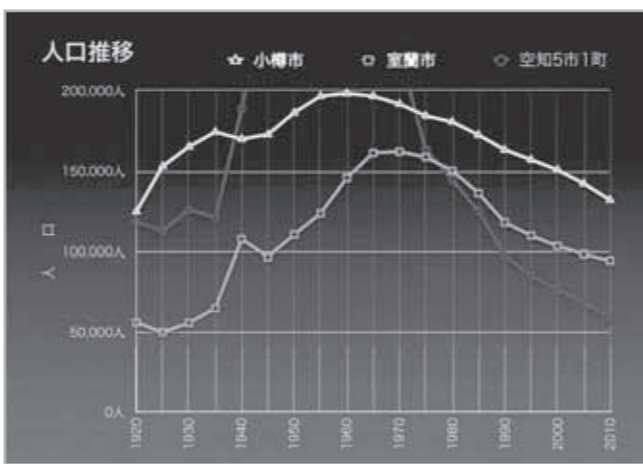
夕張の中心商店街である本町も、1980年代は人口5万人で炭鉱も操業しており、斜陽と言われながらもまだ賑わいが感じられました。それが1990年代に入り炭鉱がなくなると一気に淋しくなり、2000年代には観光政策の一環で拡幅事業が行われ家並みは新しくなりま



どうぞよろしくお願いたします。私は、福島大学経済学部を1986年に卒業しました。学生時代は、地理学研究会に所属していたので、会津を含めて福島県内を歩き回っていました。今回、久々に会津に行けるかと思ってお楽しみでした。残念ながらWebでの参加となりました。

それでは、空知の取り組みを「紹介」します。位置は札幌の東側約50kmにある一帯で、南北80km、夕張が代表的な炭鉱都市です。

私は1963年に生まれ、福島大学に入るまで三笠市の炭鉱で暮らしていました。私の父は、最初は「鉱員」いわゆるブルーワーカーだったのですが、1965年の社内試験でホワイトカラーである「職員」に登用されたという経歴を持っています。



「炭鉱ができたために街が成立したのに」

毎年10mも雪が降って、本来ど人が住みやすいような場所に人が集まって、あれだけ大きな都市ができた。それが、石炭産業がなくなった後に、どのような地域スローガンが掲げられたかという、炭鉱の暗い過去を払拭する「でした。炭鉱は暗いから、その痕跡を消し去らなければならないのです。

これに対して私は、まず第一に「ただ暗いだけなのか？」ということを感じました。第二に、「炭鉱ができたために街が成立したのに、それをなかったことにすると、もう全く履歴の詐称ではないか？」ということ。北海道は、そもそも街があった所に炭鉱ができた常磐炭田とは違うのです。

そして第三に、「一体全体、何を实际にしましたのか？」ということ。私は、夕張市石炭博物館の館長でもありますが、そもそもこのミュージアムは「石炭の歴史村」という遊園地とセットで運営されていました。博物館の300mほど上流にあった遊園地は、今や遊具は撤去され、また朽ち果て、残骸だけが残っています。

空知全体には、1970、1990年の短期間に、国からの補助金が1500億円ぐらい投入されてきたましたが、もう一つとして残っていない。このうち0.01%でも残っているれば、我々の活動を1000年は続けていけるのですが、何も残っていません。



どうしてこのような事態が起こってしまったのか。一つは、自分たちの街の価値とか歴史を知らない、主体性がないことが、こういう悲劇をもたらす。

二つめは、自分たちの未来を主体的に考えられない。どこか外のコンサルが言ったり、国が言ったりした通りのことをやってきた。そして三つめとして、地域を変えてみようという動きがない。黙っていても国からお金が降りて来た訳ですから、そのうちに麻薬中毒になってしまった。私は、空知の炭鉱出身者として、この地域が日本を支えてきて北海道を築いてきたという思いがありました。それはどうして形成されたのかというと、小さいころから職住一体という炭鉱街に住む中で、父や周りの人から炭鉱の歴史や巨大なシステムについての知識を得ることができたからだと思います。

### 歩くことからスタートしました

今から22年前に、まだ多少は残ってるんだから、みんなを誘って探してみようよということ、歩くことからスタートしました。例えば、先ほどの選炭機の奥には、炭鉱が閉山するときには産業廃棄物が不法投棄された、人の背丈まで草が生い茂った場所がありました。ここがまさに1879年（明治12年）に北海道初の近代炭鉱ができた場所でした。歩いてみようよということからスタートするうちに、元炭鉱マンだとかいろいろの人が手弁当で片付けや草刈りなど整備し始めて、今は行政によるジオパークの施設として快適に歩けるようになっていきます。だいたいの屋外の散策型施設というのは、せっかく公共で整備しても誰も来ないうちにどんどん朽ちていくというパターンが多いのですが、この場合は我々が総工費3万円ぐらいで最初から公園というコンセプトを持ちながら作っており、後追いで行政が公共工事として場所を整備した時には、すでに人が来るような場所になっているんです。

### アートの力

実際には、炭鉱遺産は広く知られていませんし、やはり裾野を広げないと、こういう運動というのは力を得ることはできません。とにかく炭鉱遺産の現場に来てさえくれば、これだけの圧倒的な迫力と、そして100年の間に絶頂と没落を経験したダイナミックさは、必ず人々の心を打つという自信はありました。しかし、その現場へ来てもらうのに、どういうきっかけを作ったらいいんだろうかと考えあぐねていた時に、着目したのがアートの力です。そこで、札幌市立大学デザイン学部の上遠野さんと、これまで二人三脚で、炭鉱遺産の現場でアートをやってきました。例えば2014年



には、札幌国際芸術祭にタイミングを合わせて、空知でも夕張と三笠を結ぶインスタレーションを展開しています。三笠の旧住友別荘ホールでは、岡部昌生さんの長大なフロタージュを展示しました。長さ100mにも及ぶコンクリートの神殿みたいな空間は、30t積みの石炭貨車がスッポリと10両入って、上から石炭がドボドボ落ちてくる場所でした。岡部さんの作品は、ものすごいダイナミックな作品ですから、そこら辺の会館ごときじゃ展示出来ない、こういう長さ100mの空間があるところで初めて生きてくる。

力を、上遠野さんと一緒にやる中で実感することができました。

そして、アート好きの裾野は広いですから、ちょっと関心を持ってもらうとそれなりの人数になる。そしてとにかく現場に来てもらう。最初はみなさんアートを来てるのですが、アートはどうでもよくなって、「いやあ、炭鉱ってすごいね」と言っていて帰ってゆく。展示してある作品自体が、現場に即し現場で考えてもらうようなものばかりですから、見に来てくれた人も、それぞれに触発されるものがあるようです。アート以外にも、鉄道であったり環境教育であったり関心の入り口は他にもいろいろあります。

### 対話の場

もう一つ、今取り組んでいるのは、ミュージアムです。先日、地元の小学生がやって来て、元炭鉱マンの西田という博物館スタッフが探炭機械の実演運転と解説を行いました。坑内で巨大な探炭機械を実際に使って石炭を掘っていた人が、子どもたちに現物の機械を使ってこういうふう掘っていたといった話を伝えていきます。ただ単に見せるだけのミュージアムじゃなくて、対話の場になっているのです。私も結構な頻度で、この探炭機械の実演運転の現場に立って話をします。私は坑内で働いたことはありませんが、炭鉱で育った人間として話をしています。そういったさまざまなことを、目の前にいる方の表情を見ながらお話ししていくと、我々もいろんなヒントが得られるのです。

あともう一つ、石炭博物館の大きな特徴だと思いが、実際に元炭鉱の坑道を展示の一部として見せていました。しかし残念ながら、2019年の4月に坑内火災が起きて、公開できない状況にあります。火はもう消え、消火のために入れた水も揚水されています。

私が小学校6年生の1975年にも、自分のいた幌内炭鉱で同じような経験をしました。地下750mでガス爆発が起き、坑内火災を消すために400万tの水を注水し、2年間かけて坑内に残っていた全遺体を収容して生産再開までたどり着いた。まさか親子2代で、坑道注水に関わるとは思ってもみませんでした。ですが、私がかつて自分のいた炭鉱で得た経験というの

ん朽ちていくというパターンが多いのですが、この場合は我々が総工費3万円ぐらいで最初から公園というコンセプトを持ちながら作っており、後追いで行政が公共工事として場所を整備した時には、すでに人が来るような場所になっているんです。しかし、いくら我々市民が一生懸命活動しても、地域のトップにある市長・町長が、相変わらず炭鉱は暗いという考え方だと、活動は疲弊してしまいます。やっぱりここは頂上攻略でもしなきゃ駄目だろうと、2005年に我々民間団体が管内の市長を全員呼んでフォーラムをやりました。この地域は、炭鉱遺産というものが残っているんだから、それに活路を見い出していこうじゃないかっていうもので、次に北海道庁の力を借りて地域のマスタープランみたいな計画を作り・・・と、次から次へと策を練り出していきました。

### 形の見えないものをどうやって伝えていくのか

炭鉱遺産の表面的な格好良さとか、歴史のごさとかから、炭鉱に関心を持っていただけで結構なのです。しかし、やはりお伝えしたいのは、どういう時代になっても、先に向かっているような困難を乗り越えていくという、そういう力強さです。これが、まさに炭鉱の特質なんだと。そういうことを、どのようなかたちで知っていただくのか。形の見えないものをどうやって伝えていくのかといったときに、ある程度かたちの見えるものを入り口や頼りにしながら、見えざるものにとり着いてもらわなければならぬ。そこに、ミュージアムが一つ大きな役割を果たしていくのかなと思っております。

### 産業というのは、まさにネットワーク

北海道は、人口が100年で100倍になったという地域です。新千歳空港のある場所は、もともと坑内で使う坑木のための森林だったの、地権者は炭鉱会社だけでした。そのため、新空港の建設の時には、えらい早いスピードで完成させることができました。そういった、今に直結する歴史性があります。

現在は、そういった歴史性を踏まえて「炭鉄港」というテーマで、広域的な取り組みも進めています。空知の石炭・鉄鋼・鉄道・港湾。こ

れは空知の石炭を軸に、小樽・室蘭を結び取り組みで、少しまた地域の広がりが出てきたかなと思っております。さらに、小樽は北前船と大きな関わりがあるし、室蘭は舞鶴・呉といった海軍港との深い関係がある。同じ鉱山仲間見れば、世界遺産である石見銀山であったり、播磨の生野銀山であったり、鹿児島島の薩摩藩とも非常に強いつながりを持っています。福島というと、安積疎水なんかもそういう流れの中にある。産業というのは、まさにネットワークですから、そのなかで我々の場所の意味をいかに訴えかけていくのかということを考えています。

最後になりますが、一つ頼りにしているのが、パラダイムの転換です。かつて二宮金次郎の銅像が全国各地の小学校にあって、これは勤勉の象徴で目指すべき存在だったわけです。しかし、今やなんて言われるかというところ、二元祖歩きスマホですから。こんなのまねしちゃいけないという存在になっている訳です。

だから、同じものであっても、時代の流れによって見方とか捉え方というのは変わってくる。今、この時代の大きな変化というのは、まさに我々にとってチャンスだというふうにいるから、それを頼りにして活動を続けていくところなんです。

### 小林

ありがとうございます。吉岡さんから「講演いただきました。北海道空知の産炭地の歴史を知ることの大切さ、その土地の歴史を知って、そこから、では今、どうしていったらいいのか。価値観の変換も含めてなんです。かつての人々が困難を乗り越えてきた、目に見えないものをどう共有していったらいいのか。その一つ





の模索としてミュージアムはあるんじゃないかというお話もいただきました。吉岡さん、ありがとうございました。

続きまして、京都府の舞鶴市にあります引揚記念館の山下館長からお話しいただきます。こちらは空知の炭鉱に対して、引揚という土地の歴史を、ミュージアムとして地域の方とのように位置付けて活動しているの、か、そのお話をお聞きしていきます。山下館長、どうぞよろしくお願いいたします。

### 舞鶴のまちの歴史

#### 山下

山下です。どうぞ、よろしくお願いいたします。



山下美晴さん

それでは、本日のフォーラムのテーマに沿って、舞鶴からは「紡ぐまちの記憶、次世代への継承から次世代による継承へ」ということで、取り組みの一部をご紹介できればと思います。

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。と思いますが、舞鶴市生まれ舞鶴市育ちでございます。引揚記念館の館長になってからは9年目を迎えております。

京都はみなさんよくご存じだと思います。京都府内から1時間半ぐらいのところにあります。福島からは約7時間かかるとお聞きしております。今回その7時間を体感しようと思つてなんですけど、直接伺いできなくて大変残念に思っております。

舞鶴のまちの歴史なんですけれども、明治34年、1901年に海軍の鎮守府が置かれております。先ほども、吉岡館長のお話にもありますが、横須賀・呉・佐世保、そして最後に舞鶴に海軍が置かれました。明治・大正・昭和と海軍のまちになりました。その明治の時代に武器庫として使われた赤れんが倉庫をはじめ、いくつかそういう資産がございます。4市で平成28年に日本遺産の認定も頂戴しております。

その後、昭和20年以降は引揚港としての役割を担ったというまちの歴史を有しております。引き揚げの港ということですが、昭和20年、第二次世界大戦終結のとき、日本を離れ海外にいらした日本人の方は約660万人と言われております。そういう方々の帰国を受け入れる港は増えたり、減ったりですけども、だいたい、延べ18港ぐらいあったと言われております。舞鶴はそのうちの一つなんですけれども、二

間、舞鶴に滞在されるのが普通でしたけれど、その人に、舞鶴は忘れることのできない第二のふるさとというふうなお気持ちになつていただくと、そういった交流ですとか出来事があったんだということが、こういったことからわかると思えます。

### この地で残していきたい

そして、戦後40年に、舞鶴にお帰りになつた方々が引き揚げを振り返る記念式典のためにも一度舞鶴にお越しになつたときに、第二の出発の地、第一歩を記したこの舞鶴で、戦後40年の移りゆく記憶を、ぜひこの地で残していきたいんだという熱い思いをまちに届けていただきました。そして子どもたちに平和って、命って、どうして大切かということ伝えていってほしいんだというお気持ちの中から、昭和63(1988)年に引揚記念館が開館いたしました。

全国からたくさんのお客様をいただいております。今年33年目ですけども、当初は2400点、いまは1万6000点が増えております。極寒の中を耐え忍んだ防寒着、衣類ですとか、あちらで書かれた数少ない記録資料ですとか。そして、このジオラマのなかで当時の引揚の様子を再現したり、シベリア抑留の生活を体験、体感していただく、そういった空間もつくっております。

### 活躍の歴史

舞鶴市民の当時のお迎えの取り組みについては、実は以前の引揚記念館ではほとんど展示は



抑留生活の体感空間

引揚港をジオラマで再現

つ特徴がありました。一つは昭和20年から33年までの13年間が引揚事業の期間なんですけど、舞鶴だけがその13年間、全期間を引揚港として担ったということ。ちなみに昭和33年と言ったら東京タワーが建つた年なんですけれども、そのときまで自分の意志で祖国に帰れなかった方々がいらしたんです。二つ目は、舞鶴には各方面からお帰りになつたんですけれども、シベリア抑留、戦後強制的に連行されて、労働等をさせられた、そういう体験をした方々が、ほとんど帰って来られた港だという特徴がございます。

### 「お帰りのさい、ご苦労さまでした」

もちろん引き揚げは国の事業として行われましてけれども、13年間、舞鶴のまちや市民も深くその事業に関わらせていただいております。



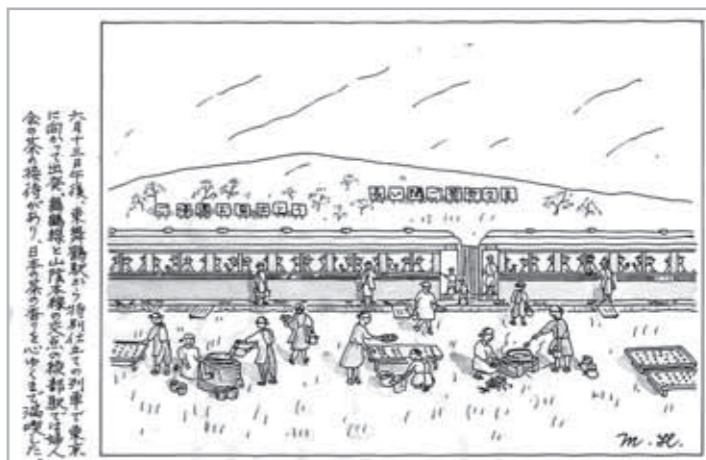
しておりませんでした。帰ってこられた方々に温かくするのは人として当然なところもありまして、まちとしては、「私たちは本当にすごい活動をした」みたいな、そういった展示はなかなかしにくいところもありました。9年前に沖縄出身の学芸員が縁があつて引揚記念館の学芸員となつたんですが、その学芸員が、これはすごいことなんだと、当時あの状況の中で、引揚港としてこういった行動をしたということ自体、歴史であつて、伝えなければいけないことだし、子どもたちにもまちの歴史として伝えるべきではないかということ、5年前のリニューアルのときにこうした、活躍の歴史を伝えるコーナーを設置しました。

### 世界記憶遺産

開館当時、シベリア抑留体験者の方の平均年齢60歳ぐらいで、10万人足らずのこの町に、20万人を超える方が来ていただきました。けれども、平成も20年ころになると来館者も右肩下がりになつてきました。それは体験者の高齢化という現象も大きいと思うんですけども、舞鶴の人たちの中で、戦争とか暗いイメージはもういいという、そういうふうな関心の薄れというの、来館者減少に現れた一つではないかと思っております。

9年前に館長に就任した時、過去最低の入館者数から再生をするというのでスタートをしたんですけども、その中で取り組んだ一つとして、ユネスコの世界記憶遺産というのがあります。富士山とか、富岡の製糸場、あいう自然とか建物の世界遺産は有名ですが、この世界記憶遺産というのは、記録資料、文字ですとか絵

引揚者をお迎えする中で、大きな引揚船で帰って来られたときに、各漁村から船を出したり婦人会が足を運んで「お帰りのさい、ご苦労さまでした」という声をかけたことが引揚者にとって本当にどんなにうれしかったかということをお聞きしたいです。あちらで亡くなった方のお骨が一番最初に日本に下り立つのが舞鶴なんですけれども、船にお迎えに行つて先頭を歩いたのは、当時の舞鶴の女子中学生。いまでは考えられませんが、当時はそういったことも舞鶴の子どもたちが担っていました。これは、すごくかわいい絵のようにも見えますけど、シベリア抑留を経験された方の抑留体験のなかの



画ですとか、記録された資料を登録するユネスコの遺産事業の一つです。日本ではまだあまりなじみがないんですけども、世界では400件を超えて登録をされておまして、代表的なものとして、アンネ・フランクの日記の原本ですとか、フランスの人権宣言書の原本ですとか、最古のコーランですとか、ベートーベンの楽譜ですとか、そういったものがあります。

日本で私どもがやってみようと思つたときは、まだ福岡県田川市の炭鉱記録画1件しか登録がありませんでした。私もユネスコに登録できるとは全然思っていなくて、でもそういったことを通じて、登録を目指せるすゝいものがこの舞鶴にはあるんですよということ、市民のみなさんにもう一度、引揚の歴史や引揚記念館に目を向けていただけたらという想いで始めました。

### 応援する会

取り組みを始めますと、報道など、いろいろな機会に触れていただくことができるようになります。これは何か、自分たちも一緒に、目標を持ってやれることだということ、市内の40団体の方が応援する会を結成していただきました。

私どもからお願いをして結成するのでは今までも同じだと思つて、言わずに我慢していただいております。そういったらある日、言ってきたんですけど、本当に涙が出るくらいうれしかったんです。一緒にやろうよとおっしゃってくださいました。市民活動としては、自分たちで用紙を作ってください、お知り合いに配ってください、街頭で一緒に汗をかきながら署名活動をしてくだ

さったり。  
そうしますと、はじめは大人の方だけだったんですけども、学校のみなさんも、自分たちも何かできるかなと、国際コースを持っている高校などは、アメリカやカナダへ行くのに、自分たちで企画をして署名活動をしてくれました。それを私もあとで聞いて大変感激しました。そういうことがございました。

ありがたいことに5年前に世界記憶遺産に登録になりました。入館者数の増加や、PRですとか、いろいろなことが進んだんですけども、一番の財産は、まちの中に、引揚の歴史を残そうとか、これを伝えようとか、引揚記念館と一緒に応援しようとか、そういった心が残ったということが、本当にありがたいことだったなと思っております。

記憶遺産登録を一過性とせずに、ゴールじゃないんだ、継続して取り組み進めることで、この歴史が未来につながるよねということで、みなさんからの声で、引揚の第一船の入港日10月7日をまず「引揚の日」としようということになって、今3年目ですかね。いろいろと取り組みを進めております。

### 博物館とつづけること

もう一つ、博物館の役目として、やっぱり教育普及というのがあっておられます。ここ数年でようやく、市内18の小学校に学芸員が行かせていただいて、そのあと館に来ていただいておられます。体験者の方が舞鶴にも何人かいてくださるので、そのお話ですとか、当時のものに触れるということもさせていただいております。

願っております。ありがとうございました。

小林

ありがとうございます。山下館長からお話しいただきました。引揚の方、それから戦争経験の方たちの想いで、起きたことを伝える場所として建ったミュージアムですけども、この数年間の活動の中では、市民のみなさん、そしていろんな世代のみなさんにとっての自分ごとになって、館を運営していらつしやるといことが、すごくよくわかりました。そうありがたいと思いつつ、なかなかできることでもないと思うんです。本当にすごいことを実現されている引揚記念館だと思っています。3世代で担っているミュージアムのお話をお聞かせいただきました。山下さん、ありがとうございます。

それでは3番手の岩名さんから話をうかがいます。岩名さんは、今、三重県の鳥ヶ原という地区で、同世代のみなさんと一緒に「蜜ノ木」という活動をされています。岩名さんもまた、「自分たちのふるさとの歴史を足場に、そこから文化的な、そして緩やかなつながりの中での活動をしていってほしい」と思っています。

これまでNPOや公立のミュージアムといったお立場からお話を聞きましたが、今度は民間のみなさんのつながりの中での活動についてお聞きしてみたいです。

岩名

岩名です。どうぞよろしくお願います。僕は今日の講師の方の中では、一人だけアーティストという立場なので、アーティストの視点か



そうした中で、ありがたいと思うのは、子どもたちが自主的な活動をしてくれるようになったことです。子どもたちが引揚を知って受け取ってくれるというところから進んで、自分たちで劇をしたり、学校の中に引揚記念館を自分たちで作ろうとか、そういった行動へ移していただいています。学校としては、それを学校の中だけの行事にするのではなく、地域の方を呼んでくださったりと、地域に発信していただくということが、少しずつ、各年代で増えてきました。大変うれしいことだと思います。

博物館としてできることについて、まだまだ私たちは探している途中ではあるんですけども、歴史を伝えるために一緒に何かやってみようということ、その拠点となる、核となる、そ



岩名泰岳さん

ら、僕の活動拠点である三重県の鳥ヶ原という場所と、地元の人たちと一緒に活動をしている「蜜ノ木」について、お話しさせていただきますと思います。

### 旧鳥ヶ原村

まず、僕の今暮らしている鳥ヶ原という場所について、簡単に紹介します。鳥ヶ原は旧鳥ヶ原村と呼ばれていて、京都府、滋賀県、奈良県に接する、三重県の山間集落です。2004年に過疎化の影響で市町村合併があって、それによって消滅して、現在は三重県伊賀市鳥ヶ原という場所になっています。人口は約2000人で、高齢化率は48%になります。

鳥ヶ原の風景をいくつか紹介します。鳥ヶ原



ういった役割なのかなというふうにも思っています。

その中で平成28年から語り部の養成講座に中学生が3名来てくれました。学校でいろいろと繰り返し聞いたのが理由だというふうにも言っていました。大人の語り部さんと一緒に講座を受けて、活動をしてもらっています。初めは3名だったんですけど、語ったり、イベントで活動をしている姿を後輩たちが見て、そういうのがかっこいいなと、ああいうふうにならなりたいなと、中学生と高校生が活動してくれるようになりました。そしてその子たちが、全国から来られる人たちとの記念館で交流したり、リモートで交流したりが、少しずつですが、芽生えております。

には、JR関西本線という鉄道が通っていて、この鳥ヶ原から名古屋方面であるとか、大阪方面、関西方面に、だいたい1時間に1本くらいの電車が出掛けていくことができます。村にはいろんなところに、こういう田園風景が広がっていて、川の上流のほうではサワガニとかの生きものも採れます。今、うちのアトリエでも、このサワガニを飼っています。人口減少が進んでいるんですけど、毎年夏には各地区で盆踊りが行われたり、地域のコミュニティというのは今も残っているわけです。

次に僕の生い立ちと、なぜアートの世界に進むようになったのかについて、お話しさせていただきます。僕は1987年に鳥ヶ原の隣の上野市という場所で生まれたんですけど、小学3年生ぐらいのときに家族で、当時の鳥ヶ原



### 平和でより良い未来を目指していきたい

今、記念館では、シベリア抑留とか引揚体験者の語り部さん、そしてそういう人たちから講座を受けた大人の語り部、そして中高校生の語り部と、3世代で活動しております。小さな地方のミュージアムですけども、まちと一緒に、まちの人たちと一緒に、そしていろんな方の、市外からの応援もいただきながら、平和でより良い未来を目指していきたいなというふうな、夢を少しずつ進めていこうというふうにも思っております。

またどうぞ、引き続き縁が繋がりますよう

村に移住しました。鳥ヶ原の中学校を卒業した翌年に、先ほどお話しした市町村合併による鳥ヶ原村の消滅を経験しました。

今日のフォーラムでは、「ミュージアムの」なところというテーマが一つありますので、鳥ヶ原の市町村合併による影響の一つで、象徴的なことを一つ取り上げたいと思います。それは村の資料館の閉鎖ということ。旧鳥ヶ原村資料館は、かつて村役場の一室に、鳥ヶ原の歴史資料であるとか農具などが展示されていたんですけど、市町村合併直後の2004年に閉鎖状態になりました。展示室には村の年表を書いたパネルがあったんですけど、それは2004年以降、更新されていません。村の年表が更新されなくなったということは、いわゆる公的に、自分たちの土地の記憶を記し続けていくということが困難になっていったことを象徴している、僕は感じています。

### 土地の記憶を表現する方法、伝えていく方法

僕は中学2年生ぐらいのとき、2001年ごろだったんですけど、この先、市町村合併によって、鳥ヶ原村がなくなる計画があるということを知って、そのときにすごく大きな衝撃を受けました。ちょうどそのころから芸術に興味を持ち始めて、中学の図書館でマルク・シャガールという画家の画集を見つけたんです。このときに初めて、写真とか映像とは異なる、土地の記憶を表現する方法、伝えていく方法というのに出会いました。それが自分が絵を描き始めていくきっかけになったんですね。そのあと、美術大学に進んで、現在も鳥ヶ原を題材にした



絵画の制作をしています。

これは鳥ヶ原を題材にした僕の絵画作品の一例です。観音山と呼ばれる、石の観音像が並んでいる山が鳥ヶ原にあるんですけど、そこを歩きながら、土地の古い信仰や、そこに生きた人たちの記憶に着想を得て描いた油絵の作品が、「観音山」というタイトルの作品です。こういう、自分の育った土地を題材にした絵画作品を作って、各地のギャラリーや美術館などで発表しています。

### 「蜜ノ木」

成安造形大学という滋賀県の芸術大学を卒業したあと、ドイツのデュッセルドルフ芸術アカデミーという芸術大学に留学しました。その留学中の2011年に、日本で東日本大震災が起きて、原発の事故の問題も含めて、ドイツでも大きく報道されていたんですけど、それが自分のこれからの芸術活動を見つめ直すきっかけになります。

なって、地元鳥ヶ原に戻って活動をした、創作をしたというのを考えたとか、絵は一人で描いているんですけど、自分だけで作品を作るんじゃなくて、地元の人たちと一緒に芸術活動しようという計画をこのころ立て始めました。

せながら、鳥ヶ原という土地に根ざした活動をしています。これまでの主な活動は、展示会の企画、地域のリサーチ、伝統行事への参加、地域間交流、農業などです。これは僕がデザインした「蜜ノ木」のロゴです。蜜ノ木の「蜜」というのは木の樹液の蜜をモチーフにしています。「蜜ノ木」が誕生した背景について、少し説明させてくださいと思います。その一つが、2010年代に鳥ヶ原、その周辺地域の農村についてです。2010年代に、伊賀市の中心部は、伊賀忍者とかお聞きになった方もいらっしゃると思うんですけど、忍者を軸にした観光地化がどんどん進んでいきました。それによって中心部は観光地化が進んでいくんですけど、観光資源の乏しい、鳥ヶ原のような周辺地域というのは、さらに取り残されていったんです。2017年には伊賀市は忍者市宣言というのをしています。

明させてくださいと思います。その一つが、2010年代に鳥ヶ原、その周辺地域の農村についてです。2010年代に、伊賀市の中心部は、伊賀忍者とかお聞きになった方もいらっしゃると思うんですけど、忍者を軸にした観光地化がどんどん進んでいきました。それによって中心部は観光地化が進んでいくんですけど、観光資源の乏しい、鳥ヶ原のような周辺地域というのは、さらに取り残されていったんです。2017年には伊賀市は忍者市宣言というのをしています。



一方で取り残された周辺地域はどうなっていたかというと、東日本大震災の直後ぐらいから、若い世代の移住者やUターン者が増え始めて、これまで、僕の子どものころには全然なかったようなお店であるとか、地域おこしをするような団体、イベントなどが次々と誕生していったんです。こういう状況のなかで、鳥ヶ原で暮らしていた、例えば僕と同級生とか、その近い世代の若い人たちも、2010年代に移住してきているような活動をしている人たち、あるいはローカルなビジネスを田舎でやっている人たちに刺激を受けて、「蜜ノ木」が誕生する一因になったと、僕は考えています。「蜜ノ木」に参加してくれていた村の子たちに、最近、話を聞いたんですけど、やっぱり過疎化していく中で、村を守っていきたくていう使命感があったりとか、地元では仕事がないってよく言われていたんですけど、移住してきた人たちはネットとかを使っているいろいろな仕事とか活動をして活躍しているのを見て、それに憧れを感じたりとか、あるいは対抗意識を持ったとか、そういういろんな想いがあったみたいです。

### かつての村の青年団

次にもう一つ、「蜜ノ木」が影響を受けたのは、かつての村の青年団の活動の存在です。鳥ヶ原村にも鳥ヶ原村青年団というのはあったんですけど、これは合併前後の2000年代に解散し

ています。僕も「蜜ノ木」のメンバーたちも、村の公式な青年団というには入ったことがないんですけど、「蜜ノ木」が活動していく中で、それよりももっと古い、僕たちが全く知らなかった時代の村の青年団の活動というのを、少しずつ発見していくことになりました。

これが戦前と終戦直後の鳥ヶ原村青年団の文化活動の資料です。「蜜ノ木」の活動の中で発見して、村の方々にいただいたものなんですけど、1927年に鳥ヶ原村の青年団と、その周辺の村の青年団が共同で発行した、「七ツ乃華」という青年団文集です。この「七ツ乃華」というタイトルは、七つの村の青年団が一緒に作ったこと由来します。直接の関係は不明なんですけど、ちょうどこの本ができる数年前には、関東大震災が起きていて、文集の中からも、当時の鳥ヶ原やその周辺の地域の村が抱えていた農村の困窮であったりとか、あるいは格差の問題、都市へ人々が流出していくという問題を、村に残っている20代の人たちが、結構生々しく綴っています。

こちらは鳥ヶ原村青年団が終戦直後に「やぐざ踊り」という演劇というか、寸劇をやっていたときの写真です。1945年の終戦直後というのは、全国的に各地の農村とかで、青年団に



こういう活動のなかで、メンバーや活動の形態を変化させようという計画をこのころ立て始めました。それで2012年に鳥ヶ原に帰郷して、地元で作品の制作を始めて、その翌年の2013年に



よるこういう「やぐざ踊り」というのが流行していたらしいんですけど、鳥ヶ原村でもこういう活動が行われていたというのを、「蜜ノ木」で地域のことをリサーチしていくうえで知りました。

僕らが知っている村の青年団は、お祭りの舞台をやったりとか、小学校のキャンプの指導をしたりとか、どちらかというと体育会系のイメージだったんですけど、例えば震災であるとか戦争という危機の時代にあとに、地元の村の若い人たちが、こういう文化的な活動を、限られた時間ではあったんですけど、やってたというのを、初めて僕も知りました。

### 村の郵便配達員

もう一つ、「蜜ノ木」の活動に影響を与えたのは、村はずれにある「アトリエ河口 絵好住（エゴノミークラス）」という、なすびの絵が描かれた小屋です。その小屋はですね、ドイツから帰国して、鳥ヶ原でアトリエを探しているときに発見しました。村の人たちにいろいろお話を聞いてみると、昔、村の郵便配達員で、アマチュア画家だった河口重雄さんという人が、自分の手で建てたアトリエだったらしいんです

ね。河口さんはアトリエが完成した直後ぐらいにお亡くなりになって、約10年間くらい空き家になっていました。

それで僕はここを使いたいなと思って、ご遺族の方にお願ひして貸していただいたんですけど、廃墟になっていたので、アトリエの片づけであるとか、草刈りとか、そういう改装作業を始めたんですけど、そこに、鳥ヶ原に住んでいる地元の友だちとか、近くの村に移住してきた友だちとかが手伝いに来てくれるようになって、その集まりが「蜜ノ木」というグループができていく土台にもなりました。このアトリエは改装を終えて、そのあと、アトリエ、展示会場として利用しています。

このアトリエを建てた河口さんという人は、生前、アトリエを芸術を通じた村の人たちの交流の場所にしようと思っていたらしくて、それもこの河口さんのご遺族とかにお話を聞いている中で知ったことなんですけど、この河口さんという村の郵便配達員さんの持っていた理想というのを「蜜ノ木」も引き継いでいることになりました。

このアトリエ河口の清掃をして、2013年にこの場所で「郵便夫（ポストマン）と森の星」という展示会を「蜜ノ木」で企画します。これが「蜜ノ木」が開いた最初の展示会なんですけど、村の人たちから、このアトリエを建てた河口さんの遺作をお借りしてきて、彼が生前、どういう人だったかというアーカイブも作って展示しました。あと、そのころ僕のアトリエとしても使っていましたので、僕の新作と、河口さんの作品と一緒に展示しました。会期中には県外の研究者を招いて、地域の芸術に関するトークも開催しています。





観音提寺正月堂

その次に、「蜜ノ木」の活動の場所となっていくのが、観音提寺正月堂という村に古くからあるお寺です。751年に奈良の東大寺の実忠和尚により開創されたと伝わっています。本堂や楼門、本尊は国指定の重要文化財になっています。そして、二本尊の十一面観世音像は、33年に一度開帳される観音像で、ほかには、毎年2月の修正会という伝統儀式が、このお寺で執り行われています。

この33年に一度開帳されるといわれている観音像なんですけど、2015年に開帳の年を迎えまして、そこで「蜜ノ木」もこのお寺に協力して、この開帳のフライヤーを制作したり、SNSを使って広報活動を行いました。普段は

参拝に来られる方もほとんどいらっしやらないんですけど、この開帳のあった1週間は全国各地から本当にたくさんの方が鳥ヶ原に来てくださって、参拝してくださいました。そしてこの開帳の期間、境内にある客殿という建物で「茶会」という「蜜ノ木」の展示会を企画しました。これは正月堂にまつわる鳥ヶ原の過去や現在、あるいは次の開帳が3年後なので、土地の未来についてのリサーチを行って、その成果として作品や資料を展示しました。会期中には、この場所で県外のアーティストや研究者も交えたシンポジウムであり、ライブを開催しました。当時、大学生だった「蜜ノ木」のメンバーが、将来の自分たちが住む土地について、どのような土地にしていきたい



いか話し合ったりもしました。

そしてこれが修正会という、正月堂で行われている儀式です。1200年以上続くといわれている、毎年2月になると、「講」と呼ばれる住民グループによって、練りこみが行われています。今は七つぐらい講があるんですけど、その各講がつくった鬼頭(おにがしら)や大餅(だいひょう)などの供物が、正月堂に奉納されます。この写真の鬼とか、男の人たちが抱えているお餅、これらの供物はこの年に鳥ヶ原で採れた野菜や餅米、そういう農作物を素材として作っている。非常にアニミズム的なお祭りです。

この正月堂の修正会に「蜜ノ木」も参加することになって、2015年に「蜜ノ木講」という新しい講が立ち上がります。伝統的な講というのは、参加できるのは決められた家の人で、昔は女性とか子どもはこのお祭りに参加できな



いくつかの拠点

かったんですけど、だんだん少子化の影響で解散する講も出てきて、近年はより時代に合わせた形の講というか、お祭りにしていこうという動きが強くなっています。「蜜ノ木講」は特に若い人たちが中心なので、よりその傾向が強くて、参加者の約半数くらいは村外から参加してくれる人たちですね。あと、2018年には初の女性の頭屋が誕生しました。そのほか、お祭りで奉納される伝統的なお供え物をみんなで勉強して作っているんですけど、その伝統的なお供え物のほかにも、独自の旗やプラカードなどを制作しています。

は1953年に鳥ヶ原で発生した山津波を経験した地元住民の人たちともトークを開催しています。

### リアルタイムなことも、土地の記憶の一つとして

コロナ禍では、全国に緊急事態宣言が発令された4月から解除されるまでのあいだ、「蜜ノ木」メンバーが定期的に鳥ヶ原を歩き、お堂や祠を参拝する「歩く日」というのを続けたいんです。この活動は、同年、三重県立美術館で開催された「ステイミュージアム」という展示会でも紹介されました。古い土地の記憶だけではなく

くて、現在起こっていること、現在、土地で起きているリアルタイムなことも、土地の記憶の一つとして活動しています。

### 失われたり衰退した共同体の機能を緩やかなかたちで

最後になりましたが、今お話ししてきたことを少しまとめてみたいと思います。2010年代に起きた過疎地の文化的な変化は、「ここには何も無い」「ここでは何も生み出せない」と思っていた鳥ヶ原の若者たちにも勇気を与えて、「蜜ノ木」の誕生に繋がりました。「蜜ノ木」は土地の記憶や現在の過疎地の課題と向き合っていく中で、失われたり衰退した共同体の機能を緩やかなかたちで担っています。

一つは郷土史研究家的な役割、地域リサーチ、アーカイブの保存です。もう一つは公的な役割。先ほどの正月堂修正会の継承。もう一つは、アートコレクティブ的な役割。これは創作や展示会についてです。もう一つが青年団的な役割で、これは地域間の交流や教育、地域づくりに関わっています。

これらがすべて成功して、持続しているわけではなくて、人口減少や過疎化が進む中で、土地にはたくさん課題があって、やはり田舎暮らしの現実や、人手不足の問題などは、「蜜ノ木」も抱えています。近年は、村の人たちが運営する団体から、村内外の協力者と結びつくネットワークへと、徐々に変化しています。

駆け足になりましたが、僕からの発表は以上となります。ご清聴、どうもありがとうございました。

### 小林

岩名さん、ありがとうございます。過疎が引き起こした自分のふるさとへの喪失感が原点となつての活動の変遷と、現在、どんなことを行っているのかお聞きしました。

シャガールの画集を見てというお話が印象に残っているんですけども、そういう図書室だったり、図書館だったり、資料館だったり閉鎖してしまつたときに、そういうことに出会う、自分の進む道を決めるきっかけをくれる場所がなくなっていくってしまふんだなということも改めて感じて、その共同体の機能を見いだせるような気がしながら、お話をお聞きしてきました。そして、アートの力もですね。それではこれで前半を終えることができました。みなさん、それぞれにとでも考えさせてくださるご報告、ご講演だったと思います。

.....

### 小林

それでは後半は、前半のお話を受けて、ディスカッションをしていきたいと思います。ライフミュージアムネットワーク事務局で当館の川延副館長がモデレーターをさせていただきます。前半をお聞きになったうえでのご質問を会場のみなさんから質問シートでいただいています。

### 川延安直

こんにちは。深い質問をみなさんからいただいておりますので、うまく繋いでいくのが難しいですが、まず私からの感想というかが、今日こ



「蜜ノ木」の拠点以外での活動として、2014年に鳥ヶ原会館で開催した「こうさいのさざめき」という展示会がありまして、これは岩手県の山田町で震災ボランティアを経験した「蜜ノ木」のメンバーが企画した展示会です。被災された方たちから集めてきた言葉に、「蜜ノ木」のメンバーたちが絵を添えて作った作品を、この公民館で展示しました。この会期中に



川延安直さん

うしてみなさんとお話ができることについてお礼を申し上げたいと思います。

### 震災から10年

震災から間もなく10年です。今回、それぞれの方のお話から、吉岡さんからは、「すでにある未来」という言葉をいただきました。とてもよいキーワードだと思います。山下館長からは、入館者数の減少に、やはり関心の薄れ、もういやという思いが市民の中にも広がっていた時期もあったというお話をお聞きしました。さらに衝撃だったのは私たちのように博物館に動いている人間としては、岩名さんの故郷の資料館が、2004年以来更新されないままフリーズしているという事例報告です。

お気付きかと思いますが、これは、いずれも現在福島が置かれている状況だと私は思っています。こうしたお話をこのタイミングでみなさまからお聞きできたことが、まず大変うれしいです。

さまざまな質問をいただいています。まず吉岡さんということですが、これは山下館長にも、岩名さんにも共通する「質問とお聞きいただければと思います。」

「地域の歴史資源の価値を知らない」ということについて、観光と災害では少し異なるかもしれませんが、過去を思い出したくない、つらい、消してしまいたいといった点から、いわゆる震災遺構の多くが解体撤去されてしまいました。そうした問題について、吉岡さんは、東北の災害遺構や伝承をどのように見られますか」という質問です。まず、吉岡さん、いかがでしょう。

### そついった日常を示しながら、ある程度時間の助けも借りながら

吉岡

はい。我々、活動を開始したのは1990年代後半なんですけど、タイミングとしては、ある程度の落ち着きを取り戻すまで、そのぐらいまで待たなければならなかったのだというのが実感です。

こちらでも炭鉱事故とか、労働争議など、さまざまな軋轢や悲しみ等がたくさんあって、炭鉱の記憶を残すというのはなかなか理解してもらえないところがありました。そういったものが解決されないかぎり、何も先へ進んではいけないみたいな論調、例えば戦争中の強制徴用が解決しないかぎり扱いたいな、そういう

ところがあつたのです。

それも、何もしなかったらどうなるかと問いかけました。何もしなければ人の記憶から全然なくなってしまう。それぞれの価値観の違いはあると思うけど、そこに存在したという出来事はしっかりみんな認識をしておく取り組みをしようじゃないかという、最初はそういう言い方をしていました。

ただ、やっぱり時間軸というか、すごく悲しい思い出に対しては浄化作用みたいなものは必要なんだというの思いました。しかし一方で、時間がたてばたつほど記憶が薄れるし、もはやなくなるというところで、そこをせめぎ合いです。

そういった直接的な、悲しい思いをしている人に対するケアというものは、当然必要なんですけれど、我々の地域で言われていた「炭鉱の暗い過去を払拭する」というのは、まったく手触り感のないイメージで言っているところがある。炭鉱は「暗い」と言っているけど、住んでいた人間からは「案外すくいいところだったよね」という話がよく出てきます。

ただ、まったく炭鉱と関わりのない人たちから見ると、炭鉱といえば事故でしかない。マスコミは、事故と争議と閉山のときしか来ませんから、みんなが泣きわめいている姿がテレビに流れません。だけど、365日泣きわめいていたら、人間、おかしくなっちゃいます。365日のうちの1日は、そういうことかもしれないけれど、残りの364日は、ものすこいひたむきな創意工夫に満ちた、人間らしい生活がある。そういうところをもう一度クローズアップして、過去へのノスタルジーじゃなくて、未来の日本にとってどういう意味があるのかと

いうことに関連つけてゆく必要があります。

私は、大学の教員をしていたのですけれども、目の前にいる友達とラインで会話するような学生が出てくる。ちょっと何か言われたら、ちょっとつまづいたら、もう立ち上がれないような学生がいる。困難なんて日常茶飯事で、いくらでもそういうのを乗り越えてきたダイナミックな人たちを見ながら育ってきた私としては、このような学生の姿は異様です。

先ほどの博物館模擬坑道の坑内火災でも、火災が起きてる最中から、どうやって再建しようという発想がすぐ生まれました。これを、どうやって乗り越えていくかというのを考え始めている。昨今の失速してしまうような世の中で、視点を前に向けていくという、そういう逞しさという点で、まだまだみなさんにとっても役立つのかなと。

そういった日常を示しながら、ある程度時間の助けも借りながらやっていくと、少しずつ、一緒に道を歩いていけるような人が増えてくるということでしょうか。

川延

ありがとうございます、吉岡さん。それ相應の時間がかかるということは、私たちもとてもリアルに感じます。

質問の後半は、災害遺構や伝承を吉岡さんはどのように見られますかということですが。

### サルベージする時期

吉岡

三笠には、1960年に建設された高さ50mの立坑槽が残っています。地下750mへ降りるためのエレベーターの槽で、わずか12年しか稼働せず、もう50年近くそのままになって残っています。これを街の人は、「こんなものは恥ずかしい、早く解体すべきだ」と言ってきました。しかし、外から来た人は「すごい」と言います。特に若い人が「やべえ」と言ってますね。何が「やばい」のかよくわかんないけど。やっぱり、全然、見方が違うということ、少しずつ理解してもらおうということだと思っております。

ただ、災害に実際に遭った人たちにとっては、思い出したくないというの、理解できるところです。そこで、今のうちは、とにかく保存、現状だけ維持していく。活用を無理にしようとしていないで、記憶だの、証言だの、写真だの、いろいろなものをサルベージする時期だと思えます。整理してそれを発信したり、意味付けをするのは、もう少し時間がかかるのかなと。

だけど、今やっておかないと、全部薄れてしまいますから。空知でも、おびただしいものをなくしてきましたから。今あれが残っていたらこういうことができたのに、と思うことが多々あります。それでは、今残っている遺産はどうしたのかというと、あまりに巨大すぎて壊したくても壊せなかったものなのです。それは、結果として残ったということで、我々はラッキーでした。震災遺構も、今のフェーズは、できるだけ保存的に取り組んでいく。その過程で、ある程度時間をかけて、それを束ねて発信していく、そういう長期的な戦略というか、作戦が必要だと思えます。

私には、実は東日本大震災も炭鉱遺産も、まったく同じように見えています。津波とか、原発は、何十分とか何時間とか何日間という単位で、



地域が根こそぎ全部なくなってしまう。原爆なんかは、一瞬でなくなっちゃいます。空知産炭地域は、30年間かかりましたが、全てなくなってしまったということでは同じ本質を持つものだと考えています。

共通するのは、天災ではなく、いずれも人災だということです。空知は、まさに長い間、真綿で首を絞めるような人災でなくなっていました。だから、福島ほどのなくなっただけに對する直接的な痛みというのはマイルドでした。福島のような直接的な生々しい記憶に對しては、時間との折り合いということになるのでは。

川延

とりあえず、捨てるな、壊すなということ、よくわかります。サルベージというお言葉もとてもリアルに感じます。ありがとうございます。

さて、今、吉岡さんからお答えいただいたようなことも踏まえて、岩名さん、山下館長に引き続きでお話しただきたいと思っています。山下館長からでもよろしいでしょうか。お願いします。

### 記憶を一つに集めることができる

山下

昨年の秋、福島県内の学校の先生が、修学旅行の候補地として舞鶴引揚記念館をお選びくださいって、下見にいらしてました。お話しをさせていただいたときに、10年がたつて、福島の子どもたち、震災後にお生まれになった子どもたち、そして当時まだ小さくて当時の記憶がない

子どもたちが、年代的には増えてきて、どう伝えていくかということを考えていると教えていただいたのが、すごく印象的だったんです。もちろん、復興はやってこられていて、これからも復興にも取り組まれる。そして、それと一緒に継承ということも取り組んでいかなければならないんだと思っております。

私も、歴史をお伝える館ですけれども、歴史は必ず風化を致します。ミュージアムとして、一番の役割というか、お役に立てること、ということ、やはりいろいろな記憶を一つに集めることができるということなのかな。戦後75年がたちますけれども、いまだに私どもの館には、年100点とかの資料、また証言が集まっています。なかなか予算的にもたくさんというわけにはいかないんですけれども、私どもは体験者のところに全国行かせていただいて、そのお話をビデオに収めさせていただいて、アーカイブに努めています。

復興というよりも、私どもは継承ですけれども、継承というのは近道がありませんので、一つ一つ今遺していくべきものを、とりあえずは集めたり、遺したり、繋いだりをして、いろいろな研究者や、いろいろな機会が必要なきに拠点として、それを見ていただいたり、一緒に取り組んだり、そういうことができるのが強みでもあるのかなというふうに思います。一つ一つの記憶を紡げるというか、それをいかに次にバトンとして渡せるかということ、仕組みとして考えてみるということも大事だと思いがら、日々しております。

ちょっと、お答えになっているかどうかかわかりませんが、以上です。

吉岡

今の話に関連して、継承という、過去のことを未来に對してまったく同じかたちで残さなきゃならないみたいな、そんなようなイメージでとらえられちゃうかな。継承には、まず自分たちが立っている土台がなんなんだと、今の時点でちゃんと確認していきましょっていうのがすごく大事です。これは、基礎工事の地盤みたいなもの。そこをちゃんとやっておかないと、いくらいいことをやって、基礎がぶずぶずで、それはいつか朽ちて倒れてしまうもの、ただというのは、空知でやってきたことがまさにそうだった。整地工事をして、1500億円もかけていろいろなものを作ったけど全部倒れた。

だから、継承の前に大事なのは、今、なぜ自分たちがここにいいのかというのをしっかり聞く。50年も100年も同じことを繋げていけるという話ではなく、それをちゃんと認識したうえで、今、何をするかということを考えていくのが、我々の地域。強いて言えば、30年後に自分たちの子どもとか孫に、「親父が変なことをやってくれたおかげで」と言われるのか、「親父たちが残してくれたおかげでなんとかなってる」と言われるのかっていう、その違いがあるんじゃないかと、岩名さんの話を聞いて思いました。

川延

ありがとうございます。もう一つ、岩名さんに質問ですが、「行政からは「蜜ノ木」への支援があるんでしょうか」というお尋ねです。

川延  
ありがとうございます。継承の方法について、ちゃんと工夫しなさいよというアドバイスだったと思っています。また、のちほど、子どもたちの伝承事業について、もう少しお話をうかがえればと思っておりますので、その際は、よろしくお願いたします。

山下

ありがとうございます。

川延

それでは、岩名さん。今のご質問に続けてお答えいただけたいと思います。岩名さんのお話にもあったのですが、今、人口が20000人、高齢化率48%。これは、だいたいこの辺りで言うと、奥会津の金山町と昭和村の間くらいです。そういう規模感、雰囲気ガリアルにわかります。今日、会場にいらしているみなさんも、岩名さんの暮らしているところの状況というのは、なんとなく雰囲気伝わっていると思いますので、仲間にお話しただくようつもりで、先ほどの質問を受けていただければと思います。

岩名

はい。記憶の風化とか、継承の問題というのが、一つ出てきたと思います。先ほど、お話ししたように、うちの周囲は資料館も閉鎖されて、村の教育委員会もなくなっているんで、記憶の継承とか、そういうのに向き合っていくというのはかなり困難な状態がずっと続いています。

### 荒地地の中から 何かを酌み取ってくれる

僕は今日、ここでお話しさせていただきました立場なので、結構微妙なんですけど「蜜ノ木」に参加している村の人たちというのは、必ずしも土地の歴史とか、そういうものを守っていくことに興味を持っていないわけではないんです。若い人たちに土地の歴史を継承してほしいというのをよく言われているんですけど、高齢化率が48%となると、もう若い人の数がそもそも少ないわけです。地域のミッション、土地の伝統を継承するとか、記憶を継承するというのは、僕は必要だと思ってそれを仕事としてやっているんですけど、それぞれ生活も大変なので、すべての若い人たちが受け入れられることではないというのがあるんです。その人たちの人生とか、その人たちの時間というものを、土地の継承とか、土地の問題に拘束してしまっているかという問題があります。

ただ、例えば、先ほど資料を紹介させていただいたような、青年団の文集であるとか、アマチュア画家の方が建てたアトリエであるとか、あれって、全然、継承はされずに放置されているんです。特に、青年団の資料は、90年間ご家族以外、知っている人もいらっしやらない。それが何かのタイミングで、先ほど吉岡さんのお話を借りるとサルベージされる。何か、そういうきつかけというのが発生して、またなんかのあたりで保存、継承されていく。そのままではないかもしれないけれど、そういうことというのは自分の活動を振り返ってみると大きいので、あまり未来に継承するということを要求しすぎずに、もしかしら救世主的な人が、あるタイミングで何十年かに一人現われて、そういう人たちが荒地地の中から何かを酌み取って



くれるという、そういう期待とか、継承の方法も僕の経験としてはありなのかなということをおもいました。

川延

ありがとうございます。意識的な継承をタスクとするということよりも、サルベージのチャンスを見逃さないということなんじゃないかな。

岩名

はい。

川延

そのためには、サルベージしたいと思うものを、常に自分が持ってないといけないですね。

### 伝えられる土台

岩名

そうですね。僕は、そういうのを持ち続けて、ミッションだと思ってやっていますし。もし、逆の立場になったときに、土地の記憶を継承してくれる可能性を持っている人というのは、もしかしたら90年後かもしれないですけど、現われるかもわからないので、そういう人たちがもし発生しかけたときに伝えられる土台が必要なのかなと思います。だから、壊さないとか、記憶というものをとどめておくという土台というのは、ちゃんと残しておく必要があるかなと思います。

川延

とても重要なご指摘をいただいたと思います。

## 「から何ができるのか」

岩名

そうですね、「蜜ノ木」は行政の補助金をもらってやってるっていうことはほぼないです、基本的に。それは、合併であるとか、町の中心部の観光地化がかなり進んでいった結果、こういう過疎地が取り残されていって、じゃあ、その何も残っていない場所、そこに生きている人は一から何ができるのかとか、あるいは自分たちのDIY的なことでできるのかっていうのは、たぶん「蜜ノ木」の原動力の一つだと思っているので。

これは僕個人の意見ですけど、行政からの補助金とか、いわゆる地域活性化のプログラムに乗るのではない方向の地域の掘り起こし方であるとか、あるいはさっきの廃墟を活用した拠点づくりからの発信とかっていうのは心がけています、現在の段階では。

川延

別の方からですが、今の質問の裏表みたいな「質問がもう一つありまして、「地域外の協力者の方たちとの関わりにおいて、現在何か課題に感じていることはありますか。」

## バランスの葛藤

岩名

そうですね、課題としては、僕自身もこの村で育ったんですけど、途中から移住してきた人間ではあるので、よそ者といえばよそ者なんです。だから、ずっと村に根を張っている同じ土地の仲間たちと一緒に活動していく中で、地域

外の人にコミュニティをオープンしているいろんな人たちと協力していくのか、あるいは地元に住んでいる人たちのアイデンティティを大切に活動していくのか、バランスの葛藤というのはやっぱりあります。

地域外には専門家の方もいるので、そういう方がどんどん入ってきて、いいクオリティにイベントができるのは、僕としてはうれしいんですけど。じゃあ、地元で暮らしている人たちが、そこに前向きな気持ちで参加できるかということ、いろいろな課題がそこから浮上してきます。

川延

それは、デリケートな問題です。最終的に、お一人お一人のキャラクターをどれだけ大事にできるかということにしかならないかもしれない。

あと10分ほどになってしまいましたが、山下館長へのご質問です。今の岩名さんへのご質問のように、地域外の方との関係性みたいなことでもあるので、そういう視点も含めてお聞きいただけたらと思います。「引揚の方たちで、やっぱり一番苦勞されたのは満州からの方たちではないかと。その満州の方たちの多くは、半島の葫芦島（コロ島）から、博多や福岡、佐世保に上陸されました。そこでも同じように、舞鶴の方たちがなさったような、引揚の方たちを大切に活動があったのではないのでしょうか。そちらにも「連絡なさってみてはどうでしょうか」という「意見」です。

山下

ありがとうございます。私ども、平成28年から、引揚港18港のうち、毎年1港ずつ引揚港の



「地の記憶を苗床に」

「地の記憶を苗床に」

あつたまちと連携して、その地で巡回展をさせていただいております。

平成28年に始まって、今、10港ほど、福岡、佐世保、呉、横須賀、函館、和歌山県の田辺、名古屋などへ行かせていただいています。いまおっしゃったように、それぞれの港でそれぞれの役割があったり、それぞれの状況があったりということ、そういったことを一つ一つ勉強しながら、地元と共催で巡回展をして、私も資料を持っていったり、地元に残っている資料を出していただいたりということ、少しずつ回らせていただいております。そういうことも、続けたいと思っております。

### 引揚という記憶が舞鶴を外に開いている

川延

言い方は良くないかもしれませんが、引揚という記憶が舞鶴を外に開いているということも言えるのかと思います。その辺り、意識的に活用といえますか、方向性を考えていらつしやるということはありませんか。

山下

そうですね。確かに、引揚の歴史は先ほども言いましたように、市民の方の中には少し重く感じられていたこともあるんですけども、これを通じて、本当にこの9年、いろいろな方と繋がって、こうして福島とも繋がらせていただいているというのは、今までにないことです。記憶遺産に登録されたり、子どもたちの取り組みを発信したりという中で、全国の博物館のみなさんと、引揚港のみなさん、それから、記



憶遺産を通じて海外の博物館ですとか、研究者のみなさんですとかと繋がる事ができているというのは、この引揚港の歴史を伝えて発信していく中でできたことですので、それはうちとしても大変ありがたいですし、そこが、周囲のみなさんも応援してくださる理由の一つなのかなというふうに思っています。

先ほどもありましたけれども、継承とはそのまま残していく、保存していくことは違わないか過去から学んだり、過去を聞き遺していくことで次の時代に繋げるかということ、やっぱり大事にしていきたいと思っております。

川延

ありがとうございます。あつという間です

んにもないってみんなが言う。うちの村には何も無い。「そこを、何もなくてもいい」と思っている。最後に、「何も無い」について、吉岡さん、お願いいたします。

吉岡

今日、私自身、舞鶴と、それから岩名さんのところと、こういうかたちでミックスできたというのは、非常に幸せでした。ありがとうございます。特に舞鶴は、わが家も樺太からの引揚げ者なので、個人的にもすごく親近感があります。今度、ぜひ行きます。岩名さんのところにも行きたいと思っております。よろしくお願

### 永遠の北極星を追い求める

岩名さんとすくく同じ意見だったのは、岩名さんが、「蜜ノ木」の活動内容を、郷土史の研究会で、コーディネートであり、といういろおっしゃっていただけど、自分たちを何と規定するかというところで、やっていくうちに逆に規定される局面がでてくる。やっぱり実践集団、岩名さんのところは、やっていくと必ず道は開ける。どうやって、見つかるんですかと川延さんは言っていましたけど、正直やっければ見つかるんです。

ただ、これは自転車と言う後輪みたいなもので、推進力にはなるんだけど、前輪のハンドルが変な方向に行ってしまうと、いくらこいでもこいでも思いどおりにいかない。やっぱり、前輪に相当するものが重要です。

我々の活動は、要は地域のシンクタンクだと

思い起こしました。

川延

岩名さんは、出会ってしまったと、さらりと語られるけれど、それが実はすくく大変なことのはずです。出会ってしまう引きの強さ。やっぱりご自分でアーティストだという感じはあります。

岩名

そうですね。たぶん、合併のことにしても、必ずしも村のみんなが、それに対してすくく喪失感を感じたとか、そうではないと思うんです。過疎化が徐々にこうやって進んでいくから空き家がでるのは当たり前だし、資料館がなくなっていくのも自然なことだったと思っっている人たちも結構いらつしやると思うんです。

僕は、芸術をあえて外で勉強して、地元に戻ってきた人間なんで、これまでの経験の中で違う視点、たまたま近所の人と話してたらそういう廃墟があるとか、昔あそこの家のおじいちゃんがこういふことやってたとかっていうのを聞くと、それにどんどん吸い込まれていって。それで、結果的に、いくつかのものを村の外に発信できるまでになったと思うんです。それは仕事としてやっているというよりは、普段の暮らしのなかでたまたまそういうものに、出会っていったものだと思うんです。

### 「何も無い」について

川延

岩名さんと吉岡さん、お二人のレジユメに共通して出てきているフレーズがあります。「な

どうも、ありがとうございました。あつという間に時間になってしまいました。最初、お話ししようと思っていたことも、いくつかあったのですけれど、今日は、とても良い質問を、会場からたくさんいただきました。で、そちらをベースにやらせていただきました。また、ぜひ次はリアルでお会いしたいと思います。今日は、どうもありがとうございました。

川延

ありがとうございます。はい。本当に時間があつという間で、もうちょっとお聞きしたいぐらいで、またの機会を考えていければと思います。

小林

ありがとうございます。はい。本当に時間があつという間で、もうちょっとお聞きしたいぐらいで、またの機会を考えていければと思います。

今日のタイトル「地の記憶を苗床に」。空知、鳥ヶ原、舞鶴それぞれが、とても豊かで強い苗床なんだろうなと思ってこの企画に臨んだんですけど、お話をお聞きして、日本各地にこういう場所があることで、そしてそれぞれの地域が点ではなく面的に繋がることで、日本全体が強い苗床になっていったらいいなとも思いました。

私たちは日本各地に先輩がいることをとても頼もしく思いながら、福島も苗床を強くしていければと思います。そのため場所、こちらの博物館も、そして各所のミュージアムもなれるとうれしいなとも思っています。

それでは、本当にみなさん、ご参加くださいまして、ありがとうございました。



規定しています。どっちの方向へ持っていくから良いのだろうと迷った時に、遠い将来こういうふうになりたいねというのを持ちながら、ずっと永遠の北極星を追い求めるというか、こういう方向だよという方向性を示していく。そこで、やっぱり内容をしっかり保っていくために学びが必要なことなんだなと。しかし、地域の中だけで完結していると、腐っていつたり、固まってしまうので。外の力というの、すくく必要になる。

### ミュージアムがこれからやっていくべきこと

そういうときに、ミュージアムというのはすくく良い装置で、外の人と中の人を、うまく結んでいく。あるいは、外にある制度を使って、自分たちの地域を見直す企画をつくれる。山下さんのところの記憶遺産もそうだし、我々の日本遺産もそう。それによって初めて地域の人が、ある結び付きを力にしながら、学び合うという意味では、すくくいいかなと。視点を変化させたり、発見をするという、そういう新陳代謝とか、外からの力が必要で、これはミュージアムがこれからやっていくべきこと。保存、収集、展示しているだけではない。外に対しても、朝日のように外に光っていて、それをテコにまた外の力を引き込んでという、なんか呼吸をするような、換気口みたいな役割、そんなような存在であるべきなんだなと思っながら、自分自身もミュージアムの館長としてやっていっています。

さらに言うと、あともう一つは、やっぱり人なんです。インタープリターなのか、ファシ



大きな学びになりました。持ち帰りたいと思います。(20代)

今まで、福島を深掘りする話を聞く機会が多かったので、北海道、京都、三重と知らない土地のことを学び興味を持ちました。参加する回を重ねるごとに、ミュージアムはいいなあと思えます。(50代)

3人の方のお話はどれも興味深く、面白いものでした。地域の魅力を新たな視点で見つけ出し、そして発信し、継続するという形は、とても参考になります。

「ミュージアムが苗床に、内と外をつなぐ」「すでに起きた未来」とにかく現場に来てもらう」「土地の記憶を伝える表現」など、日常生活ではなかなか出会えない言葉です。自分が住む会津という地域をアートを通してもっと面白くしたいと思っていますので、これからも取り組みに注目しています。(60代)

空知の吉岡氏のお話は、福島県とも多く共通すると思った。

新しく何かを作っていくのではなく、地域に残っている記憶や歴史から育てていくことは非常に大切である上に、有用なものであると感じます。

そんな資源をどのように発掘して伝えていけばいいのか、考えていきたいです。(20代)

「記憶」という言葉がとてつもないなと思いました。

私も地域の文化や民具などを調査する活動をして、

どうしたら残していけるんだろうといういつも思いますが、

「記録」だけではだめですね。人の思いも合わさっての「記憶」を残すべきということを、お話を聞いて感じました。(20代)

各地の活動とその特色が理解できた。これを福島県にどう活かせるかが課題。(60代)

それぞれの地域の現状により、

どのように活動するかは同じではないということを、再度考えさせられました。

自分たちだけの思い、考えだけでは成らないが、行動しなければ進まないということもよくわかりました。

行動する方法はいくらでもあるのだということを学ばせていただきました。(60代)

吉岡さんの炭鉱のお話を聞き、その地域での現状への抗い方をかっこよく感じました。

建造物を残し、向き合うことが大切だと考えさせられました。

学生時代京都で過ごしたのですが、

山下さんのお話で舞鶴にそのような歴史があることを初めて知り、大変勉強になりました。(20代)

炭鉱事故や廃坑、引揚の負の歴史、

合併で周辺化した過疎高齢化地域の三様の地の記憶に、

どのように向き合ってきたのかがわかり、

福島の課題と重ね合わせてお話を聞くことができました。

保存して遺すだけでなく、どう伝承するか、その苗床からどう育て実を採っていくか、今後の福島での取り組みに大いに参考になるお話だった。

とくに、鳥ヶ原の岩名さんのお話は興味深かった。アートを通じて表現することや、かつての青年団活動の重要性に気づかされました。

青年団活動の歴史や意義など、学び直してみたいと思いました。(50代)

行ったことがない土地や、気になっていた土地の貴重なお話がきけてよかったです。

自分の今住んでいる土地とも改めて向き合い、考え続けたいです。(30代)

# 参加者の声

ライフミュージアムネットワーク2020は、現在の福島で求められるミュージアムの新たな役割を「お互いの多様性を認めながら、過去に学び現在をつくり未来を考える場を生み出すこと」であると考え、その役割を実現するための機能の拡張を模索するプログラム開発を行いました。

テーマは三つ。

「多様なニーズに応えるミュージアムの利活用プログラム」は誰のためでもあるミュージアムの試行。

「生活資料を活用したミュージアムの連携プログラム」は地域に残る生活資料の利活用と地域ミュージアムの連携の試行。

「地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラム」は地域資源の価値の再定義と編集による地域アイデンティティ再興の試行。

三つのプログラム開発では、どの地域のどのミュージアムでも、素材や場所を入れ替えることで実施が可能であるかどうかも探りました。ミュージアムの新たな活用が、

それぞれの地域課題の解決につながることを願っています。

「いのち」と「くらし」に

向き合う試行

2020年

9月17日(木)

福島県立会津支援学校へ  
 ただみ・ブナと川のミュージアムを届けよう  
 対象生徒: 中学部2年生

内容: オンラインでミュージアムを見学し、只見の森とそこに  
 住む生き物について学んだ。クマの剥製、ブナの木、  
 ブナの葉、ブナの実、コウシキ(雪下ろしの道具)に触  
 れて、生き物や民具の質感を理解した。



9月23日(水)

福島県立会津支援学校へ  
 アクアマリンいなわしろカワセミ水族館を届けよう  
 対象生徒: 中学部1年生

内容: オンラインでミュージアムを見学し、カワウソの生態や  
 猪苗代湖に住む魚や虫について学んだ。カワウソの  
 実物大ぬいぐるみやゲンゴロウの標本に触れ、実物  
 の大きさや重さを理解した。



11月4日(水)

福島県立会津支援学校へ  
 アクアマリンふくしまを届けよう  
 対象生徒: 中学部3年生

内容: ビデオレターでミュージアムを紹介。水槽内のタコや  
 サメ、ウニなどに触れるとともに、魚をさばく様子を見  
 て食べること、命をいただくことについて考えた。



2021年

1月29日(金)

福島県立会津支援学校竹田校へ  
 福島県立博物館を届けよう  
 対象生徒: 中学部1年生

内容: テレプレゼンスロボットを操作しミュージアムを見学、  
 石器等の資料を観察、学芸員へのインタビューを行  
 い、縄文時代・弥生時代について学んだ。



Life Museum Network 2020

## 多様なニーズに応えるミュージアムの利活用プログラム

ミュージアムは本来、年齢・性別・国籍・信条を異にするどなたでも利用できる文化施設です。さまざまな人々が学びを通じて、出会い、交流する開かれた場でもあります。しかし、一度も足を運んだことがないという方も多くいます。その中には、心や身体の状態から来館が難しい方もおられます。

また、2020年は、コロナ禍の中で、ミュージアムに行きたくても行けない方がうまれてしまいました。

本プログラム開発では、オンラインやテレプレゼンスロボットなど情報通信技術による手法とハンズオン資料の持ち込みなどを組み合わせ、来館せずともミュージアムを体験していただけるプログラムを考案しました。

### 事業パートナー

- ただみ・ブナと川のミュージアム
- 公益財団法人ふくしま海洋科学館
- アクアマリンいなわしろカワセミ水族館
- 公益財団法人ふくしま海洋科学館アクアマリンふくしま
- 福島県立会津支援学校
- 福島県立会津支援学校竹田校

### 協力

- 株式会社 Eye's Japan
- 福島県立葵高等学校



生活資料を活用したミュージアムの連携プログラム

みんなで比べてみよう！ 奥会津の民具キット

ミュージアムには、その地域で暮らす人々の営みがさまざまな形で集められます。古文書や生活道具、絵画や自然の草花にいたるまで。時には暮らしを営む上での知識や情報といった形のないものも含まれます。

このプログラムでは、福島県の奥会津と呼ばれる地域を舞台に、「民具」と呼ばれる生活資料の更なる活用方法について考えてみました。こうした生活のための道具は、地域の歴史や文化を知る上で重要な資料となり得ます。そのため、多くの自治体がこれを収集していますが、一方で、収蔵場所がない、整理する人員がない、それらを確保するお金がない……という課題もあります。その結果、死蔵あるいは最悪の場合には除籍・廃棄という話も聞こえ始めています。こうした状況を回避するにはどうした

らいいのか、特にミュージアムでの展示以外に活用方法を

見いだせないか。そこで考えたのが、奥会津各町村のミュージアムに収蔵されている民具をキット化し、地域の人たちのコミュニケーションに活用していただくというプログラムです。また、こうしたキットを町村の枠を超えて利用し合うことで、他の地域と比較しながら、それぞれの地域の文化を理解することにつながっていくのではないかと考えています。奥会津ならではの共通性、それぞれの地域の独自性。それらを理解する機会を創造するため、生活資料が活用できると考えます。

ミュージアムが持つ地域資源をいかに活用するか。「民具」の部分をそれぞれの地域にとって重要な資源に置き替えることで、汎用性のあるプログラム開発を目指しました。

事業パートナー

- やないづ町立斎藤清美術館
- 三島町教育委員会
- 金山町教育委員会
- 昭和村教育委員会
- ただし、ブナと川のミュージアム

2020年  
6月~7月

奥会津各町村にプログラムの趣旨説明・協力依頼。

7月27日(月)

柳津町農家民宿「山ねこ」で、民宿を営む金子勝之さん、新潟大学創生学部特任助教の榎本千賀子さん、やないづ町立斎藤清美術館学芸員の伊藤たまきさんにプログラムの趣旨説明・打合せ。金子さんより柳津の民具や昔の風景などについて教えていただく。



8月28日(金)

昭和村公民館で地域おこし協力隊の押部僚太さんと打合せ。

10月19日(月)

金山町自然教育村会館(旧玉梨小学校)で開催された「またたび細工研究会」に参加。



11月14日(土)

連続オープンディスカッション「奥会津の周り方」第4回「民具整理から見えてくる奥会津の暮らし」の会場で昭和村民具キット試作版をおひろめ。



2021年  
1月13日(水)

昭和村公民館民具収蔵庫で民具キットに活用する資料を選定。

1月17日(日)、2月1日(月)

昭和村旧小野川小学校で同校に収蔵されている資料からキットに活用する資料を選定。写真撮影。

2月3日(水)

昭和村交流観光拠点施設喰丸小で展示・収蔵されている資料からキットに活用する資料を選定。写真撮影。

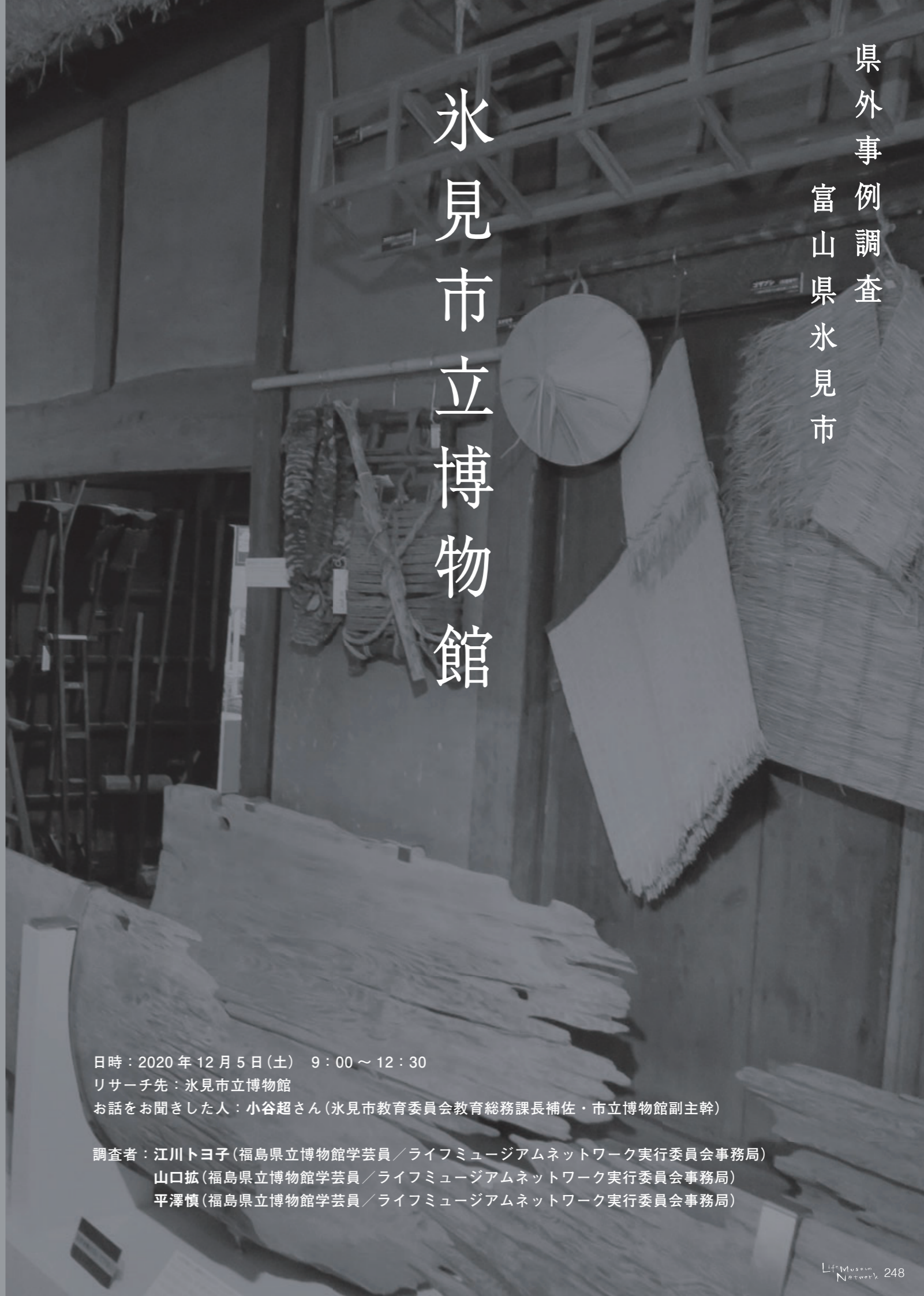
1月~2月

金山町教育委員会と民具キットの内容について検討を重ねる。

2月~3月

民具の運用方法について協議する。

# 氷見市立博物館



日時：2020年12月5日(土) 9:00～12:30

リサーチ先：氷見市立博物館

お話を聞きした人：小谷超さん(氷見市教育委員会教育総務課長補佐・市立博物館副主幹)

調査者：江川トヨ子(福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

山口拓(福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

平澤慎(福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

氷見市立博物館では長年「地域回想法」に取り組んでいます。氷見市教育委員会に所属しながら氷見市立博物館における「地域回想法」を育て上げてきた小谷超さんにお話をうかがいました。

「回想法」とは、写真や音楽、昔使っていた道具を見たり触ったりしながら、昔の経験や思い出を語り合うといった心理療法の一種で、認知症の方へのアプローチとして注目されています。ポイントは「過去を振り返り、楽しむこと」。

回想法で用いる対象は参加者誰もが知っているものであることが望ましい。参加者が同じ地域の方々なら、そこで日常的に使われてきた道具、育まれてきた文化が共通項になります。

地域の歴史や文化を見つめてきたミュージアムには、「過去を思い出す」ために活用できるさまざまな資料が集められており、回想法を利用した事業と相性がいいことから、近年こうした取り組みを始めるミュージアムも増加しています。

とはいえ、継続的な事業へと発展・維持されている例は少ないのが現状です。そもそもこうした高齢者を対象にした事業に理解が示されないこと、ミュージアムも介護福祉施設も慢性的な人員不足から負担が大きくなり過ぎてしまうことなどがその理由です。

氷見市立博物館では平成23年度から本格的に「地域回想法」を実施し始めましたが、小谷さんも、最初は予算のない中で手探りからのスタートだったとおっしゃいます。

高齢者の集いに出かけて行ったりと、さまざまな働きかけを行ったそうです。博物館の認知度が低いことに悩み、国の助成金を得てバスの送迎付きで博物館に足を運んでもらうこともしたそうです。その後、事業が停滞した時期もあったそうですが、平成29年には氷見市地域回想法活動ネットワーク連絡会「ほっこり回想クラブひみ」を結成。介護職員や看護師、地域のボランティアの方々を中心に、市民主体での主体的な活動が継続して行われています。

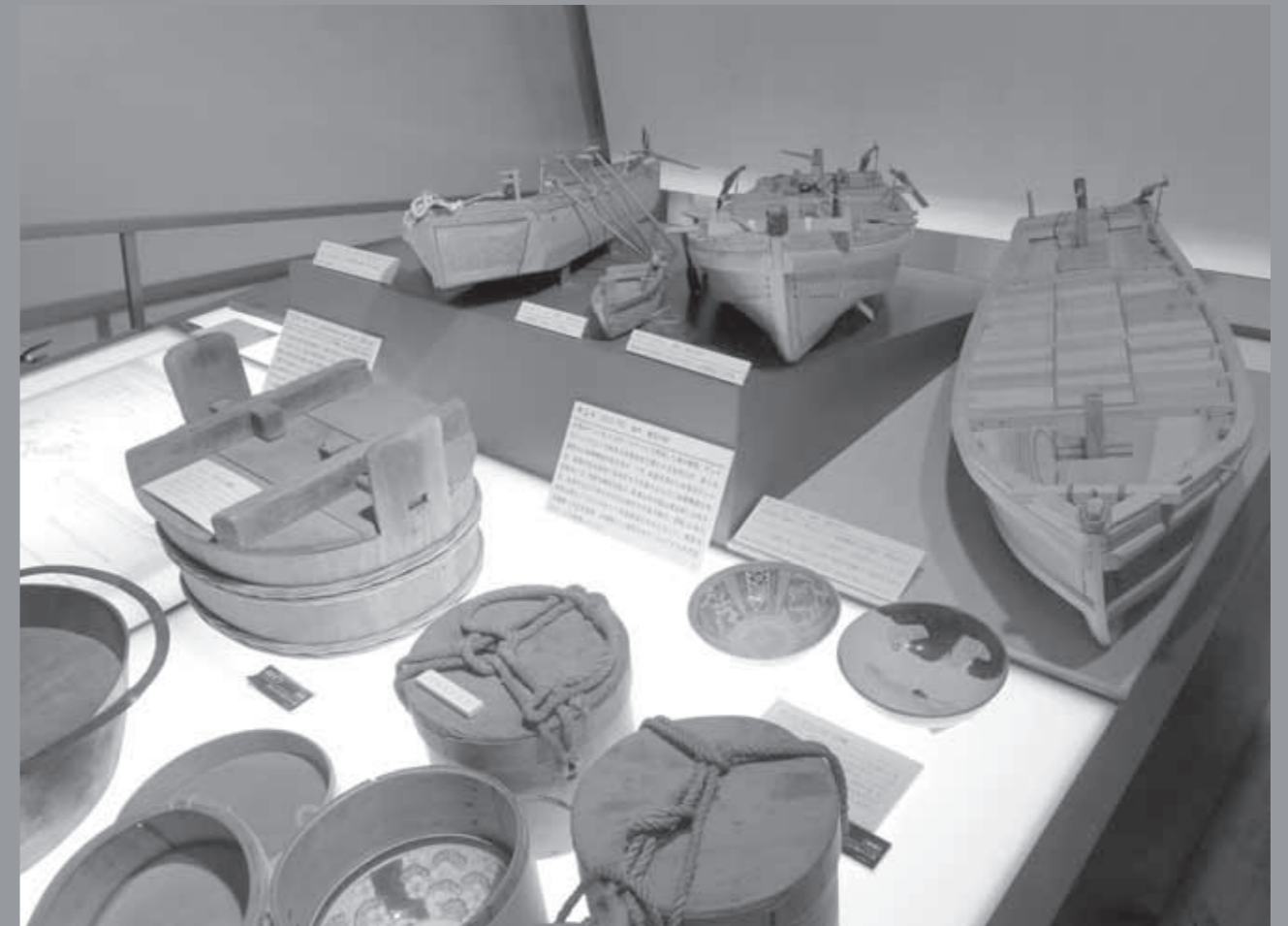
氷見市立博物館で地域回想法が継続されている理由として、第一には小谷さんの存在があげられます。回想法や心理療法の専門家ではなかったにもかかわらず、模索しながらこの事業をけん引してきたバイタリテイには脱帽です。

一方で、さまざまな立場の人を上手く巻き込んできたのも成功の秘訣なのでしょう。介護施設、市の福祉・介護予防部局との連携、元あるいは現役の介護・医療職の方を含めた市民活動。多くの歯車がかみ合って、氷見市の地域回想法が回っているように感じました。

小谷さんが地域回想法を通じて、高齢者の方々と小学生の交流事業を行ったこと。昔の話を聞かせていただいた後、最後に「80年生きてきたおばあちゃんの手をさわってみましょう」と呼びかけ、小学生たちはその手をさわらせていただいたそうです。

老いるということは何かを失うだけでなく、経験という豊かな財産を蓄積させていくことなのだ、そしてそれは何ものにも代えがたい価値のあることなのだ、実感させてくれるエピソードは、ミュージアムの利活用の大きなポイントを教えてくださいました。







### 地域資源の活用による 地域アイデンティティの再興プログラム

福島県双葉郡浪江町の伝統的工芸品である大堀相馬焼は、江戸時代から300年以上続く浪江町の主要な特産品です。しかし、2011年の東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故を受け、大堀相馬焼の関係者は町外へ避難・移住せざるを得ない状況となりました。

本事業では、大堀相馬焼に関わる幅広い立場の方々を対象に聞き取り調査を行い、アーカイブ化することで、地域の文化資源がそこで暮らす人々にとってどのような存在なのかを浮かび上がらせることを目指しました。

リサーチでお話を伺ったのは、大堀相馬焼の窯元をはじめ、作家として活動をしている方、職人として窯元からの仕事を請け負っている方、他の地域から来て後継者になろうとしている方、組合の職員として働いていた方、また、大堀相馬焼を通して移住先の方々と繋がりを持った方、さらに、浪江町商工会の関係者や、浪江町立小学校の教員、震災後浪江町外で暮らしている町民のみなさん、大堀相馬焼のコレクター、そして地域のミュージアム関係者といった方々です。

本事業を通じて、「地域の文化資源のあり方を探る実践的研究のモデル」として、また「伝統産業の復興の道標を示すモデル」として、他の地域における文化資源や伝統産業を考える際に活用できるプログラムが出来上がりました。

#### 2020年 7月15日(水)

リサーチ先:  
小峰和子さん  
(大堀相馬焼窯元光峰窯)  
場所:小峰さんの自宅  
(栃木県宇都宮市)



#### 7月28日(火)

リサーチ先:  
志賀暁吉さん(陶芸家)  
場所:  
志賀さんのギャラリー  
(福島県新地町)



#### 8月8日(土)

リサーチ先:  
陶俊弘さん  
(大堀相馬焼窯元大陶窯)  
場所:陶さんの工房  
(長野県駒ヶ根市)



#### 10月15日(木)

リサーチ先:  
小野田紀恵子さん  
(大堀相馬焼窯元勤治郎窯  
(小野田窯))  
場所:  
小野田さんの自宅近くの  
集会所(東京都中野区)



#### 10月20日(火)

リサーチ先:  
根本清己さん  
(大堀相馬焼職人)  
場所:根本さんの工房  
(福島県南相馬市)



#### 11月5日(木)・ 11月26日(木)

リサーチ先:  
亀田大介さん(陶芸家)  
場所:亀田さんの工房  
(大分県別府市)  
大堀相馬焼窯元松助窯・  
亀田集古館  
(福島県浪江町)



#### 11月6日(金)

リサーチ先:  
五藤かおりさん  
(元大堀相馬焼協同組  
合事務局)  
場所:万博記念公園内の  
カフェ(大阪府吹田市)



#### 11月19日(木)

リサーチ先:原田雄一さん  
(浪江町商工会顧問)、  
半谷秀辰さん(大堀相馬  
焼窯元休閑窯)  
場所:  
原田時計店隣のカフェ  
(福島県二本松市)



#### 12月10日(木)

リサーチ先:  
二本松コスモス会(浪江  
町から避難した町民が結  
成した自治会グループ)  
場所:まちづくりNPO  
新町なみえ  
(福島県二本松市)



#### 12月14日(月)

リサーチ先:山田慎一さん  
(大堀相馬焼窯元いかり  
や窯)、吉田直弘さん(浪  
江町地域おこし協力隊)  
場所:大堀相馬焼窯  
元いかりや商店  
(福島県白河市)



#### 12月21日(月)

リサーチ先:木村裕之さん  
(浪江町立津島小学校長)、  
武内弘子さん(浪江町立  
津島小学校6学年担任)  
場所:浪江町立津島小学校  
「10年問ふるさとなみえ博  
物館」内(福島県二本松市)



#### 12月23日(水)

リサーチ先:末永福男さん  
(大堀相馬焼コレクター)、  
堀耕平さん  
(南相馬市博物館長)  
場所:南相馬市博物館  
(福島県南相馬市)



#### 12月24日(木)

リサーチ先:  
小野田利治さん  
(大堀相馬焼窯元春山窯)  
場所:大堀相馬焼窯元  
春山窯(福島県本宮市)



本事業の実施にあたって多くの方のご協力を賜りました。

趣旨にご賛同くださったみなさま、

応援してくださったみなさま、

多くの学びを与えてくださったみなさま、

コロナ禍において、

だからこそ人が集い言葉を交わすことの意味を

問いかけてくださったみなさま、

「いのち」と「暮らし」について、ともに学び、考え、

対話を重ねてくださったみなさまに、

心より感謝申し上げます。

ライフミュージアムネットワーク実行委員会



文化庁令和2年度地域と共働した博物館創造活動支援事業  
ライフミュージアムネットワーク2020

## ライフミュージアムネットワーク2020活動記録集

編集 川延安直、小林めぐみ、江川トヨ子、筑波匡介、塚本麻衣子、山口拡、原恵理子、平澤慎(実行委員会事務局)

デザイン 馬場立治

画像提供 連続オープンディスカッション「奥会津の周り方」  
大里正樹、押部僚太、中野陽介、佐藤正実、榎本千賀子、にいがた地域映像アーカイブ・データベース  
オープンディスカッション コミュニティとミュージアム「場を編む 人を結ぶ」  
高田彩、岡部兼芳、田尾陽一  
フォーラム「地の記憶を苗床に～空知・島ヶ原・舞鶴に学ぶ「ミュージアム的」なこと」  
吉岡宏高、山下美晴、岩名泰岳  
県外事例調査 合同会社 家の女たち  
合同会社 家の女たち

撮影 須田健志：連続オープンディスカッション「奥会津の周り方」第1回  
オープンディスカッション コミュニティとミュージアム「場を編む 人を結ぶ」  
久光真佑美：連続オープンディスカッション「奥会津の周り方」第2回  
岩波友紀：連続オープンディスカッション「奥会津の周り方」第3回～第5回  
オープンディスカッション「浪江の記憶の残し方・伝え方」  
鈴木心写真館いなわしろ(那知上智、白石知香)：  
プログラム開発「多様なニーズに応えるミュージアムの利活用プログラム」  
赤間政昭、衣笠名津美、畑直幸、本郷毅史、三浦結香：  
プログラム開発「地域資源の活用による地域アデンティティの再興プログラム」  
川延安直、小林めぐみ、江川トヨ子、筑波匡介、塚本麻衣子、山口拡、原恵理子、平澤慎

印刷 北斗印刷 株式会社

発行 ライフミュージアムネットワーク実行委員会  
〒965-0807福島県会津若松市城東町1-25(福島県立博物館内)